北埋調報330

木古内町（きこないちょう）

泉沢（いずみさわ）5遺跡（いせき）

－高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

木古内町

泉沢5遺跡

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第330集

平成28年度

木古内町

泉沢５遺跡

－高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査区空撮（東から）

調査区空撮（北から）

口絵２

西側緩斜面Ｔピット列検出状況（南西から）

Ｈ－２土層断面（北東から）

例　言

1．本書は国土交通省北海道開発局函館開発建設部が行う高規格道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成26（2014）年に発掘調査を実施した木古内町泉沢５遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査（平成26年度）は第１調査部第３調査課と第１調査部第４調査課が担当した。
3．遺物の整理、石材鑑定は直江康雄が担当した。
4．現場の写真撮影は袖岡淳子、直江、渡井　瞳、谷島由貴、佐藤和雄が行い、遺物の室内写真の撮影は菊池慈人、中山昭大が行った。
5．本書の執筆は袖岡、直江、渡井が行い、全体の編集は直江が担当した。執筆者名は章ないし節ごとに文末に示した。この内、Ⅳ章の掲載遺物については直江が記載した。
6．炭化樹種同定および放射性炭素年代測定は株式会社古環境研究所に委託した。
7．調査にあたっては下記の諸機関および人々のご指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、木古内町教育委員会、木古内町郷土資料館「いかりん館」、北斗市教育委員会、北斗市郷土資料館、知内町郷土資料館、市立函館博物館、七飯町歴史館
石井淳平（厚沢部町教育委員会）、奥山さとみ（江差町教育委員会）、尾山　徹（江差町教育委員会）、木元　豊（木古内町教育員会）、佐藤雄生（松前町教育委員会）、高橋豊彦（知内町教育委員会）、竹田　聡（知内町郷土館）、塚田直哉（上ノ国町教育委員会）、中村和之（函館工業高等専門学校）、野村祐一（函館市教育委員会）、前田正憲（松前町教育委員会）、松崎水穂（檜山考古学研究会）、森　靖裕（北斗市教育委員会）、山田　央（七飯町歴史館）、横山英介（北海道考古学研究所）、吉田　力（函館市教育員会）

記号等の説明

1．遺構の表記には以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付けた。

H：竪穴住居跡

HP：竪穴住居跡の土坑・柱穴状小土坑　　HF：竪穴住居の炉・焼土

P：土坑・土坑墓　　TP：Tピット　　F：焼土　　FC：フレイク集中

S：礫集中

2．遺構図には方位記号を付した。方位は真北を示す。発掘区の基線（東－西、Fライン）は公共座標の南北方向に対して34°25′40″傾いている。レベルは標高（単位m）を示す。

3．遺構の規模は「確認面での長軸×確認面での短軸／底面での長軸×底面での短軸／厚さ（深さ）」の順で記した。一部破壊されているものや不明確なものについては現存長を「()」で、不明のものは「－」で示した。

4．掲載した遺構図・遺物実測図等の縮尺は原則的に以下のとおりとした。また、変則的なものについても随時スケールを入れている。

土層断面図	1：40	遺構実測図	1：40	遺構出土遺物分布図	1：40
遺物出土詳細図	1：20	土器実測図	1：3	土器拓影図	1：3
剥片石器実測図	1：2	礫石器実測図	1：3		

5．実測図右下のアラビア数字は掲載番号で、基本的に遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは土器・石器別に1から付し、遺物分布図中の番号と共通に示した。ただし出土数が僅少なため、住居以外の遺構の遺物は遺構種別ごとの連番とした。また、アラビア数字に後続する小文字アルファベットは同一個体を示す。

6．土器実測図中の断面図において縄文、沈線以外の凹系の施文は黒塗りで示した。

7．石器実測図中で敲打痕は∨__∨、擦り痕は｜⟷｜で縁辺部に範囲を示した。また使用によるとみられる光沢を有する面はスクリーントーン、アスファルト付着部分は黒塗りで示した。

8．石器の大きさは実測図の長軸を基準として最大長・最大幅・最大厚（㎝）を計測し、破損しているものについては現存最大値を（　）で示した。

9．遺物写真の縮尺は基本的に以下のとおりである。

土器片　約1：3　　復元土器　任意　　剥片石器　約1：2　　礫石器　約1：3

10．遺構出土の遺物分布図の表示は遺物の種類別・層位によりシンボルマークで示した。

11．土層の表記は基本土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ…）、特徴的な土層および遺構覆土をアラビア数字（1・2…）で示した。

12．土層の色調には『新版標準土色帖』24版（小山・竹原2002）を使用し、カラーチャートの番号を付した。

13．土層の観察には『土壌ハンドブックス改訂版』（日本ペトロジー学会編2000）を引用した。

14．火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会1982）に準じ、以下の略号を用いた。

Ko－d：駒ヶ岳d降下火山灰　　B－Tm：白頭山－苫小牧火山灰

15．土層の混合状態を表現するために以下のような表記を用いた場合がある。

A＋B：AとBが同量混じる。　A＞B：AにBが少量混じる。　A≫B：AにBが微量混じる。

目　　次

口　　絵
例　　言
記号等の説明
目　　次
挿 図 目 次
表　目　次
図 版 目 次

Ⅰ　諸　言
　1　調査要項…… 1
　2　調査体制…… 1
　3　調査に至る経緯…… 2
　4　調査の経過…… 2
　5　調査結果の概要…… 4
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　近隣の環境と地名…… 5
　2　周辺の遺跡…… 5
　3　遺跡の位置と地形…… 9
Ⅲ　調査の方法
　1　発掘区の設定…… 11
　2　調査の方法…… 11
　3　整理の方法…… 13
　4　遺構・遺物の分類…… 14
　5　遺跡の土層…… 15
Ⅳ　遺構の調査と遺物
　1　竪穴住居跡…… 17
　2　土坑…… 31
　3　Ｔピット…… 44
　4　焼土…… 53
　5　土器埋設遺構、遺物集中など…… 61
Ⅴ　包含層の出土遺物
　1　包含層の遺物出土状況…… 77
　2　土器…… 89
　3　石器…… 99
Ⅵ　自然科学的分析
　1　炭化樹種同定…… 113
　2　放射性炭素年代測定…… 116
Ⅶ　まとめ…… 119

引用・参考文献…… 120
写真図版

挿図目次

Ⅰ　諸言
図Ⅰ－１　遺構位置図…… 3
Ⅱ　遺跡の位置と環境
図Ⅱ－１　遺跡の位置と木古内町の地形… 6
図Ⅱ－２　木古内町周辺の地質…… 6
図Ⅱ－３　木古内町周辺の遺跡…… 7
図Ⅱ－４　遺跡位置図…… 10
図Ⅱ－５　遺跡周辺の地形…… 10
Ⅲ　調査の方法
図Ⅲ－１　調査区設定図…… 11
図Ⅲ－２　調査区内の地区名…… 12
図Ⅲ－３　土層断面図…… 16
Ⅳ　遺構の調査と遺物
図Ⅳ－１　Ｈ－１（１）…… 18
図Ⅳ－２　Ｈ－１（２）…… 19
図Ⅳ－３　Ｈ－２（１）…… 21
図Ⅳ－４　Ｈ－２（２）…… 22
図Ⅳ－５　Ｈ－２出土の遺物（１）…… 23
図Ⅳ－６　Ｈ－２出土の遺物（２）…… 24
図Ⅳ－７　Ｈ－３（１）…… 26
図Ⅳ－８　Ｈ－３（２）…… 27
図Ⅳ－９　Ｈ－３出土の遺物（１）…… 28
図Ⅳ－10　Ｈ－３出土の遺物（２）…… 29
図Ⅳ－11　Ｈ－３出土の遺物（３）…… 30
図Ⅳ－12　土坑（１）Ｐ－１～３…… 37
図Ⅳ－13　土坑（２）Ｐ－４～７…… 38
図Ⅳ－14　土坑（３）Ｐ－８～10…… 39
図Ⅳ－15　土坑（４）Ｐ－11～16…… 40
図Ⅳ－16　土坑（５）Ｐ－17～19…… 41
図Ⅳ－17　土坑出土の遺物（１）…… 42
図Ⅳ－18　土坑出土の遺物（２）…… 43
図Ⅳ－19　Ｔピット出土位置図…… 44
図Ⅳ－20　Ｔピット（１）TP－１・２… 48
図Ⅳ－21　Ｔピット（２）TP－３・４… 49
図Ⅳ－22　Ｔピット（３）TP－５・６… 50
図Ⅳ－23　Ｔピット（４）TP－７・８… 51
図Ⅳ－24　Ｔピット（５）TP－９・10… 52
図Ⅳ－25　焼土（１）Ｆ－１～６…… 57
図Ⅳ－26　焼土（２）Ｆ－７～11…… 58
図Ⅳ－27　焼土（３）Ｆ－12～17…… 59
図Ⅳ－28　焼土（４）Ｆ－18・19、土器埋設遺構・遺物集中（１）…… 60
図Ⅳ－29　遺物集中（２）…… 65
図Ⅳ－30　遺物集中（３）…… 66
図Ⅳ－31　遺物集中（４）、FC・S…… 67
図Ⅳ－32　Ｔピット・焼土・土器埋設遺構・遺物集中出土の遺物（１）…… 68
図Ⅳ－33　遺物集中出土の遺物（２）…… 69
図Ⅳ－34　遺物集中出土の遺物（３）、FC・S出土の遺物…… 70
Ⅴ　包含層の出土遺物
図Ⅴ－１　発掘区別遺物出土分布図（１）… 78
図Ⅴ－２　発掘区別遺物出土分布図（２）… 79
図Ⅴ－３　発掘区別遺物出土分布図（３）… 80
図Ⅴ－４　発掘区別遺物出土分布図（４）… 81
図Ⅴ－５　発掘区別遺物出土分布図（５）… 82
図Ⅴ－６　発掘区別遺物出土分布図（６）… 83
図Ⅴ－７　発掘区別遺物出土分布図（７）… 84
図Ⅴ－８　発掘区別遺物出土分布図（８）… 85
図Ⅴ－９　発掘区別遺物出土分布図（９）… 86
図Ⅴ－10　発掘区別遺物出土分布図（10）… 87
図Ⅴ－11　包含層遺物出土状況…… 88
図Ⅴ－12　包含層出土の土器（１）…… 93
図Ⅴ－13　包含層出土の土器（２）…… 94
図Ⅴ－14　包含層出土の土器（３）…… 95
図Ⅴ－15　包含層出土の土器（４）…… 96
図Ⅴ－16　包含層出土の土器（５）…… 97
図Ⅴ－17　包含層出土の土器（６）…… 98
図Ⅴ－18　包含層出土の石器（１）…… 102
図Ⅴ－19　包含層出土の石器（２）…… 103

図Ⅴ－20　包含層出土の石器（３）…… 104
図Ⅴ－21　包含層出土の石器（４）…… 105
図Ⅴ－22　包含層出土の石器（５）…… 106
図Ⅴ－23　包含層出土の石器（６）…… 107
図Ⅴ－24　包含層出土の石器（７）…… 108

Ⅵ　自然科学的分析
図Ⅵ－１　泉沢５遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真…… 115
図Ⅵ－２　暦年較正結果…… 118

表目次

Ⅰ　諸言
表Ⅰ－１　検出遺構一覧……　4
表Ⅰ－２　出土遺物一覧……　4
Ⅱ　遺跡の位置と環境
表Ⅱ－１　木古内町の遺跡一覧……　8
Ⅲ　調査の方法
表Ⅲ－１　調査区幅杭の座標……　12
Ⅳ　遺構の調査と遺物
表Ⅳ－１　遺構一覧……　71
表Ⅳ－２　遺構出土遺物集計……　72
表Ⅳ－３　遺構出土石器の石材別集計……　74
表Ⅳ－４　遺構出土掲載土器一覧……　74
表Ⅳ－５　遺構出土掲載石器一覧……　75
Ⅴ　包含層の出土遺物
表Ⅴ－１　包含層出土遺物集計…… 109
表Ⅴ－２　包含層出土石器の石材別集計… 109
表Ⅴ－３　包含層出土掲載土器一覧…… 110
表Ⅴ－４　包含層出土掲載石器一覧…… 111
Ⅵ　自然科学的分析
表Ⅵ－１　樹種同定結果…… 113
表Ⅵ－２　測定試料及び処理…… 116
表Ⅵ－３　年代測定結果…… 117

図版目次

図版１　調査状況
図版２　完堀状況（１）
図版３　完堀状況（２）・土層
図版４　Ｈ－１
図版５　Ｈ－２（１）
図版６　Ｈ－２（２）
図版７　Ｈ－３
図版８　Ｐ－１～Ｐ－４
図版９　Ｐ－５～Ｐ－８
図版10　Ｐ－９～Ｐ－12
図版11　Ｐ－13～Ｐ－16（１）
図版12　Ｐ－16（２）～Ｐ－19
図版13　ＴＰ－１～ＴＰ－５（１）
図版14　ＴＰ－５（２）～ＴＰ－９
図版15　ＴＰ－10、Ｆ－１～Ｆ－６
図版16　Ｆ－７～Ｆ－13
図版17　Ｆ－14～Ｆ－19、土器埋設遺構－１
図版18　遺物集中－１～５
図版19　遺物集中－６～８、Ｓ－１、包含層個体土器
図版20　遺構出土遺物（１）
図版21　遺構出土遺物（２）
図版22　遺構出土遺物（３）
図版23　遺構出土遺物（４）
図版24　遺構出土遺物（５）
図版25　遺構出土遺物（６）
図版26　遺構出土遺物（７）、包含層出土遺物（１）
図版27　包含層出土遺物（２）
図版28　包含層出土遺物（３）
図版29　包含層出土遺物（４）
図版30　包含層出土遺物（５）
図版31　包含層出土遺物（６）
図版32　包含層出土遺物（７）
図版33　包含層出土遺物（８）

Ⅰ　諸　言

1　調査要項

事　業　名　　高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委　託　者　　国土交通省北海道開発局函館開発建設部
受　託　者　　公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
調 査 期 間　　平成26年４月１日～平成29年３月31日
　　（発掘期間）平成26年９月１日～10月30日
遺　跡　名　　泉沢５遺跡（同教委登載番号Ｂ－05－55）
所　在　地　　上磯郡木古内町字二乃岱42－４・５、43－２、47－２、48－３・４、49－４、55－２、56－２・３、57－２、58－３
調 査 面 積　　8,984㎡

2　調査体制

平成26年度

理　事　長　　坂本　均　　専 務 理 事　　中田　仁
副 理 事 長　　畑　宏明　　常 務 理 事　　千葉英一
　　（平成26年８月28日死去）

事 務 局 長　　中田　仁（兼務）　　第１調査部　部長　千葉英一（兼務）

第１調査部第３調査課　課長　土肥研晶（発掘担当者）　　主査　芝田直人（発掘担当者）
　　主査　立川トマス（発掘担当者）　　主査　直江康雄（発掘担当者）
　　主査　袖岡淳子（発掘担当者）　　嘱託　渡井　瞳

第１調査部第４調査課　課長　皆川洋一　　主任　谷島由貴
　　主任　佐藤和雄

平成27年度

理　事　長　　坂本　均　　専 務 理 事　　中田　仁
　　（平成27年６月26日まで）　　（平成27年６月26日まで）
　　越田賢一郎　　山田寿雄
　　（平成27年６月26日から）　　（平成27年６月26日から）
副 理 事 長　　中田　仁　　常 務 理 事　　長沼　孝
　　（平成27年６月26日から）　　（平成27年６月26日から）

事 務 局 長　　中田　仁（兼務）　　第１調査部　部長　長沼　孝（兼務）
　　山田寿雄（兼務）

第１調査部第３調査課　課長　土肥研晶　　主査　直江康雄
　　主査　袖岡淳子

平成28年度

理　事　長　　越田賢一郎　　専 務 理 事　　山田寿雄
副 理 事 長　　中田　仁　　常 務 理 事　　長沼　孝

事 務 局 長　　山田寿雄（兼務）　　第 1 調 査 部　部長　長沼　孝（兼務）

第 1 調査部第 3 調査課　課長　土肥研晶

第 1 調査部第 4 調査課　主査　直江康雄

3　調査に至る経緯

高規格幹線道路函館江差自動車道は、函館市を始点とし、北斗市、木古内町、上ノ国町を経由して、江差町に至る延長約70㎞の自動車専用道路である。北海道縦貫自動車道、函館新道と接続し、道北圏まで及ぶ高速ネットワークが整備されることとなる。平成24年３月24日より北斗富川IC～北斗茂辺地ICが供用開始となり、平成29年３月現在、北斗茂辺地IC～木古内IC（仮称）までの延長16.0㎞の茂辺地木古内道路で建設事業が行われている。

平成11年に国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下「函館開建」）は函館江差自動車道路、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会（以下「道教委」）に提出した。これを受けて道教委は、木古内町大釜谷から大平までの範囲において15地点の所在確認調査が必要と通知した。

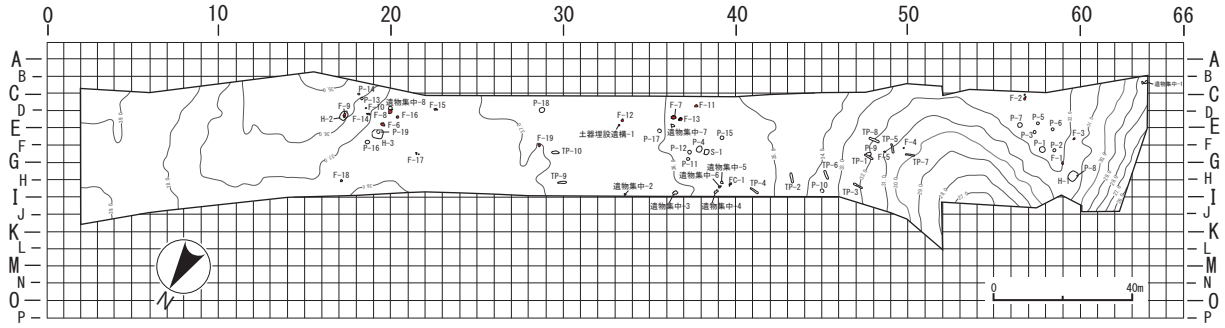
泉沢５遺跡は平成25年11月と平成26年７月に試掘調査が行われ、全体で8,984㎡について発掘調査範囲が必要との回答が道教委からなされた。これに対し函館開建は、当該箇所の工事計画変更が困難と判断し、（公財）北海道埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。

泉沢５遺跡の工区内には平成26年度中に橋台および工事用道路の建設が計画されており、工程上早期の発掘調査完了が要望された。しかし、遺跡周辺ではハチクマ（猛禽類）の営巣も確認されており、自然保護の観点から８月中旬の巣立ちの時期まで重機音などで刺激しないよう慎重な対応を行う必要も生じていた。これらの状況から、進入路造成も含めた準備工期間１か月強、発掘調査開始９月、期間２か月程度という非常にタイトな調査計画を立案した。この調査工程を遂行するため、他の函館江差道路に関連する発掘調査の縮小・変更を函館開建に要請・協議し、泉沢５遺跡の調査には第１調査部第３調査課と第１調査部第４調査課の２課体制で臨むこととした。

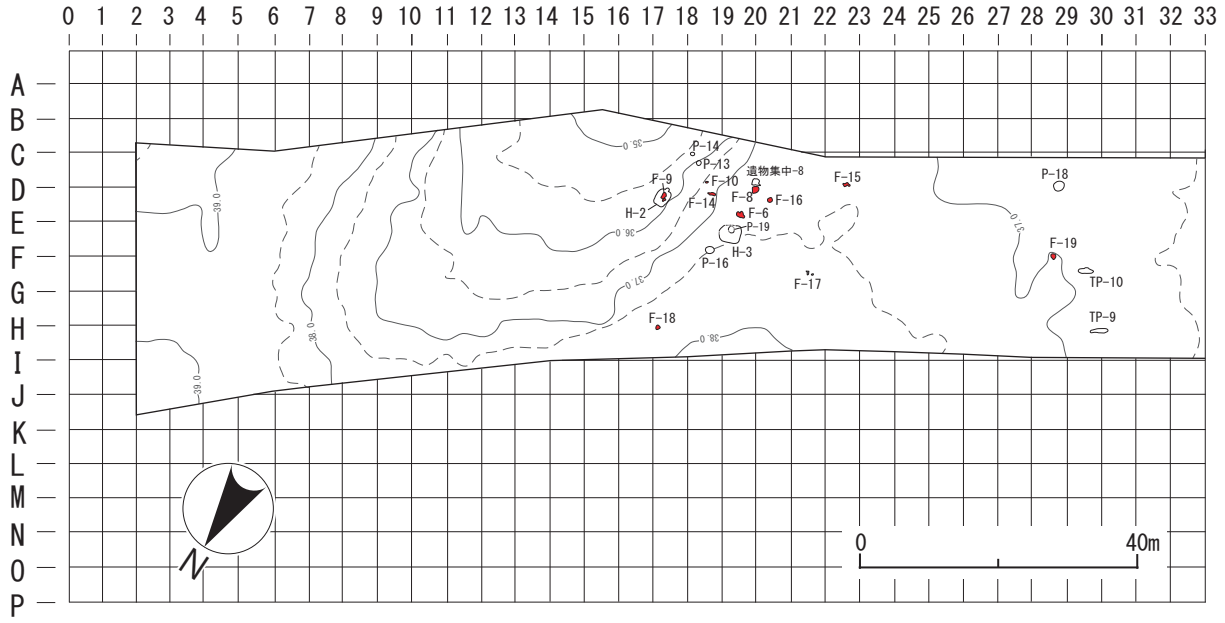
4　調査の経過

平成26年８月25日から重機による表土除去作業、８月26日に方眼杭打設作業を開始し、９月１日より作業員69名体制で調査を開始した。調査区内は試掘調査から予想される遺物の出土量の多寡から４つに区分した（第Ⅲ章第２節参照）。これを元にして道路工事の内容や優先度に合わせて５つの地点に細分して調査を進め、終了後直ちに各地点の引き渡しを行った。

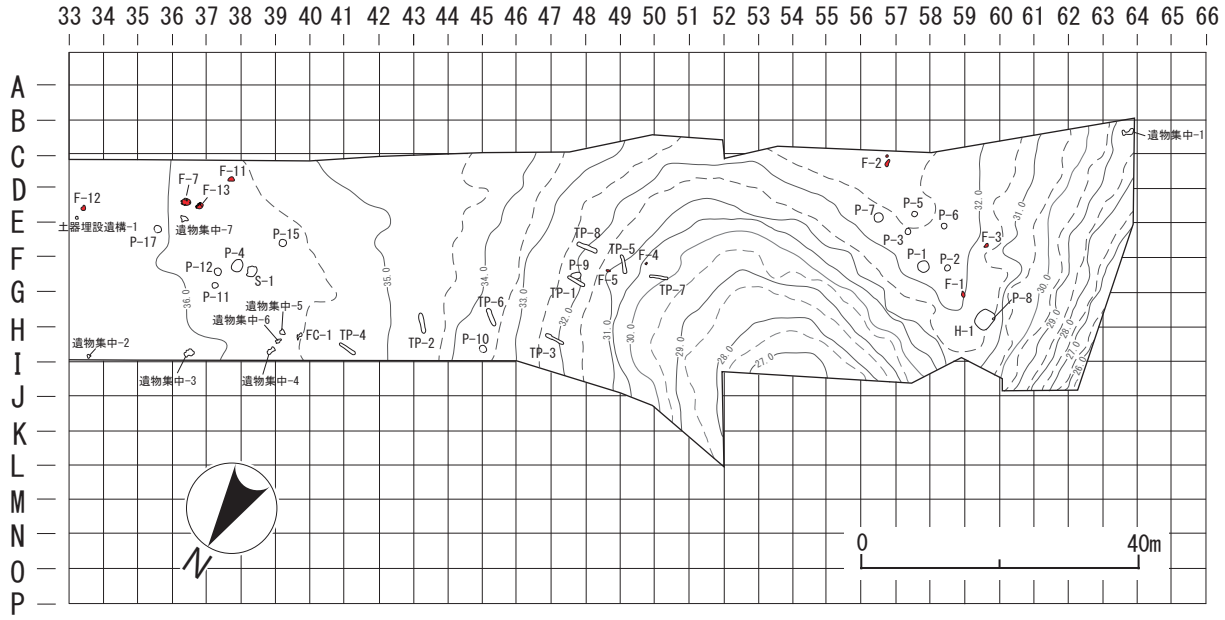
主に第１調査部第３調査課が調査区の西側、同第４調査課が東側にあたる範囲を担当した。９月23日に進入路と接する調査区西側の台地部分、９月26日に調査区東側の遺構確認区とセンターライン以北の範囲の調査が終了した。10月８日より作業員を74名体制に増員し、最終的に10月22日に残りのセンターライン以南の範囲の調査を完了した。



全体



北東部拡大



南西部拡大

図Ⅰ－1　遺構位置図

5　調査結果の概要

調査の結果、縄文時代早期～晩期までの遺構・遺物が確認された。主体となる時期は中期前半および後期前葉で、遺構の大部分はこれらの時期の所産と思われる。遺構は竪穴住居跡（H）３軒、土坑（P）19基、Ｔピット（TP）10基、焼土（F）19か所が、遺物集中８か所、フレイクチップ集中（FC）１か所、礫集中（S）１か所、土器埋設遺構１か所を検出した（図Ｉ－１、表Ｉ－１）。

遺物は土器5,161点、石器・礫10,045点の計15,206点出土した（表Ｉ－２）。土器は縄文時代早期後半の東釧路Ⅲ式、前期後半の円筒土器下層式、中期前半の円筒土器上層式、同後半の榎林式、後期前葉の天祐寺式、涌元式、晩期の大洞Ｃ２式があり、中期前半と後期前葉のもので９割以上を占めている。なお、中期前半の土器にはニシンタイプの魚骨文土器も含まれている。石器は石鏃、石槍、石錐、スクレイパー、石斧などがあり、剥片石器の大半は頁岩を素材としている。１点のみであるが長さ10㎝程の黒曜石製の石槍も出土している。（直江）

表Ｉ－１　検出遺構一覧

遺構種別	件数
竪穴住居（H）	3
土坑（P）	19
Ｔピット（TP）	10
焼土（F）	19
土器埋設遺構	1
遺物集中	8
フレイク集中（FC）	1
礫集中（S）	1
計	62

表Ｉ－２　出土遺物一覧

	遺構	包含層	総計
土器	1127	4034	5161
Ⅰ群b類		7	7
Ⅱ群b類		3	3
Ⅲ群a類	445	1813	2258
Ⅲ群b類		4	4
Ⅳ群a類	680	2196	2876
Ⅴ群b類	2	11	13
剥片石器	702	2521	3223
石鏃	2	18	20
石槍		2	2
箆状石器		1	1
両面調整石器	1	12	13
石錐	1	8	9
スクレイパー	18	157	175
Ｒフレイク	34	186	220
Ｕフレイク		4	4
つまみ付ナイフ		4	4
ピエス・エスキーユ		2	2
フレイク	632	2023	2655
石核	14	104	118
礫石器・礫	3574	3248	6822
石斧		7	7
石のみ		1	1
たたき石	7	28	35
くぼみ石		1	1
北海道式石冠	1	2	3
扁平打製石器	5	18	23
すり石	1	70	71
台石	10	102	112
砥石	2	16	18
加工痕ある礫	5	55	60
原石		1	1
礫片		41	41
礫	3543	2906	6449
総計	5403	9803	15206

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　近隣の環境と地名

泉沢５遺跡の所在する木古内町は、北海道の南西部、渡島半島先端の内湾した海沿いにある。函館市と松前町のほぼ中間に位置し、函館市街から木古内市街までは直線距離で25㎞ほどである。江戸時代から交通の要所で、現在沿岸には国道228号、道南いさりび鉄道、海峡線、北海道新幹線が走っている。木古内町の大きさは東西22.5㎞、南北17.7㎞、総面積は221.89㎢で、人口は平成28年12月末で4,430人である。周囲は北東側に北斗市、北側に厚沢部町、西側に上ノ国町、南側に知内町と町境を接し、東側は津軽海峡に面している（図Ⅱ－１）。また、木古内町の沿岸からは約40㎞離れた下北半島の西部にあたる青森県大間町や佐井村を目視することができる。沿岸には海成段丘が海岸線から数百ｍ内陸まで形成されている。海成段丘は大きく標高40ｍ前後の高位段丘、標高20～30ｍの中位段丘、標高10～15ｍの低位段丘の３つに分かれ、さらに高位・低位段丘はそれぞれ２つに細分されている。海成段丘から内陸部は山岳・丘陵地帯となっており、そこからいくつもの小中河川が津軽海峡に注いでいる。市街地にあたる木古内川下流に広がるわずかな平野部を除くとほとんどが山岳・丘陵地帯である。

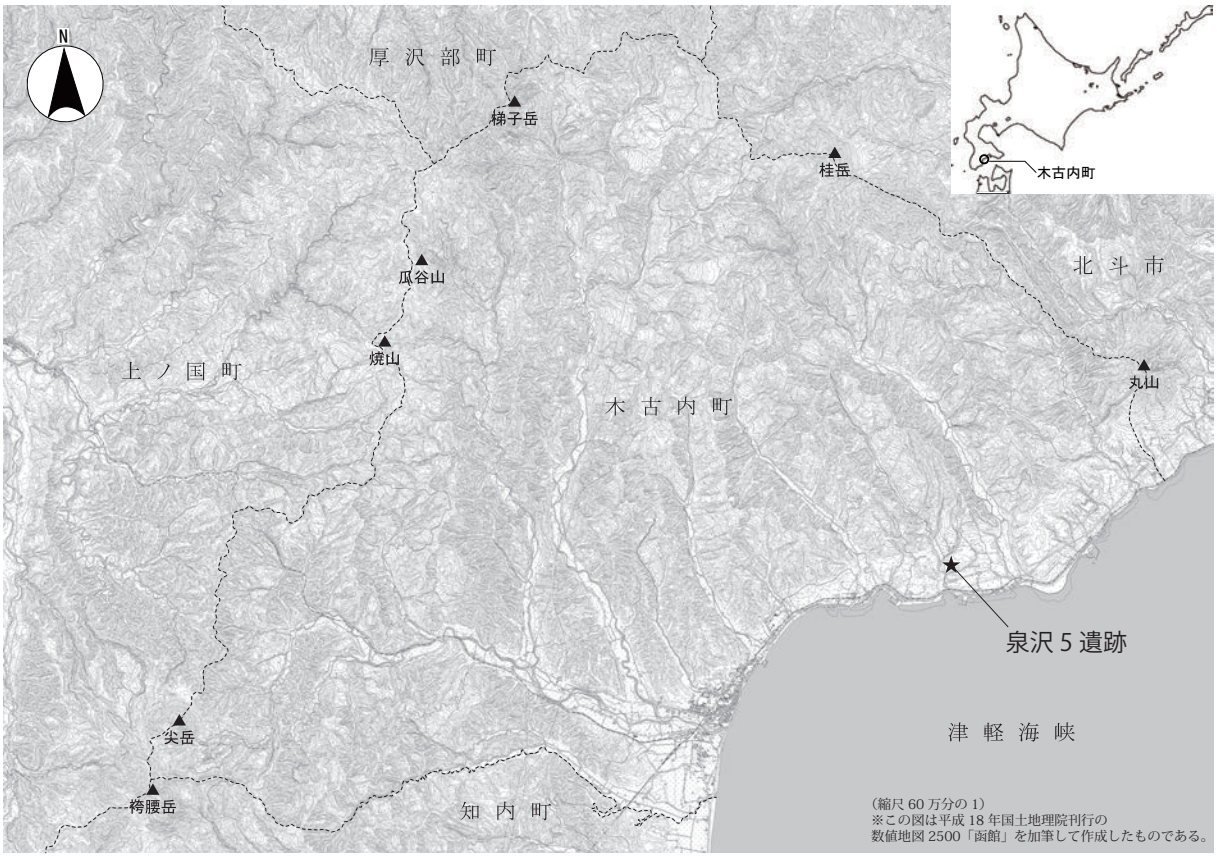
これらの地形は中生代の上磯層群を基盤とし、それを覆う新第三紀に相当する桧山層群、さらにこれらを貫いて山体を形成する貫入岩体から成り立っている（図Ⅱ－２）。遺跡周辺の桧山層は下位に木古内層、中位に厚沢部層、上位に館層が分布している。このうち木古内層は、主として珪質な硬質頁岩および硬質泥岩、軟質泥岩の互層からなり暗灰色泥岩層や砂岩層、凝灰岩層を挟有している。この層には剥片石器の石材となりうるものが含まれており、本遺跡で利用された剥片石器の石材の大多数を占めているものとみられる。また、遺跡周辺の幸連・亀川地区には掘削泥水やコア中に原油成分が認められる油徴の存在が確認されている。石器類に付着するアスファルトとの関連性が考えられる。

木古内の地名は、寛永年間（1624年～1643年）に松前藩が領内を巡行し、全島の地図を作らせたときに付けられたのが始めとされている。由来としてアイヌ語の「リコナイ（高く昇る源）」、または「リロナイ（潮の差し入る川）」から転訛したものと言われている。しかし「リコナイ」の記述が明治以前にみられないことから「リロナイ」が語源と考えるのが正しいとされる（木古内町HP）。また、泉沢地域はアイヌ語で「シュシュボッケ（柳の影・下）」と呼ばれ、集落は室町時代の嘉吉３年（1443年）頃には形成されていたと言われている。「泉沢」という地名になったのは、350年ほど以前のことらしく、亀川に「さけ」がまるで泉が湧くようにたくさん上がったので、このような呼び名になったといわれている（木古内町HP）。

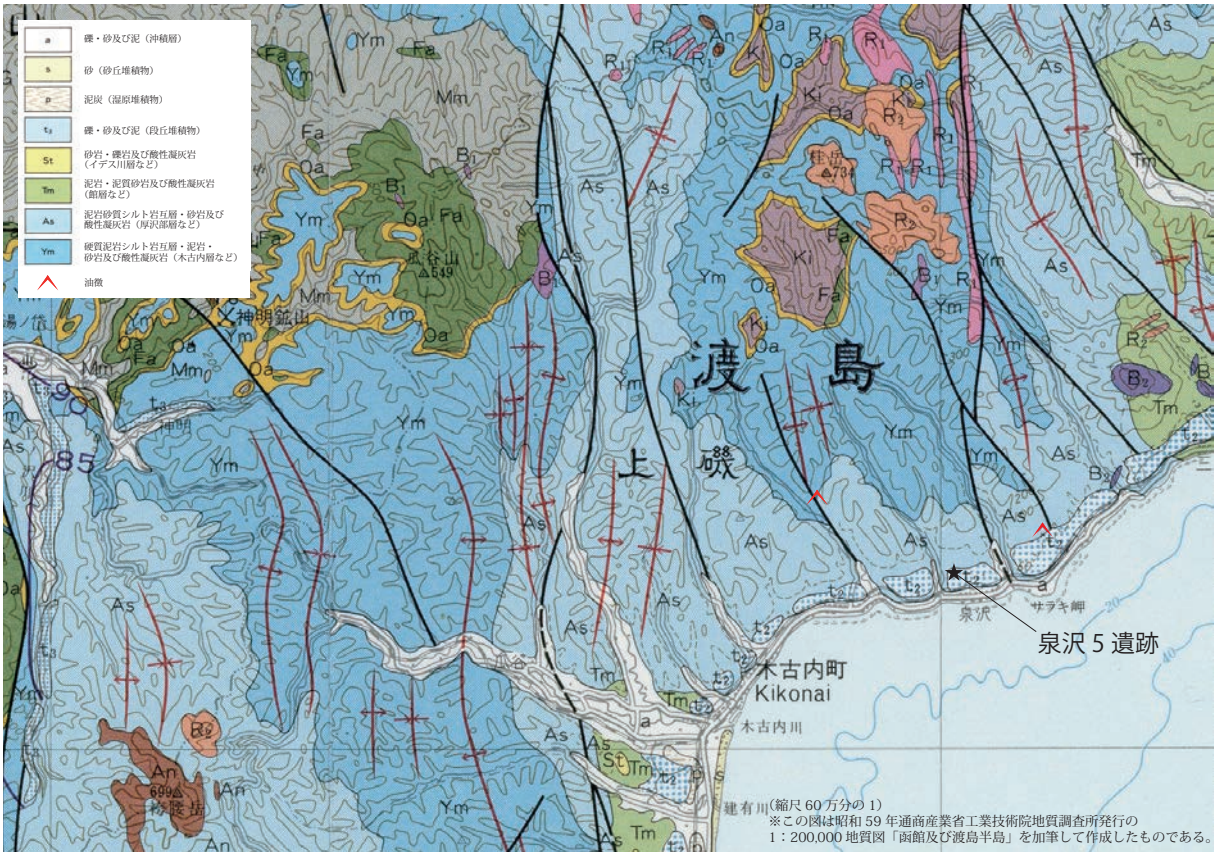
2　周辺の遺跡

木古内町内には平成28年３月現在、旧石器時代から擦文文化期までの62か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている（図Ⅱ－３、表Ⅱ－１）。また、大平４遺跡などで幕末函館戦争時の遺構・遺物も少数確認されている。62か所の包蔵地のほとんどが縄文時代の遺跡で、主に津軽海峡を臨む海成段丘上に立地している。特に近年、函館江差道路建設に伴う試掘調査、緊急発掘調査により、海成段丘の中でもより内陸側にあたる高位の段丘面上の遺跡が多く認識されるようになった。

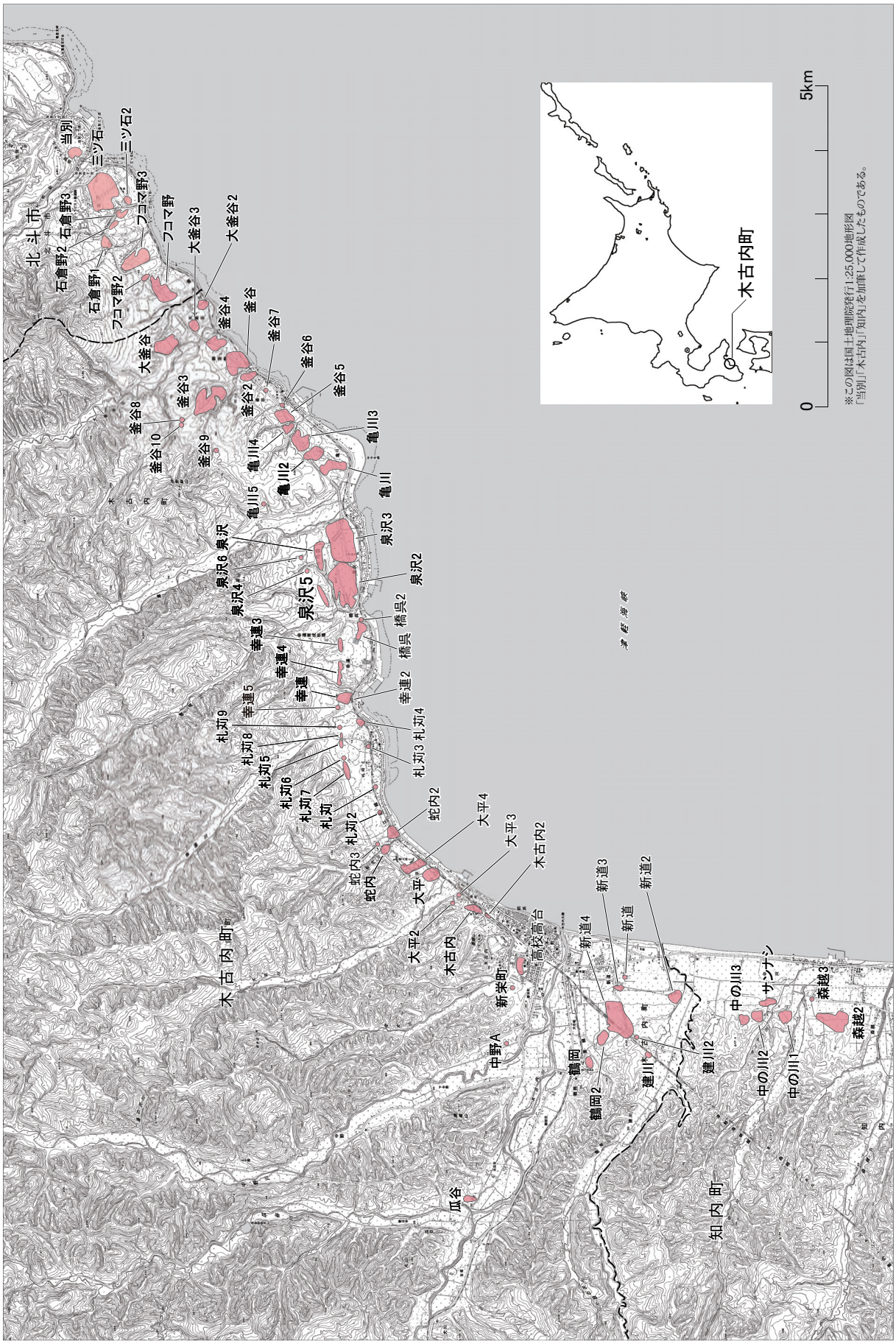
ここでは本遺跡を除く泉沢地区に所在する遺跡について概要を記す。（）内の数字は北海道教育委



図Ⅱ－１　遺跡の位置と木古内町の地形



図Ⅱ－２　木古内町周辺の地質



図Ⅱ－３　木古内町周辺の遺跡

表Ⅱ－1　木古内町の遺跡一覧

登載番号	遺　跡　名	種　別	主な時期	調　査　歴（報告年）
B－05－01	新道遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－02	大釜谷遺跡	遺物包含地	縄文（中期・後期）	
B－05－03	木古内遺跡	集落跡	縄文（前期・中期）・擦文	2010・2011　道埋文（2013）
B－05－04	札苅遺跡	集落跡	縄文（晩期）・近世	1971・1972　北海道開拓記念館（1976） 1973　町教委（1974） 1983　道埋文（1986）
B－05－05	釜谷遺跡	集落跡	縄文（早期～晩期）・擦文	1991～1993　町教委（1999）
B－05－06	泉沢遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－07	大平遺跡	集落跡	縄文（早期～晩期）・擦文	2009～2011・2013　道埋文（2011・2015）
B－05－08	蛇内遺跡	集落跡	縄文（前期～後期）	2000　町教委（2004）
B－05－09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
B－05－10	新道３遺跡	集落跡	縄文（中期・後期）	1996　町教委（1997）
B－05－11	新道２遺跡	集落跡	縄文（前期）	1997～2002　町教委（1999・2004）
B－05－12	中野Ａ遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－13	中野Ｂ遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－14	瓜谷遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－15	大釜谷２遺跡	遺物包含地	縄文（前期・中期）	
B－05－16	釜谷２遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－17	橋呉遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文（前半期）	
B－05－18	幸連遺跡	遺物包含地	縄文（中期・後期）	2016　道埋文
B－05－19	蛇内２遺跡	集落跡	縄文（早期～晩期）	2009～2011　道埋文（2011・2012）
B－05－20	蛇内３遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
B－05－21	大平２遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
B－05－22	大平３遺跡	遺物包含地	縄文（中期）	
B－05－23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
B－05－24	鶴岡遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－25	鶴岡２遺跡	遺物包含地	縄文（前期～後期）・続縄文	1988・1989　町教委（1989・1990）
B－05－26	建川遺跡	遺物包含地	縄文（早期～後期）	1984　道埋文（1986）
B－05－27	新道４遺跡	集落跡	旧石器・縄文（早期～晩期）・続縄文	1984～1986・2013　道埋文（1986・1987・1988・2015）
B－05－28	木古内２遺跡	集落跡	縄文（前期）	2010・2011　道埋文（2011・2012）
B－05－29	大平４遺跡	集落跡	縄文（早期～中期・晩期）	2009・2010・2012～2014　道埋文（2011・2012）
B－05－30	札苅２遺跡	遺物包含地	不明	
B－05－31	札苅３遺跡	遺物包含地	不明	
B－05－32	札苅４遺跡	遺物包含地	不明	
B－05－33	幸連２遺跡	遺物包含地	不明	
B－05－34	橋呉２遺跡	遺物包含地	不明	
B－05－35	建川２遺跡	集落跡	縄文（前～晩期）	1985・1986　道埋文（1987）
B－05－36	釜谷３遺跡	遺物包含地	縄文（後期）	
B－05－37	釜谷４遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文（早期～後期）	1990　町教委（1991）
B－05－38	亀川遺跡	遺物包含地	縄文（晩期）	
B－05－39	亀川２遺跡	遺物包含地	縄文（中期～晩期）	1995　町教委（1998）
B－05－40	亀川３遺跡	集落跡	縄文（早期～後期）	1995　町教委（1998）
B－05－41	泉沢２遺跡	集落跡	縄文（前期～晩期）・擦文	1998～2001　町教委（2003・2004）
B－05－42	泉沢３遺跡	遺物包含地	縄文（後期）	1996　町教委（1998）
B－05－43	亀川４遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－44	釜谷５遺跡	集落跡	縄文（早期～晩期）	1993　町教委（1995）
B－05－45	釜谷６遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－46	釜谷７遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－47	大釜谷３遺跡	集落跡	縄文（前期～晩期）	2001　町教委（2003）
B－05－48	札苅５遺跡	遺物包含地	縄文（早期・前期・後期）	2011・2016　道埋文（2012）
B－05－49	札苅６遺跡	集落跡	縄文（中期・後期）	2011　道埋文（2013）
B－05－50	札苅７遺跡	集落跡	縄文（後期）	2013～2016　道埋文
B－05－51	釜谷８遺跡	遺物包含地	縄文（早期・中期・後期）	2011・2012　道埋文（2013）
B－05－52	釜谷９遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－53	泉沢４遺跡	遺物包含地	縄文	
B－05－54	亀川５遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	2014　道埋文
B－05－55	**泉沢５遺跡**	**集落跡**	**縄文（中期・後期）**	**2014　道埋文（2016本書）**
B－05－56	札苅８遺跡	集落跡	旧石器・縄文（前期）	2014　道埋文
B－05－57	札苅９遺跡	遺物包含地	不明	
B－05－58	釜谷10遺跡	遺物包含地	縄文（後期）	2016　道埋文
B－05－59	幸連３遺跡	遺物包含地	縄文（中期）	2015　道埋文
B－05－60	幸連４遺跡	遺物包含地	縄文（前期後半・中期後半～後期前葉）	2015・2016　道埋文
B－05－61	泉沢６遺跡	遺物包含地	縄文（早期・後期）	2015・2016　道埋文
B－05－62	幸連５遺跡	集落跡	縄文（中期）	2016　道埋文

町教委：木古内町教育委員会、道埋文：北海道埋蔵文化財センター

員会の遺跡登載番号である。

泉沢遺跡（B－05－06）：遺物包含地。標高40m前後の高位の海成段丘面上に立地する。未発掘である。

泉沢２遺跡（B－05－41）：集落跡。縄文時代前期～晩期、続縄文時代、擦文文化期。標高５～35m前後の低・中位の海成段丘面上に立地する。南渡島地区広域営農団地農道建設に伴い、平成10（1998）～13（2001）年にかけて木古内町教育委員会により発掘調査が行われた。全体の調査面積は10,945㎡で、西側の平坦面から台地の先端部急斜面にかけてのＡ地点（5,632㎡）と湧水源に隣接する台地の東側平坦面にあたるＢ地点（3,113㎡）、Ａ地点に隣接し、低位の海成段丘面にあたるＣ地点（2,200㎡）に分かれる。遺構は住居跡12軒、土坑11基、Ｔピット１基、焼土58か所、石組み炉７か所、埋設土器１か所、埋石遺構１か所、集石遺構１か所が検出されている。出土遺物は約316,000点で、石器が大半を占めている。住居跡は９軒中７軒が縄文時代後期前葉に属しており、出土遺物も同時期に帰属するものが多い。沢を挟んだ北側に泉沢５遺跡が位置している。

泉沢３遺跡（B－05－42）：遺物包含地。縄文時代後期。標高20～25mの中位の海成段丘面上に立地する。南渡島地区広域営農団地農道建設に伴い、平成８（1996）年に木古内町教育委員会により発掘調査が行われた。全体の調査面積は2,319㎡で、平坦部（1,290㎡）とそこから90mほど東側の東地点（1,029㎡）に分かれる。遺構は焼土１か所が検出されたのみで、その他に旧河道跡が２か所確認されている。出土遺物は3,482点で、縄文時代後期前葉～中葉のものが出土している。

泉沢４遺跡（B－05－53）：遺物包含地。縄文時代。標高40mほどの高位の海成段丘面上に立地する。小さな沢を挟んで本遺跡の北東側に隣接する。函館江差道路建設に伴い発見され、工事立会が行われた。頁岩製の剥片や打製石斧が出土している。

泉沢６遺跡（B－05－61）：遺物包含地。縄文時代。標高30～48mの高位の海成段丘面上に立地する。函館江差道路建設に伴い、平成27（2015）・28（2016）年に当センターによって発掘調査が行われた。調査面積は3,079㎡である。遺構は土坑１基、焼土14か所、フレイクチップ集中１か所が検出されている。出土遺物は約12,300点で、石器類が多数を占める。土器は縄文時代早期および同後期前葉のものを中心として出土している。

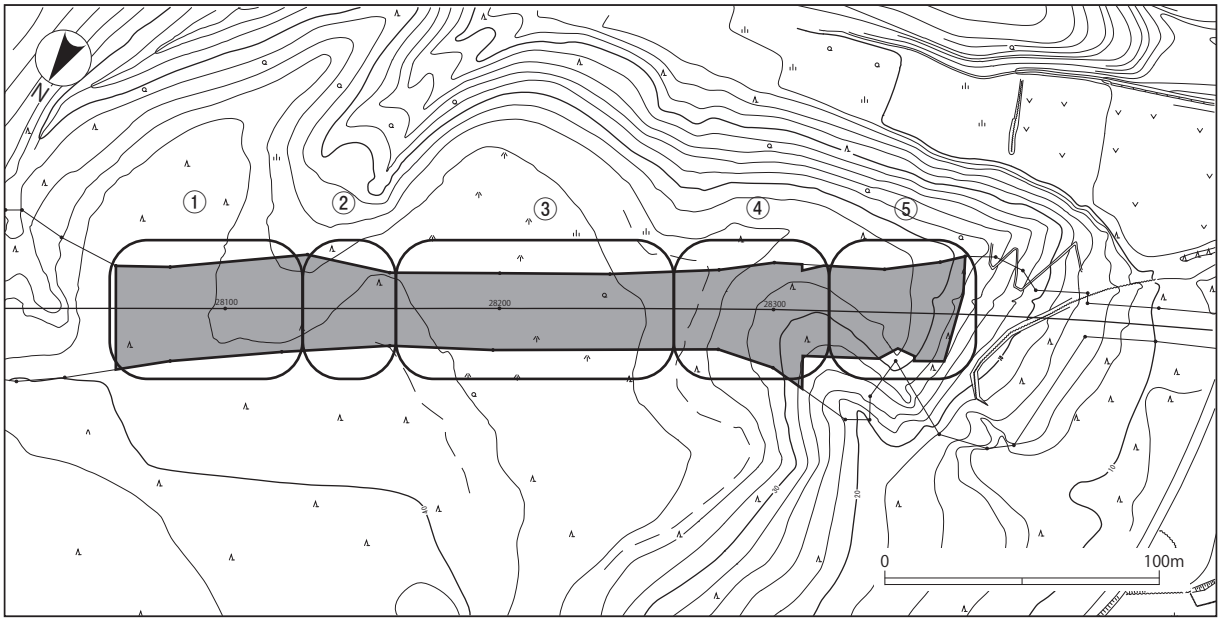
３　遺跡の位置と地形

遺跡は函館市街から西方に約20㎞、木古内市街から北東に約６㎞の海成段丘上にあり、現海岸線からは600mほど内陸で、海成段丘の最奥部に位置する（図Ⅱ－４）。遺跡の立地する台地は、東側の亀川と西側の橋呉川、南側の橋呉川の支流に開析され、標高は30～40mである。同一台地上には北東側に泉沢４遺跡、泉沢６遺跡があり、橋呉川の支流を挟んだ南側には泉沢２遺跡、東側に泉沢遺跡がある。台地の北側は山地形となり標高165mほどの富山などに続く。それらの山地から南西方向に流れる多数の沢が橋呉川の支流となっている。

調査区は台地西側の縁から北東方向に約310mの長さがある。北東側ほど台地の縁から内陸部にあたる。調査区内の東西には二つの小さな沢地形がある。南西部に北西方向、北東部に南方向への沢地形で、その周辺は緩斜面となっており、その間は比較的平坦な地形である。これらのことから遺跡内の地形について沢地形と平坦面を基準として以下の地点①～⑤に区分した。①南方向の沢に面した西向きの緩斜面（２～15ライン付近）②南方向の沢に面した東向きの緩斜面（15～20ライン付近）、③二つの沢に挟まれた中央の平坦面（20～43ライン付近）、④北西方向の沢に面した西向きの斜面（43～52ライン付近）、⑤北西方向の沢と調査区西端の橋呉川に面する急斜面に挟まれた舌状の台地（52

～60ライン付近）となっている（図Ⅱ－５）。　（直江）

図Ⅱ－４　遺跡位置図



図Ⅱ－５　遺跡周辺の地形

Ⅲ　調査の方法

1　発掘区の設定

発掘区はアルファベットと数字の組み合わせで表示し、規格は５×５ｍとした。調査区の設定基準には、工事測点のSTA. 28, 100とSTA. 28, 300を利用し、その２点を通る直線をアルファベットラインの基線（Ｆライン）とし、STA. 28, 100を通りアルファベットラインと直交する直線を10ラインとした（図Ⅲ－１）。Ｆラインより南東側にE、D、C…、北西側は逆にG、H、I…となる。また10ラインより北東側に９、８、７…、南西側は逆に11、12、13…となる。したがってSTA. 28, 100はF10杭、STA. 28, 300がF50杭にあたる。調査区域は、アルファベットラインで、B～K、数字ラインで２～63の範囲に収まる。調査区域に関わる幅杭の名称と座標値は、函館開建が測量したものを利用した（L58～68、R60～66）。また新たに測量した幅杭は頭文字をＰとして番号を付した（Ｐ１～11）。基準点の測量成果（世界測地系）は下記のとおりである。また、調査区の幅杭の座標値を表Ⅲ－１に示した。

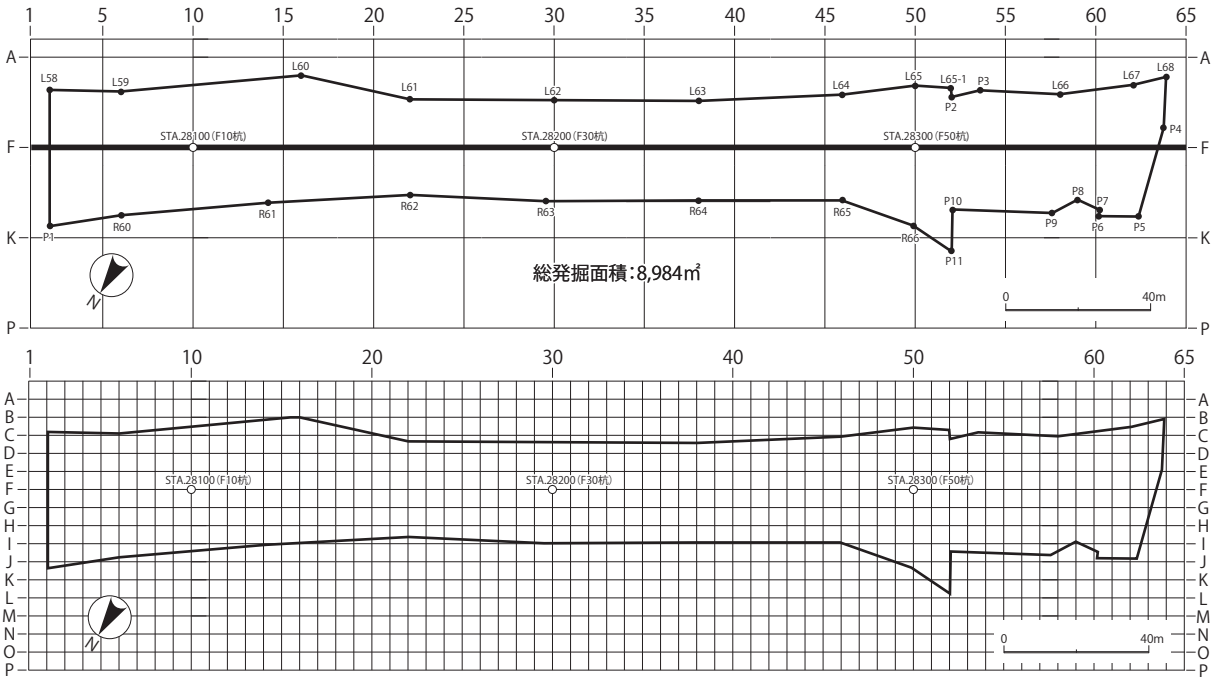
F10杭　　X＝－254721. 217　　Y＝20792. 572

F50杭　　X＝－254834. 290　　Y＝20627. 606　　（平面直角座標系　第ＸＩ系）

発掘区の呼称は、５ｍ四方区画の南東隅のライン交点で示した。例えば、Ｍラインと10ラインの交点の北西側がM10区ということになる。また、発掘区のアルファベットラインは、公共座標の南北方向に対して34°25′40″傾いている。調査区は北東－南西方向に延びる形状となっており、最大で長さ310m、幅45mある。調査区の総面積は8, 984㎡である。

2　調査の方法

試掘調査の結果、予想される遺物の出土量に応じて調査区内をＡ～Ｄの４地区に区分した。最も多くの遺物が見込まれたＡ地区、次いでＢ・Ｄ地区、遺物が少なく遺構確認区とされたＣ地区である。



図Ⅲ－１　調査区設定図

表Ⅲ－1　調査区幅杭の座標

調査区幅杭	X座標	Y座標	下列の杭間の距離
L58	－254711.296	20834.307	20.004
L59	－254722.310	20817.608	50.202
L60	－254754.374	20778.980	30.718
L61	－254765.953	20750.528	40.000
L62	－254788.474	20717.470	40.257
L63	－254811.045	20684.136	39.891
L64	－254834.887	20652.154	20.286
L65	－254848.502	20637.116	9.337
L65－1	－254853.333	20629.126	2.859
P2	－254851.286	20627.130	7.863
P3	－254857.473	20622.278	22.904
L66	－254869.324	20602.678	20.394
L67	－254882.928	20587.484	9.399
L68	－254889.895	20581.175	14.666
P4	－254877.143	20573.930	25.073
P5	－254853.436	20565.767	11.160
P6	－254847.126	20574.972	2.505
P7	－254849.279	20576.253	6.065
P8	－254847.360	20582.006	7.598
P9	－254840.752	20585.757	28.199
P10	－254825.856	20609.700	11.718
P11	－254816.191	20603.075	12.518
R66	－254816.339	20615.592	20.976
R65	－254810.700	20635.796	39.903
R64	－254788.034	20668.637	42.373
R63	－254763.965	20703.511	37.627
R62	－254743.892	20735.337	39.404
R61	－254719.797	20766.515	40.829
R60	－254693.954	20798.124	20.287
P1	－254680.023	20812.871	37.914

調査はこれらの状況と道路工事の優先度を加味し、調査手順の効率性から以下の５つの地点に細分した。①進入路と接する出入口部を中心とした橋台が建築される調査区西端側（Ｄ地区）、②調査区東端側の遺構確認区（Ｃ地区）、③工事用道路建設がなされるセンターライン以北（Ｂ地区、Ａ地区の山側（Ａ－２）部分）、④残りのセンターライン以南（Ａ地区海側（Ａ－１）部分）の順に着手した（図Ⅲ－２）。調査区の振り分けは、主に西側にあたるＡ－１地区・Ｂ地区・Ｄ地区を第１調査部第３調査課が担当し、東側にあたるＡ－２地区・Ｃ地区を同第４調査課が担当した。

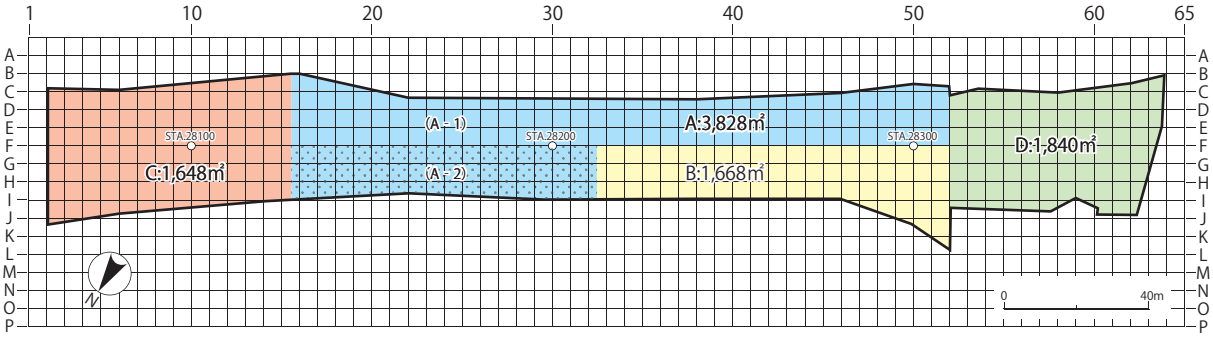
（１）包含層調査

調査にあたっては、まず表土、Ⅱ層を重機により除去し、Ⅲ層上面を精査後、遺物包含層であるⅢ～Ⅴ層を人力によって掘り下げた。掘り下げ時には遺物の出土の程度に応じて、多い範囲では移植ごて、少ない場合はスコップ、ジョレンを用いた。なお遺構確認区（Ｃ地区）では、Ⅵ層とした黄褐色土の上面でスコップ、ジョレンを用いて遺構確認のための精査を行った。

また、25％調査の結果、遺物の出土点数が少量であったＢ地区、Ａ－２地区、Ａ－１地区の45～52区、Ｄ地区については重機を用いて調査区ごとに立会をしながらⅥ層上面まで掘り下げた。最終的にⅥ層上面の地形測量、完掘写真を撮影し、調査を終了した。

（２）遺構調査

遺構はⅢ層中から検出を注意しつつ、最終的にⅥ層上面までの間で随時精査し検出作業を行った。検出後は移植ごてを用いて床・底面を確認し、土層断面図の記録を作成した後、全体を掘り下げ完掘している。遺構出土遺物は床・底面など重要とみられるものは位置・層位を記録して取り上げ、その他は層位のみ記録して取り上げた。また、調査区が長大であり調査時間の効率化を図るため、現場段



図Ⅲ－２　調査区内の地区名

階では調査課ごとに遺構番号を振り分けた。各遺構とも第１調査部第３調査課の検出したものに１から、第４調査課の検出したものに1001から番号を付した。報告書作成段階では1001からの番号を第３調査課の番号からの連番に振り替えている。

（３）記録類

地形測量図、土層断面図、遺構平面図、遺構断面図、遺物出土状況図などを作成した。これらはＢ３版セクションフィルムを使用し、縮尺については遺構平面図、同断面図、遺物出土状況図が１/20を基本とし適宜１/10の図も作成した。これらは調整後、素図を作成し墨入れを行った。

写真撮影はリバーサル６×７判、モノクローム６×７判のほか一眼レフデジタルカメラを用いた。撮影対象としたものは主に遺跡遠景、調査状況、遺構の土層・遺物出土状況・完掘、包含層出土遺物の出土状況、遺跡の完掘状況などである。撮影に用いた機材はMamiya社製RZ67PROⅡおよびNikon社製D5200である。フィルムは富士フィルム社製フジPROVIA100F、NEOPAN ACROS100を使用した。また、発掘現場での撮影データ（カットNo,、撮影日、被写体、出土位置、撮影方向、フィルム種類）を野帳に記入し、デジタルカメラの画像と対応する写真台帳を作成した。

３　整理の方法

（１）一次整理

水洗・分類・遺物注記・遺物カード作成・遺物台帳作成などを行った。注記は土器小片・礫を除くすべての遺物に対して行い、遺構出土のものは略称と番号の間にハイフンを入れ調査区名と区別した。遺物注記の内容は下記のとおりである。

	遺跡名.	遺構名または発掘区.	層位.	遺物番号
（遺構出土遺物例）	泉５.	Ｈ－２.	フク土.	14
（包含層出土遺物例）	泉５.	D45.	Ⅲ.	26

（２）二次整理

江別市の北海道埋蔵文化財センター整理作業棟で行った。遺物台帳のデータをパソコン（マイクロソフト社エクセル）に入力し、各種遺物一覧表の元とした。

土器は接合・復元作業を行い、11個体の土器を復元した。これらを含め選択した140点ほどの資料について実測・トレースないし拓本後、図版作成、計測、一覧表作成、写真撮影を行った。

石器は住居内の剥片集中に対して接合作業を行い、４個体についての作業内容が判明した。また分類を見直し、報告書掲載用石器の選別を行った。実測・トレースを進め、図版作成、計測、一覧表作成、写真撮影を行った。

その他に発掘現場撮影カットのアルバム収納および写真台帳作成、遺構図面・遺物出土状況図・メインセクション図の作成、各種分析委託、原稿の執筆を進め、報告書編集作業として、文字原稿の他各種一覧表・挿図・写真図版のレイアウト作業を行った。

（３）収納・保管

出土遺物については、調査年度・遺跡名・遺物名・分類・収納番号などを記したラベルを貼ったコンテナに収納し、収納台帳を作成した。基本的に掲載遺物と非掲載遺物に区分し、掲載遺物について

は出土位置（遺構・包含層）、内容（土器・石器・礫石器）ごとに区分している。報告書刊行後、北海道教育委員会の指示により木古内町教育委員会へ移管予定である。写真・図面などの記録類に関しては北海道立埋蔵文化財センターにて保管される。

4　遺構・遺物の分類

（1）土器

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群

a類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群

b類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。東釧路系土器群などに相当するもの。

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群

a類：縄文尖底・丸底土器など。春日町式・石川野式・桔梗野式などに相当するもの。

b類：円筒土器下層式。

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群

a類：円筒土器上層式およびそれに後続するサイベ沢Ⅶ式・見晴町式に相当するもの。

b類：榎林式・大安在Ｂ式・ノダップⅡ式などに相当するもの。

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群

a類：天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津式・白坂３式などに相当するもの。

b類：ウサクマイＣ式・手稲式・ホッケマ式などに相当・併行するもの。

c類：堂林式・三ツ谷式・湯の里３式などに相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群

a類：大洞Ｂ・BC式とそれに併行する上ノ国式などに相当するもの。

b類：大洞Ｃ１・Ｃ２式などに相当・併行するもの。

c類：大洞Ａ・A'式・などに相当・併行するもの。

（2）剥片石器と礫石器

剥片石器

石鏃：素材を細かく扁平に加工し、端部に尖頭部を作り出したおおむね５㎝以下のもの。

石槍：素材の両面を加工し、尖頭部を作り出した５㎝以上のもの。

箆状石器：素材の両面を加工し、端部に斧状の刃部を作り出したもの。

両面調整石器：素材の両面を加工したもので、石鏃・石槍・箆状石器に分類されないもの。

石錐：素材の端部に錐状の尖頭部を作り出したもの。

つまみ付ナイフ：素材端部にノッチ状の加工でつまみ部を作り出したもの。

スクレイパー：素材の縁辺に連続的な二次加工を施したもの。

ピエス・エスキーユ（楔形石器）：剥片を素材とし、両極技法による剥離が行われたもの。

Ｒフレイク：素材に二次加工を施したもので、定形的な石器に分類されないもの。

Ｕフレイク：素材の縁辺に使用の痕跡とみられる微細な剥離痕が認められるもの。

フレイク：石核・定形的な石器から剥離されたもの。

石核：石器の素材となる剥片を剥離したもの。

礫石器

石斧：打ち欠き・敲打・研磨などの加工により、端部に斧状の刃部を作り出したもの。

石のみ：小型で細身の形状で、打ち欠き・敲打・研磨などの加工により、端部に斧状の刃部を作り出したもの。

たたき石：礫の凸面に敲打痕が観察されるもの。

くぼみ石：礫の主面に敲打によるくぼみが観察されるもの。

扁平打製石器：扁平な礫を素材とし、長軸端部を打ち欠き一側面に擦り痕をもつもの。

北海道式石冠：上面観が楕円形で、側面に敲打による溝を作出し、底面に擦り痕をもつもの。

すり石：礫に擦り痕が観察されるもので、扁平打製石器・北海道式石冠以外のもの。

台石・石皿：平坦面ないし凹面をもつ大型礫に打撃痕や磨痕が観察されるもの。

砥石：石器を研磨するのに使われたもので、礫の片面もしくは両面に磨痕が観察されるもの。

加工痕ある礫：礫に加工が観察されるもので、定型的な石器に含まれないもの。

5　遺跡の土層

本遺跡の土層は色調などの特徴から以下のようにⅠ～Ⅵ層の基本土層に区分した。なお、調査区南壁の31～33ライン（メインセクション①）と沢に向けての斜面にあたる16～18ライン付近（メインセクション②）について土層断面図を図示した（図Ⅲ－３）。

Ⅰ層：表土・耕作土　黒色（10YR2/1）の腐植土。層厚は平坦部で５㎝前後、斜面部では10～20㎝とやや厚くなる傾向がある。植林の杉の根を多量に含む。

Ⅱ層：黒色土　Ｂ－Ｔｍ火山灰降下以後の形成層。黒色～黒褐色（10YR1.7/1～2/2）を呈する。層厚は10㎝前後である。遺構や木根跡のくぼみなどでは厚く堆積し、中位にKo－dとみられる火山灰が確認されるところもある。縄文時代の遺物が少量出土するが、本来の包含層ではなく、流れ込みなどによるものと考えられる。

※駒ヶ岳d火山灰（Ko－d）：渡島半島東部の駒ヶ岳から1,640年に噴出したシルト状の火山灰。灰白色（10YR8/2）で、部分的ににぶい黄褐色（10YR6/4）を呈する。粒子が非常に細かくサラサラしている。層厚は２㎝程度で、遺構や木根のくぼみなどに斑状に薄く堆積する部分もみられた。

Ⅲ層：暗赤褐色土　黒褐色～暗赤褐色（7.5YR3/2～5YR3/3）を呈する。層厚は10㎝前後で斜面の上部で20㎝程度と厚く確認された。遺構の覆土などでは上部にＢ－Ｔｍ層が堆積する場合がある。遺物包含層である。

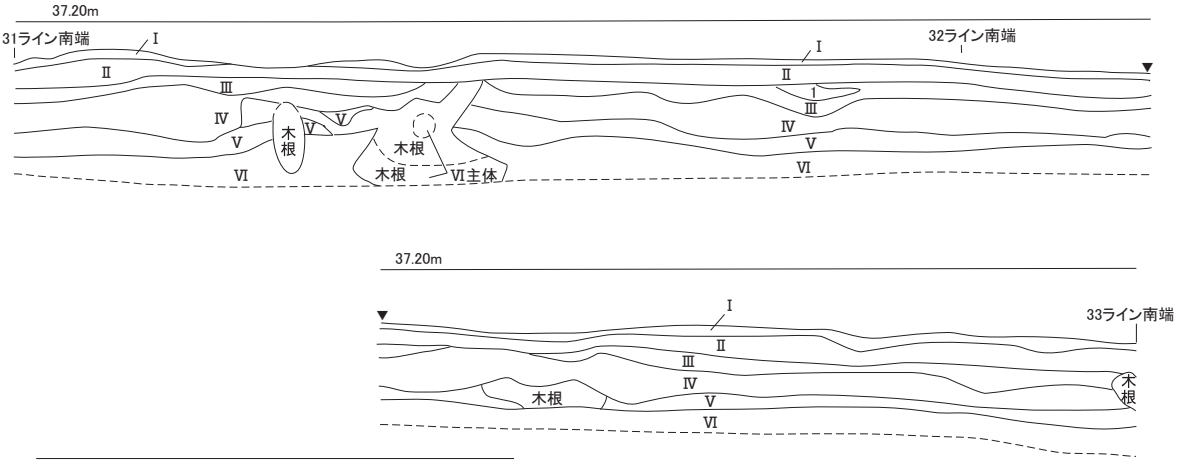
※白頭山－苫小牧火山灰（Ｂ－Ｔｍ）：朝鮮半島北部の白頭山から10世紀に降下したシルト状の火山灰。明黄褐色～にぶい黄褐色（10YR5/6～10YR6/4）を呈する。粒子が非常に細かくサラサラしている。層厚は３㎝前後で、暗褐色土と混じり斑状に堆積する部分もみられた。

Ⅳ層：黒色土　黒色～黒褐色（10YR1.7/1～10YR2/3）を呈する。調査区のほぼ全域に堆積し、層厚は20㎝前後、斜面部では30㎝程度と厚くなる傾向がある。全体的に下端層界はやや不明瞭で、粘性は中程度、堅密度は軟～堅。遺物包含層である。

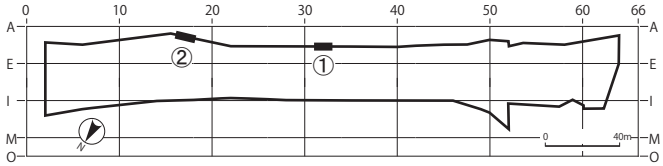
Ⅴ層：漸移層　暗褐色～褐色（10YR3/4～10YR4/6）を呈する。不均質で、下端層界は漸遷しており、Ⅴ層が確認できない範囲もみられる。少量であるが遺物が含まれる。

Ⅵ層：ローム層　黄褐色～明黄褐色（10YR5/6～10YR6/8）を呈する。地山にあたるローム層で、全体的に粘性は中～強、堅密度は堅である。大きさが不均一な腐植の発達する凝灰岩礫を含み、下部ほど密度が高く確認された。（直江）

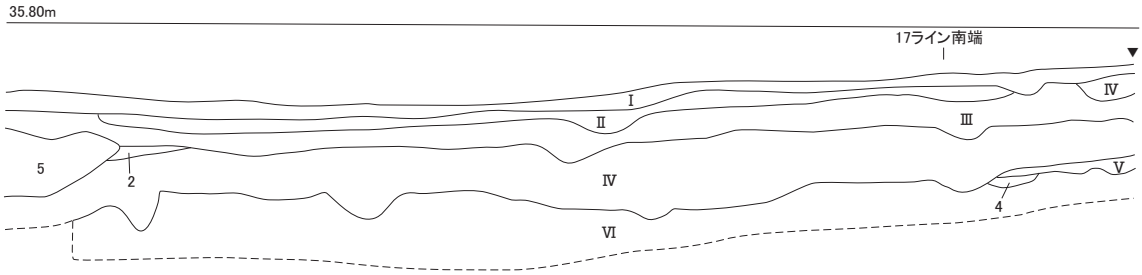
メインセクション①

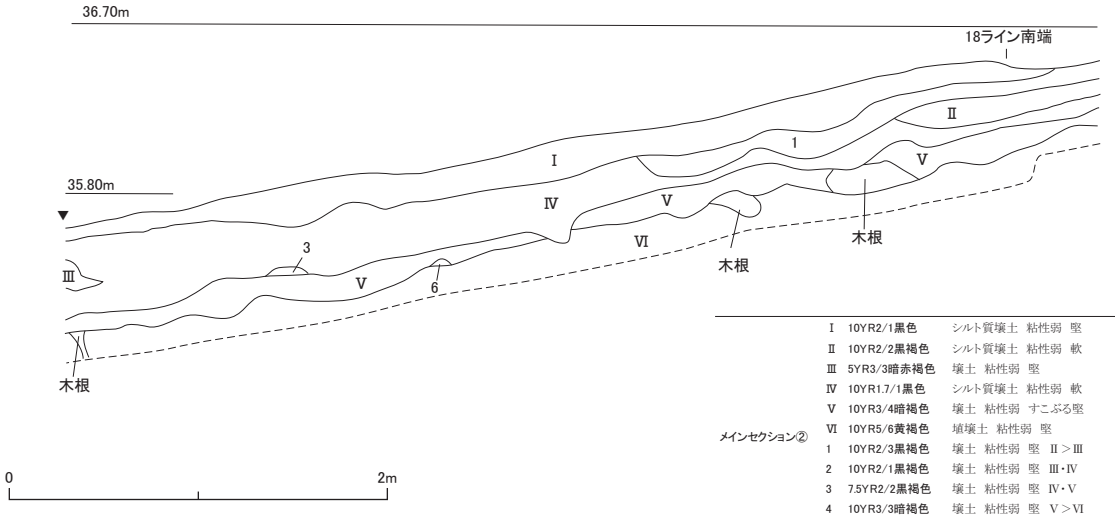


メインセクション①	Ⅰ	表土	—
	Ⅱ	10YR1.7/1黒色	埴土　粘性中～強　堅
	Ⅲ	7.5YR3/2黒褐色	シルト質壌土　粘性弱　堅
	Ⅳ	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性中　堅
	Ⅴ	10YR4/6褐色	埴土　粘性中　堅　Ⅵの漸移層
	Ⅵ	10YR6/8明黄褐色	埴土　粘性中～強　堅　ローム層、地山
	1	7.5YR7/6橙色	シルト質壌土　粘性なし　堅　火山灰層 B-Tm



メインセクション②





メインセクション②	Ⅰ	10YR2/1黒色	シルト質壌土　粘性弱　堅
	Ⅱ	10YR2/2黒褐色	シルト質壌土　粘性弱　軟
	Ⅲ	5YR3/3暗赤褐色	壌土　粘性弱　堅
	Ⅳ	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性弱　軟
	Ⅴ	10YR3/4暗褐色	壌土　粘性弱　すこぶる堅
	Ⅵ	10YR5/6黄褐色	埴壌土　粘性弱　堅
	1	10YR2/3黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅱ＞Ⅲ
	2	10YR2/1黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅲ・Ⅳ
	3	7.5YR2/2黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅳ・Ⅴ
	4	10YR3/3暗褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅴ＞Ⅵ
	5	7.5YR2/3極暗褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅴ・Ⅵ
	6	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性弱　堅　Ⅵ＞Ⅴ

図Ⅲ－3　土層断面図

Ⅳ　遺構の調査と遺物

遺構は、竪穴住居跡（H）３軒、土坑（P）19基、Ｔピット（TP）10基、焼土（F）19か所、土器埋設遺構１基が検出され、遺構に準ずるものとして遺物集中８か所、フレイクチップ集中（FC）１か所、礫集中（S）１か所を確認した。以下に上記の順に記載していく。章末に遺構一覧表（表Ⅳ－１）・遺構出土遺物集計表（表Ⅳ－２・３）・遺構出土掲載遺物一覧表（表Ⅳ－４・５）を付した。

１　竪穴住居跡

H－１（図Ⅳ－１・２、図版４・20）

位置：G・H59区　　**平面形**：類隅丸方形

規模：292×243／274×231／38㎝　　**長軸方位**：N－４°Ｅ

確認・調査：包含層をⅥ層上面付近まで掘り下げたところ、径２ｍ弱程度のやや不明瞭な暗褐色の落ち込みを確認した。遺構であることが想定されたため、落ち込みの東西・南北方向に土層観察用のトレンチ調査を行った。トレンチ調査で検出した小型のＰ－８を調査後さらに掘り下げ、比較的平坦な床面を確認した。また、壁面は急角度で、当初認識していた暗褐色の落ち込みの範囲より北側に大きく広がって検出した。全体を掘り進めたところ角の丸い台形状の掘り込みとなり、中央に長軸上に並ぶ付属土坑（HP－１・２）を確認した。これらのことから竪穴住居跡と認定した。覆土はⅥ層主体層にⅣ層が混じる褐色土とⅣ層起源とみられる暗褐色土からなり、人為的に埋められた可能性がある。

付属遺構：床面中央付近に南北に並ぶHP－１・２を確認した。いずれも50㎝前後で浅い皿状を呈している。

遺物出土状況：出土遺物は土器17点、剥片石器８点、礫石器・礫13点で総数38点である。内訳はⅣ群a類17点、フレイク８点、台石１点、加工痕ある礫１点、礫11点となっている。これらのうち床面から加工痕ある礫１点、礫６点が出土した。

掲載遺物：１はⅣ群a類、涌元式に相当する。断面角形の口唇部で、胴部には無節の斜行縄文が縦方向に施されている。２は砂岩製の台石。扁平な面が平滑となっている。

時期：後期前葉のＰ－８と重複し、当遺構のほうが古い。周辺の遺物出土状況から縄文時代中期前半の可能性がある。　（直江）

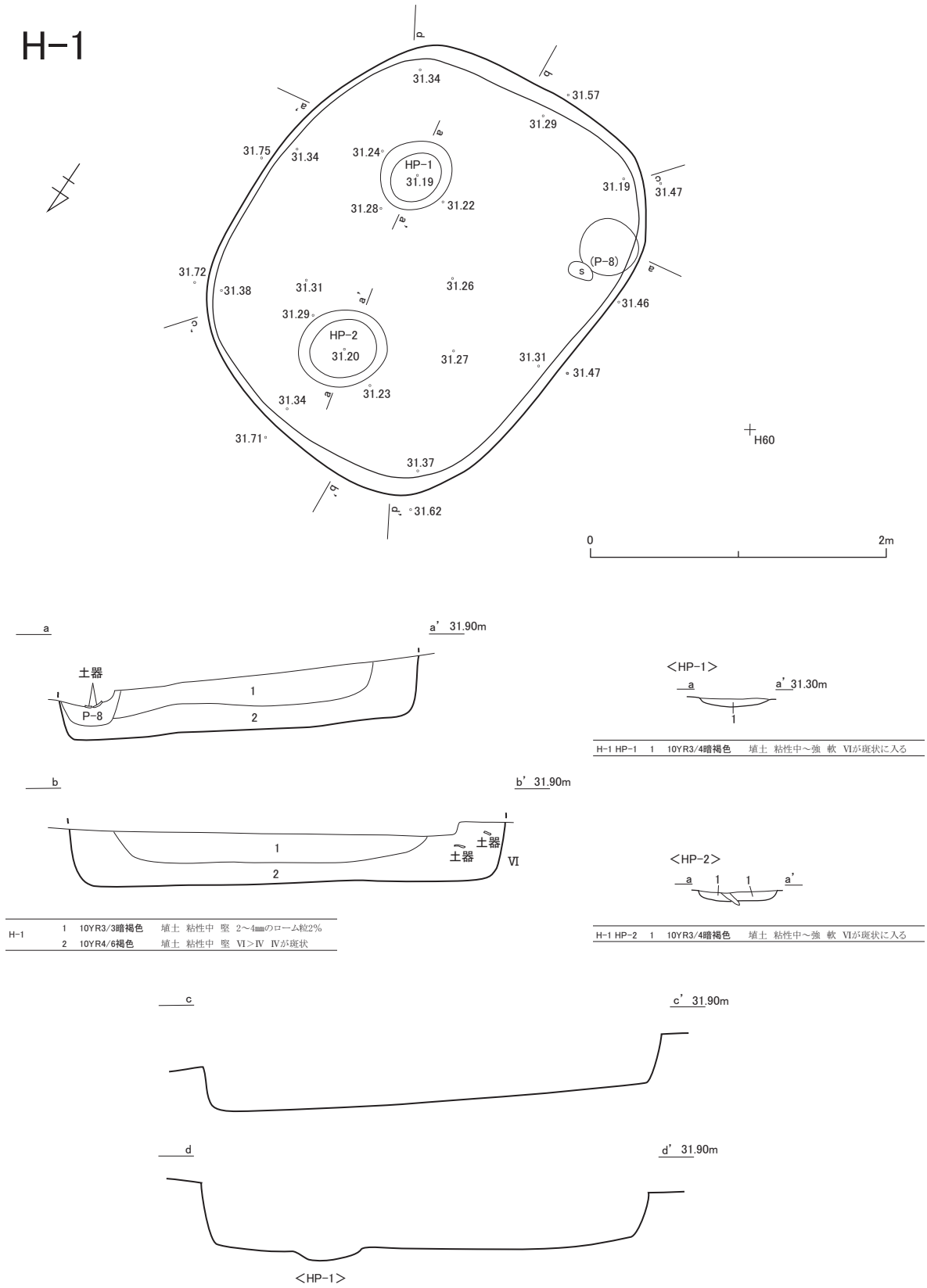
H－２（図Ⅳ－３～６、図版５・６・20・21）

位置：D16・17区　　**平面形**：隅丸方形

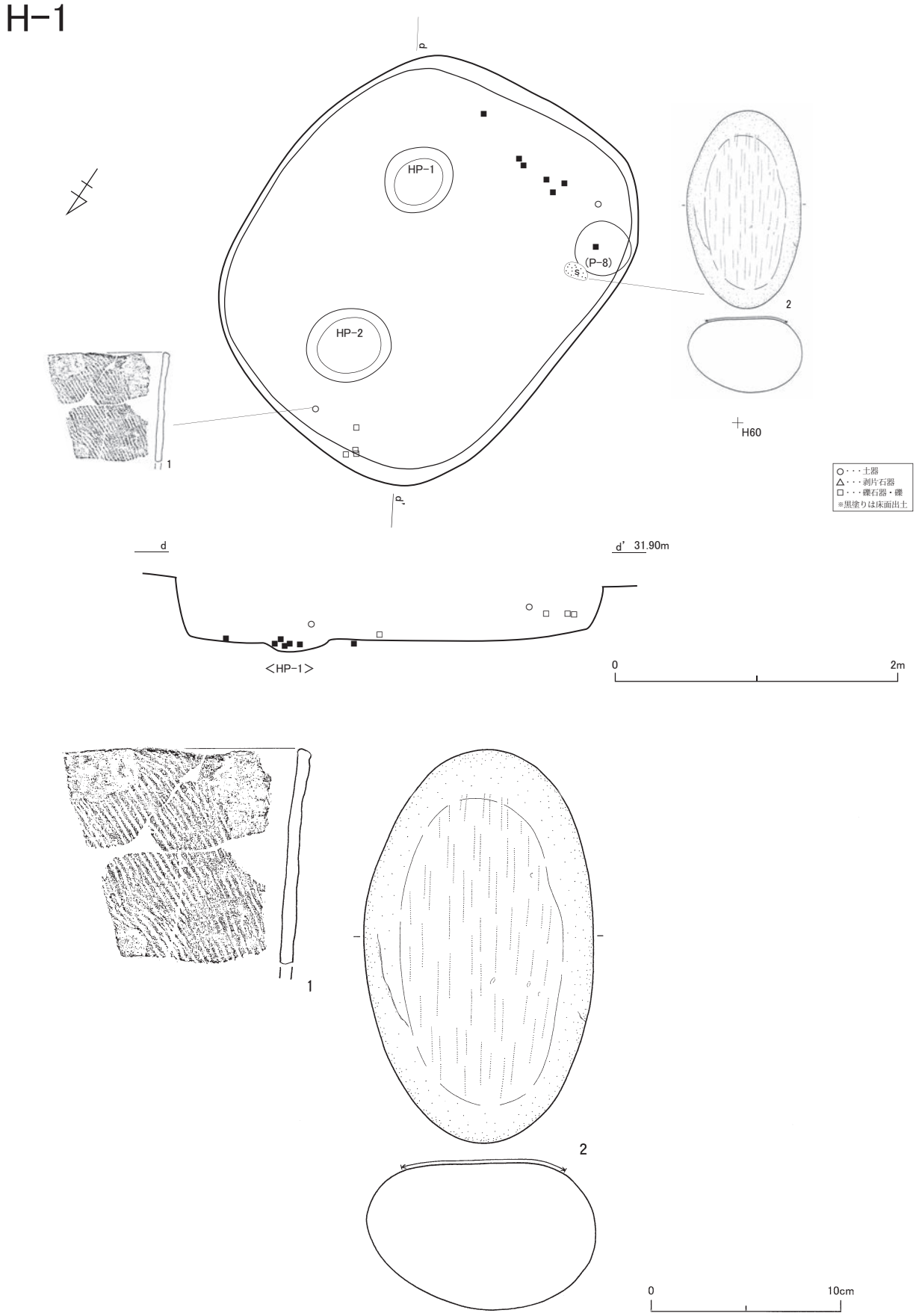
規模：306×219／269×182／63㎝　　**長軸方位**：N－１°Ｗ

確認・調査：包含層調査でⅣ層下位～Ⅴ層上面を掘り下げていたところ、焼土（F－９）を含む黒色土の方形の落ち込みを確認した。遺構であることが想定されたため、落ち込みの長・短軸に土層観察用のベルトを設定、トレンチ調査を行った。落ち込みの東西方向を切る短軸のトレンチでは、平坦な床と西壁との境に溝状遺構があり、壁は急角度で立ち上がる。東側では溝状遺構付近で床が段になっていた。南北方向を切る長軸のトレンチでは、北側の床が段になっており、南側ではやや低くなって急角度で立ち上がる。長軸の南壁には張り出すような付属土坑の存在が想定された。ベルトの土層観察により遺構の重複は無かったため、全体的に掘り進めていったところ、北～東側の床が幅20㎝前後

の段になっており、そこへ貼り付くように焼土（HF－１・２）を検出、段下の床面には隅丸方形になる溝状遺構を検出、住居跡と認定した。平面形は長軸上の南側に付属土坑（HP－１）を持つ隅丸



図Ⅳ－１　H－１（１）


H-1
HP-1
HP-2
(P-8)
S
H60
1
2
d
d' 31.90m
<HP-1>
0
2m
○・・・土器
△・・・剥片石器
□・・・礫石器・礫
※黒塗りは床面出土
0
10cm

図Ⅳ－２　Ｈ－１（２）

方形である。段になる床は、拡張もしくはベンチ状の可能性があるが、土層観察により覆土は軟性の土が主体であり、拡張された面での活動があったとは考えられない。ベンチ状であると判断する。覆土はⅣ層土主体にⅤ、Ⅵ層土が混じる黒褐色～暗褐色土が主体で、炭化材や焼土粒が混じる土で、西側の標高が高い方から人為的に埋められた可能性がある。覆土中の遺物も不規則に上下から出土した（図Ⅳ－４）。F－９はこの住居跡の落ち込みを利用した焼土と考えられる。

付属遺構：HP－１、床面の溝状遺構、地床炉ではない焼土のHF－１・２。HP－１は住居南側に位置する。覆土に炭化材や焼土粒が含まれ、Ⅵ層の黄褐色ロームも混入している。堆積状況から、埋戻しによるものと考えられる。HF－１・２はいずれも住居北側のベンチ上から検出した。どちらも平面形態は不整形で、単層である。HF－１から得られた炭化材で放射性炭素年代測定（AMS）と樹種同定を行ったところ、4,360±20yrBP、樹種はクリ？と想定されている（第Ⅵ章１・２節）。年代測定値は出土遺物から見ると概ね妥当か、やや新しい値であるが、調査で判断した時期と一致する。

遺物出土状況：出土遺物は土器175点、剥片石器44点、礫石器・礫72点で総数291点である。内訳はⅢ群a類175点、スクレイパー６点、Rフレイク５点、フレイク30点、石核３点、たたき石１点、北海道式石冠１点、扁平打製石器３点、台石１点、砥石２点、加工痕ある礫１点、礫63点となっている。これらのうち床面からⅢ群a類６点（１・２）、スクレイパー１点（10）、北海道式石冠１点（20）が出土した。覆土の上位からは大型の礫が多くみられる。遺物の多くは、住居の中心に向かって上位から中位にかけて突き刺さるような状態で出土しており、廃絶された住居の窪みに遺物が投棄されたものと考えられる。

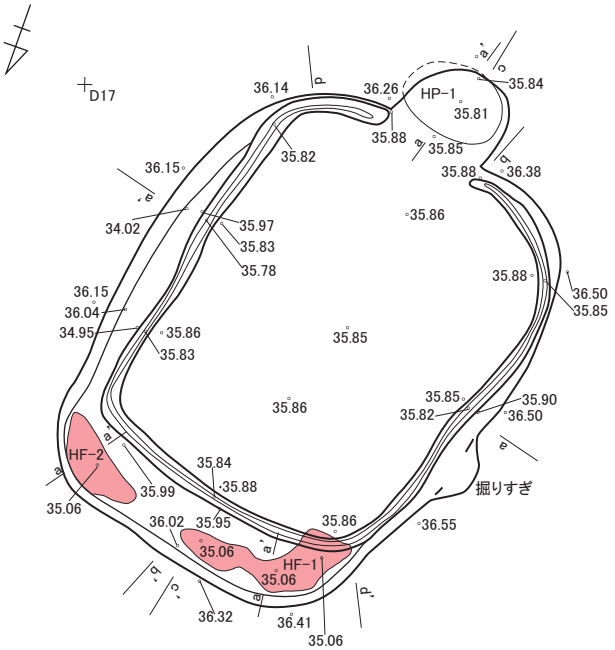
掲載遺物：１～７はⅢ群a類。１～３は円筒土器上層b式。１は無文地に粘土紐を弧状に貼り付けその間に馬蹄形圧痕文が施されている。２・３は山形突起部分で、口唇部と粘土紐上に撚糸の圧痕が施文されている。４・５はサイベ沢Ⅶ式古段階相当で、縄文地に貼付が施されている。４の地文は結束羽状縄文で、粘土紐に沿う浅い沈線と貼付上の撚糸の圧痕がみられる。５は突起先端部が尖る形状でループ状の粘土紐が貼り付けられている。口唇部には単節の縄が押捺され（５a）、地文は綾絡を持つ斜行縄文である（５b）。６・７はサイベ沢Ⅶ式新段階または見晴町式相当。６の突起先端部は丸く成形され、口唇部とともに棒状工具による刻みが施されている。地文はLR斜行縄文。７は口唇部に棒状工具による短い刻みがあり、地文にはRL単節斜行縄文が施されている。

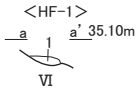
８～12はスクレイパー。８・９は縦長の形状で、８が両側縁、９が左側縁に刃部を作出している。また、９は腹面の下端に連続した平坦剥離がみられる。10・11・12は下端が広がる形状で、いずれも末端に刃部を作出している。13はRフレイク。裏面に節理面のある剥片を素材とし、下縁に加工がみられる。14～16は石核。14は円礫を素材とし、上下からの加撃が行われている。15は多方向からの剥離がみられ、主に横長剥片が剥離されている。16は正面の剥離および右側縁と裏面との交互剥離が主に行われている。17はたたき石。細長い礫の両端部に敲打痕がみられる。18・19は扁平打製石器。いずれも破損している。18は上面も擦り面に利用されている。20は北海道式石冠。底面は非常に平滑で、中央が黒色に変色している。付着物の可能性がある。底面からの剥離痕が正裏面に観察できる。右側面の敲打は弱く溝は浅い。21は台石。続成作用による固結力の弱い砂岩製である。22は砥石。凹面の一部に黒色の付着物がみられる。

時期：遺構と周辺の遺物、住居跡の形態などから縄文時代中期前半の住居跡と判断する。

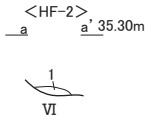
（渡井瞳・袖岡淳子）

H−2

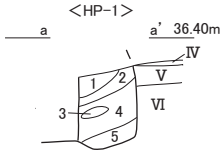




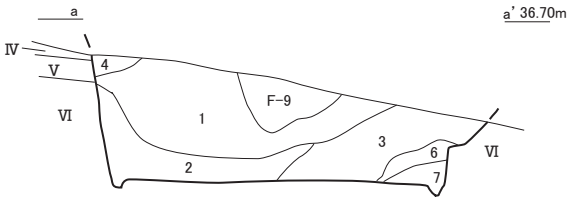
H−2 HF−1	1	7.5YR3/4褐色	壌土	粘性弱	堅	炭化材・焼土粒多く含む



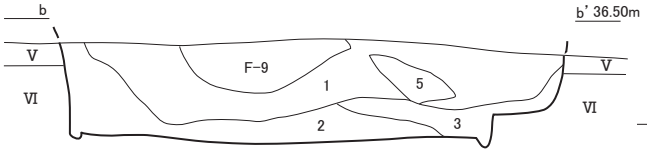
H−2 HF−2	1	7.5YR3/4褐色	壌土	粘性弱	堅	炭化材・焼土粒多く含む



H−2 HP−1	1	10YR2/1黒色	壌土	粘性弱	堅	Ⅳ主体
	2	10YR2/2黒褐色	壌土	粘性弱	軟	
	3	7.5YR3/4暗褐色	壌土	粘性弱	軟	焼土粒混じる
	4	10YR2/3黒褐色	埴壌土	粘性弱	軟	Ⅳ・Ⅴ＞Ⅵ　炭化材・焼土粒、Ⅳ層ローム粒混じる (H−2土層断面2層と同じ土)
	5	10YR3/4暗褐色	埴壌土	粘性弱	軟	Ⅵ＞Ⅴ



H−2aa'	1	7.5YR2/2黒褐色	壌土	粘性弱	堅	Ⅳ＋Ⅴ　Ⅳ層ローム粒混じる
	2	7.5YR3/4暗褐色	埴壌土	粘性弱	堅	Ⅴ＞Ⅳ　Ⅵ層ローム粒混じる

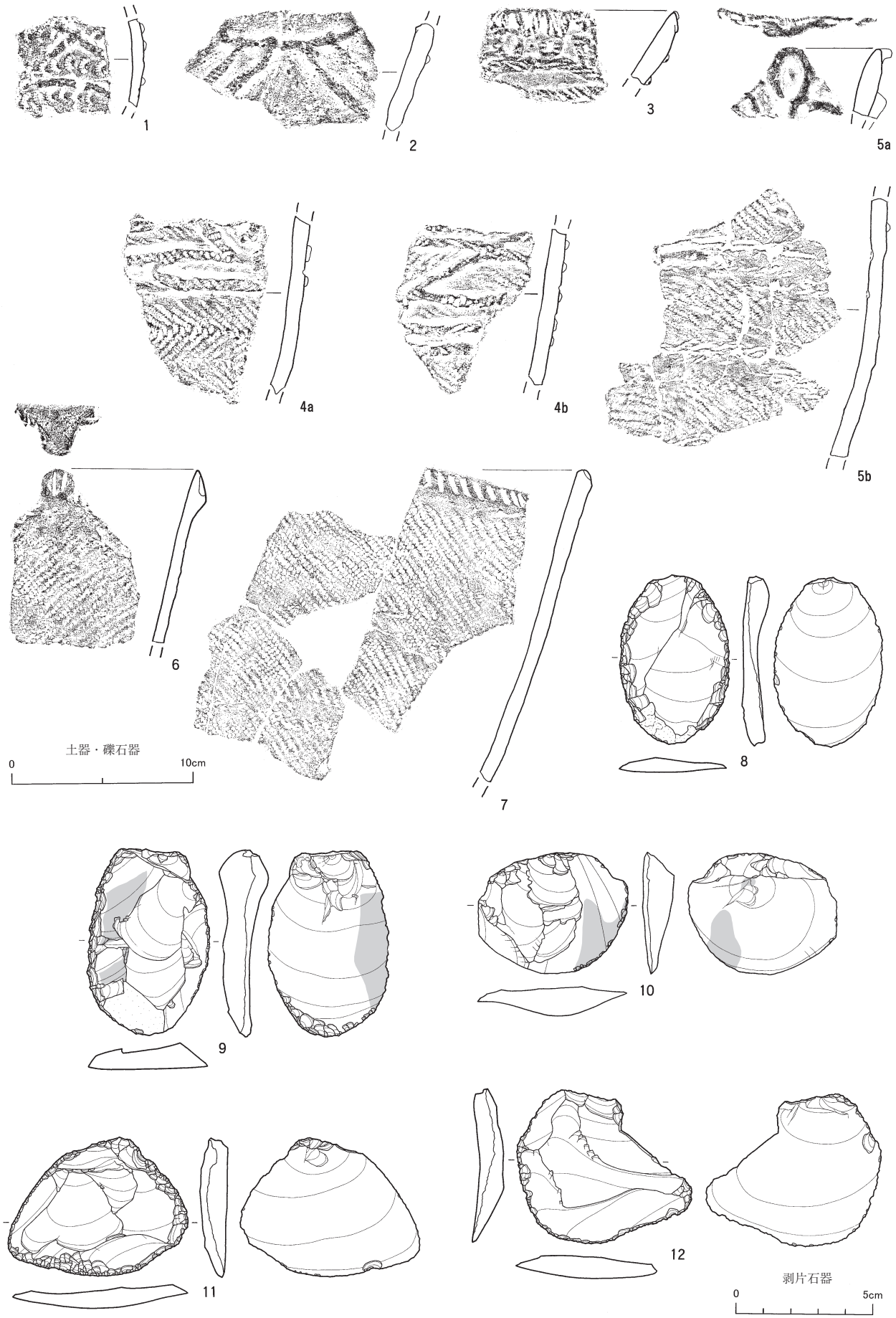


H−2bb'	1	10YR2/黒褐色	壌土	粘性弱	堅	Ⅳ・Ⅴ≫Ⅵ　炭化材・焼土粒、Ⅵ層ローム混じる
	2	10YR2/3黒褐色	埴壌土	粘性弱	軟	Ⅳ・Ⅴ＞Ⅵ　炭化材・焼土粒、Ⅵ層ローム混じる
	3	10YR3/4暗褐色	壌土	粘性弱	堅	Ⅳ＞Ⅴ　炭化材・焼土粒、Ⅵ層ローム粒混じる
	4	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土	粘性弱	軟	Ⅳ主体　炭化材・焼土粒、Ⅵ層ローム粒混じる
	5	10YR2/3黒褐色	埴壌土	粘性弱	堅	Ⅳ・Ⅴ＞Ⅵ　炭化材・焼土粒、Ⅵ層ローム粒混じる

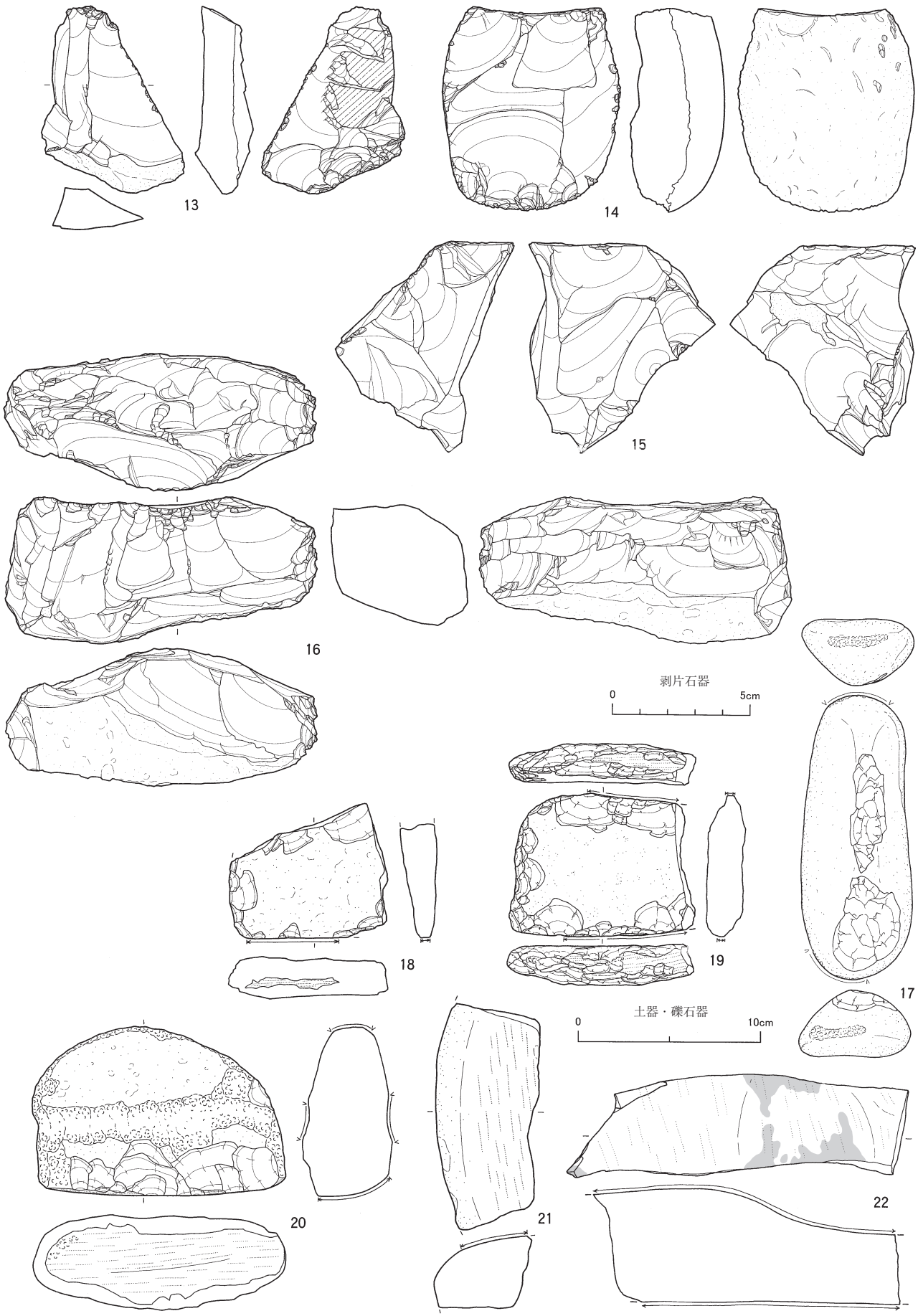
図Ⅳ−3　H−2（1）

H-2
D17
d
d'
18
14
9
1
22
2
10
5b
20
4a
4b
5a
6
17
15
16
○・・・土器
△・・・剥片石器
□・・・礫石器・礫
※黒塗りは床面出土
0
2m
d
d' 36.60m

図Ⅳ－４　Ｈ－２（２）



図Ⅳ－５　Ｈ－２出土の遺物（１）



図Ⅳ－6　H－2出土の遺物（2）

H－3（図Ⅳ－７～11、図版７・21・22）

位置：E18・19区　　**平面形**：類隅丸方形

規模：319×249／291×225／26㎝　　**長軸方位**：N－56°E

確認・調査：包含層調査でⅤ層下位～Ⅵ層上面にかけて掘り下げていたところ、灰褐色土の落ち込みにフレイク集中と土器片のまとまりを確認した。遺構であることが想定されたため土層観察用のベルトを設定、トレンチ調査と並行し全体を掘り下げたところ、平坦な床面と急角度で立ち上がる壁を検出し竪穴住居跡と認定した。南側の壁と床が抜根による撹乱を受けているが、平面は楕円に近い隅丸方形と考えられる。また、トレンチ調査で検出したフラスコ状土坑のP－19と重複関係にあるが、これも撹乱により新旧は不明である。

付属遺構：床面と住居跡の周辺を精査したが検出できなかった。

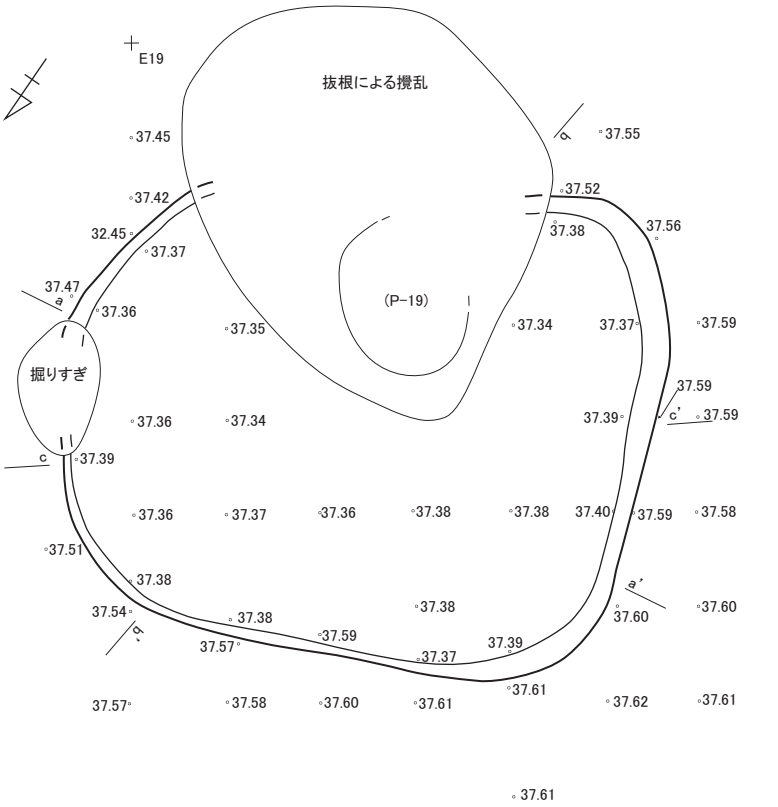
遺物出土状況：出土遺物は土器114点、剥片石器176点、礫石器・礫51点で総数341点である。内訳はⅢ群a類110点、Ⅳ群a類４点、石錐１点、スクレイパー３点、Rフレイク７点、フレイク164点、石核１点、たたき石４点、扁平打製石器１点、すり石１点、台石３点、加工痕ある礫２点、礫40点となっている。これらのうち床面から台石１点（15）、礫２点が出土した。覆土中からⅢ群a類土器の深鉢形土器１個体（２）の破片とフレイク集中１か所を検出した。ここから４・５・９・10の接合資料が得られている。

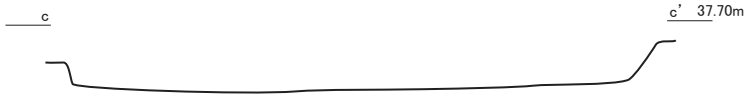
掲載遺物：１・２はⅢ群a類。１は円筒土器上層b式で、口唇部と口頸部文様帯に撚糸による刻みが施された粘土紐が貼り付けられている。文様帯には馬蹄形圧痕文と粘土紐に沿う３本一組の撚糸による圧痕が施されている。２はサイベ沢Ⅶ式新段階または見晴町式相当。大型の深鉢で、波状口縁のもの。推定４単位の小さな山形突起があり、突起下に橋状把手を持つ。口縁部上端には撚糸による刻みが短かく縦位に施され、突起の上端にも及んでいる。地文は綾絡を持つ斜縄文が施文されている。

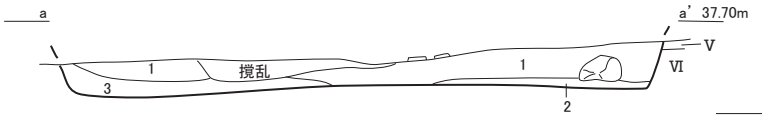
３・４－１・５－１はスクレイパーで、４・５はその接合資料。３は縦長剥片素材と思われ、左側縁に連続した加工がみられる。４－１は４の状態から、比較的初期段階に得られた剥片を素材としていることが分かる。背面が原石面に覆われた剥片の両側縁に錯向状の加工を施し、全体的にやや円い形状に成形している。また、裏面にはバルブを除去するような平坦加工も施されている。５－１は５の状態から、素材の打面から右側縁にかけての集中的な加工の様子が分かる。屈曲する縁辺に成形されている。６～８・９－１はRフレイクで９はその接合資料。６は横長剥片素材で、打面と下縁に錯向状の加工がなされている。７は左側縁に僅かな加工がなされている。右側縁には90度打面転移の痕跡がみられる。８は両側縁に部分的な加工が施されている。９は９－１の状態から、縦長剥片素材であったことが分かる。加工は左側縁に施されている。器体の破損後は上半部に折れ面からの剥離がなされるが、素材の打面部を大きく取り込むウートラパッセとなっている。10はフレイクの接合資料である。左側縁の背面側を中心とした薄手の平坦加工による両面調整がなされており、製作遺物は石槍の可能性が高い。11は石核。破損した大型剥片の折れ面からの剥離がなされている。12・13はたたき石。いずれも下端よりややずれた縁辺に敲打痕がみられる。14は扁平打製石器。擦り面が細く、部分的にエッジが残存している。15・16は台石。15は素材の小口にあたる平坦面を利用している。16は角柱状の礫を素材としている。

時期：遺構とその周辺からⅢ群a類土器が出土していることから縄文時代中期前半の住居跡と判断する。（袖岡）

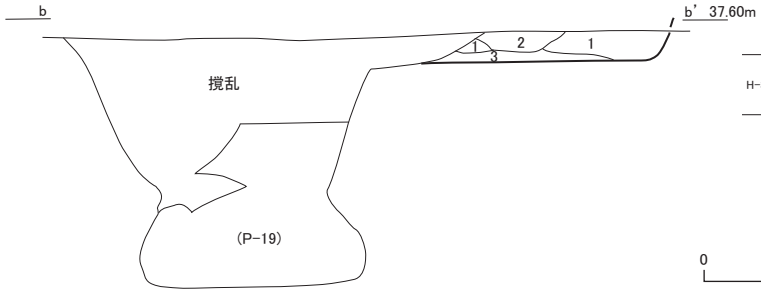
H-3







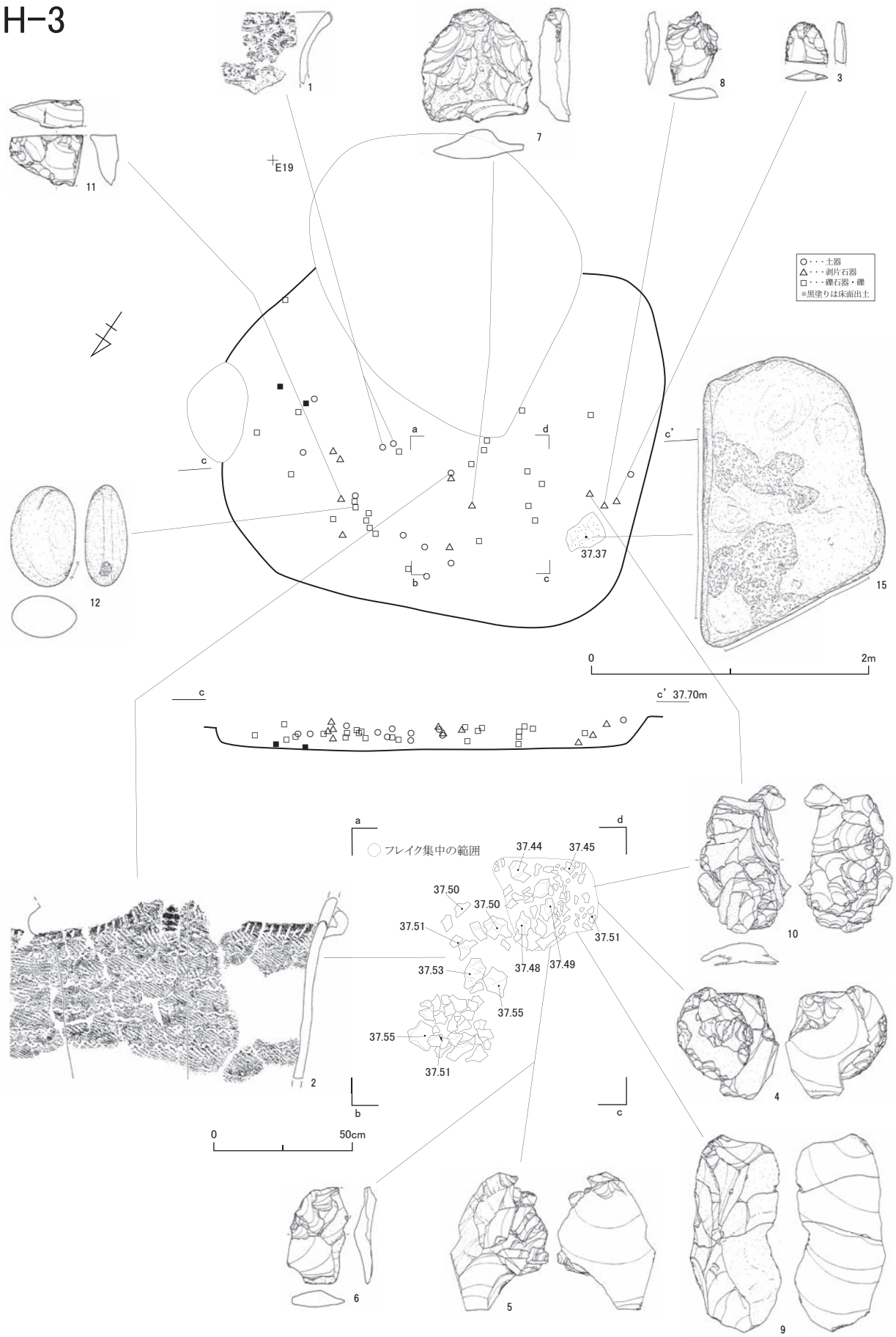
H-3aa'	1	7.5YR4/2灰褐色	埴壌土　粘性強　堅　ローム粒1%
	2	7.5YR5/4にぶい褐色	埴壌土～埴土　粘性強　堅　IVとVIの斑状
	3	7.5YR5/6明褐色	埴土　粘性強　やや軟　ローム主体



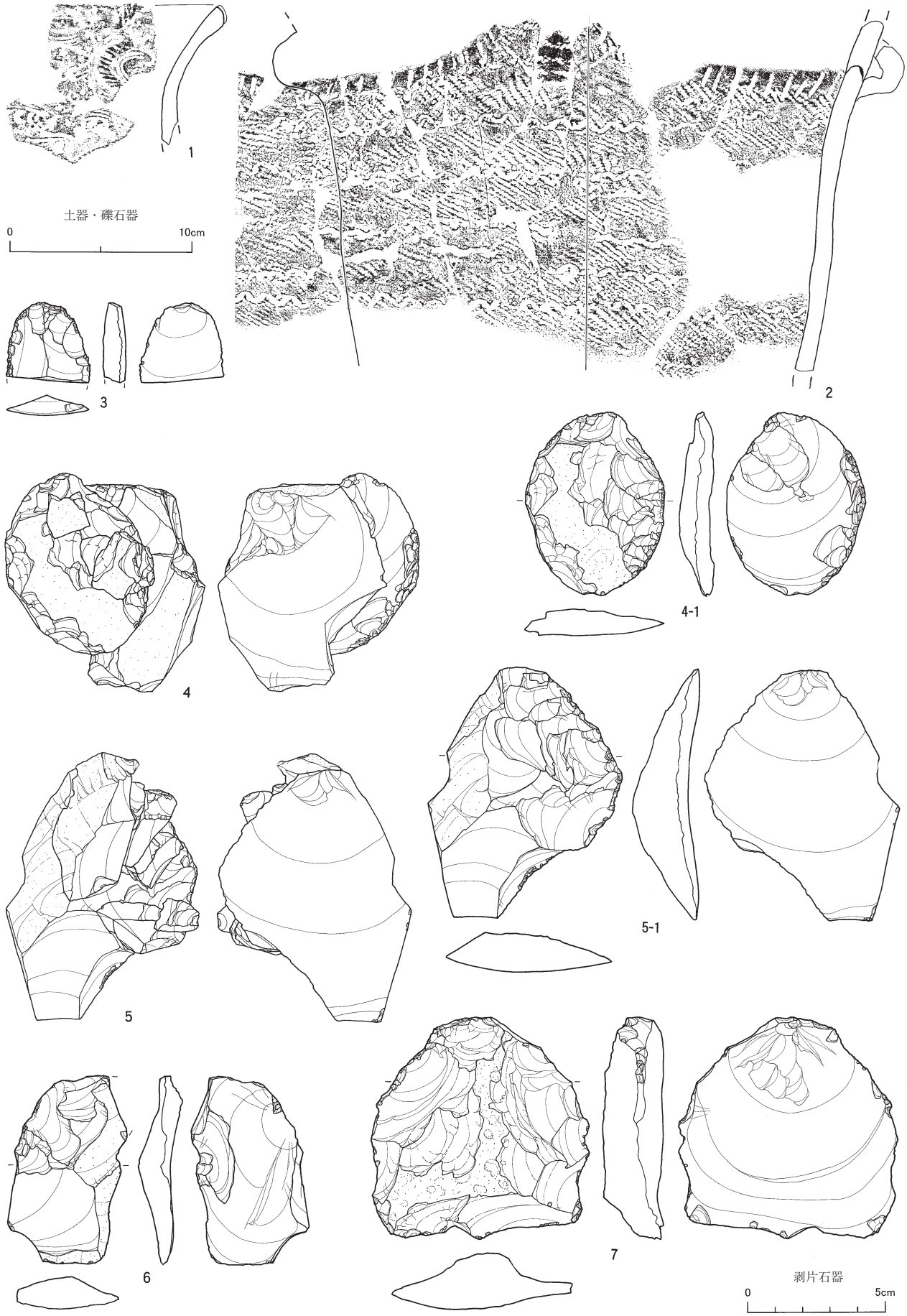
H-3bb'	1	7.5YR4/2灰褐色	埴壌土　粘性強　堅　ローム粒1%
	2	7.5YR3/1褐灰色	埴壌土　粘性中～強　やや軟
	3	7.5YR5/6明褐色	埴土　粘性強　やや軟　VI主体

0　2m

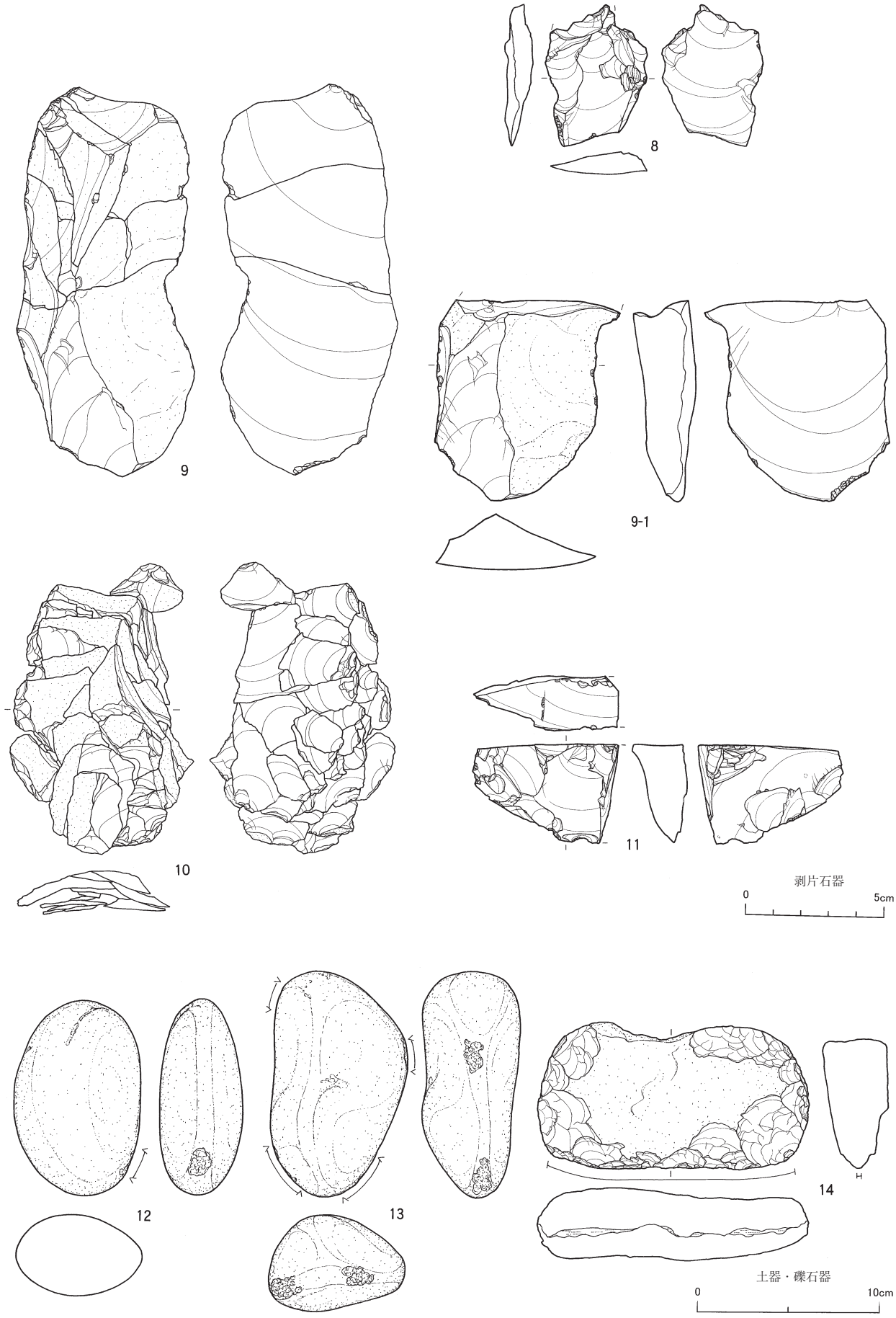
図Ⅳ－7　H－3（1）


H-3
1
7
8
3
11
E19
○・・・土器
△・・・剥片石器
□・・・礫石器・礫
※黒塗りは床面出土
a
d
c
c'
37.37
b
c
12
15
0
2m
c
c' 37.70m
a
d
フレイク集中の範囲
37.44
37.45
37.50
37.50
37.51
37.51
37.53
37.48
37.49
37.55
37.55
37.51
2
b
c
0
50cm
10
4
6
5
9

図Ⅳ－８　Ｈ－３（２）



図Ⅳ－9　H－3出土の遺物（1）



図Ⅳ－10　H－３出土の遺物（２）

図Ⅳ－11　H－3出土の遺物（3）

2　土坑

P－1（図Ⅳ－12・17、図版８・23）

位置：F57区　　**平面形**：円形

規模：（165）×152／170×164／90cm

調査・特徴：試掘調査時に確認されていた。試掘坑の精査により壁の立ち上がりを検出した。Ⅴ層上面まで掘削していたが、平面的には土坑のプランが検出できなかったため、さらに10cm程掘り下げたⅥ層中に黒色土のまとまりを確認した。半截したところ覆土上部より大型の台石が出土した。土層の堆積状況を観察し、壁面・坑底面を検出したことから土坑と判断した。坑底は平坦で壁は緩やかにオーバーハングするフラスコ状土坑である。覆土は下位（６～14層）に壁面の崩落とみられるⅥ層とローム粒が混じる黒色土がラミナ状に堆積し、上位にはローム粒が混じるⅣ層主体の黒色～黒褐色土の流れ込みが認められることから埋戻しのない自然堆積の土坑とみられる。

遺物出土状況：出土遺物は土器４点、礫石器・礫９点で総数13点である。内訳はⅢ群a類４点、台石１点、礫８点となっている。すべて覆土中から出土している。

掲載遺物：１・２はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式古段階相当。１は貼付上に棒状工具による斜位の刻みが施されている。地文は結束羽状縄文。２は貼付上に撚糸による刻みが施されている。摩耗が激しく不鮮明であるが、縄文地とみられる。３は台石。大型で長さ37cm程ある礫の平坦面を利用している。

時期：遺構周辺の遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。

P－2（図Ⅳ－12、図版８）

位置：F58区　　**平面形**：円形

規模：73×63／74×65／69cm

調査・特徴：Ⅵ層上面を５cmほど掘り下げた時点で、黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認し、トレンチを設定して壁面・坑底面を検出し土坑と判断した。坑底は平坦、立ち上がりは緩やかで、壁は垂直に近い。覆土はⅥ層主体の褐色土と暗褐色土が交互に堆積する自然堆積とみられる。

遺物出土状況：出土遺物は坑底より出土した礫１点のみである。

時期：遺構周辺の遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。

P－3（図Ⅳ－12・17、図版８・23）

位置：E57区　　**平面形**：円形

規模：66×59／101×84／53cm

調査・特徴：Ⅵ層上面を５cmほど掘り下げた時点で、黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認し、壁面・坑底面を検出し土坑と判断した。坑底は平坦で、壁はオーバーハングするフラスコ状土坑である。覆土は下位が壁面の崩落土を多く含む土層で、上位がⅣ層を主体とする流れ込みで自然堆積とみられる。

遺物出土状況：出土遺物の総数は66点で、剥片石器40点、礫石器・礫26点である。内訳はスクレイパー１点、フレイク39点、台石２点、礫24点となっている。すべて覆土中から出土している。

掲載遺物：４はスクレイパー。下端が収束する形状で、右側縁に加工が施されている。

時期：遺構周辺の遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。　（直江）

P－4（図Ⅳ－13・17、図版８・23）
位置：F37・38区　　**平面形**：楕円形
規模：194×159／176×130／46cm　　**長軸方位**：N－７°W
調査・特徴：包含層調査でⅣ層下位～Ⅴ層上面にかけ、黒色の楕円形の落ち込みを確認した。遺構と想定し半截したところ、平坦な坑底と急で明瞭な壁の立ち上がりを確認、土坑と認定した。覆土はⅣ層土を主体とした自然堆積によるものである。上位には炭化材が微量に含まれる。覆土３層は他の層と比べて水分含有量がやや多い。
遺物出土状況：出土遺物は土器８点、剥片石器４点、礫石器・礫34点で総数46点である。内訳はⅣ群a類８点、フレイク４点、台石１点、礫33点となっている。すべて覆土中から出土している。
掲載遺物：５はⅣ群a類。胴部片でLR単節の縄文が横位に施されている。
時期：土坑とその周辺の遺物から縄文時代後期前葉と判断する。　（渡井・袖岡）

P－5（図Ⅳ－13・17、図版９・23）
位置：D57区　　**平面形**：円形
規模：94×92／76×73／23cm
調査・特徴：Ⅵ層上面を５cmほど掘り下げた時点で、黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認し、壁面・坑底面を検出し土坑と判断した。坑底はほぼ平坦で、立ち上がりは緩やかである。覆土は下位がⅥ層を含む褐色土、上位がⅣ層を主体とする流れ込みで自然堆積とみられる。
遺物出土状況：出土遺物は覆土中より出土したスクレイパー１点のみである。
掲載遺物：６はスクレイパー。末端がやや幅広の縦長剥片を素材とし、主に裏面に対向する平坦剥離が施されている。
時期：遺構周辺の遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。

P－6（図Ⅳ－13、図版９）
位置：E58区　　**平面形**：円形
規模：80×71／97×93／51cm
調査・特徴：Ⅵ層上面を５cmほど掘り下げた時点で、黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認し、壁面・坑底面を検出し土坑と判断した。坑底は平坦で、壁は直線的にオーバーハングするフラスコ状土坑である。覆土は下位（４・５層）が崩落土とみられるⅥ層が主体の褐色土で、上位がⅣ層を主体とする流れ込みで自然堆積とみられる。
遺物出土状況：出土遺物の総数は礫２点のみである。これらのうち坑底から礫１点が出土している。
時期：遺構周辺の遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。

P－7（図Ⅳ－13・17、図版９・23）
位置：D・E56区　　**平面形**：円形
規模：140×138／135×128／108cm
調査・特徴：Ⅵ層上面を５cmほど掘り下げた時点で、黒褐色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認し、壁面・坑底面を検出し土坑と判断した。坑底は平坦で、壁は西側が急でほぼ垂直に立ち上がり、東側は緩やかにオーバーハングするフラスコ状土坑である。覆土は下位（４～12層）に崩落土とみられるⅥ層が主体の黄褐色～褐色土が含まれ、上位（１・３層）にⅣ層を主体とする黒色土

が流れ込んでおり自然堆積とみられる。なお、２層は色調からＢ－Ｔｍの可能性がある。
遺物出土状況：出土遺物は土器３点、剥片石器１点、礫石器・礫６点で総数10点である。内訳はⅢ群a類３点、フレイク１点、たたき石１点、礫５点となっている。すべて覆土中から出土している。
掲載遺物：７はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式古段階相当。深鉢形土器のやや外反する口頸部文様帯の破片で、縄文地に粘土紐が貼り付けられ、貼付上には撚糸の圧痕が施されている。８はたたき石。素材の下端に敲打痕があり、それに起因する剥離痕がみられる。
時期：遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。

Ｐ－８（図Ⅳ－14・17、図版９・23）
位置：G59区　　**平面形**：円形
規模：（40）×39／（24）×22／18cm
調査・特徴：Ｈ－１を調査中、南西隅の覆土を10cmほど掘り下げた時点で、一括土器片が多数出土したことから、竪穴住居の覆土中に掘り込まれた土坑の可能性を想定した。Ｈ－１の調査に用いたトレンチで堆積状況を確認したところ壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底はほぼ平坦、立ち上がりは緩やかで壁は外上方に開く。覆土は黄褐色土のみで埋戻しの可能性がある。
遺物出土状況：出土遺物は覆土中より出土したⅣ群a類の土器19点のみである。
掲載遺物：９はⅣ群a類、涌元式相当の深鉢形土器。胴部が張り出し、口縁部が外反する器形で、４単位の波頂部を持つ波状口縁である。地文にはRL単節縄文が縦位に施文されている。Ｈ－１覆土出土の遺物も接合している。
重複・時期：Ｈ－１と重複し、当遺構の方が新しい。出土遺物から判断すると、縄文時代後期前葉と考えられる。

Ｐ－９（図Ⅳ－14、図版10）
位置：F47区　　**平面形**：楕円形
規模：146×（95）／92×41／42cm　　**長軸方位**：Ｎ－40°Ｅ
調査・特徴：Ⅵ層上面で暗褐色土がリング状にまとまる範囲を検出した。半截して堆積状況を確認したところ壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底は湾曲し南西側がやや深く全体的に亀裂による凹凸がみられた。立ち上がりは緩やかに湾曲し、壁はそのまま外上方に開く。覆土はⅣ層を主体とする流れ込みで自然堆積である。なお、１層は色調からＢ－Ｔｍの可能性がある。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
重複・時期：ＴＰ－１と重複し、当遺構の方が古い。縄文時代と考えられる。

Ｐ－10（図Ⅳ－14・17、図版10・23）
位置：H44区　　**平面形**：不整円形
規模：202×（162）／71×65／62cm　　**長軸方位**：Ｎ－68°Ｗ
調査・特徴：Ⅵ層上面で黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認したところ壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底はほぼ平坦で平面が隅丸の台形をなす。立ち上がりは緩やかで壁は外上方に大きく開く。覆土は最下位にⅥ層を主体とする明褐色土があり、上位にはⅣ層を主体とする黒～黒褐色土がみられた。自然堆積と考えられる。なお、上位の１・２層にはKo－dが斑状に混在しており、当遺構底部の周辺のⅥ層は締まりを欠いていた。

遺物出土状況：出土遺物は石鏃１点、礫３点で総数４点である。すべて覆土中から出土している。
掲載遺物：10は石鏃。カエシの弱い有茎で、主に正面への加工によって成形され、裏面には素材腹面が大きく残る。カエシの一部にアスファルトが残存している。
時期：不明である。

P－11（図Ⅳ－15・18、図版10・23）
位置：F37区　　**平面形**：円形
規模：50×46／34×29／39㎝
調査・特徴：Ⅵ層上面で黒褐色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認したところ壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底は平坦、立ち上がりは急で、壁は外上方に開く。覆土はⅣ層由来の黒褐色土でローム粒が混入しており、自然堆積である。
遺物出土状況：出土遺物はＲフレイク１点、フレイク１点、礫１点で総数３点である。すべて覆土中から出土している。
掲載遺物：11はＲフレイク。横長剥片を素材とし、下縁の一部に加工がみられる。
時期：不明である。近くに類似する形態のＰ－12が存在することから両者は同時期に構築された可能性が高い。

P－12（図Ⅳ－15、図版10）
位置：F37区　　**平面形**：円形
規模：41×37／26×25／35㎝
調査・特徴：Ⅵ層上面で黒褐色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認したところ壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底は平坦、立ち上がりは急で、壁は外上方に開く。覆土はⅣ層由来の黒褐色土でローム粒が混入しており、自然堆積である。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：不明である。近くに類似する形態のＰ－11が存在することから両者は同時期に構築された可能性が高い。　（直江）

P－13（図Ⅳ－15、図版11）
位置：C18区　　**平面形**：円形
規模：72×62／27×27／28㎝　　**長軸方位**：Ｎ－５°Ｗ
調査・特徴：包含層調査でⅤ層中に黒色土の円形の落ち込みを確認した。遺構と想定し半截したところ幅の狭い平坦な坑底と急で明瞭に立ち上がる壁を検出し土坑と認定した。覆土は下位（２・３層）に崩落したⅥ層、上位にⅣ層土を主体とした自然堆積がみられた。
遺物出土状況：出土遺物はⅢ群ａ類の土器３点、フレイク３点、礫５点で総数11点である。すべて覆土中から出土している。
時期：土坑とその周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の土坑と考えられる。

P－14（図Ⅳ－15・18、図版11・23）
位置：C18区　　**平面形**：円形
規模：61×51／46×34／16　　**長軸方位**：Ｎ－65°Ｅ

調査・特徴：包含層調査でⅤ層中に黒色土の円形の落ち込みを確認した。遺構と想定し半截したところ、平坦な坑底と緩やかで明瞭に立ち上がる壁を検出し土坑と認定した。覆土は主にⅣ層土を主体とした自然堆積によるものである。
遺物出土状況：出土遺物はスクレイパー１点、石核１点で総数３点である。すべて覆土中から出土している。
掲載遺物：12はスクレイパー。末端が幅広の剥片を素材とし、縁辺全体に細かい加工が施されている。13は石核。細かい剥離によって打面を作出し、正面への剥離が行われているが、大半が石核上部までの剥離に留まっており、有効な剥片が得られていない。
時期：土坑とその周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の土坑と考えられる。　（渡井・袖岡）

P－15（図Ⅳ－15、図版11）
位置：D39区　　**平面形**：円形
規模：82×81／46×45／21㎝
調査・特徴：Ⅵ層上面で黒褐色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認したところ皿状の壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底・立ち上がりとも湾曲し、壁は外上方に開く。覆土はⅣ層由来の土層で自然堆積である。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：不明である。　（直江）

P－16（図Ⅳ－15・18、図版11・12・23）
位置：E18区　　**平面形**：楕円形
規模：133×103／120×107／68㎝　　**長軸方位**：N－58°E
調査・特徴：包含層調査でⅥ層中に黒褐色土の楕円形の落ち込みを確認した。遺構と想定し半截したところ、平坦で幅広の坑底とオーバーハングし開口部で開く壁を検出しフラスコ状土坑と認定した。覆土上位の１～３層は自然堆積によるもの、覆土４層より下位の土はⅣ層土を主体とした埋戻しの可能性がある。
遺物出土状況：出土遺物は土器19点、剥片石器17点、礫石器・礫９点で総数45点である。内訳はⅢ群a類19点、スクレイパー１点、フレイク16点、扁平打製石器１点、礫８点となっている。これらのうち坑底面から扁平打製石器１点（16）、礫１点が出土した。
掲載遺物：14はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式古段階相当。深鉢形土器のやや外反する口頸部文様帯の口縁部片である。口縁部には縄文地に粘土紐が鋸歯状に貼り付けられている。15はスクレイパー。末端ヒンジの剥片を素材とし、右側縁の腹面側に細かな加工が全体的に施されている。16は扁平打製石器。下縁からの加工が僅かにみられるのみで、擦り面幅が大きく発達している。
時期：坑底面から扁平打製石器が出土していることや周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の土坑と判断する。　（渡井・袖岡）

P－17（図Ⅳ－16、図版12）
位置：E35区　　**平面形**：円形
規模：89×81／37×33／30㎝
調査・特徴：Ⅵ層上面で黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認したところ壁面・坑

底面を検出したため土坑と判断した。坑底はほぼ平坦だが南側が深い。立ち上がりは緩やかでやや湾曲し、壁は外上方に開く。覆土は最下位にⅥ層主体の黄褐色土、その上位にⅣ層由来の土層があり自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：不明である。

P－18（図Ⅳ－16・18、図版12・24）

位置：C・D28区　　**平面形**：楕円形

規模：160×138／151×141／105㎝　　**長軸方位**：N－33°E

調査・特徴：Ⅵ層上面で黒色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認したところ壁面・坑底面を検出したため土坑と判断した。坑底はほぼ平坦だが中央部がやや高い。立ち上がりは緩やかでオーバーハングするフラスコ状土坑である。覆土は下位（12層以下）に崩落土とみられるⅥ層主体の土が多く、上位にローム粒の混じるⅣ層主体の土が多い。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器２点、Ⅳ群a類の土器１点、礫２点で総数５点である。すべて覆土中から出土している。

掲載遺物：17はⅢ群a類、円筒土器上層b式。深鉢形土器の口頸部破片である。無文地に貼付を施し、貼付上には撚糸による圧痕が施されている。文様帯内には馬蹄形圧痕文と貼付に沿う３本一組の撚糸による圧痕が施文されている。

時期：遺構周辺の遺物出土状況から判断すると、縄文時代中期前半と考えられる。　（直江）

P－19（図Ⅳ－16・18、図版12・24）

位置：E19区　　**平面形**：円形

規模：（95）×（94）／113×103／89㎝

調査・特徴：H－３のトレンチ調査により土層断面を確認、半截したところ幅広の坑底面とオーバーハングし、開口部付近で開く壁を検出、フラスコ状土坑と認定した。この土坑の上部にあたるH－３の南側は抜根による撹乱を受けており、住居跡との新旧関係は不明である。覆土は壁面崩落と自然堆積によるものと考えられる。

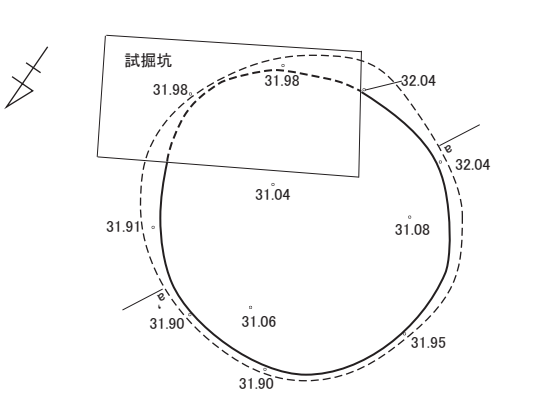
遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器２点、たたき石１点、礫２点で総数５点である。すべて覆土中から出土している。

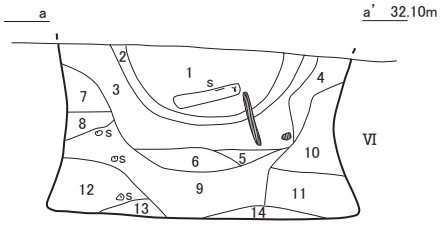
掲載遺物：18はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式古段階相当。縄文地に細い粘土紐が貼り付けられている。19はたたき石。下端と右側縁下部に敲打痕がみられる。

時期：土坑とその周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と考えられる。　（袖岡）

P−1

F57区

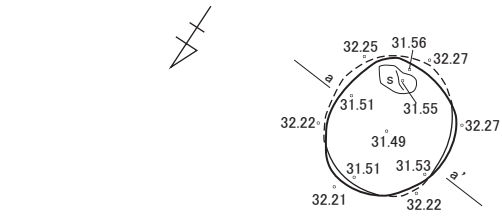


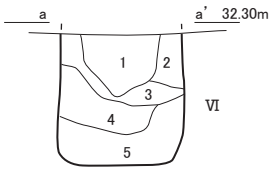


P−1	1	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性中　すこぶる堅　3㎜程度のローム粒5%
	2	10YR3/3暗褐色	埴壌土　粘性中　堅　2～5mのローム粒10%
	3	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性中　軟　2～10mのローム粒10%
	4	7.5YR3/3暗褐色	シルト質壌土　粘性中　軟　2～10mのローム粒11%
	5	7.5YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性中　軟　3㎜程度のローム粒5%
	6	7.5YR5/6明褐色	シルト質壌土　粘性中　軟　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	7	7.5YR3/3暗褐色	シルト質壌土　粘性中～強　軟
	8	10YR5/6黄褐色	シルト質壌土　粘性中～強　しょう　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	9	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性強　軟　15㎜程度のローム粒2%
	10	10YR5/8黄褐色	シルト質壌土　粘性強　軟　8㎜程度のローム粒20%
	11	10YR5/6黄褐色	埴壌土　粘性強　軟　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	12	10YR5/8黄褐色	シルト質壌土　粘性強　軟　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	13	10YR2/3黒褐色	埴壌土　粘性強　軟　3㎜程度のローム粒3%
	14	10YR2/3黒褐色	埴壌土　粘性強　堅

P−2

F58区

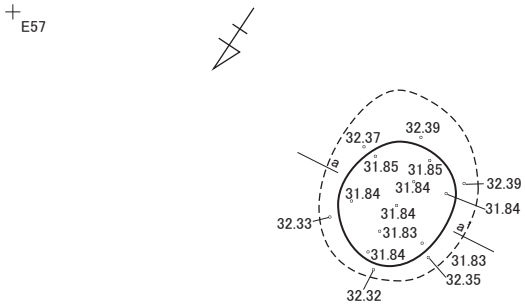


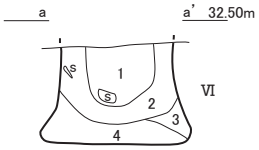


P−2	1	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性中　軟　3㎜程度のローム粒2%
	2	10YR4/6褐色	シルト質壌土　粘性中～強　軟　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	3	10YR4/6暗褐色	シルト質壌土　粘性中～強　堅　2～8㎜のローム粒5%
	4	10YR4/6褐色	シルト質壌土　粘性中～強　堅　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	5	10YR3/4暗褐色	シルト質壌土　粘性強　堅　5㎜程度のローム粒3%

P−3

E57区





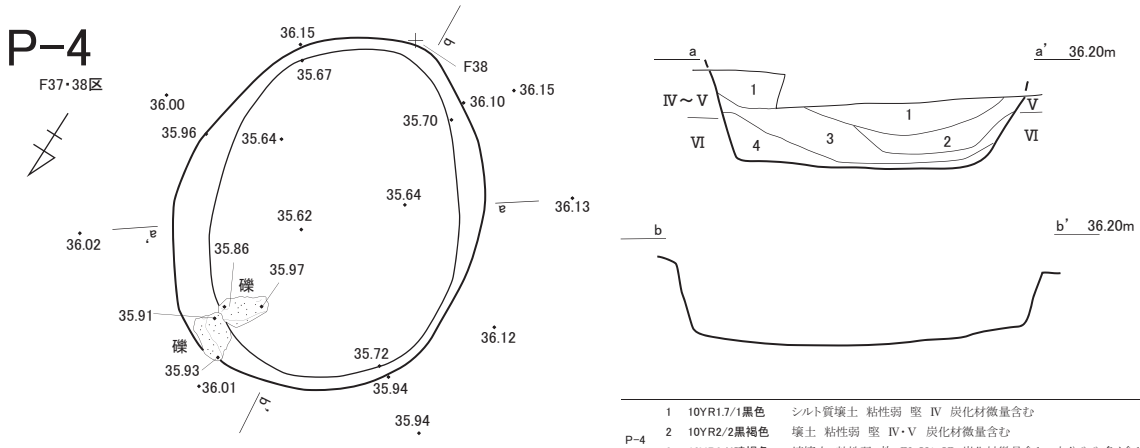
P−3	1	10YR1.7/1黒色	埴壌土　粘性中　堅　2㎜程度のローム粒2%
	2	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性中　堅　2～5㎜のローム粒3%
	3	10YR5/8黄褐色	埴土　粘性中　軟　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	4	10YR4/4褐色	埴壌土　粘性中　堅　Ⅵ主体　Ⅳが斑状

0　　2m

図Ⅳ−12　土坑（1）P−1～3

P−4

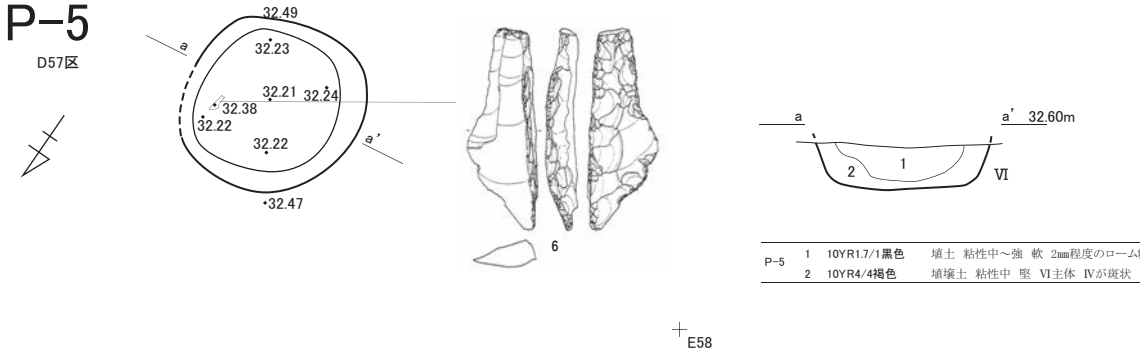
F37・38区



P−4	1	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性弱　堅　Ⅳ　炭化材微量含む
	2	10YR2/2黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅳ・Ⅴ　炭化材微量含む
	3	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性弱　軟　Ⅳ・Ⅴ＞Ⅵ　炭化材微量含む　水分やや多く含む
	4	10YR4/4暗褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅵ＞Ⅴ

P−5

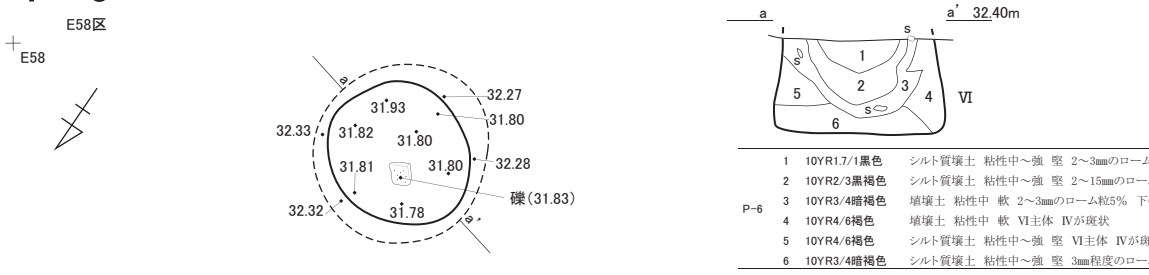
D57区



P−5	1	10YR1.7/1黒色	埴土　粘性中～強　軟　2㎜程度のローム粒1%
	2	10YR4/4褐色	埴壌土　粘性中　堅　Ⅵ主体　Ⅳが斑状

P−6

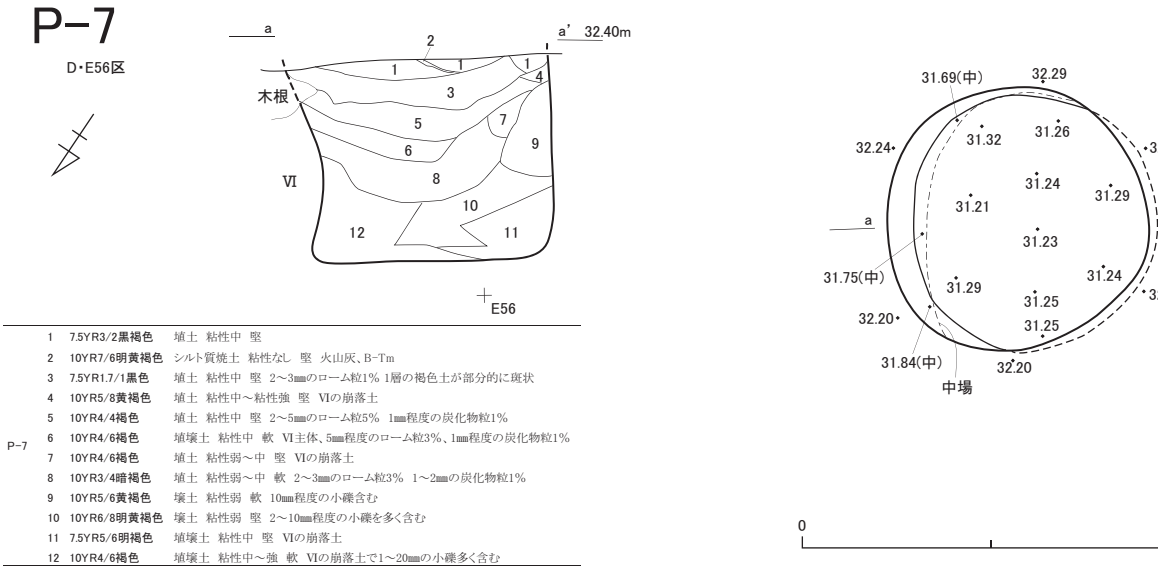
E58区



P−6	1	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性中～強　堅　2～3㎜のローム粒2%
	2	10YR2/3黒褐色	シルト質壌土　粘性中～強　堅　2～15㎜のローム粒3%
	3	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性中　軟　2～3㎜のローム粒5%　下位斑状
	4	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性中　軟　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	5	10YR4/6褐色	シルト質壌土　粘性中～強　堅　Ⅵ主体　Ⅳが斑状
	6	10YR3/4暗褐色	シルト質壌土　粘性中～強　堅　3㎜程度のローム粒2%

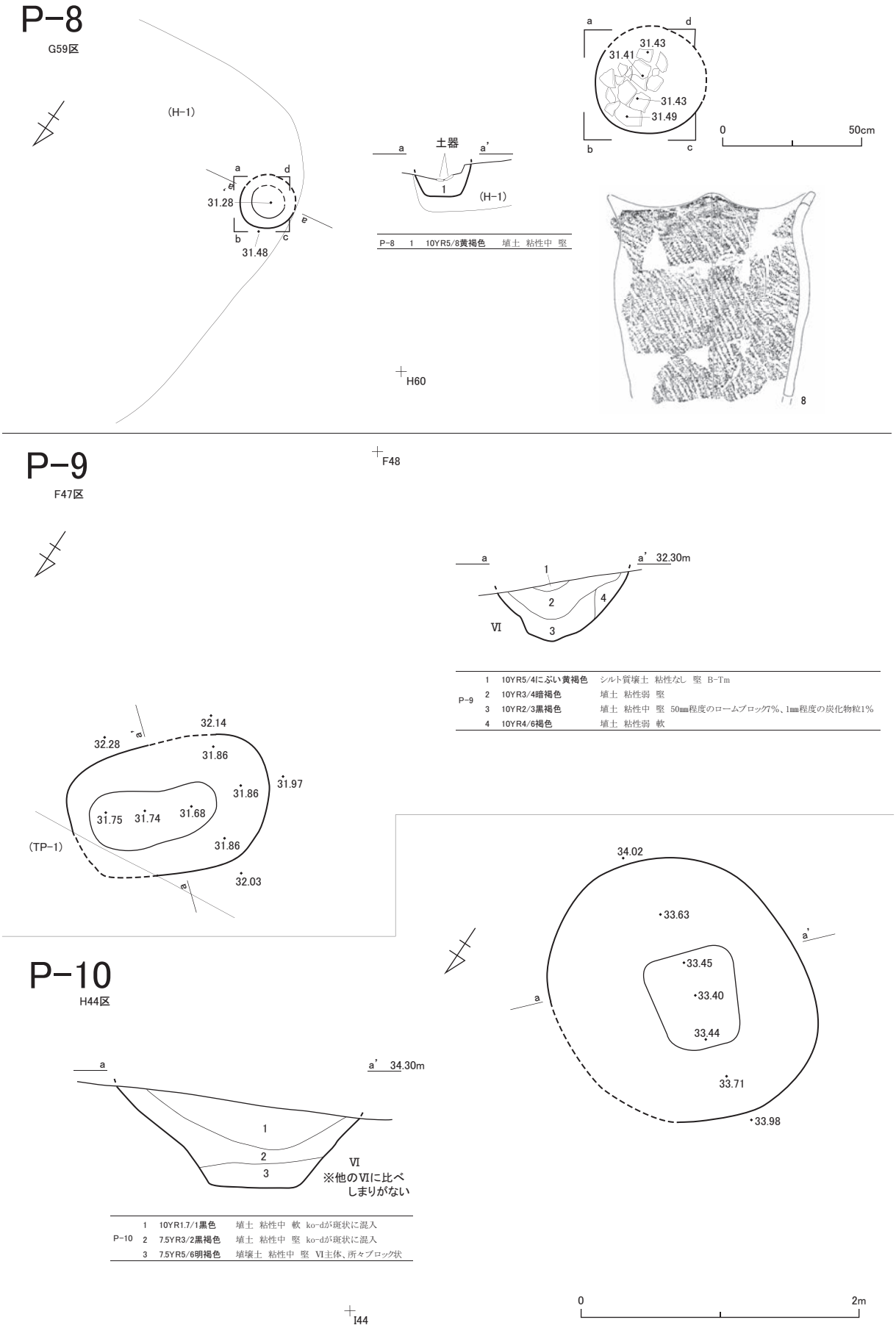
P−7

D・E56区

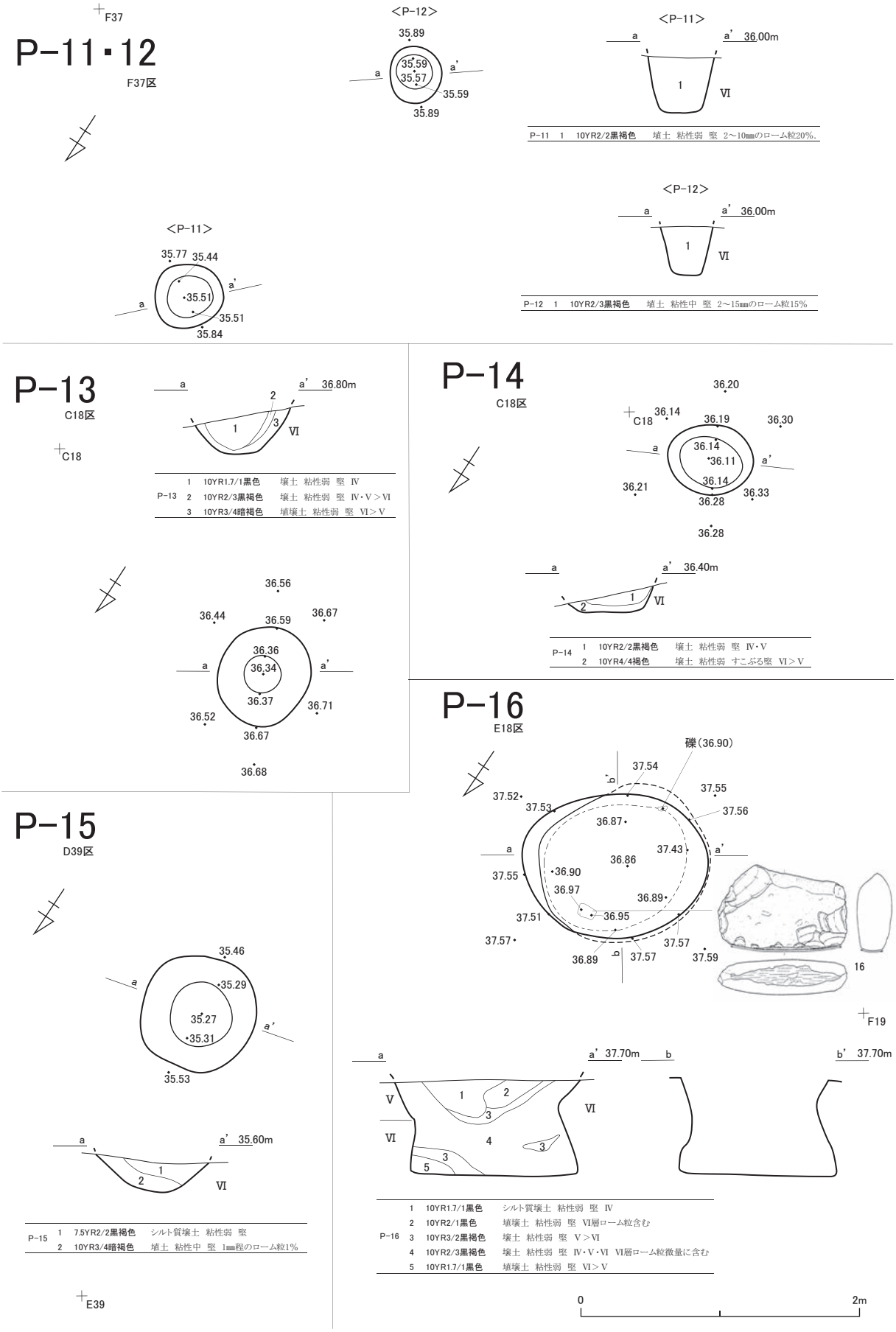


P−7	1	7.5YR3/2黒褐色	埴土　粘性中　堅
	2	10YR7/6明黄褐色	シルト質焼土　粘性なし　堅　火山灰、B-Tm
	3	7.5YR1.7/1黒色	埴土　粘性中　堅　2～3㎜のローム粒1%　1層の褐色土が部分的に斑状
	4	10YR5/8黄褐色	埴土　粘性中～粘性強　堅　Ⅵの崩落土
	5	10YR4/4褐色	埴土　粘性中　堅　2～5㎜のローム粒5%　1㎜程度の炭化物粒1%
	6	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性中　軟　Ⅵ主体、5㎜程度のローム粒3%、1㎜程度の炭化物粒1%
	7	10YR4/6褐色	埴土　粘性弱～中　堅　Ⅵの崩落土
	8	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性弱～中　軟　2～3㎜のローム粒3%　1～2㎜の炭化物粒1%
	9	10YR5/6黄褐色	壌土　粘性弱　軟　10㎜程度の小礫含む
	10	10YR6/8明黄褐色	壌土　粘性弱　堅　2～10㎜程度の小礫を多く含む
	11	7.5YR5/6明褐色	埴壌土　粘性中　堅　Ⅵの崩落土
	12	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性中～強　軟　Ⅵの崩落土で1～20㎜の小礫多く含む

図Ⅳ−13　土坑（2）P−4～7



図Ⅳ−14　土坑（3）P−8〜10



図Ⅳ−15　土坑（4）P−11～16

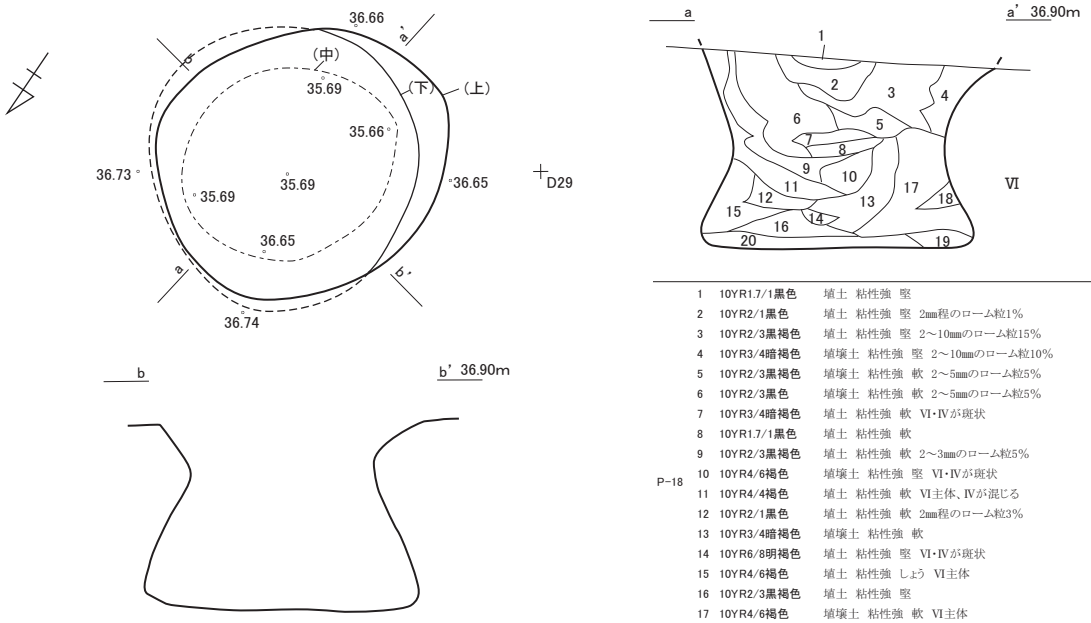
P−17

E35区

P−17	1	5YR1.7/1黒色	埴土　粘性中　堅
	2	10YR4/4褐色	埴土　粘性中　堅　10㎜程のローム粒2%
	3	10YR5/6黄褐色	埴壌土　粘性中　軟　ボロボロのⅥ中心、2層が混じる

P−18

CD28区

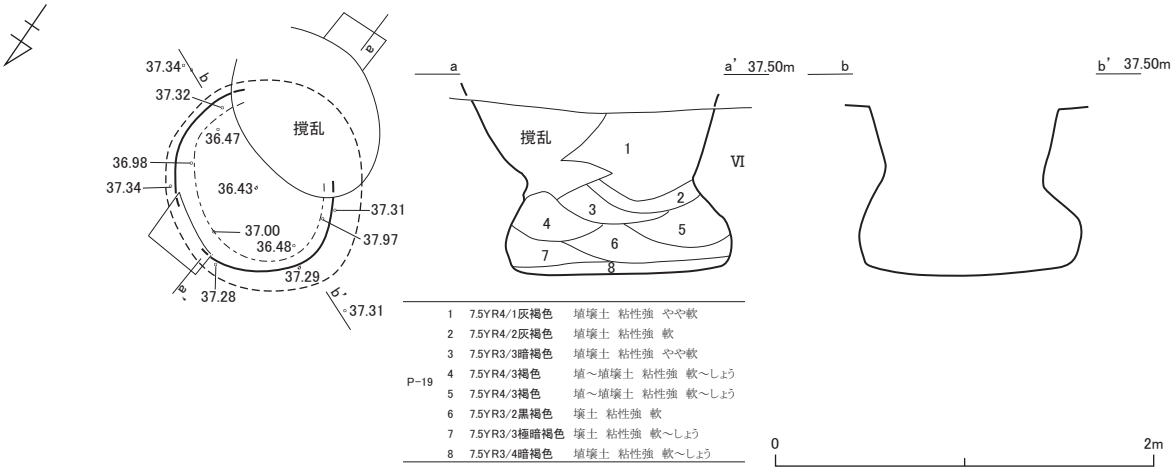


P−18	1	10YR1.7/1黒色	埴土　粘性強　堅
	2	10YR2/1黒色	埴土　粘性強　堅　2㎜程のローム粒1%
	3	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性強　堅　2〜10㎜のローム粒15%
	4	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性強　堅　2〜10㎜のローム粒10%
	5	10YR2/3黒褐色	埴壌土　粘性強　軟　2〜5㎜のローム粒5%
	6	10YR2/3黒色	埴壌土　粘性強　軟　2〜5㎜のローム粒5%
	7	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性強　軟　Ⅵ・Ⅳが斑状
	8	10YR1.7/1黒色	埴土　粘性強　軟
	9	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性強　軟　2〜3㎜のローム粒5%
	10	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性強　堅　Ⅵ・Ⅳが斑状
	11	10YR4/4褐色	埴土　粘性強　軟　Ⅵ主体、Ⅳが混じる
	12	10YR2/1黒色	埴土　粘性強　軟　2㎜程のローム粒3%
	13	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性強　軟
	14	10YR6/8明褐色	埴土　粘性強　堅　Ⅵ・Ⅳが斑状
	15	10YR4/6褐色	埴土　粘性強　しょう　Ⅵ主体
	16	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性強　堅
	17	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性強　軟　Ⅵ主体
	18	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性強　しょう
	19	10YR5/8黄褐色	埴壌土　粘性強　軟　30㎜程のローム粒が上位に混ざる
	20	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性強　堅

P−19

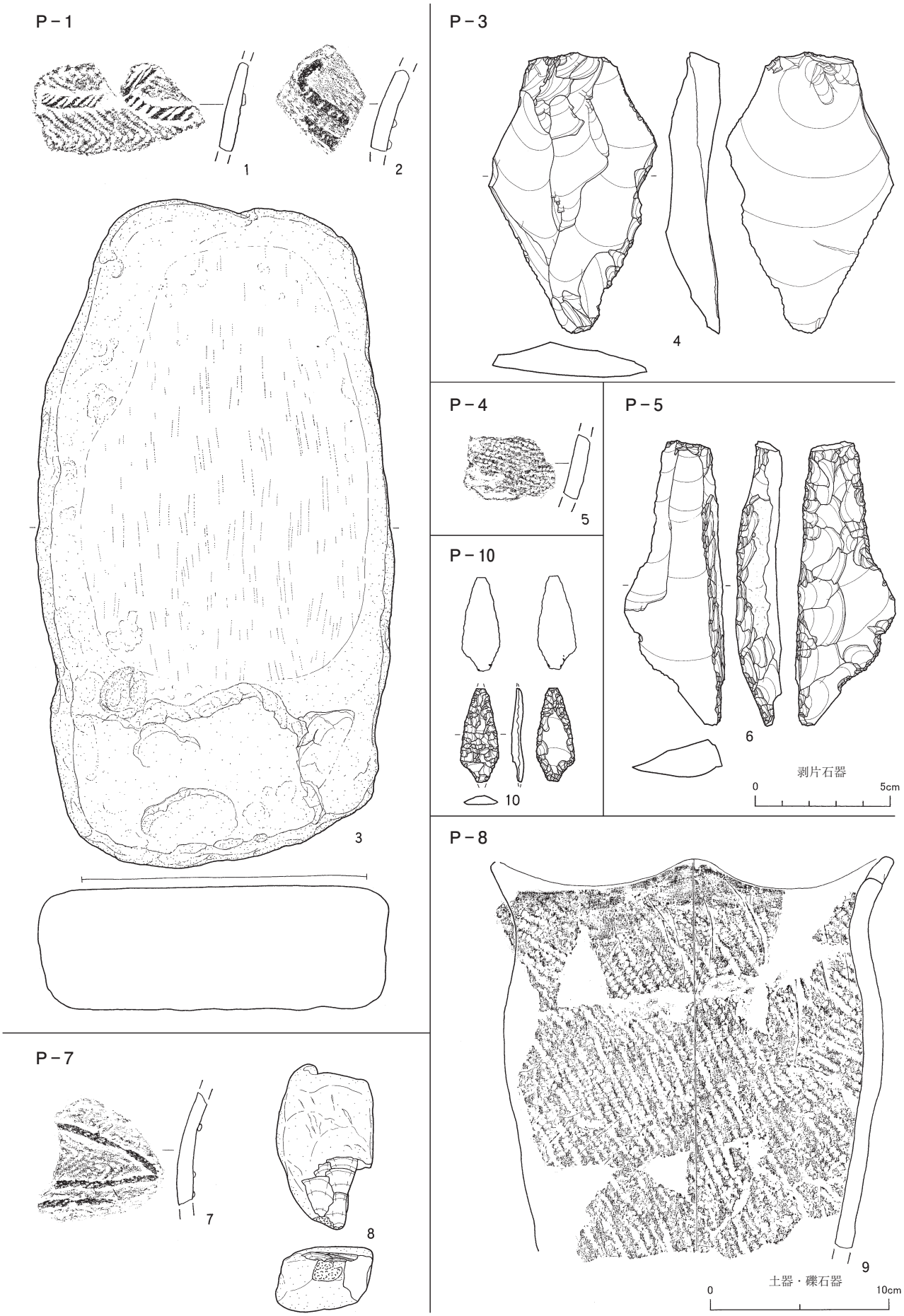
E19

E19区

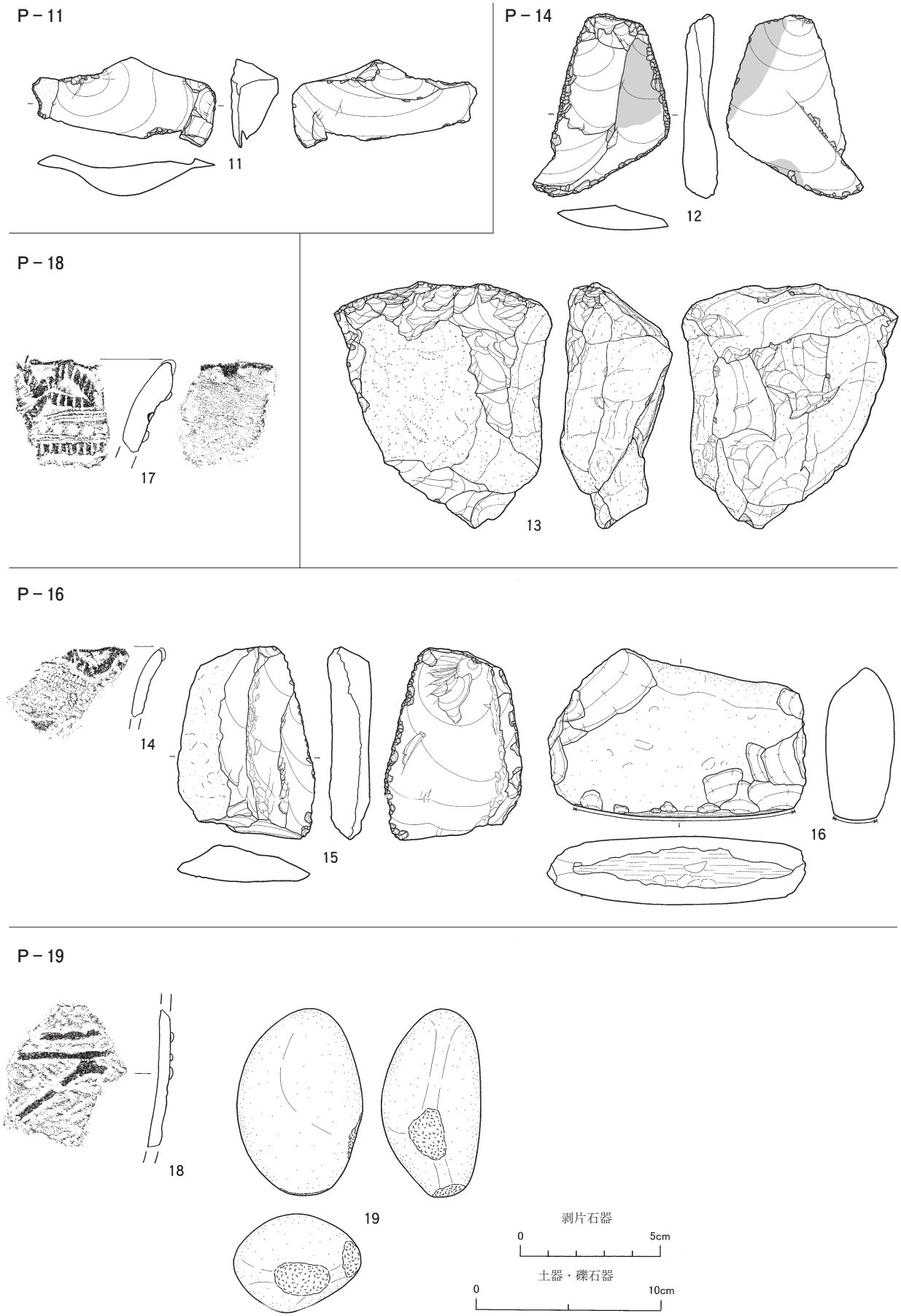


P−19	1	7.5YR4/1灰褐色	埴壌土　粘性強　やや軟
	2	7.5YR4/2灰褐色	埴壌土　粘性強　軟
	3	7.5YR3/3暗褐色	埴壌土　粘性強　やや軟
	4	7.5YR4/3褐色	埴〜埴壌土　粘性強　軟〜しょう
	5	7.5YR4/3褐色	埴〜埴壌土　粘性強　軟〜しょう
	6	7.5YR3/2黒褐色	壌土　粘性強　軟
	7	7.5YR3/3極暗褐色	壌土　粘性強　軟〜しょう
	8	7.5YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性強　軟〜しょう

図Ⅳ−16　土坑（5）P−17〜19



図Ⅳ－17　土坑出土の遺物（1）



図Ⅳ－18　土坑出土の遺物（2）

3　Ｔピット

本遺跡で検出されたＴピットは長軸方向と並びから以下の３つのまとまりがみられる（図Ⅳ－19）。①平坦部30ライン付近で検出されたTP－９・10。等高線とほぼ直交する北東－南西方向の長軸で並列する。遺構間は約８ｍである。②斜面部40～50ラインで検出されたTP－２・４・５・６。等高線とおおむね平行する北西－南東方向の長軸で、平坦部の縁から斜面沢筋の標高31m付近に向かって並列している。斜面上部の３つのＴピット間（TP－２・４・６）は約10mとほぼ等間隔で存在しているが、TP－６とTP－５は③の配列を介在して間隔が空き約20m離れている。③斜面部47～51ラインで検出されたTP－１・３・７・８。等高線とほぼ直交する東西方向の長軸で、標高32mに沿って並ぶTP－１・３・８と標高30mに位置するTP－７がある。TP－１・８間は約５ｍ、TP－１・３間は約10m離れており、間隔は一定していない。以下、遺構ごとに説明する。

TP－１（図Ⅳ－20、図版13）

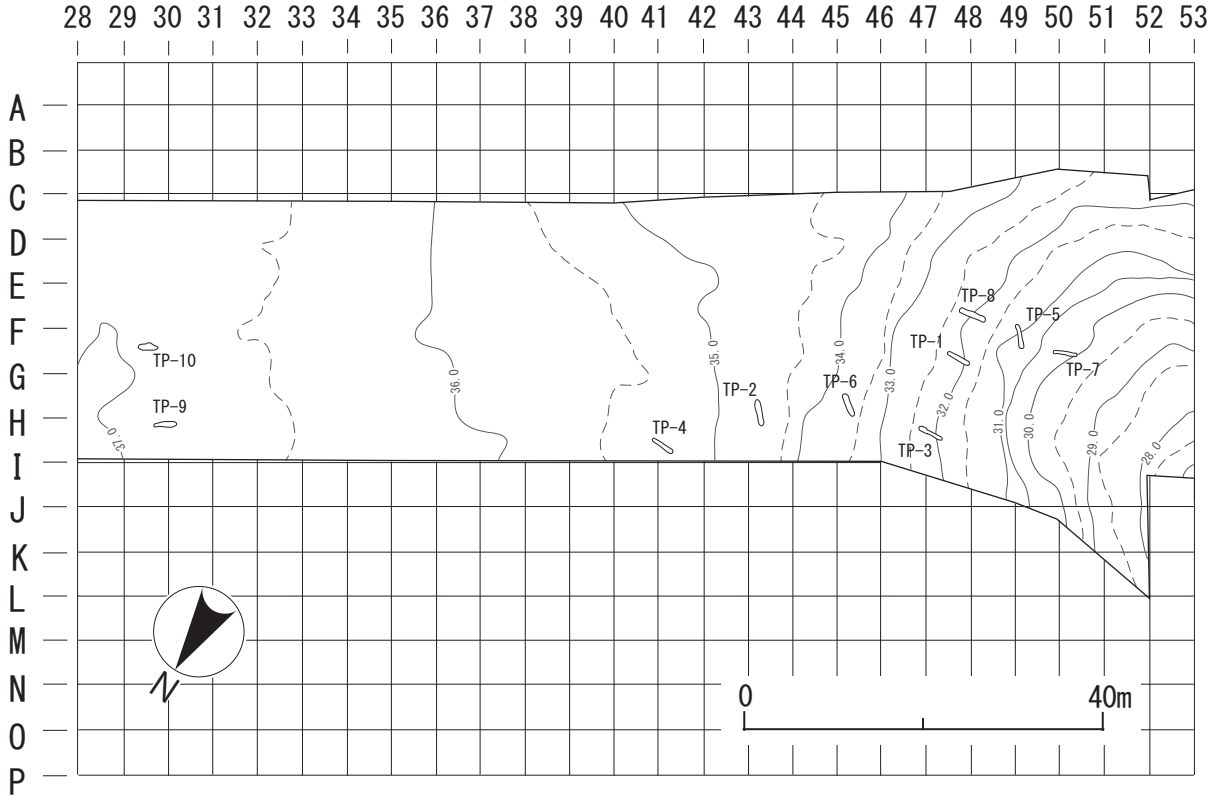
位置：F47区　　**平面形**：溝状

規模：288×56／243×25／93㎝　　**長軸方位**：Ｎ－85°Ｅ

調査・特徴：Ⅵ層上面で傾斜方向とほぼ平行する黒色土のまとまりを検出した。短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ狭い壁面と坑底面を検出したためＴピットと判断した。坑底は傾斜方向と同様に西側が深く、側壁面は漏斗状、長軸両端の壁は外上方に開く。覆土は崩落土を含むⅥ層を主体とする土とⅣ層を主体とする土が交互にみられた。Ⅳ層主体の土が多い。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

重複・時期：Ｐ－９と重複し、当遺構の方が新しい。縄文時代と考えられる。



図Ⅳ－19　Ｔピット出土位置図

TP－2（図Ⅳ－20・32、図版13・24）

位置：G・H43区　　**平面形**：溝状

規模：298×69／248×26／118cm　　**長軸方位**：N－46°W

調査・特徴：Ⅵ層上面で傾斜方向とほぼ直交する黒色土のまとまりを検出した。短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ、狭い壁面と坑底面を検出したためＴピットと判断した。坑底はほぼ平坦だが北西側が深い。側壁面は漏斗状で、長軸両端の壁はほぼ垂直に立ち上がり上位で外上方に開く。覆土は崩落土を含むⅥ層を主体とする土とⅣ層を主体とする土が交互にみられた。Ⅳ層主体の土が多い。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：出土遺物はⅣ群a類の土器１点、フレイク２点で総数３点である。すべて覆土中から出土している。

掲載遺物：１はⅣ群a類で、無文の胴部片である。

時期：縄文時代と考えられる。

TP－3（図Ⅳ－21、図版13）

位置：H46・47区　　**平面形**：溝状

規模：（291）×（57）／271×29／92cm　　**長軸方位**：N－83°E

調査・特徴：Ⅵ層上面で傾斜方向とほぼ平行する黒色土のまとまりを検出した。短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ狭い壁面と坑底面を検出したためＴピットと判断した。坑底は傾斜方向と同様に西側が深く、側壁面は漏斗状、長軸両端の壁は垂直に近い。覆土はⅥ層とⅣ層の混土を主体として堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：縄文時代と考えられる。　（直江）

TP－4（図Ⅳ－21・32、図版13・24）

位置：H40・41区　　**平面形**：溝状

規模：289×56／302×20／128cm　　**長軸方位**：N－90°E

調査・特徴：Ⅴ層～Ⅵ層上面で溝状の落ち込みを検出した。広範囲に撹乱を受けていたが短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ狭い壁面と坑底面を確認したためＴピットと判断した。両側の壁の間隔は20cmでほぼ垂直に立ち上がり、上部がやや開き気味となる。長軸両端の壁はオーバーハングしている。覆土は非常にもろく崩落土を含むⅣ層を主体とする暗褐色土（３層）とⅥ層を主体とする褐色土（４層）が中心で、最下層に黒色土が薄く堆積している。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：出土遺物はⅣ群a類の土器２点、フレイク１点、礫14点で総数17点である。すべて覆土中から出土している。

掲載遺物：２はⅣ群a類、涌元式に相当するもの。無文地に弧状の沈線が施されている。包含層出土の壺形土器（図Ⅴ－17－75）と併行すると考えられる。

時期：縄文時代と考えられる。　（渡井・直江）

TP－5（図Ⅳ－22、図版13・14）

位置：E48、E・F49区　　**平面形**：溝状

規模：285×53／264×29／99cm　　**長軸方位**：N－46°W

調査・特徴：Ⅵ層上面で傾斜方向とほぼ平行する黒色土のまとまりを検出した。短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ狭い壁面と坑底面を検出したためTピットと判断した。坑底は傾斜方向と同様に北西側が深く、側壁面は漏斗状、長軸両端の壁は垂直に近い。覆土は崩落土を含むⅥ層を主体とする土とⅣ層を主体とする土が交互にみられた。自然堆積と考えられる。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：縄文時代と考えられる。（直江）

TP－6（図Ⅳ－22、図版14）
位置：G45区　**平面形**：溝状
規模：279×66／263×34／128cm　**長軸方位**：N－58°W
調査・特徴：Ⅴ層～Ⅵ層上面で傾斜方向とほぼ平行する黒色土の溝状のまとまりを検出した。短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ狭い壁面と坑底面を検出したためTピットと判断した。坑底はほぼ平坦で、側壁面は漏斗状、長軸北西端の壁がオーバーハングしている。覆土はおおむね崩落土を含むⅥ層を主体とする土が下位に多く、Ⅳ層を主体とする土が上位にみられた。自然堆積と考えられる。
遺物出土状況：出土遺物は覆土より出土した礫１点のみである。
時期：縄文時代と考えられる。（渡井・直江）

TP－7（図Ⅳ－23、図版14）
位置：F49・50区　**平面形**：溝状
規模：252×40／235×20／80cm　**長軸方位**：N－64°E
調査・特徴：Ⅵ層上面で不整形な撹乱範囲と黒色土のまとまりを検出した。Tピットの存在を想定し短軸方向にトレンチを２か所設定し堆積状況を確認した。その結果、撹乱層の下位に狭い壁面と坑底面を検出したためTピットと判断した。坑底は傾斜方向の西側が若干深く、側壁面は漏斗状である。長軸両端の壁は西側が垂直に近く、東側が外上方に開く。覆土は崩落土を含むⅥ層を主体とする土とⅣ層を主体とする土が交互にみられた。自然堆積と考えられる。
遺物出土状況：出土遺物は覆土より出土した礫３点のみである。
時期：縄文時代と考えられる。

TP－8（図Ⅳ－23、図版14）
位置：E47・48区　**平面形**：溝状
規模：245×49／225×27／88cm　**長軸方位**：N－79°E
調査・特徴：Ⅵ層上面で傾斜方向とほぼ平行する黒色土のまとまりを検出した。短軸方向に半截して堆積状況を確認したところ狭い壁面と坑底面を検出したためTピットと判断した。坑底は傾斜方向と同様に西側が深く、東側端部には不整形な窪みがみられた。側壁面は漏斗状、長軸両端の壁は垂直に近い。覆土は下位に崩落土を含むⅥ層を主体とする土が厚く堆積し、上位にはⅣ層を主体とする土がみられた。自然堆積と考えられる。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：縄文時代と考えられる。

TP－９（1001）（図Ⅳ－24、図版14）

位置：H29・30区　　**平面形**：溝状

規模：267×65／351×35／112cm　　**長軸方位**：N－52°E

調査・特徴：H29区においてⅥ層上面から黒色土のまとまりを半分程検出し、隣接するH30区ではその続きをⅣ層下部において認識した。H29区内に短軸方向に土層観察用のベルトを残し堆積状況を確認しながら調査を行った。狭い壁面と坑底面を検出したためＴピットと判断した。坑底は緩やかに湾曲し、側壁面は漏斗状、長軸両端の壁はオーバーハングしている。覆土は崩落土を含むⅥ層を主体とする土とⅣ層を主体とする土が交互にみられた。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器１点、Ⅳ群a類の土器３点、フレイク１点、礫４点で総数９点である。すべて覆土中、主に黒色土から出土している。

時期：縄文時代と考えられる。

TP－10（1002）（図Ⅳ－24・32、図版15・24）

位置：F29区　　**平面形**：溝状

規模：229×86／268×28／123cm　　**長軸方位**：N－58°E

調査・特徴：Ⅴ層中に黒色土のまとまりを検出した。短軸方向に土層観察用のベルトを残し堆積状況を確認しながら調査を行った。狭い壁面と坑底面を検出したためＴピットと判断した。坑底は湾曲し、中央部が最も深い。側壁面は漏斗状で、部分的に壁面上位が大きく抉れている。長軸両端の壁はオーバーハングしている。覆土はⅣ層を由来とする土が多い。自然堆積と考えられる。

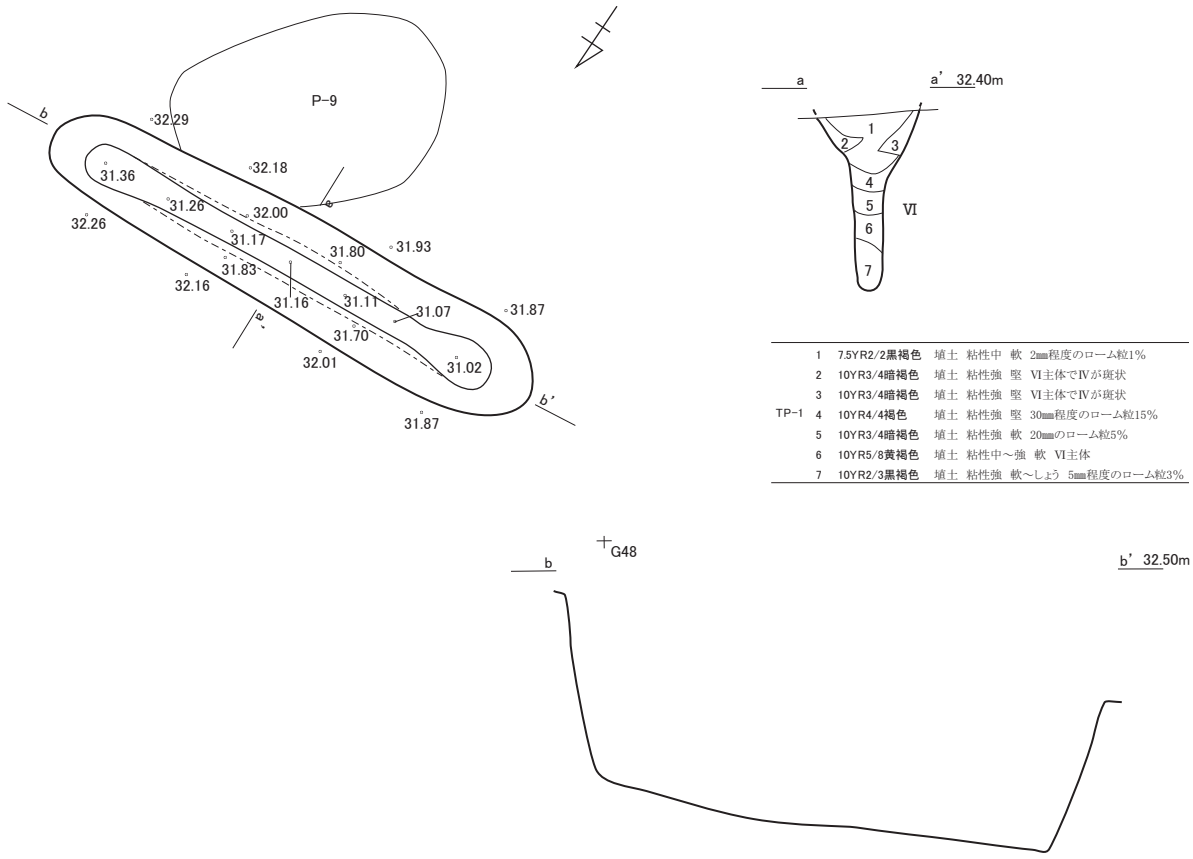
遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器２点、礫３点で総数５点である。すべて覆土中から出土している。

掲載遺物：３はⅢ群a類、円筒土器上層b式。口頸部文様帯を一部含む口縁部片である。貼付に撚糸圧痕が施文されている。文様帯内は無文地で半截竹管状工具による連続刺突文が施されている。

時期：縄文時代と考えられる。　（直江）

TP−1

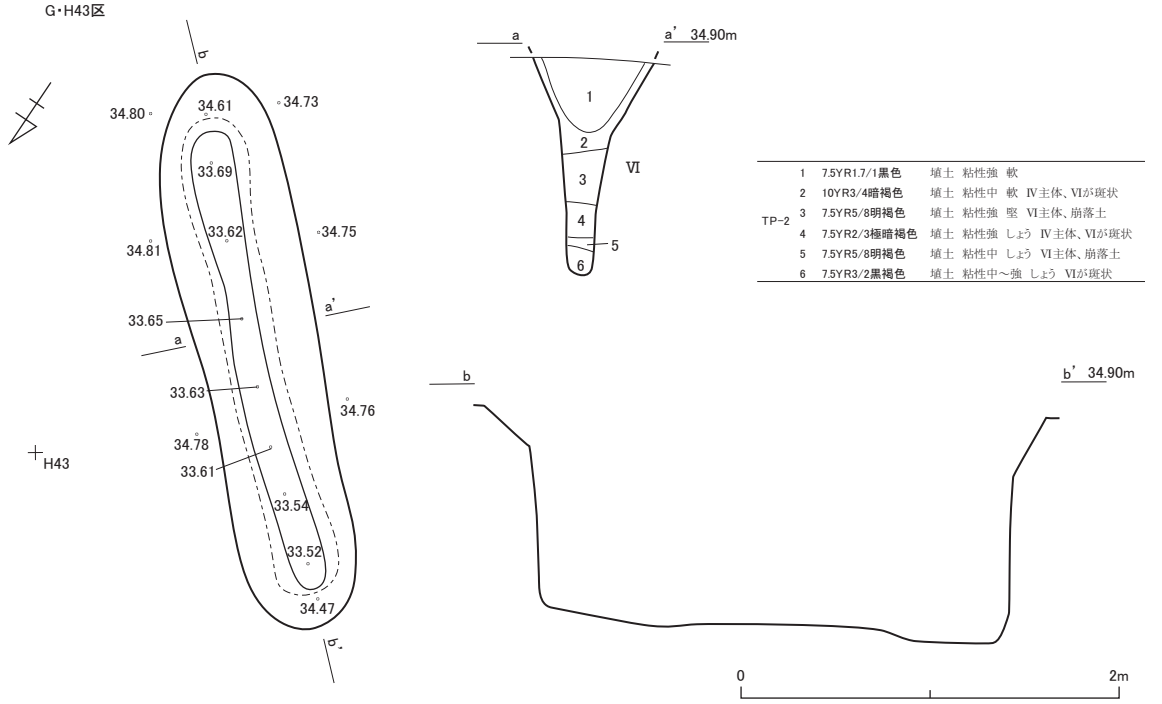
F47区



TP−1	1	7.5YR2/2黒褐色	埴土	粘性中　軟　2㎜程度のローム粒1%
	2	10YR3/4暗褐色	埴土	粘性強　堅　Ⅵ主体でⅣが斑状
	3	10YR3/4暗褐色	埴土	粘性強　堅　Ⅵ主体でⅣが斑状
	4	10YR4/4褐色	埴土	粘性強　堅　30㎜程度のローム粒15%
	5	10YR3/4暗褐色	埴土	粘性強　軟　20㎜のローム粒5%
	6	10YR5/8黄褐色	埴土	粘性中〜強　軟　Ⅵ主体
	7	10YR2/3黒褐色	埴土	粘性強　軟〜しょう　5㎜程度のローム粒3%

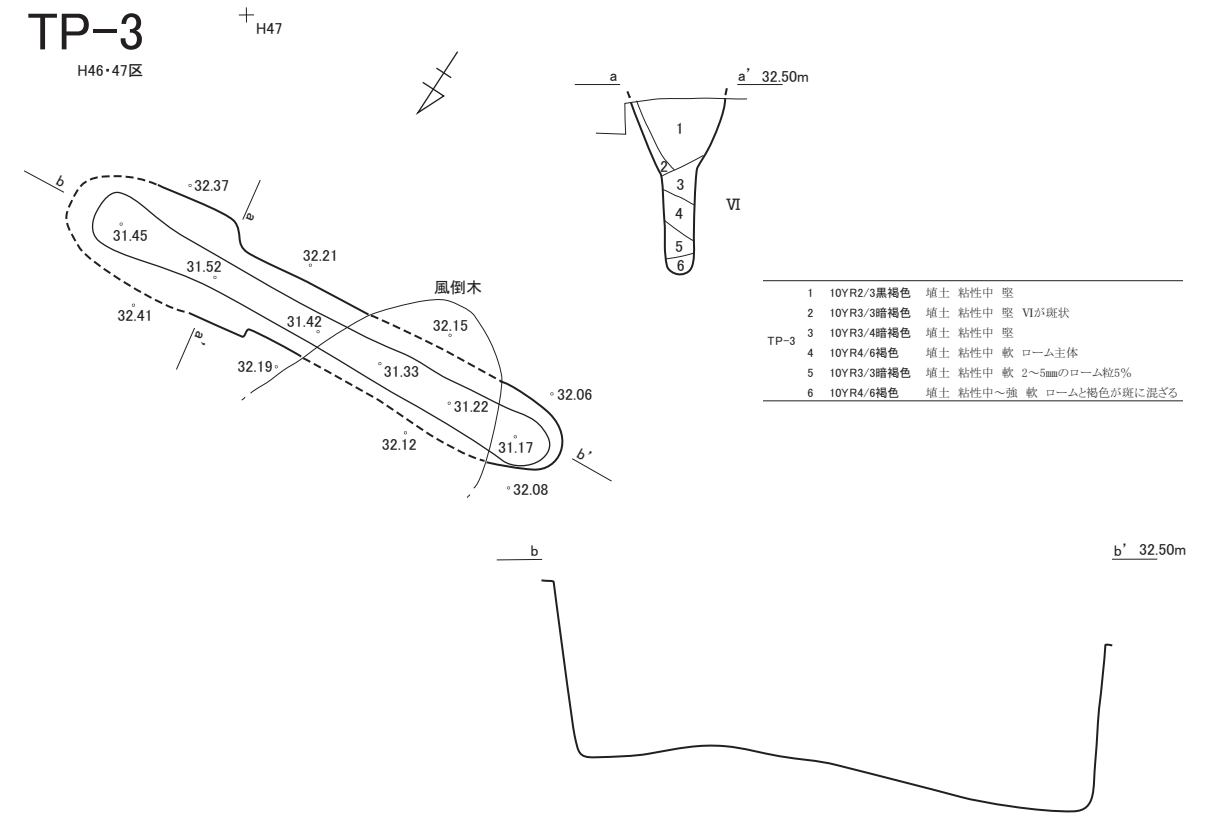
TP−2

G・H43区

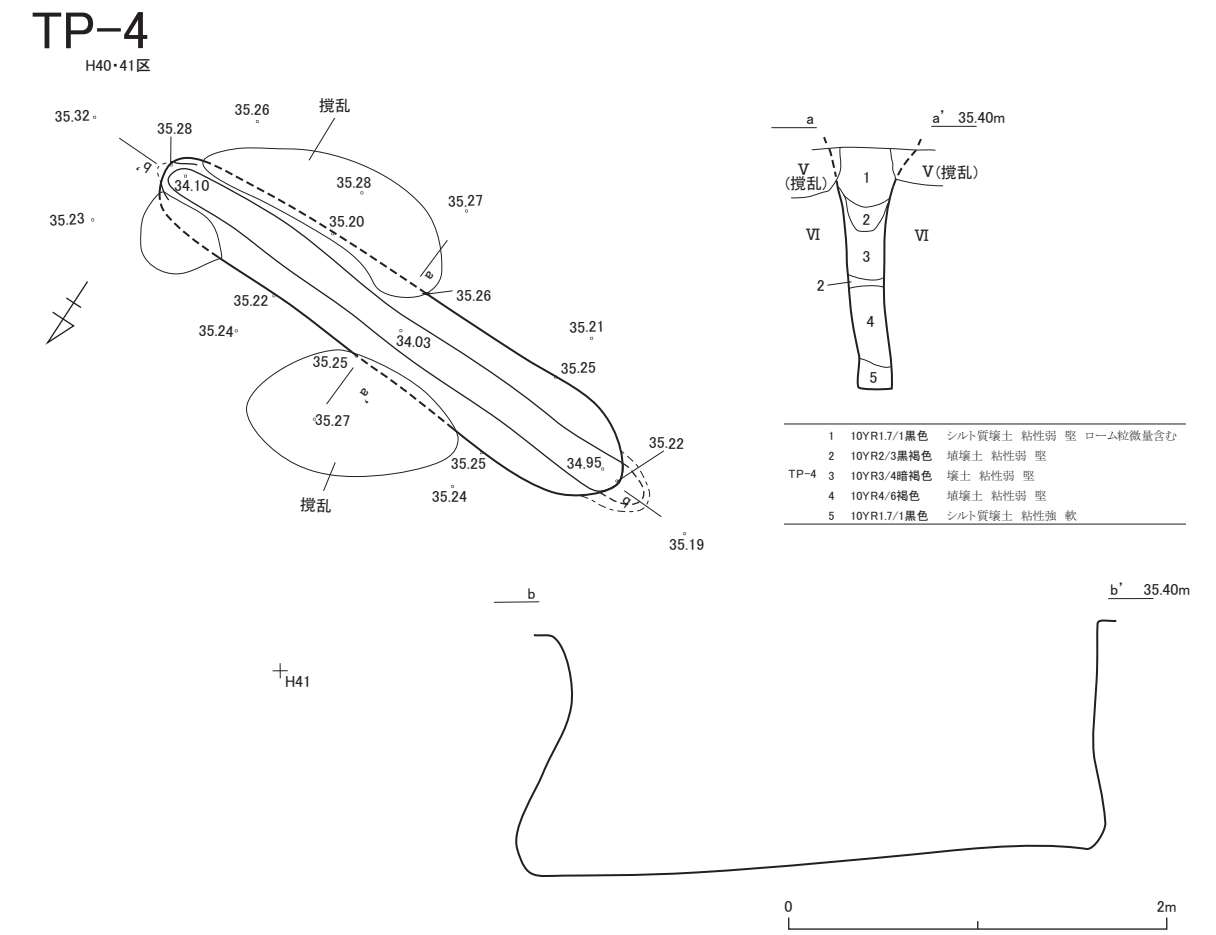


TP−2	1	7.5YR1.7/1黒色	埴土	粘性強　軟
	2	10YR3/4暗褐色	埴土	粘性中　軟　Ⅳ主体、Ⅵが斑状
	3	7.5YR5/8明褐色	埴土	粘性強　堅　Ⅵ主体、崩落土
	4	7.5YR2/3極暗褐色	埴土	粘性強　しょう　Ⅳ主体、Ⅵが斑状
	5	7.5YR5/8明褐色	埴土	粘性中　しょう　Ⅵ主体、崩落土
	6	7.5YR3/2黒褐色	埴土	粘性中〜強　しょう　Ⅵが斑状

図Ⅳ−20　Ｔピット（1）TP−１・２



TP−3	1	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性中　堅
	2	10YR3/3暗褐色	埴土　粘性中　堅　Ⅵが斑状
	3	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性中　堅
	4	10YR4/6褐色	埴土　粘性中　軟　ローム主体
	5	10YR3/3暗褐色	埴土　粘性中　軟　2～5㎜のローム粒5%
	6	10YR4/6褐色	埴土　粘性中～強　軟　ロームと褐色が斑に混ざる

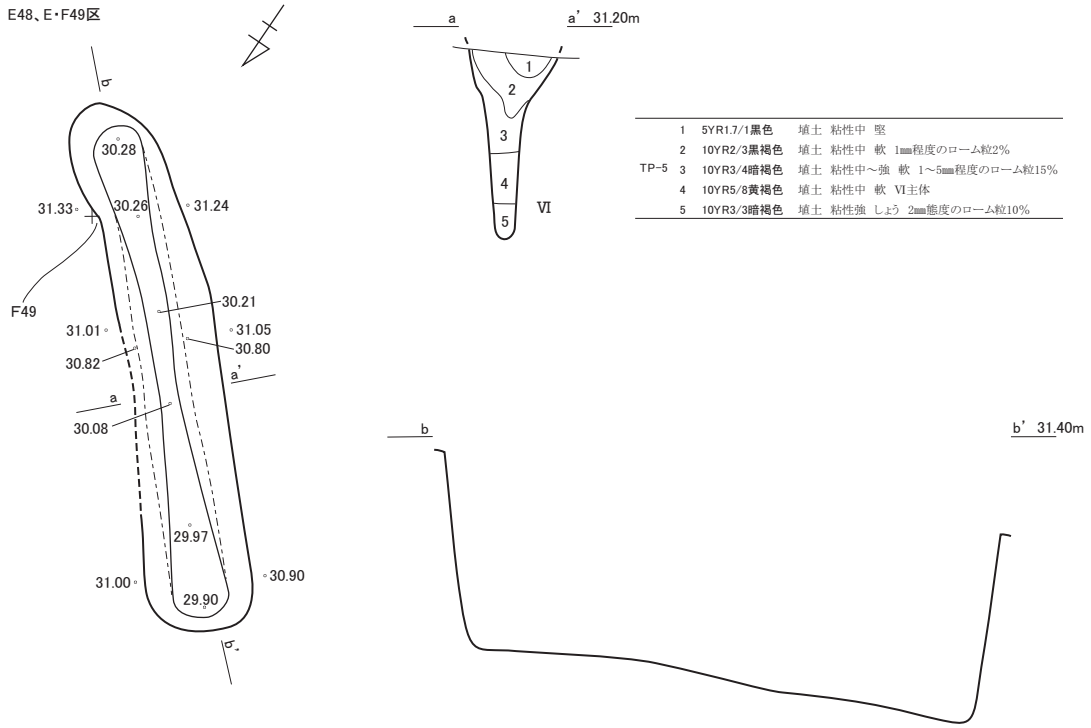


TP−4	1	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性弱　堅　ローム粒微量含む
	2	10YR2/3黒褐色	埴壌土　粘性弱　堅
	3	10YR3/4暗褐色	壌土　粘性弱　堅
	4	10YR4/6褐色	埴壌土　粘性弱　堅
	5	10YR1.7/1黒色	シルト質壌土　粘性強　軟

図Ⅳ−21　Ｔピット（２）TP−３・４

TP−5

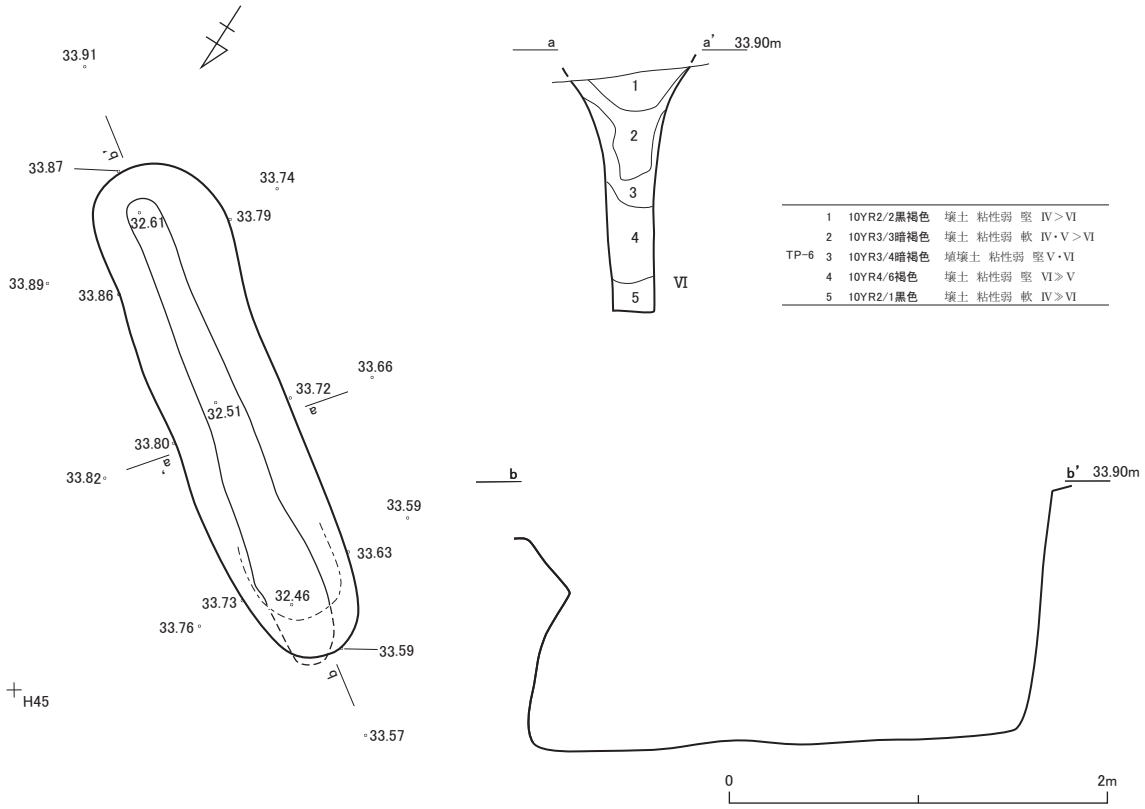
E48、E・F49区



TP−5	1	5YR1.7/1黒色	埴土　粘性中　堅
	2	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性中　軟　1㎜程度のローム粒2%
	3	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性中～強　軟　1～5㎜程度のローム粒15%
	4	10YR5/8黄褐色	埴土　粘性中　軟　Ⅵ主体
	5	10YR3/3暗褐色	埴土　粘性強　しょう　2㎜態度のローム粒10%

TP−6

G45区

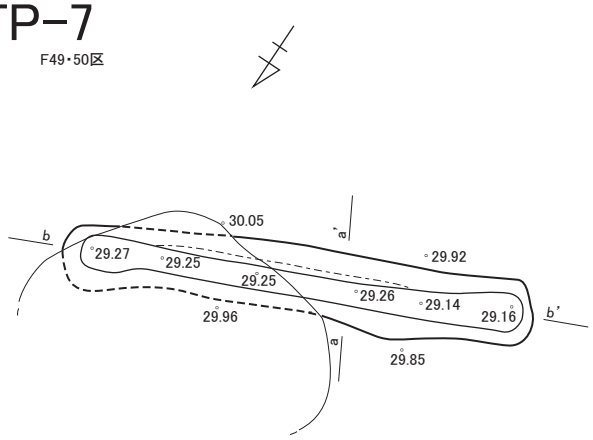


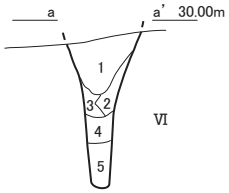
TP−6	1	10YR2/2黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅳ＞Ⅵ
	2	10YR3/3暗褐色	壌土　粘性弱　軟　Ⅳ・Ⅴ＞Ⅵ
	3	10YR3/4暗褐色	埴壌土　粘性弱　堅Ⅴ・Ⅵ
	4	10YR4/6褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅵ≫Ⅴ
	5	10YR2/1黒色	壌土　粘性弱　軟　Ⅳ≫Ⅵ

図Ⅳ−22　Ｔピット（3）TP−５・６

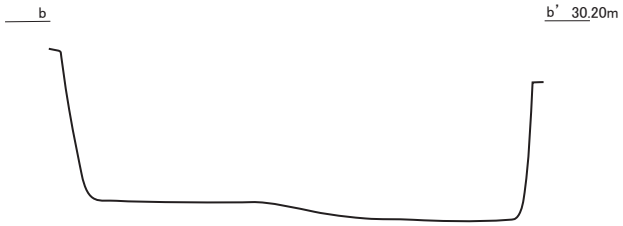
TP−7

F49・50区





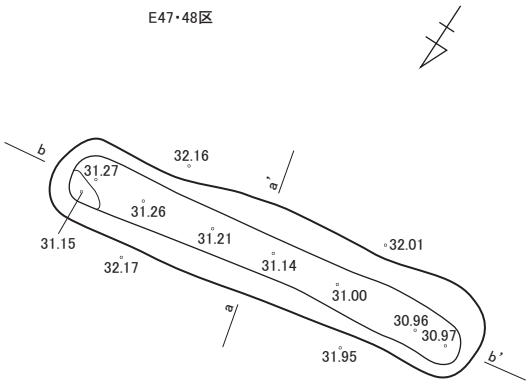
TP−7	1	10YR1.7/1黒色	埴壌土　粘性中〜強　軟
	2	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性中〜強　軟
	3	10YR4/6褐色	埴土　粘性中〜強　堅　Ⅵ主体、崩落土、Ⅳが斑状
	4	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性中〜強　軟　Ⅵが多く混在
	5	10YR1.7/1黒色	埴土　粘性中〜強　しょう

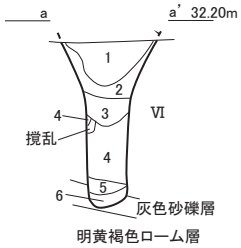


G50

TP−8

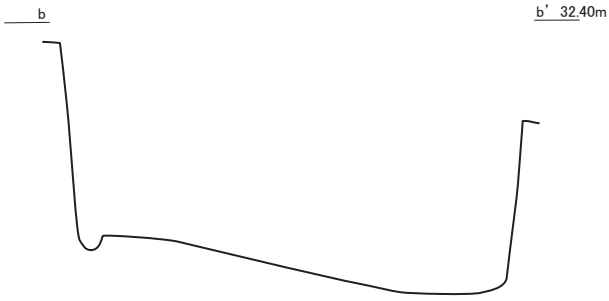
E47・48区





TP−8	1	10YR2/2黒褐色	埴土　粘性中　軟　2㎜程度のローム粒10%
	2	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性中〜強　軟　ⅣとⅥの斑状
	3	10YR2/2黒褐色	埴土　粘性中　軟　2層より斑状が少ない、2〜10㎜のローム粒20%
	4	7.5YR5/8明褐色	埴土　粘性中　しょう　Ⅵ層の崩落土
	5	7.5YR5/6明褐色	壌土　粘性弱　軟　Ⅵ層と砂層が混在
	6	10YR2/2黒褐色	壌土　粘性中〜強　軟

F48

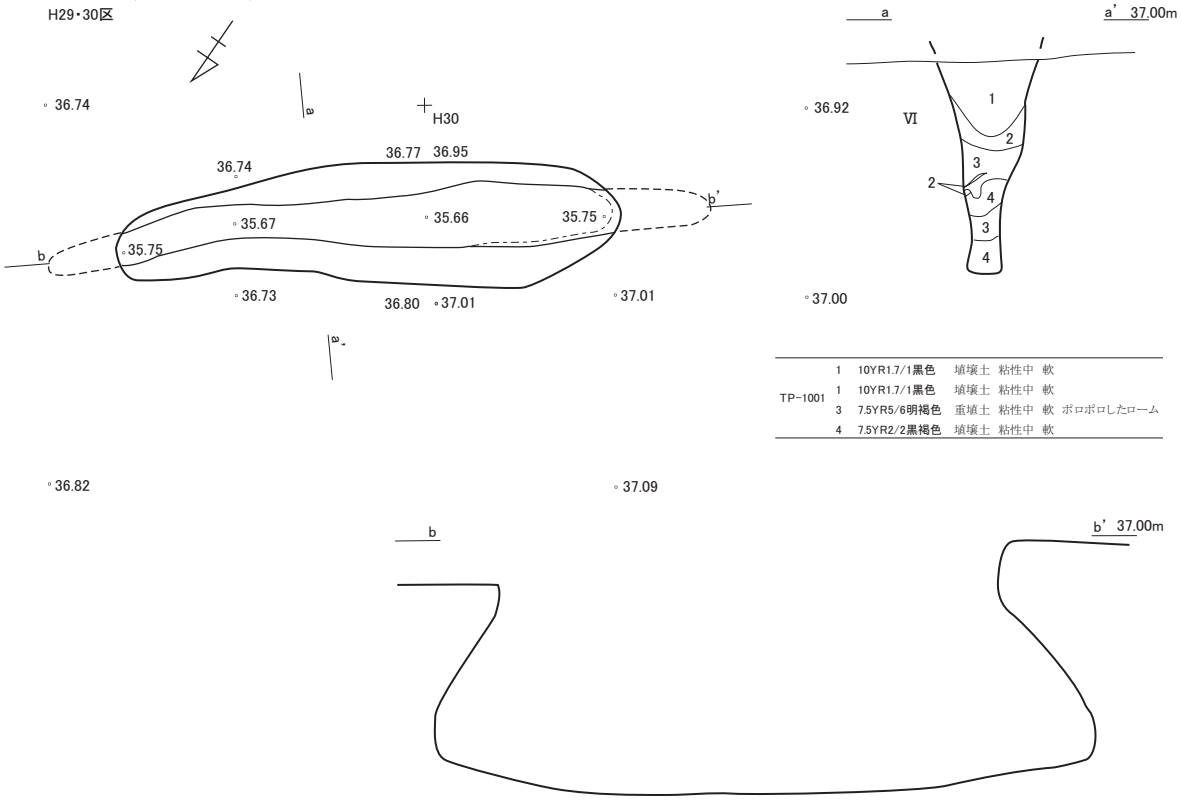


0　2m

図Ⅳ−23　Ｔピット（４）TP−７・８

TP−9（1001）

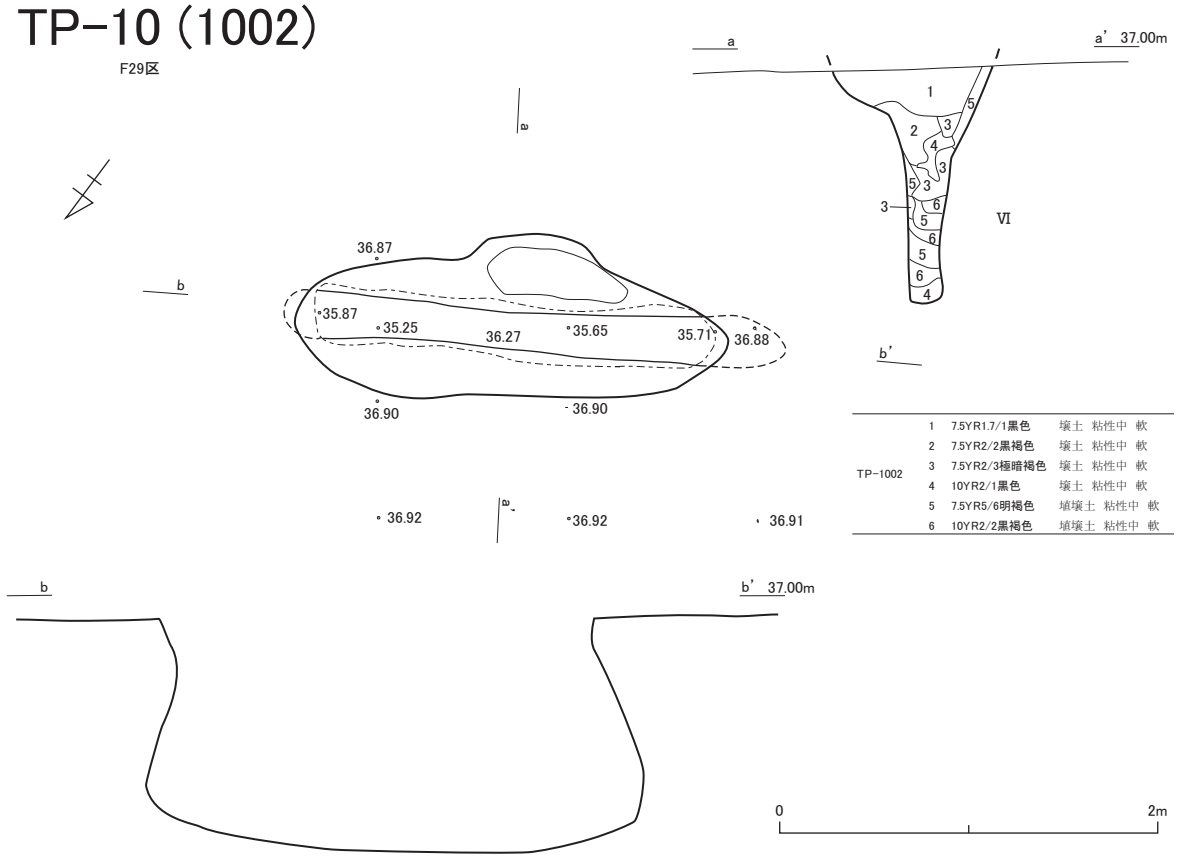
H29・30区



TP−1001	1	10YR1.7/1黒色	埴壌土	粘性中　軟
	1	10YR1.7/1黒色	埴壌土	粘性中　軟
	3	7.5YR5/6明褐色	重埴土	粘性中　軟　ボロボロしたローム
	4	7.5YR2/2黒褐色	埴壌土	粘性中　軟

TP−10（1002）

F29区



TP−1002	1	7.5YR1.7/1黒色	壌土	粘性中　軟
	2	7.5YR2/2黒褐色	壌土	粘性中　軟
	3	7.5YR2/3極暗褐色	壌土	粘性中　軟
	4	10YR2/1黒色	壌土	粘性中　軟
	5	7.5YR5/6明褐色	埴壌土	粘性中　軟
	6	10YR2/2黒褐色	埴壌土	粘性中　軟

図Ⅳ−24　Ｔピット（５）TP−９・10

4　焼土

F－1（図Ⅳ－25、図版15）

位置：F・G58区　　**規模**：137×36／14cm

調査・特徴：Ⅵ層上面で焼土粒・炭化物粒を含む褐～赤褐色土の広がりを確認した。周囲を精査したし半截したところ、焼土粒を少量含み下限の層界がやや不明瞭な不整なレンズ状の断面を検出し、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と考えられる。

F－2（図Ⅳ－25、図版15）

位置：C56区　　**規模**：①38×27／7㎝、②91×43／12cm

調査・特徴：Ⅵ層上面で焼土粒・炭化物粒を含む暗赤褐色土の広がりを確認した。周囲を精査すると小型で円形の①とより大型の細長い形状の②の2か所を検出した。半截したところ、両者とも焼土粒を少量含むレンズ状の断面を検出し、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の可能性がある。

F－3（図Ⅳ－25、図版15）

位置：E59区　　**規模**：77×58／17cm

調査・特徴：Ⅵ層上面で焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色～暗褐色土の斑状の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ炭化物を含む層と焼土層の断面を検出し、全体を含めて焼土の範囲と認定した。

遺物出土状況：出土遺物は礫1点のみである。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の可能性がある。

F－4（図Ⅳ－25、図版15）

位置：F49区　　**規模**：36×26／11cm

調査・特徴：包含層調査でⅤ層中に焼土粒を多く含む暗褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限の層界がやや不明瞭な断面を検出し、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の可能性がある。

F－5（図Ⅳ－25、図版15）

位置：F48区　　**規模**：100×47／18cm

調査・特徴：Ⅵ層上面で焼土粒・炭化物粒を含む褐色土を中心とする広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下部ほど焼土粒・炭化物粒が増加する断面を検出し、全体を含めて焼土の範囲と認定した。

遺物出土状況：出土遺物はⅣ群a類の土器5点、礫1点で総数6点である。

時期：縄文時代と考えられる。　　（直江）

F－6（図Ⅳ－25、図版15）

位置：D19区　　**規模**：129×90cm、①50×32／9cm、②32×25／13cm

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に焼土粒を含む暗褐～黒褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限がやや判然としない焼土の断面を検出、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と考えられる。　（渡井・袖岡）

F－7（図Ⅳ－26、図版16）

位置：D36区　　**規模**：76×45／4cm

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に被熱礫のまとまりを検出した。周囲を精査したところ、内部に極暗赤褐色土が広がり、周囲に5～15cm程度の礫が半周ほど廻るように配置されている状況を確認した。また、半截した結果、断面がレンズ状の焼土を検出した。これらのことから廃絶後、一部の礫が抜き取られた石組み炉と判断した。遺構内の炭化材で放射性炭素年代測定（AMS）と樹種同定を行ったところ、3,800±20yrBP、樹種はクリと分析されている（第Ⅵ章1・2節）。

遺物出土状況：焼土中から遺物は出土していないが、周囲に配置された礫6点を遺構の遺物として取り上げた。

時期：周辺の遺構・遺物およびAMS年代から縄文時代後期前葉と考えられる。　（直江）

F－8（図Ⅳ－26、図版16）

位置：C19・20、D19・20区　　**規模**：99×90／16cm

調査・特徴：包含層調査でⅣ層下位～Ⅴ層上面に焼土粒を含む暗褐～黒褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限がやや判然としない焼土の断面を検出、焼土と判断した。

遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器4点、フレイク5点、礫2点で総数11点である。

時期：焼土と周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と考えられる。

F－9（図Ⅳ－26・32、図版5・24）

位置：D17区　　**規模**：①92×68／29cm、②57×31／28cm

調査・特徴：竪穴住居跡H－2の落ち込み上面で赤褐色土の広がりを確認した。H－2のトレンチ調査により、焼成を受け赤褐色化した焼土層を検出、この住居跡の窪みを利用した焼土と判断した。

遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器4点、礫2点で総数6点である。

掲載遺物：1はⅢ群a類、円筒土器上層b式。口頸部文様帯を含む胴部片である。無文地に粘土紐の貼付があり、貼付上には撚糸による刻みが施されている。

時期：H－2より新しいが、周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の焼土と判断する。

F－10（図Ⅳ－26、図版16）

位置：C18区　　**規模**：56×41／21cm

調査・特徴：包含層調査でⅤ層上面に焼土粒を含む暗褐～黒褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限がやや明瞭な焼土の断面を検出、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と考えられる。　（渡井・袖岡）

F－11（図Ⅳ－26、図版16）

位置：C37区　　**規模**：43×33／6㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に炭化物粒を少量含む極暗赤褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところやや不整なレンズ状の焼土の断面を検出、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。

F－12（図Ⅳ－27、図版16）

位置：D33区　　**規模**：50×46／8㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に炭化物粒を含む極暗赤褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところやや不整なレンズ状の焼土の断面を検出、焼土と判断した。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。

F－13（図Ⅳ－27・32、図版16・24）

位置：D36区　　**規模**：66×48／11㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に被熱礫のまとまりを検出した。周囲を精査したところ、内部に炭化物粒をわずかに含む黒褐色土が広がり、周囲に10～15㎝程度の礫が半周ほど廻るように配置されている状況を確認した。また、半截した結果、焼土ブロックを含む土層を検出した。これらのことから廃絶後、一部の礫が抜き取られた石組み炉と判断した。遺構内の炭化材で放射性炭素年代測定（AMS）と樹種同定を行ったところ、3,315±20yrBP、樹種はクリと分析されている（第Ⅵ章１・２節）。

遺物出土状況：焼土中からⅣ群a類の土器２点のみ出土した。また、周囲に配置された礫６点を遺構の遺物として取り上げた。

掲載遺物：２はⅣ群a類。無文の口縁部片である。

時期：AMS年代はやや新しいものの、遺構内の遺物および周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。（直江）

F－14（図Ⅳ－27、図版17）

位置：D18区　　**規模**：116×37／12㎝

調査・特徴：包含層調査でⅤ層中に焼土粒を含む極暗赤褐～黒褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限がやや判然としない焼土の断面を検出、焼土と判断した。また、F－14の周囲で円礫が２点出土していることから石組み炉であった可能性も考えられる。

遺物出土状況：出土遺物は礫２点のみである。

時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と判断する。

F－15（図Ⅳ－27、図版17）

位置：C22区　　**規模**：102×48／10㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層下部に焼土粒を含む暗赤褐～暗褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限がやや判然とせず、被熱層がまばらな焼土の断面を検出した。投棄された焼

土と判断した。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：焼土やその周辺から時期を特定できる遺物の出土は無い。縄文時代中期前半～後期前葉の範疇と推測する。

F－16（図Ⅳ－27・32、図版17・24）
位置：D20区　　**規模**：38×31／4㎝
調査・特徴：包含層調査でⅤ層～Ⅵ層上面に焼土粒と微量の炭化物粒を含む極暗赤褐土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところ下限がやや判然としない焼土の断面を検出、焼土と判断した。
遺物出土状況：出土遺物はⅢ群a類の土器4点のみである。
掲載遺物：3はⅢ群a類、円筒土器上層b式。口頸部文様帯を含む胴部片である。無文地に粘土紐の貼付があり、貼付上には撚糸による刻みが施されている。
時期：焼土から出土した遺物と周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半と判断する。
（渡井・袖岡）

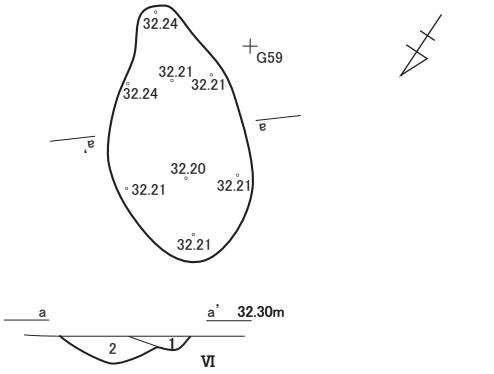
F－17（1001）（図Ⅳ－27、図版17）
位置：F21区　　**規模**：①56×40／13㎝、②33×22／9㎝
調査・特徴：包含層調査でⅣ層中ににぶい赤褐色～暗赤褐色土の2か所の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところやや不整なレンズ状の焼土の断面を検出、焼土と判断した。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の可能性がある。

F－18（1002）（図Ⅳ－28、図版17）
位置：G・H17区　　**規模**：71×67／12㎝
調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に焼土粒を含む極暗赤褐色～暗赤褐色土の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところやや不整なレンズ状の焼土の断面を検出、焼土と判断した。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代中期前半の可能性がある。

F－19（1003）（図Ⅳ－28、図版17）
位置：E・F28区　　**規模**：68×54／23㎝
調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に炭化物粒を含む灰褐色の広がりを確認した。周囲を精査し半截したところにぶい赤褐色の焼土層やその下位に焼土粒、炭化物粒を含む灰褐色土を検出、全体を含め焼土と判断した。
遺物出土状況：遺物は出土していない。
時期：周辺の遺構・遺物から縄文時代の可能性がある。　（直江）

F−1

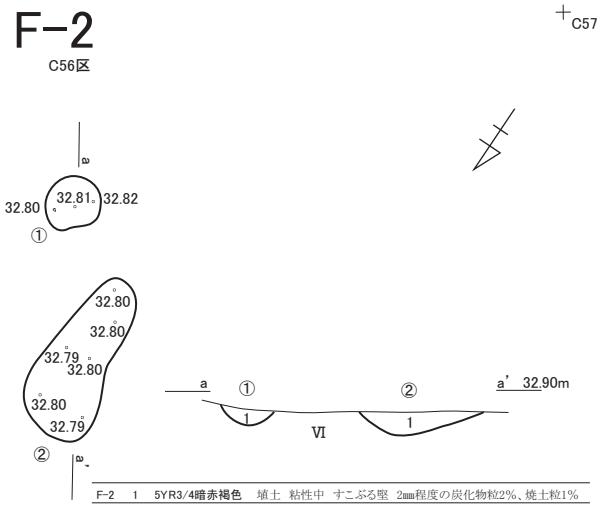
F・G58区



F−1	1	7.5YR4/4褐色	シルト質壌土　粘性中　すこぶる堅　2〜4mm程度のローム粒1%、2mm程度の焼土粒1%
	2	5YR4/8赤褐色	埴土　粘性中　すこぶる堅　5mm程度の焼土粒3%、層界不明瞭

F−2

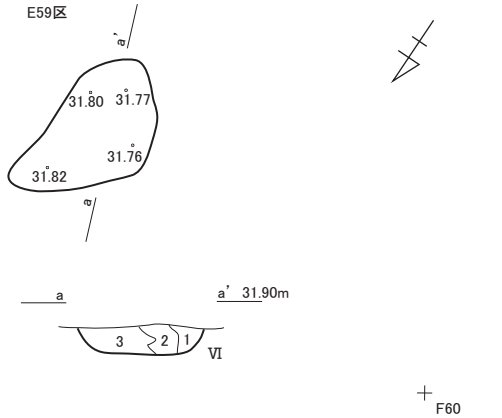
C56区



F−2	1	5YR3/4暗赤褐色	埴土　粘性中　すこぶる堅　2mm程度の炭化物粒2%、焼土粒1%

F−3

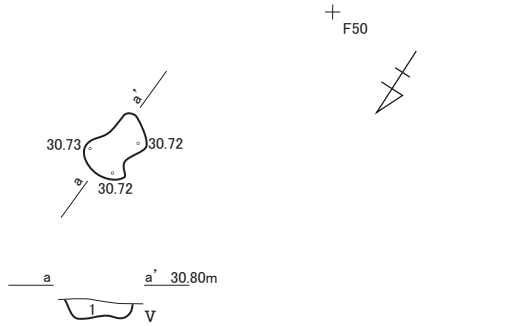
E59区



F−6	1	7.5YR3/3暗褐色	シルト質壌土　粘性弱　堅　Ⅳ＋焼土、焼土粒微量含む
	2	7.5YR3/4暗褐色	シルト質壌土　粘性弱　堅　焼土＞Ⅳ、焼土粒含む、よく焼けている
	3	10YR2/3黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅳ≫焼土、炭化材微量含む

F−4

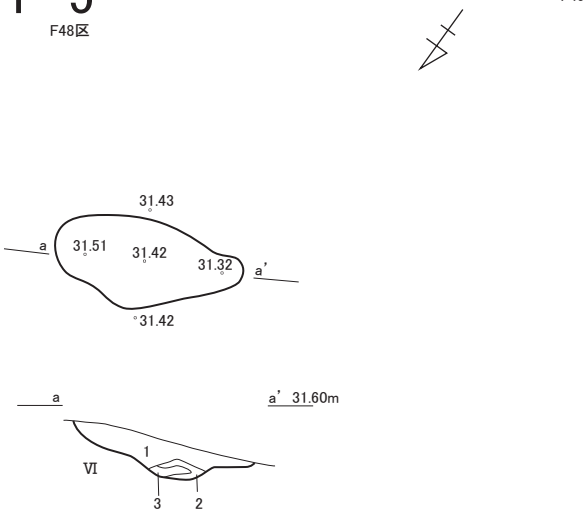
F49区



F−4	1	7.5YR3/4暗褐色	埴土　粘性強　堅　10mm程度の焼土粒25%、1mm程度の炭化物粒7%、層界やや不明瞭

F−5

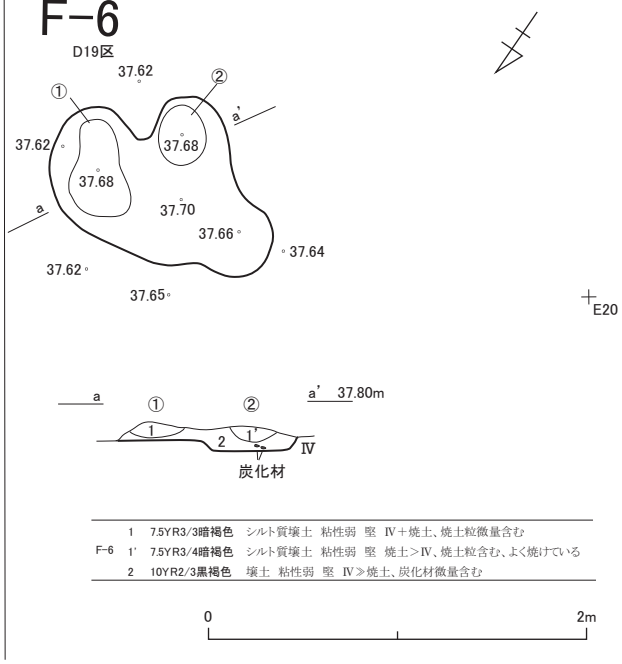
F48区



F−5	1	10YR4/4褐色	埴土　粘性強　軟　焼土層、炭化物粒1%
	2	10YR2/3黒褐色	埴土　粘性強　軟　焼土粒、炭化物粒1%
	3	10YR3/4暗褐色	埴土　粘性強　軟　焼土粒、炭化物粒3%

F−6

D19区

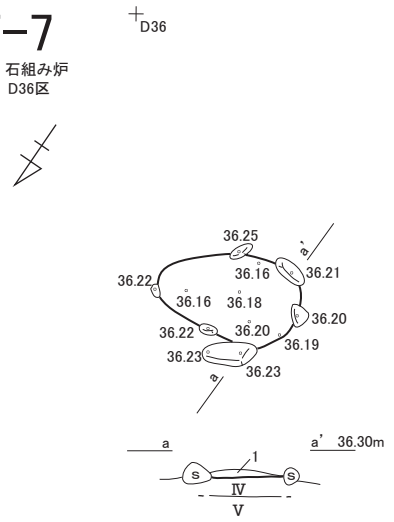


F−6	1	7.5YR3/3暗褐色	シルト質壌土　粘性弱　堅　Ⅳ＋焼土、焼土粒微量含む
	1'	7.5YR3/4暗褐色	シルト質壌土　粘性弱　堅　焼土＞Ⅳ、焼土粒含む、よく焼けている
	2	10YR2/3黒褐色	壌土　粘性弱　堅　Ⅳ≫焼土、炭化材微量含む

図Ⅳ−25　焼土（1）F−1〜6

F−7

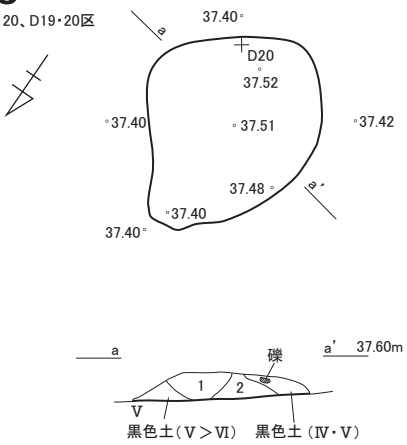
石組み炉
D36区



F−7　1　2.5YR2/2極暗赤褐色　シルト質壌土　粘性弱　堅　炭化物粒1%

F−8

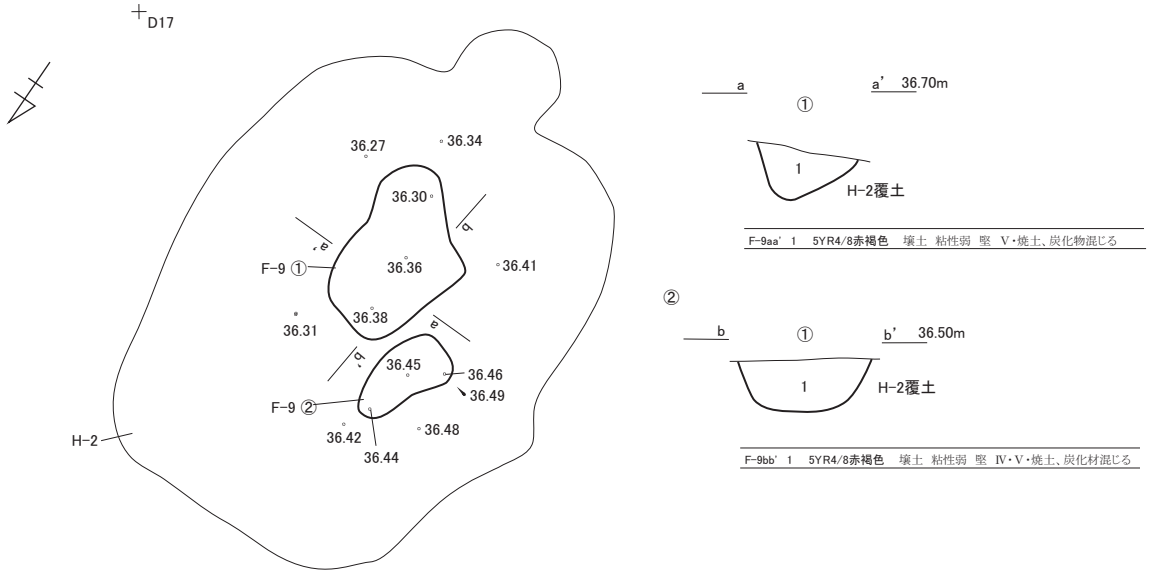
C19・20、D19・20区



F−8　1　7.5YR3/4暗褐色　埴壌土　粘性弱　堅　焼土＞Ⅳ・Ⅴ、よく焼けている、焼土粒が混じる
　　2　10YR2/3黒褐色　埴壌土　粘性弱　堅　焼土＞Ⅴ

F−9

D17区

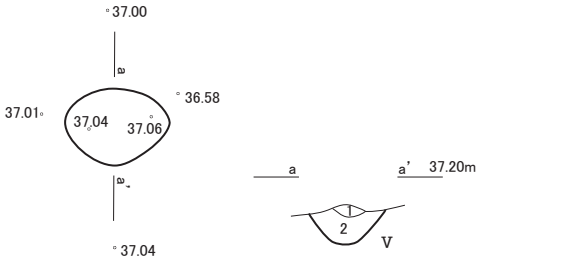


F−9aa'　1　5YR4/8赤褐色　壌土　粘性弱　堅　Ⅴ・焼土、炭化物混じる

F−9bb'　1　5YR4/8赤褐色　壌土　粘性弱　堅　Ⅳ・Ⅴ・焼土、炭化材混じる

F−10

C18区

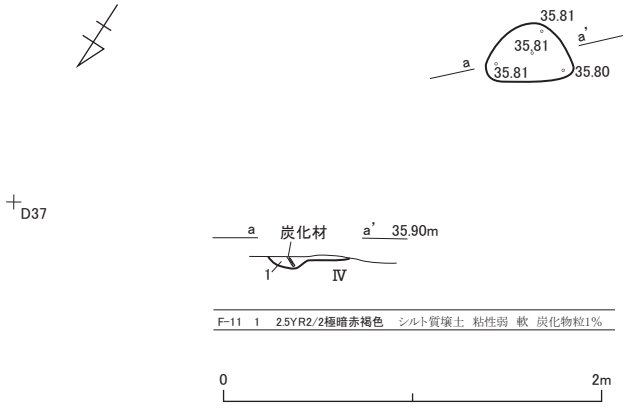


F−10　1　7.5YR3/4暗褐色　埴壌土　粘性弱　堅　Ⅳ・Ⅴ＋焼土、焼土薄い
　　2　10YR2/3黒褐色　壌土　粘性弱　堅　Ⅳ・Ⅴ＞焼土、焼土粒微量に含む

D19

F−11

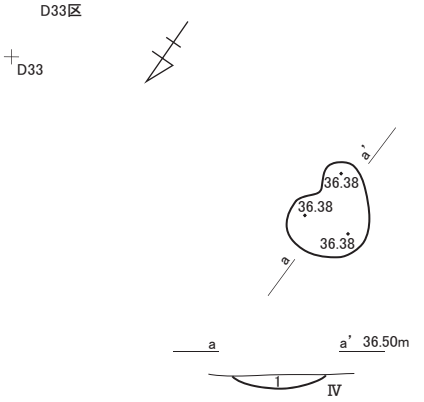
C37区



F−11　1　2.5YR2/2極暗赤褐色　シルト質壌土　粘性弱　軟　炭化物粒1%

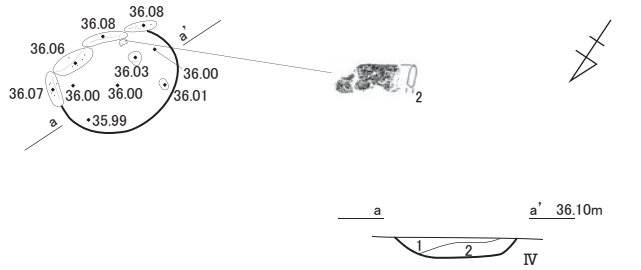
図Ⅳ−26　焼土（2）F−7〜11

F−12
D33区



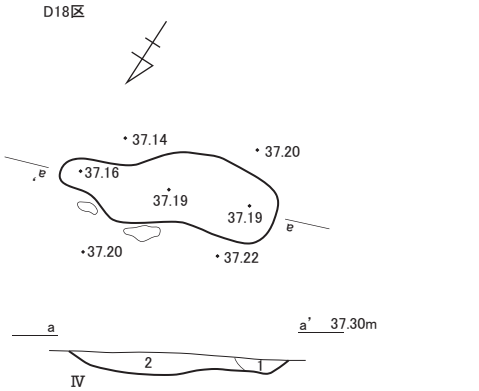
F−12	1	5YR2/3極暗赤褐色	埴土	粘性強	軟	

F−13
石組み炉
D36区



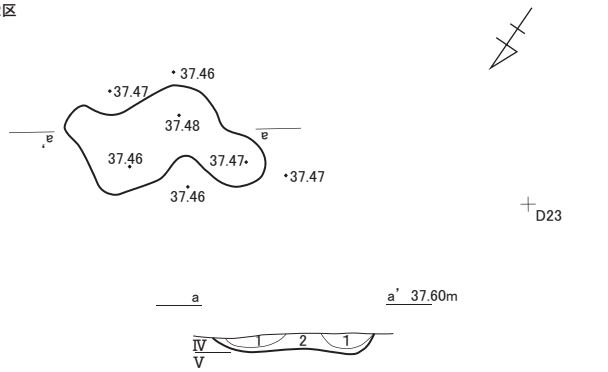
F−13	1	10YR2/3黒褐色	埴土	粘性中	堅	炭化物粒2%
	2	7.5YR3/4暗褐色	埴土	粘性中	堅	焼土ブロック30%

F−14
D18区



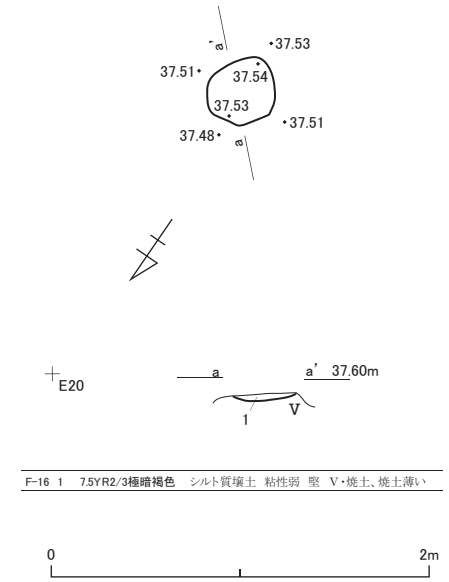
F−14	1	5YR3/4極暗赤褐色	シルト質壌土	粘性弱	堅	焼土＞Ⅳ、ややよく焼けている
	2	10YR2/3黒褐色	シルト質壌土	粘性弱	堅	Ⅳ＞焼土、焼土薄い

F−15
C22区



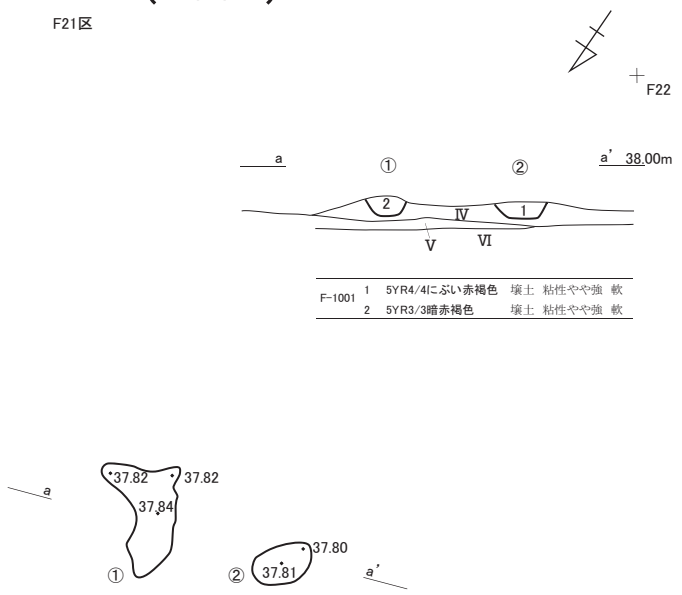
F−15	1	5YR3/6暗赤褐色	シルト質壌土	粘性弱	堅	焼土＞Ⅳ、焼土粒・炭化材含む
	2	10YR3/4暗褐色	壌土	粘性弱	堅	Ⅳ＋焼土、炭化材微量含む

F−16
D20区



F−16	1	7.5YR2/3極暗褐色	シルト質壌土	粘性弱	堅	Ⅴ・焼土、焼土薄い

F−17（1001）
F21区

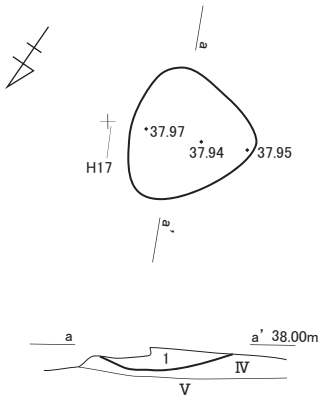


F−1001	1	5YR4/4にぶい赤褐色	壌土	粘性やや強	軟	
	2	5YR3/3暗赤褐色	壌土	粘性やや強	軟	

図Ⅳ−27　焼土（3）F−12〜17

F−18（1002）

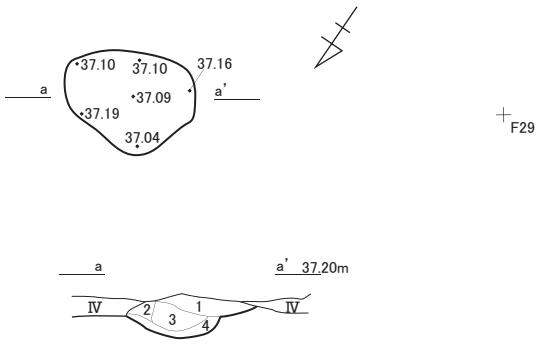
G・H17区



F−1002	1 上	5YR2/3極暗赤褐色	シルト質壌土	粘性中	軟	漸移する
	1 下	5YR3/4暗赤褐色	シルト質壌土	粘性中	軟	漸移する

F−19（1003）

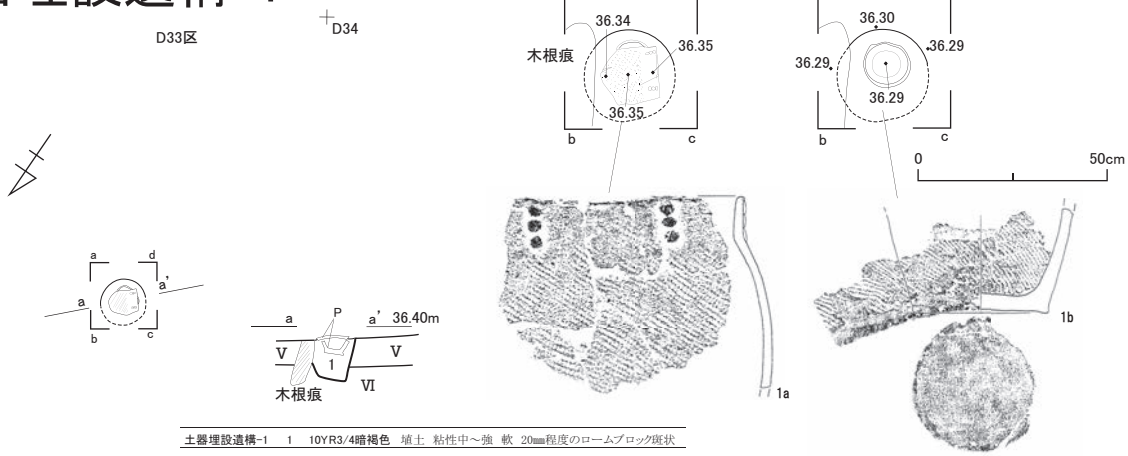
E・F28区



F−1003	1	5YR4/1褐灰色	—	粘性弱　Ⅳ≫焼土粒
	2	5YR3/1黒褐色	—	粘性弱　Ⅳ≫焼土粒
	3	5YR4/3にぶい赤褐色	—	焼土
	4	5YR4/2灰褐色	—	粘性弱　Ⅳ＞焼土粒、炭化物含む

土器埋設遺構−1

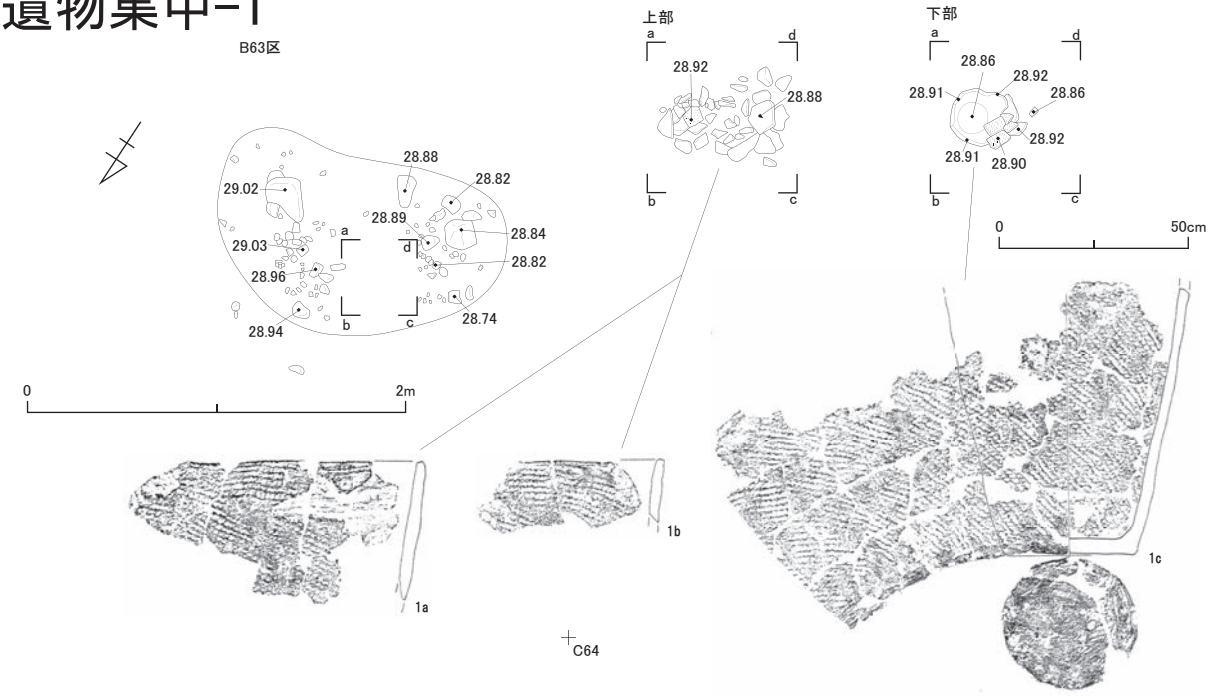
D33区



土器埋設遺構−1	1	10YR3/4暗褐色	埴土	粘性中〜強	軟	20㎜程度のロームブロック斑状

遺物集中−1

B63区



図Ⅳ−28　焼土（4）F−18・19、土器埋設遺構・遺物集中（1）

5　土器埋設遺構、遺物集中など

土器埋設遺構－１（図Ⅳ－28・32、図版17・24）

位置：D33区　　**平面形**：円形

規模：26×25／14×13／23㎝

調査・特徴：包含層調査でⅤ層中に口縁部を含む15㎝大の土器片とその周囲の暗褐色土のまとまりを検出した。半截して堆積状況を確認し、壁面・坑底面を検出した。坑底は平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる土坑中に、上記の土器片が蓋のようになり、その底部とみられる部分が正位で埋設されており、土器埋設遺構と判断した。覆土は１層で埋戻しと思われる。

遺物出土状況：覆土中よりⅣ群ａ類の土器26点が埋設され出土した。

掲載遺物：１ａ・１ｂはⅣ群ａ類、涌元式。胴部が膨らみ、口縁部に僅かなくびれを持つ器形である。口唇部は基本的に平坦に成形されているが、粗雑なナデによる外側への粘土のはみ出しが一部みられる。口縁部の地文は無文で縦位に３つ並ぶボタン状の貼付がなされ、胴部の地文はLR単節斜行縄文が施文されている。内面は口縁部付近に横方向、胴部に縦方向のヘラナデ調整が全面的に施されている。

時期：遺構内の土器から縄文時代後期前葉と判断する。

遺物集中－１（図Ⅳ－28・32、図版18・24）

位置：B63区　　**規模**：154×94㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に土器片と礫を中心とする遺物の集中を確認した。遺物の広がりを確認するため周辺の精査を行った結果、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

　出土遺物はⅣ群ａ類の土器93点、礫216点で総数309点である。いずれもⅣ層から出土している。

掲載遺物：１ａ～１ｃはⅣ群ａ類、涌元式相当のもの。底部から口縁部にかけて僅かに歪むものの、ほぼ直線的に開く器形である。口唇部は平坦に成形され、断面が角形を呈している。胎土に小砂利を多く含む。地文にはLR単節縄文が胴部に斜行、口縁部に横走気味に施されている。

時期：集中内にⅣ群ａ類の土器片が含まれることから、縄文時代後期前葉と判断する。　（直江）

遺物集中－２（図Ⅳ－29、図版18）

位置：H33区　　**規模**：65×51㎝

調査・特徴：包含層調査でⅢ層中に礫を中心としたまとまりを確認した。遺物の広がりを確認するため周辺の精査を行った結果、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

　出土遺物はⅣ群ａ類の土器２点、Ｒフレイク２点、フレイク５点、礫25点で総数34点である。いずれもⅢ層から出土している。

時期：集中内にⅣ群ａ類の土器片が含まれることから、縄文時代後期前葉と判断する。

（渡井・直江）

遺物集中－３（図Ⅳ－29・33、図版18・25）

位置：H36区　　**規模**：112×77㎝

調査・特徴：包含層調査でⅢ層中に土器片を中心とするまとまりを確認した。遺物の広がりと周辺の精査を行い、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類土器287点を中心に、フレイク１点、礫６点で総数294点である。いずれもⅢ層から出土している。

掲載遺物：２a～２d・３はⅣ群a類、涌元式相当のもの。２は撚りが密なLR縄文が全面的に施されている。表面の摩耗が激しい。３は無文地に格子目状の撚糸文が施されている。

時期：Ⅳ群a類の集中であることから、縄文時代後期前葉と判断する。（袖岡）

遺物集中－４（図Ⅳ－29・33、図版18・25）

位置：H38区　**規模**：126×65㎝

調査・特徴：包含層調査でⅢ層中に土器片を中心とするまとまりを確認した。遺物の広がりと周辺の精査を行い、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類の土器76点を中心に、Rフレイク４点、フレイク３点、石核１点、礫５点で総数89点である。いずれもⅢ層から出土している。

掲載遺物：４a～４cはⅣ群a類、涌元式相当のもの。無文地の口縁と横走するLR単節縄文の施される胴部に２条一組の撚糸が施文されている。

時期：Ⅳ群a類土器の集中であることから、縄文時代後期前葉と判断する。

遺物集中－５（図Ⅳ－30・33、図版18・25）

位置：H39区　**規模**：77×48㎝

調査・特徴：包含層調査でⅢ層中～Ⅳ層上面にかけ、土器片を中心とするまとまりを確認した。遺物の広がりと周辺の精査を行い、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類の土器72点を中心に、フレイク５点、礫２点で総数79点である。いずれもⅢ～Ⅳ層からの出土である。

掲載遺物：５はⅣ群a類、涌元式相当のもの。大型の深鉢形土器で、胴部が僅かに湾曲する器形。口唇部の断面は角形である。LR単節斜行縄文が地文として全面的に施されている。

時期：Ⅳ群a類土器の集中であることから、縄文時代後期前葉と判断する。

遺物集中－６（図Ⅳ－30・33、図版19・25）

位置：H39区　**規模**：90×52㎝

調査・特徴：遺物集中５の北側に、検出面を同じくして剥片と礫を中心とするまとまりを確認した。遺物とその周辺を精査し、遺構の伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類の土器３点、Rフレイク５点、フレイク23点、石核２点、礫16点で総数49点である。いずれもⅢ～Ⅳ層から出土している。

掲載遺物：６はⅣ群a類。小型の深鉢形土器の底部。無文で底面は平坦である。

時期：遺物集中５と同様、縄文時代後期前葉と判断する。（渡井・袖岡）

遺物集中－７（図Ⅳ－30・34、図版19・25）

位置：D36区　**規模**：88×51㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中に土器片と礫を中心とするまとまりを確認した。遺物の広がりを確認するため周辺の精査を行った結果、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類の土器45点、台石１点、礫94点で総数140点である。いずれもⅣ層から出土し

ている。

掲載遺物：７a・７bはⅣ群a類、涌元式相当のもの。深鉢形土器である。折り返し口縁で、平縁に小突起を持つ。口唇部は平坦に成形され、粗雑なナデによる外側への粘土のはみ出しが一部みられる。地文にはLR単節縄文が横走気味に施されている。内面は口縁部付近に横方向、胴部に縦方向のヘラナデ調整が全面的に施されている。

時期：集中内にⅣ群a類の土器片が含まれることから、縄文時代後期前葉と判断する。　（直江）

遺物集中－８（図Ⅳ－31・34、図版19・26）

位置：C19・20区　　**規模**：126×120㎝

調査・特徴：包含層調査でⅣ層中から土器片を中心とするまとまりを検出した。遺物の広がりと周辺の精査を行い、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅢ群a類土器112点を中心に、Ⅴ群b類の土器２点、スクレイパー１点、フレイク６点で総数121点である。いずれもⅣ層から出土しているが、Ⅴ群b類土器はⅣ層中の遺物ではなく、木根等によるコンタミネーションと考えられる。

掲載遺物：８a～８cはⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式新段階または見晴町式相当のもの。大型の深鉢形土器で、二種の突起を持つ波状口縁である。一つは頂部が薄く成形され、突起下に短い横方向の粘土紐貼付（剥落）のあるもので、他方は頂部が厚く、細い棒状工具による刻みを持ち、突起下に粘土紐が円と弧線状に貼り付けられている。突起以外の口唇部には棒状工具による斜めの刻みが付されている。地文はRL単節斜行縄文が施されている。９はⅤ群b類、大洞C２式相当。口唇部が内側に切り出す形状で、口縁部に２条の沈線が付されている。胴部にはLR単節斜行縄文が施されている。10はスクレイパー。縦長剥片素材で腹面の両側縁に連続した細かい加工が施されている。

時期：Ⅲ群a類土器のまとまりであることから、縄文時代中期前半と判断する。

FC－１（図Ⅳ－31・34、図版26）

位置：H39区　　**規模**：94×42㎝

調査・特徴：包含層調査でⅢ層中からⅣ層にかけ、剥片のまとまりを検出した。遺物の広がりと周辺の精査を行い、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類の土器５点、石鏃１点、スクレイパー４点、Rフレイク７点、フレイク278点、石核５点、礫２点で総数302点である。いずれもⅢ～Ⅳ層から出土している。

掲載遺物：１はⅣ群a類、涌元式相当のもの。口縁部に幅の狭い無文帯があり、２条の撚糸による圧痕が施されている。地文はLR単節斜行縄文である。２は石鏃。有茎で、カエシ部分にアスファルトが付着している。加工は縁辺を中心とした細かいもので、正裏面ともに素材面が大きく残る。

時期：剥片集中の中の遺物と、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と判断する。

（渡井・袖岡）

S－１（図Ⅳ－31・34、図版19・26）

位置：F38区　　**規模**：165×123㎝

調査・特徴：包含層調査でⅢ層中に大量の凝灰岩礫・礫片を中心としたまとまりを確認した。遺物の広がりを確認し周辺の精査を行った結果、遺構を伴わない遺物の集中と判断した。

出土遺物はⅣ群a類の土器９点、両面調整石器１点、Rフレイク３点、フレイク36点、石核１点、

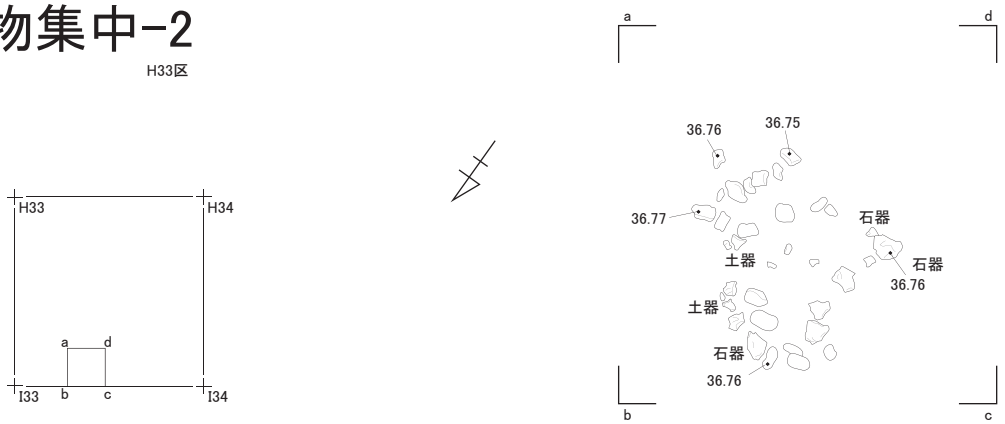
加工痕ある礫１点、礫2,924点で総数2,975点である。礫は激しく破損しており、同一個体のものが多数含まれていると考えられる。

掲載遺物：１は両面調整石器。厚手の剥片を素材とし、不整な撥形に成形されている。両側縁は急角度の加工、下縁は薄手の加工によりやや鋭角な縁辺となっている。２は石核。縦長剥片素材で、素材腹面と両側面との交互剥離が正裏面で行われている。

時期：遺構中の遺物と、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と判断する。　（渡井・直江）

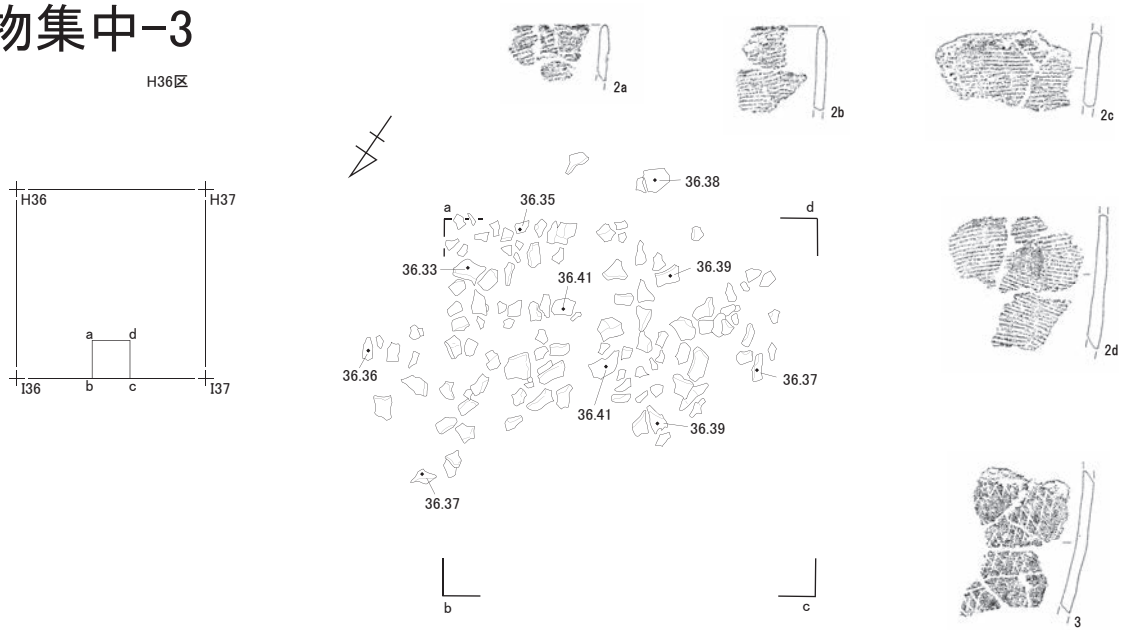
遺物集中-2

H33区



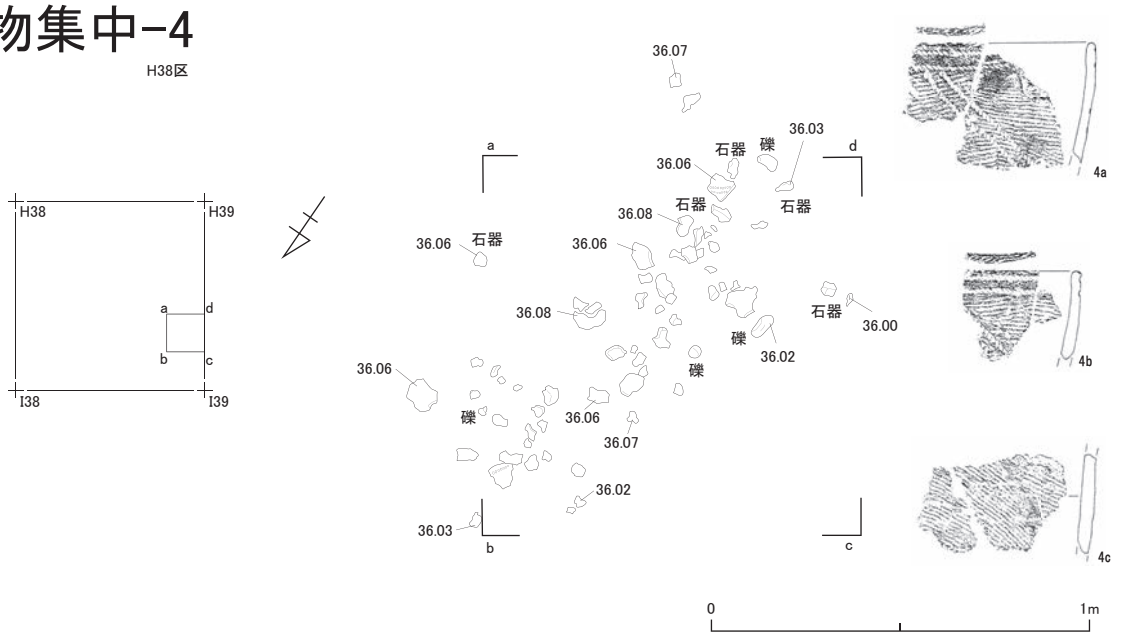
遺物集中-3

H36区



遺物集中-4

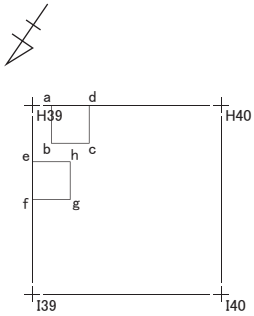
H38区



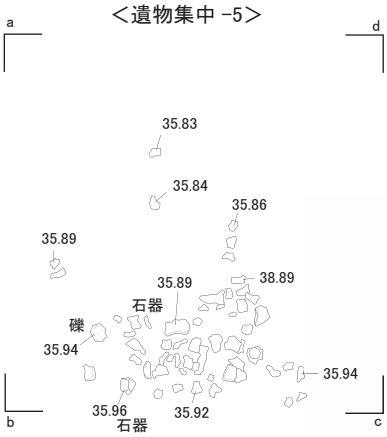
図Ⅳ－29　遺物集中（２）

遺物集中-5・6

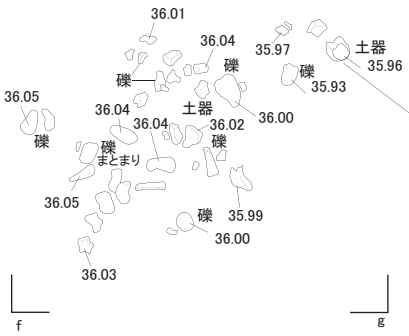
H39区

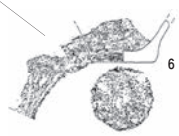


＜遺物集中 -5＞



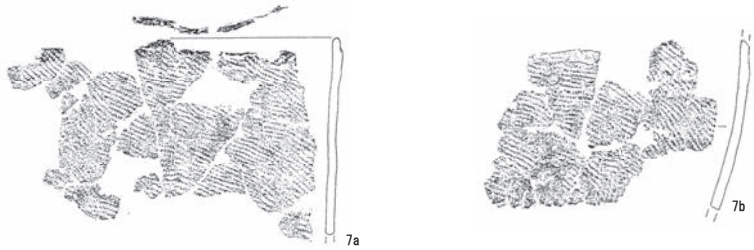
＜遺物集中 -6＞

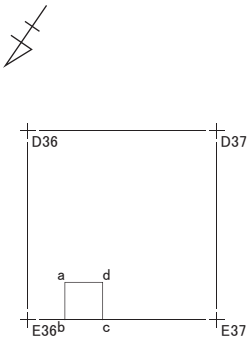


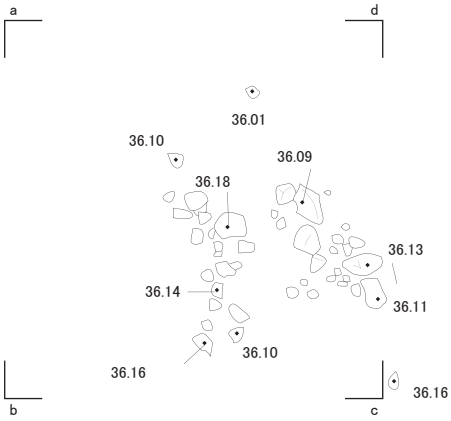


遺物集中-7

D36区



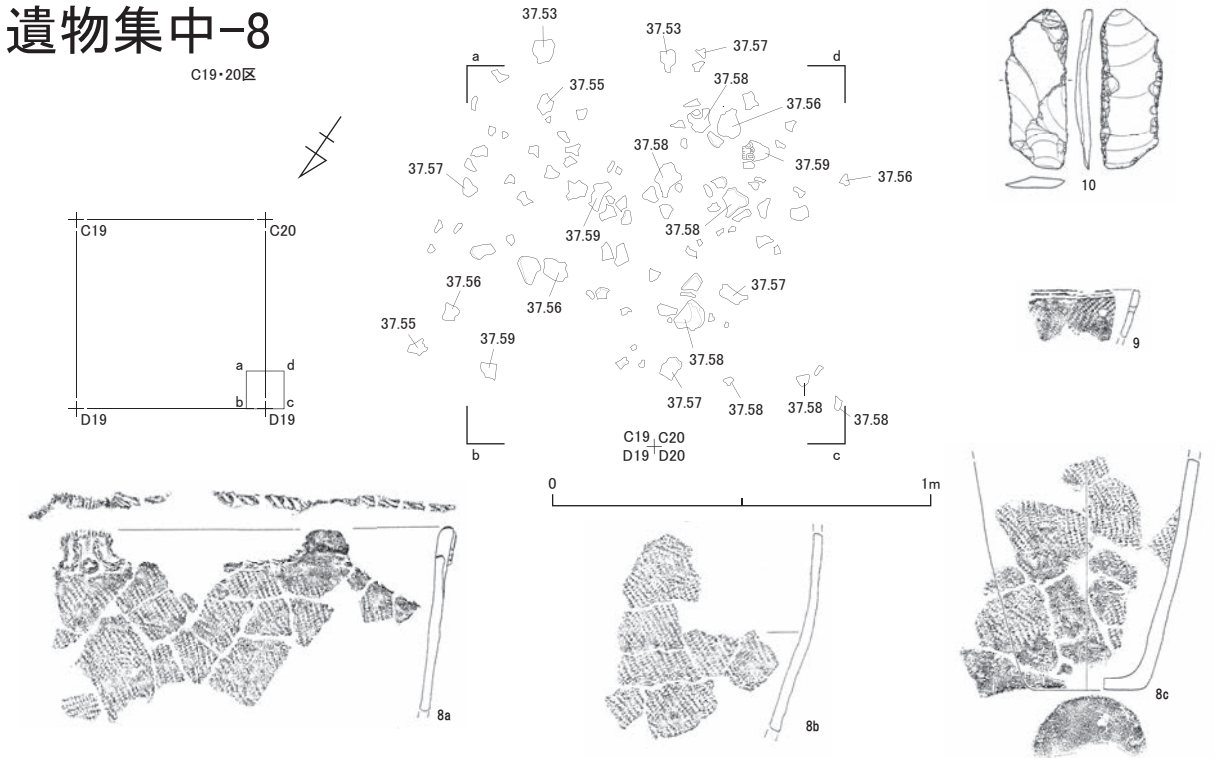


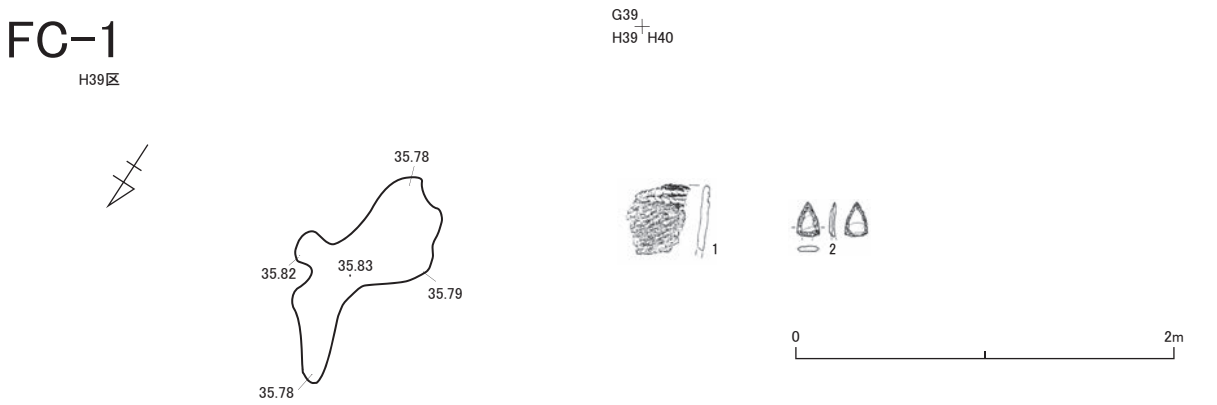


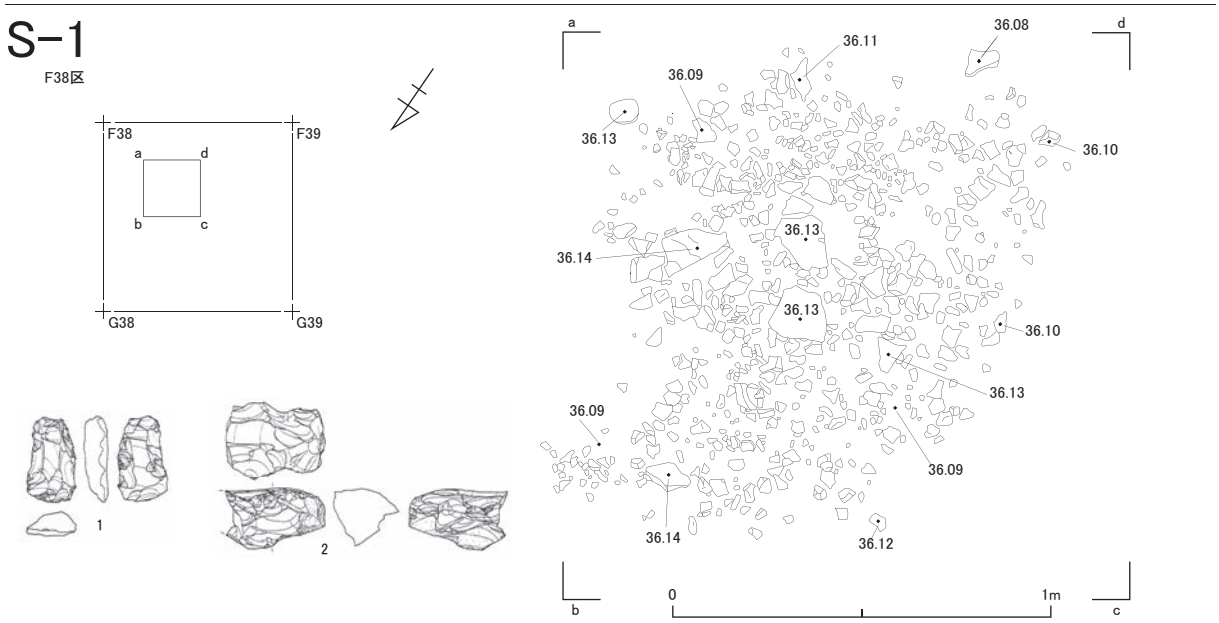
E36

0　1m

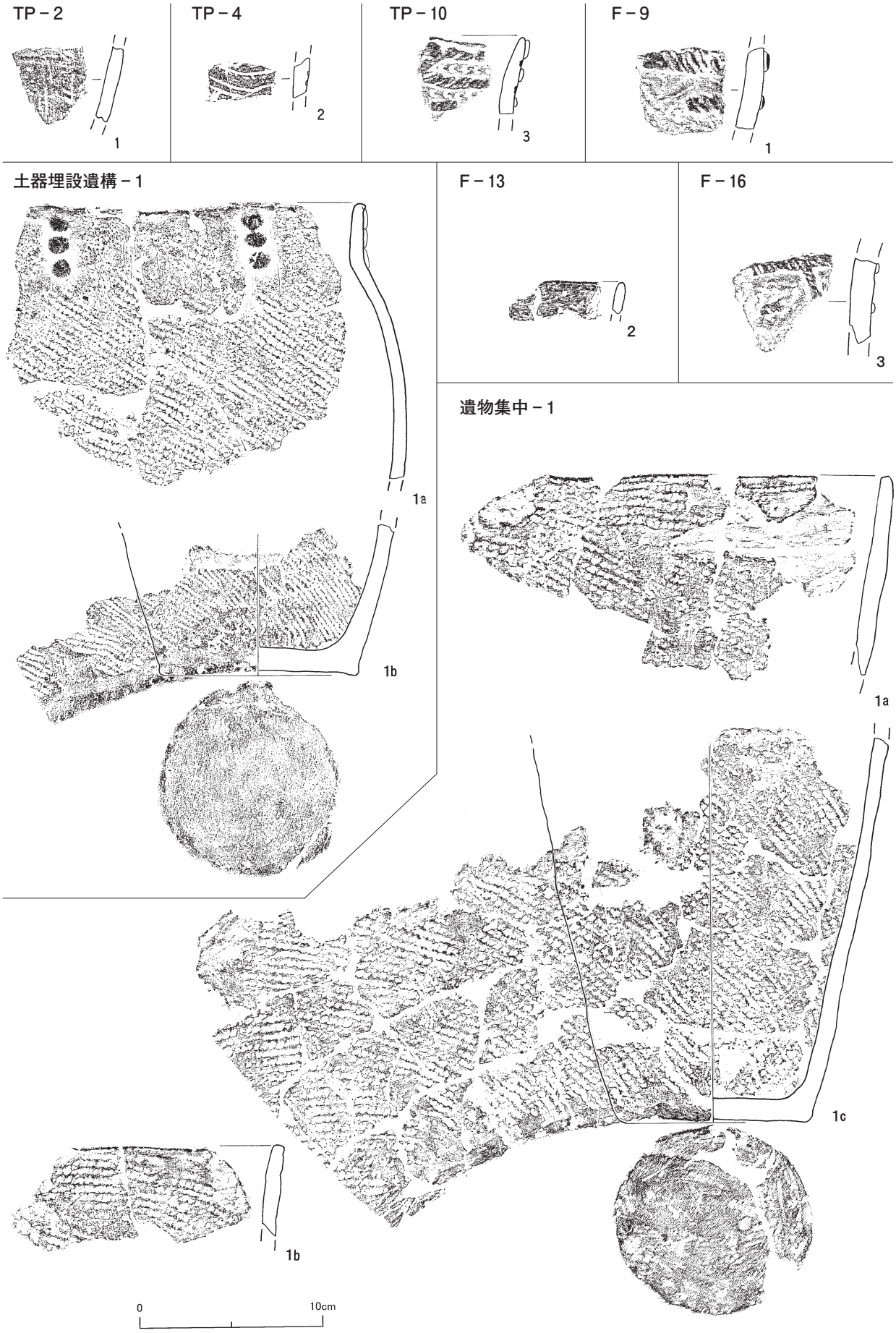
図Ⅳ－30　遺物集中（3）





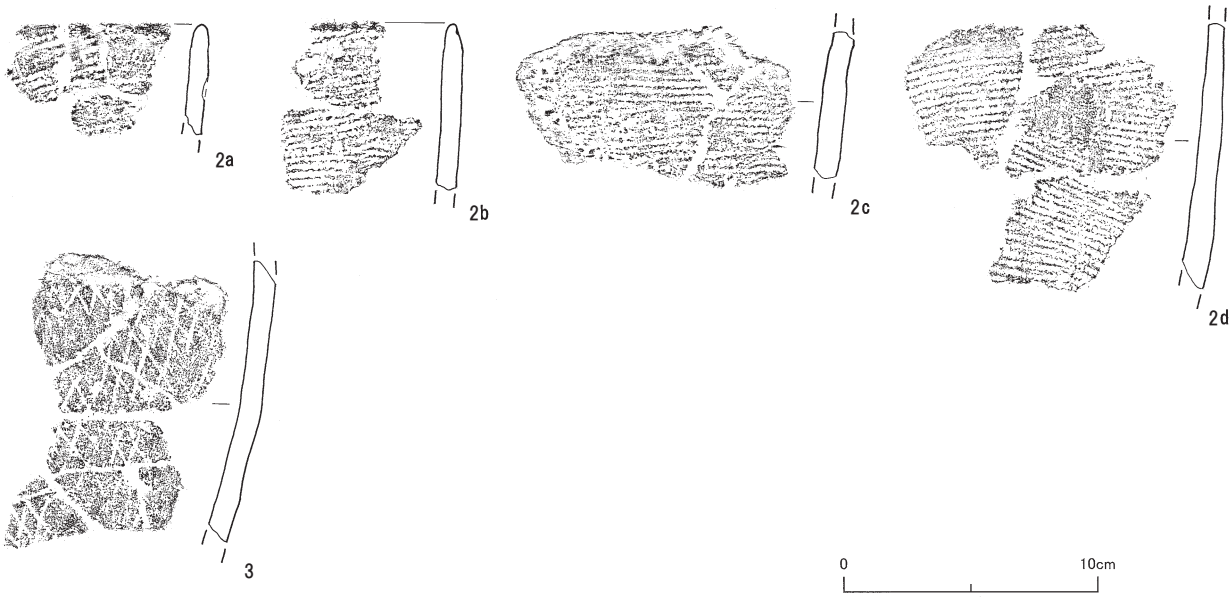


図Ⅳ－31　遺物集中（4）、FC・S



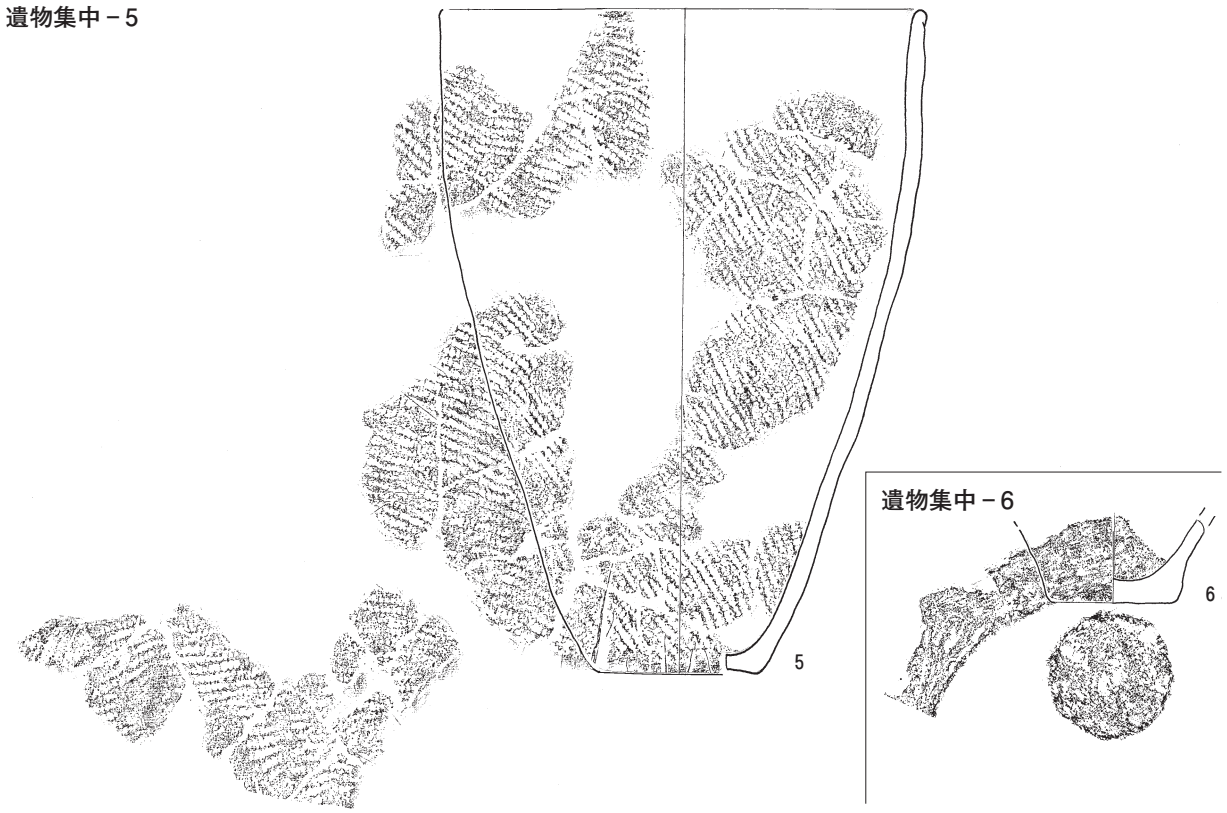
図Ⅳ－32　Ｔピット・焼土・土器埋設遺構・遺物集中出土の遺物（１）

遺物集中－3



遺物集中－4

遺物集中－5



図Ⅳ－33　遺物集中出土の遺物（2）

遺物集中－7

遺物集中－8

図Ⅳ－34　遺物集中出土の遺物（3）、FC・S出土の遺物

表Ⅳ－１　遺構一覧

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模（cm）					時期	備考
	挿図番号	写真図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
						長径	短径	長径	短径			
H－１	図Ⅳ－１・２	4	G・H59	Ⅵ	類隅丸方形	292	243	274	231	38	縄文中期前半	N－４°E
HP－１			G59			51	46	27	31	6		
HP－２			G59			61	52	45	38	7		
H－２	図Ⅳ－３・４	５・６	D16・17	Ⅳ～Ⅴ	隅丸方形	306	219	269	182	63	縄文中期前半	N－１°W
HF－１			D17			74	37			3		
HF－２			D16・17			53	21			6		
HP－１			D17			50	41	55	39	37		
H－３	図Ⅳ－７・８	7	E18・19	Ⅴ～Ⅵ	類隅丸方形	319	249	291	225	26	縄文中期前半	N－56°E
P－１	図Ⅳ－12	8	F57	Ⅵ	円形	(165)	152	170	164	90	縄文中期前半	
P－２	図Ⅳ－12	8	F58	Ⅵ	円形	73	63	74	65	69	縄文中期前半	
P－３	図Ⅳ－12	8	E57	Ⅵ	円形	66	59	101	84	53	縄文中期前半	
P－４	図Ⅳ－13	8	F37・38	Ⅳ～Ⅴ	楕円形	194	159	176	130	46	縄文後期前葉	N－７°W
P－５	図Ⅳ－13	9	D57	Ⅵ	円形	94	92	76	73	23	縄文中期前半	
P－６	図Ⅳ－13	9	E58	Ⅵ	円形	80	71	97	93	51	縄文中期前半	
P－７	図Ⅳ－13	9	D・E56	Ⅵ	円形	140	138	135	128	108	縄文中期前半	
P－８	図Ⅳ－14	9	G59	H－１覆土	円形	(40)	39	(24)	22	18	縄文後期前葉	H－１と重複
P－９	図Ⅳ－14	10	F47	Ⅵ	楕円形	146	(95)	92	41	42	縄文時代	N－40°E
P－10	図Ⅳ－14	10	H44	Ⅵ	不整円形	202	(162)	71	65	62	不明	N－68°W
P－11	図Ⅳ－15	10	F37	Ⅵ	円形	50	46	34	29	39	不明	
P－12	図Ⅳ－15	10	F37	Ⅵ	円形	41	37	26	25	35	不明	
P－13	図Ⅳ－15	11	C18	Ⅴ	円形	72	62	27	27	28	縄文中期前半	N－５°W
P－14	図Ⅳ－15	11	C18	Ⅴ	円形	61	51	46	34	16	縄文中期前半	N－65°E
P－15	図Ⅳ－15	11	D39	Ⅵ	円形	82	81	46	45	21	不明	
P－16	図Ⅳ－15	11・12	E18	Ⅳ	楕円形	133	103	120	107	68	縄文中期前半	N－58°E
P－17	図Ⅳ－16	12	E35	Ⅵ	円形	89	81	37	33	30	不明	
P－18	図Ⅳ－16	12	C・D28	Ⅵ	楕円形	160	138	151	141	105	縄文中期前半	N－33°E
P－19	図Ⅳ－16	12	E19	H－３覆土	円形	(95)	(94)	113	103	89	縄文中期前半	
TP－１	図Ⅳ－20	13	F47	Ⅵ	溝状	288	56	243	25	93	縄文時代	N－85°E
TP－２	図Ⅳ－20	13	G・H43	Ⅵ	溝状	298	69	248	26	118	縄文時代	N－46°W
TP－３	図Ⅳ－21	13	H46・47	Ⅵ	溝状	(291)	(57)	271	29	92	縄文時代	N－83°E
TP－４	図Ⅳ－21	13	H40・41	Ⅴ～Ⅵ	溝状	289	56	302	20	128	縄文時代	N－90°E
TP－５	図Ⅳ－22	13・14	E48、E・F49	Ⅵ	溝状	285	53	264	29	99	縄文時代	N－46°W
TP－６	図Ⅳ－22	14	G45	Ⅴ～Ⅵ	溝状	279	66	263	34	128	縄文時代	N－58°W
TP－７	図Ⅳ－23	14	F49・50	Ⅵ	溝状	252	40	235	20	80	縄文時代	N－64°E
TP－８	図Ⅳ－23	14	E47・48	Ⅵ	溝状	245	49	225	27	88	縄文時代	N－79°E
TP－９（1001）	図Ⅳ－24	14	H29・30	Ⅵ	溝状	267	65	351	35	112	縄文時代	N－52°E
TP－10（1002）	図Ⅳ－24	15	F29	Ⅴ	溝状	229	86	268	28	123	縄文時代	N－58°E
F－１	図Ⅳ－25	15	F・G58	Ⅵ	－	137	36			14	縄文中期前半	
F－２①	図Ⅳ－25	15	C56	Ⅵ	－	38	27			7	縄文中期前半	
F－２②			C56		－	91	43			12		
F－３	図Ⅳ－25	15	E59	Ⅵ	－	77	58			17	縄文中期前半	
F－４	図Ⅳ－25	15	F49	Ⅴ	－	36	26			11	縄文中期前半	
F－５	図Ⅳ－25	15	F48	Ⅵ	－	100	47			18	縄文時代	
F－６①	図Ⅳ－25	15	D19	Ⅳ	－	129	90	50	32	9	縄文中期前半	
F－６②			D19		－			32	25	13		
F－７	図Ⅳ－26	16	D36	Ⅳ	－	76	45			4	縄文後期前葉	
F－８	図Ⅳ－26	16	C19・20、D19・20	Ⅳ～Ⅴ	－	99	90			16	縄文中期前半	
F－９①	図Ⅳ－26	5	D17	H－２覆土	－	92	68			29	縄文中期前半	
F－９②			D17		－	57	31			28		
F－10	図Ⅳ－26	16	C18	Ⅴ	－	56	41			21	縄文中期前半	
F－11	図Ⅳ－26	16	C37	Ⅳ	－	43	33			6	縄文後期前葉	
F－12	図Ⅳ－27	16	D33	Ⅳ	－	50	46			8	縄文後期前葉	
F－13	図Ⅳ－27	16	D36	Ⅳ	－	66	48			11	縄文後期前葉	
F－14	図Ⅳ－27	17	D18	Ⅴ	－	116	37			12	縄文中期前半	
F－15	図Ⅳ－27	17	C22	Ⅳ	－	102	48			10	縄文中期前半～後期前葉	
F－16	図Ⅳ－27	17	D20	Ⅴ～Ⅵ	－	38	31			4	縄文中期前半	
F－17（1001）①	図Ⅳ－27	17	F21	Ⅳ	－	56	40			13	縄文中期前半	
F－17（1001）②			F21		－	33	22			9		
F－18（1002）	図Ⅳ－28	17	G・H17	Ⅳ	－	71	67			12	縄文中期前半	
F－19（1003）	図Ⅳ－28	17	E・F28	Ⅳ	－	68	54			23	縄文時代	
土器埋設遺構－１	図Ⅳ－28	17	D33	Ⅴ	円形	26	25	14	13	23	縄文後期前葉	
遺物集中－１	図Ⅳ－28	18	B63	Ⅳ	－	154	94				縄文後期前葉	
遺物集中－２	図Ⅳ－29	18	H33	Ⅲ	－	65	51				縄文後期前葉	

表Ⅳ－1　遺構一覧

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模（cm）					時期	備考
	挿図番号	写真図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
						長径	短径	長径	短径			
遺物集中－3	図Ⅳ－29	18	H36	Ⅲ	－	112	77				縄文後期前葉	
遺物集中－4	図Ⅳ－29	18	H38	Ⅲ	－	126	65				縄文後期前葉	
遺物集中－5	図Ⅳ－30	18	H39	Ⅲ～Ⅳ	－	77	48				縄文後期前葉	
遺物集中－6	図Ⅳ－30	19	H39	Ⅲ～Ⅳ	－	90	52				縄文後期前葉	
遺物集中－7	図Ⅳ－30	19	D36	Ⅳ	－	88	51				縄文後期前葉	
遺物集中－8	図Ⅳ－31	19	C19・20	Ⅳ	－	126	120				縄文中期前半	
FC－1	図Ⅳ－31	－	H39	Ⅲ～Ⅳ	－	94	42				縄文後期前葉	
S－1	図Ⅳ－31	19	F38	Ⅲ	－	165	123				縄文後期前葉	

表Ⅳ－2　遺構出土遺物集計

遺構／付属遺構／層位	土器				剥片石器								礫石器・礫									総計
	Ⅲ群a類	Ⅳ群a類	Ⅴ群b類	土器集計	石鏃	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	剥片石器集計	たたき石	北海道式石冠	扁平打製石器	すり石	台石	砥石	加工痕ある礫	礫	礫石器・礫集計	
H－1		17		17						8		8					1		1	11	13	38
床面																			1	6	7	7
覆土		17		17						8		8					1			5	6	31
H－2	175			175				6	5	30	3	44	1	1	3		1	2	1	63	72	291
床面	6			6				1				1		1							1	8
覆土	169			169				5	5	29	3	42	1		3		1	2	1	63	71	282
HP－1																						
覆土										1		1										1
H－3	110	4		114			1	3	7	164	1	176	4		1	1	3		2	40	51	341
床面																	1			2	3	3
覆土	94	4		98				3	6	161	1	171	2		1		1		2	27	33	302
撹乱	16			16			1		1	3		5	2			1	1			11	15	36
P－1	4			4													1			8	9	13
覆土	4			4													1			8	9	13
P－2																				1	1	1
坑底																				1	1	1
P－3								1		39		40					2			24	26	66
覆土								1		39		40					2			24	26	66
P－4		8		8						4		4					1			33	34	46
覆土		8		8						4		4					1			33	34	46
P－5								1				1										1
覆土								1				1										1
P－6																				2	2	2
坑底																				1	1	1
覆土																				1	1	1
P－7	3			3						1		1	1							5	6	10
覆土	3			3						1		1	1							5	6	10
P－8		19		19																		19
覆土		19		19																		19
P－10					1							1								3	3	4
覆土					1							1								3	3	4
P－11									1	1		2								1	1	3
覆土									1	1		2								1	1	3
P－13	3			3						3		3								5	5	11
覆土	3			3						3		3								5	5	11
P－14								1			1	2										2
覆土								1			1	2										2
P－16	19			19				1		16		17			1					8	9	45
坑底															1					1	2	2
覆土	19			19				1		16		17								7	7	43
P－18	2	1		3																2	2	5
覆土	2	1		3																2	2	5

表Ⅳ－２　遺構出土遺物集計

遺構／付属遺構／層位	土器				剥片石器								礫石器・礫									総計
	Ⅲ群a類	Ⅳ群a類	Ⅴ群b類	土器集計	石鏃	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	剥片石器集計	たたき石	北海道式石冠	扁平打製石器	すり石	台石	砥石	加工痕ある礫	礫	礫石器・礫集計	
P－19	2			2									1							2	3	5
覆土	2			2									1							2	3	5
TP－2		1		1						2		2										3
覆土		1		1						2		2										3
TP－4		2		2						1		1								14	14	17
覆土		2		2						1		1								14	14	17
TP－6																				1	1	1
覆土																				1	1	1
TP－7																				3	3	3
覆土																				3	3	3
TP－9（1001）	1	3		4						1		1								4	4	9
覆土										1		1										1
覆土黒	1	3		4																4	4	8
TP－10（1002）	2			2																3	3	5
覆土黒	2			2																1	1	3
覆土中																				2	2	2
F－3																				1	1	1
焼土																				1	1	1
F－5		5		5																1	1	6
焼土		5		5																1	1	6
F－7																				6	6	6
周囲																				6	6	6
F－8	4			4						5		5								2	2	11
焼土	4			4						5		5								2	2	11
F－9	4			4																2	2	6
焼土	4			4																2	2	6
F－13		2		2																6	6	8
焼土		2		2																		2
周囲																				6	6	6
F－14																				2	2	2
焼土																				2	2	2
F－16	4			4																		4
焼土	4			4																		4
土器埋設遺構－1		26		26																		26
覆土		26		26																		26
遺物集中－1		93		93																216	216	309
Ⅳ		93		93																216	216	309
遺物集中－2		2		2					2	5		7								25	25	34
Ⅲ		2		2					2	5		7								25	25	34
遺物集中－3		287		287						1		1								6	6	294
Ⅲ		287		287						1		1								6	6	294
遺物集中－4		76		76					4	3	1	8								5	5	89
Ⅲ		76		76					4	3	1	8								5	5	89
遺物集中－5		72		72						5		5								2	2	79
Ⅲ～Ⅳ		72		72						5		5								2	2	79
遺物集中－6		3		3					5	23	2	30								16	16	49
Ⅲ～Ⅳ		3		3					5	23	2	30								16	16	49
遺物集中－7		45		45													1			94	95	140
Ⅳ		45		45													1			94	95	140
遺物集中－8	112		2	114				1		6		7										121
Ⅳ	112		2	114				1		6		7										121
FC－1		5		5	1			4	7	278	5	295								2	2	302
Ⅲ～Ⅳ		5		5	1			4	7	278	5	295								2	2	302
S－1		9		9		1			3	36	1	41							1	2924	2925	2975
Ⅲ		9		9		1			3	36	1	41							1	2924	2925	2975
総計	445	680	2	1127	2	1	1	18	34	632	14	702	7	1	5	1	10	2	5	3543	3574	5403

表Ⅳ－3　遺構出土石器の石材別集計

石材／器種	剥片石器								礫石器・礫									総計
	石鏃	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	剥片石器集計	たたき石	扁平打製石器	北海道式石冠	すり石	台石	砥石	加工痕ある礫	礫	礫石器・礫集計	
頁岩	2	1	1	18	33	584	14	653	2						4	308	314	967
凝灰岩					1	40		41					2		1	2975	2978	3019
砂岩						1		1	4				4	2		124	134	135
安山岩						2		2	1	4	1	1	3			71	81	83
チャート						4		4								52	52	56
片岩						1		1								12	12	13
メノウ																1	1	1
花こう閃緑岩													1				1	1
玄武岩										1							1	1
総計	**2**	**1**	**1**	**18**	**34**	**632**	**14**	**702**	**7**	**5**	**1**	**1**	**10**	**2**	**5**	**3543**	**3574**	**4276**

表Ⅳ－4　遺構出土掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構／（発掘区）	層位	遺物No.	点数 片	点数 計	分類	器種	部位	計測値・備考
図Ⅳ－2	1	20	H－1	覆土	10		6	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅳ－5	1	20	H－2	床	30		4	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－5	2	20	H－2	床	28		2	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－5	3	20	H－2	覆土	61		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－5	4a	20	H－2	覆土	4		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－5	4b	20	H－2	覆土	14		1			胴	
図Ⅳ－5	5a	20	H－2	覆土	18		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－5	5b	20	H－2	覆土	10	14	19			胴	
			H－2	覆土	43	5					
図Ⅳ－5	6	20	H－2	覆土	22		1	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅳ－5	7	20	H－2	覆土	43		5	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅳ－9	1	21	H－3	覆土	25	6	7	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
			H－3	覆土	26	1					
図Ⅳ－9	2	21	H－3	覆土	20	1	61	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	口径（30.0）cm・器高（19.5）cm
			H－3	覆土	41－1	51					
			H－3	撹乱	58	4					
			D18	Ⅰ	3	1					
			D18	撹乱	8	1					
			E18	Ⅳ	2	1					
			E19	Ⅳ	2	1					
			E19	撹乱	5	1					
図Ⅳ－17	1	23	P－1	覆土	3		2	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－17	2	23	P－1	覆土	1		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－17	5	23	P－4	覆土	7		1	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅳ－17	7	23	P－7	覆土	1		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－17	9	23	P－8	覆土	1	19	23	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	
			H－1	覆土	8	2					
			G59	Ⅴ	3	2					
図Ⅳ－18	14	23	P－16	覆土	6		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－18	17	24	P－18	覆土	3		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－18	18	24	P－19	覆土	1		2	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－32	1	24	TP－2	覆土	1		1	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅳ－32	2	24	TP－4	覆土	1		2	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅳ－32	3	24	TP－10（1002）	覆土黒	1		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－32	1	24	F－9	覆土	1		2	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－32	2	24	F－13	覆土	2		2	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－32	3	24	F－16	覆土	1		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅳ－32	1a	24	土器埋設遺構－1	覆土	1		14	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅳ－32	1b	24	土器埋設遺構－1	覆土	1		8	Ⅳa	深鉢	胴～底	底径10.8cm・器高（8.6）cm

表Ⅳ－4　遺構出土掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構／（発掘区）	層位	遺物No.	点数 片	点数 計	分類	器種	部位	計測値・備考
図Ⅳ－32	1a	24	遺物集中－1	Ⅳ	1		8	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅳ－32	1b	24	遺物集中－1	Ⅳ	1		2			口縁	
図Ⅳ－32	1c	24	遺物集中－1	Ⅳ	1	36	60			胴～底	底径10.5cm・器高（19.5）cm
			遺物集中－1	Ⅳ	9	24					
図Ⅳ－33	2a	25	遺物集中－3	Ⅳ	1		4	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅳ－33	2b	25	遺物集中－3	Ⅳ	1		2			口縁～胴	
図Ⅳ－33	2c	25	遺物集中－3	Ⅳ	1		3			胴	
図Ⅳ－33	2d	25	遺物集中－3	Ⅳ	1		4			胴	
図Ⅳ－33	3	25	遺物集中－3	Ⅳ	1		8	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅳ－33	4a	25	遺物集中－4	Ⅲ	1		2	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅳ－33	4b	25	遺物集中－4	Ⅲ	1		2			口縁～胴	
図Ⅳ－33	4c	25	遺物集中－4	Ⅲ	1		3			胴	
図Ⅳ－33	5	25	遺物集中－5	Ⅲ～Ⅳ	1		47	Ⅳa	深鉢	口縁～底	口径（20.0）cm・底径（6.5）cm・器高（23.7）cm
図Ⅳ－33	6	25	遺物集中－6	Ⅲ	1		1	Ⅳa	深鉢	底	底径5.1cm・器高（1.8）cm
図Ⅳ－34	7a	25	遺物集中－7	Ⅳ	1	9	25	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	
			遺物集中－7	Ⅳ	6	16					
図Ⅳ－34	7b	25	遺物集中－7	Ⅳ	1	2	12			胴	
			遺物集中－7	Ⅳ	6	10					
図Ⅳ－34	8a	26	遺物集中－8	Ⅳ	1	18	20	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
			C19	Ⅳ	8	2					
図Ⅳ－34	8b	26	遺物集中－8	Ⅳ	1		7			胴	
図Ⅳ－34	8c	26	遺物集中－8	Ⅳ	1	17	21			胴～底	底径（8.5）cm・器高（16.0）cm
			C19	Ⅳ	8	3					
			C20	Ⅳ	4	1					
図Ⅳ－34	9	26	遺物集中－8	Ⅳ	2	1	2	Ⅴb	鉢	口縁	
			D20	Ⅲ	3	1					
図Ⅳ－34	1	26	FC－1	Ⅲ～Ⅳ	1		1	Ⅳa	深鉢	口縁	

表Ⅳ－5　遺構出土掲載石器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構／（発掘区）	層位	遺物番号	遺物名	石材	大きさ（cm） 長さ	大きさ（cm） 幅	大きさ（cm） 厚さ	重量（g）	備考
図Ⅳ－2	2	20	H－1	覆土	9	台石	砂岩	20.9	12.0	7.8	2690.0	
図Ⅳ－5	8	20	H－2	覆土	62	スクレイパー	頁岩	6.3	4.0	1.0	21.7	
図Ⅳ－5	9	20	H－2	覆土	25	スクレイパー	頁岩	6.9	4.5	1.8	42.1	光沢
図Ⅳ－5	10	20	H－2	床	32	スクレイパー	頁岩	4.5	5.5	1.2	21.9	光沢
図Ⅳ－5	11	20	H－2	覆土	63	スクレイパー	頁岩	5.2	6.6	1.0	27.0	
図Ⅳ－5	12	20	H－2	覆土	45	スクレイパー	頁岩	5.7	6.4	1.2	27.8	
図Ⅳ－6	13	20	H－2	覆土	65	Rフレイク	頁岩	6.9	5.2	2.1	48.3	
図Ⅳ－6	14	20	H－2	覆土	6	石核	頁岩	7.5	6.5	3.5	200.0	
図Ⅳ－6	15	20	H－2	覆土	27	石核	頁岩	7.8	6.8	6.5	200.0	
図Ⅳ－6	16	20	H－2	覆土	5	石核	頁岩	5.5	11.4	5.1	340.0	
図Ⅳ－6	17	21	H－2	覆土	23	たたき石	頁岩	15.6	6.1	3.6	490.0	
図Ⅳ－6	18	21	H－2	覆土	24	扁平打製石器	玄武岩	7.9	(10.1)	2.3	250.0	
図Ⅳ－6	19	21	H－2	覆土	68	扁平打製石器	安山岩	(7.4)	(8.7)	2.3	170.0	
図Ⅳ－6	20	21	H－2	床	29	北海道式石冠	安山岩	9.3	13.8	5.3	870.0	
図Ⅳ－6	21	21	H－2	覆土	53	台石	砂岩	(12.4)	(5.7)	4.1	270.0	
図Ⅳ－6	22	21	H－2	覆土	8	砥石	砂岩	(5.8)	(18.5)	6.4	860.0	
図Ⅳ－9	3	21	H－3	覆土	3	スクレイパー	頁岩	(3.0)	3.1	0.9	7.4	
図Ⅳ－9	4	21	H－3	覆土	42－6	フレイク	頁岩	6.8	5.1	1.3	37.4	5点
	4－1		H－3	覆土	42－1	スクレイパー						1点
図Ⅳ－9	5	21	H－3	覆土	42－6	フレイク	頁岩	9.3	7.1	2.5	106.0	8点
	5－1		H－3	覆土	42－2	スクレイパー						1点
図Ⅳ－9	6	22	H－3	覆土	42－4	Rフレイク	頁岩	(6.9)	(4.3)	1.2	30.2	
図Ⅳ－9	7	22	H－3	覆土	45	Rフレイク	頁岩	8.2	8.0	2.2	140.0	
図Ⅳ－10	8	22	H－3	覆土	50	Rフレイク	頁岩	(5.2)	3.7	1.0	13.4	
図Ⅳ－10	9	22	H－3	覆土	42－6	フレイク	頁岩	(7.4)	6.7	2.3	82.5	5点
	9－1		H－3	覆土	42－5	Rフレイク						1点
図Ⅳ－10	10	22	H－3	覆土	4－4	フレイク	頁岩					1点
			H－3	覆土	42－6	フレイク						39点
			E19	Ⅳ	13	フレイク						1点
図Ⅳ－10	11	22	H－3	覆土	5	石核	頁岩	3.7	(5.3)	2.1	38.9	

表Ⅳ－5　遺構出土掲載石器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構／（発掘区）	層位	遺物番号	遺物名	石材	大きさ（cm）			重量（g）	備考
								長さ	幅	厚さ		
図Ⅳ－10	12	22	H－3	覆土	29	たたき石	砂岩	10.7	6.9	4.5	460.0	
図Ⅳ－10	13	22	H－3	覆土	24	たたき石	砂岩	12.4	7.4	5.3	628.0	
図Ⅳ－10	14	22	H－3	覆土	23	扁平打製石器	安山岩	8.1	14.3	4.0	602.0	
図Ⅳ－11	15	22	H－3	床	43	台石	安山岩	31.2	14.0	19.7	12420.0	
図Ⅳ－11	16	22	H－3	撹乱	72	台石	安山岩	(29.0)	15.0	12.2	7110.0	
図Ⅳ－17	3	23	P－1	覆土	4	台石	安山岩	37.3	19.8	7.7	9600.0	
図Ⅳ－17	4	23	P－3	覆土	3	スクレイパー	頁岩	10.6	6.2	2.1	80.8	
図Ⅳ－17	6	23	P－5	覆土	1	スクレイパー	頁岩	10.6	3.7	1.7	52.6	
図Ⅳ－17	8	23	P－7	覆土	3	たたき石	砂岩	9.2	5.4	3.7	210.0	
図Ⅳ－18	10	23	P－10	覆土	1	石鏃	頁岩	3.5	1.4	0.4	1.7	アスファルト
図Ⅳ－18	11	23	P－11	覆土	1	Rフレイク	頁岩	3.2	6.6	1.7	18.0	
図Ⅳ－18	12	23	P－14	覆土	1	スクレイパー	頁岩	6.7	4.9	1.3	22.9	光沢
図Ⅳ－18	13	23	P－14	覆土	2	石核	頁岩	8.9	7.7	4.0	240.0	
図Ⅳ－18	15	23	P－16	覆土	7	スクレイパー	頁岩	7.0	4.9	1.6	51.8	
図Ⅳ－18	16	23	P－16	坑底	1	扁平打製石器	安山岩	9.1	13.8	3.7	580.0	
図Ⅳ－18	19	24	P－19	覆土	2	たたき石	砂岩	10.1	6.7	5.3	450.0	
図Ⅳ－34	10	26	遺物集中－8	Ⅳ	3	スクレイパー	頁岩	8.5	3.3	0.9	18.7	
図Ⅳ－34	2	26	FC－1	Ⅲ～Ⅳ	2	石鏃	頁岩	(1.9)	1.3	0.4	0.7	アスファルト
図Ⅳ－34	1	26	S－1	Ⅲ	2	両面調整石器	頁岩	4.5	2.6	1.3	15.6	
図Ⅳ－34	2	26	S－1	Ⅲ	5	石核	頁岩	3.2	(5.3)	4.1	59.8	

Ⅴ　包含層の出土遺物

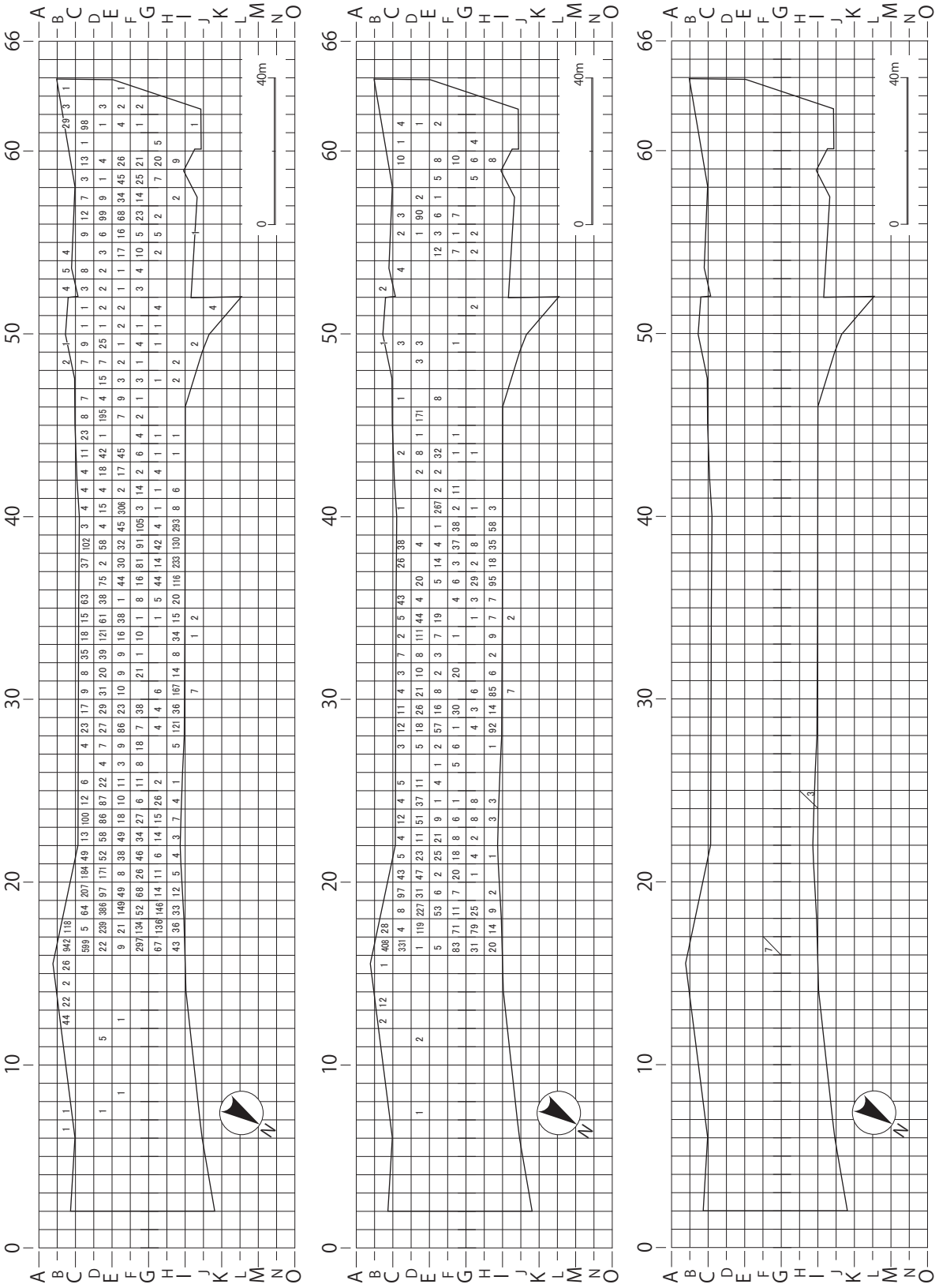
1　包含層の遺物出土状況

包含層の出土遺物総点数は9,803点で、内訳は土器4,034点、剥片石器類2,521点、礫・礫石器類3,248点である（表Ⅴ－１・２）。発掘区別の出土点数分布図を図Ⅴ－１～10に示した。全体的な傾向として、C17区周辺やE40区に300点を超えるような出土量があり、大きく２つの集中域を認識することができる。

土器の出土状況は、上記集中域の他にもH28区、D33区、H36区、D45区、D56区に100点前後の出土量があった。その内、まとまって出土した個体土器に関しては図Ⅴ－11に出土状況を図示した。内容を見るとⅢ群a類（1,813点、44.9％）とⅣ群a類（2,196点、54.4％）が主体的であり、おおむね前者が遺跡の東部と西部、後者が中央にまとまって出土する傾向がみられた。またその他の時期の土器はいずれも少数しか出土しておらず、Ⅱ群b類を除き調査区の東部の20ライン付近に分布している。

剥片石器類の出土状況はC20区周辺やH39区に100点を超えるような出土量があり、上記の全体の集中域からややずれる傾向が見受けられた。器種ごとの特徴をみると、石鏃、石槍、スクレイパー、Rフレイクは調査区全体から散漫に出土している。両面調整石器、石錐、つまみ付ナイフ、Uフレイクは調査区の中央部と東部に散漫に分布している。またピエスエスキーユ、箆状石器は調査区の東部に少量分布する。石材別にみると頁岩が圧倒的に多く利用されている（2,435点、96.6％）。次いで凝灰岩（38点、1.5％）、チャート（19点、0.8％）、片岩（13点、0.5％）の順となり、それ以外の砂岩、安山岩、珪化岩、泥岩、黒曜石、片麻岩は５点以下0.5％未満となる（表Ⅴ－２）。これらの中で頁岩以外のトゥール類として、凝灰岩製の石鏃および両面調整石器、黒曜石製の石槍が１点ずつ出土している。

礫石器・礫の出土状況は土器と剥片石器の特徴を併せ持つ傾向がある。すなわちB16区周辺とH38区に100点を超える出土量がある。この内、B16区は435点出土しており、他から群を抜く存在である。器種ごとの特徴をみると、石斧は調査区の中央部と西部に散漫に分布している。台石は調査区の東部と中央部から散漫に分布するが、特にF37区から多く出土している。たたき石、すり石、砥石、加工痕のある礫は調査区全体から散漫に出土している。くぼみ石、扁平打製石器、北海道式石冠はⅢ群a類の土器分布と重なる様に調査区東部に偏って出土している。石材別にみると頁岩が主体的であるものの半数を占めるに至っていない（1,419点、43.7％）。次いで砂岩（571点、17.6％）、凝灰岩（536点、16.5％）、安山岩（409点、12.6％）、チャート（270点、8.3％）の順となっている（表Ⅴ－２）。それ以外の石材は30点、0.8％以下の出土である。これらの中で頁岩以外の４つの石材にトゥール類との結びつきが認められる。すなわち凝灰岩と台石（62点）、砂岩とたたき石（14点）および台石（17点）、安山岩とすり石系石器（すり石53点、扁平打製石器17点、北海道式石冠２点）および台石（21点）、緑色凝灰岩と石斧（４点）、片岩と石のみ（１点）である。　（直江）

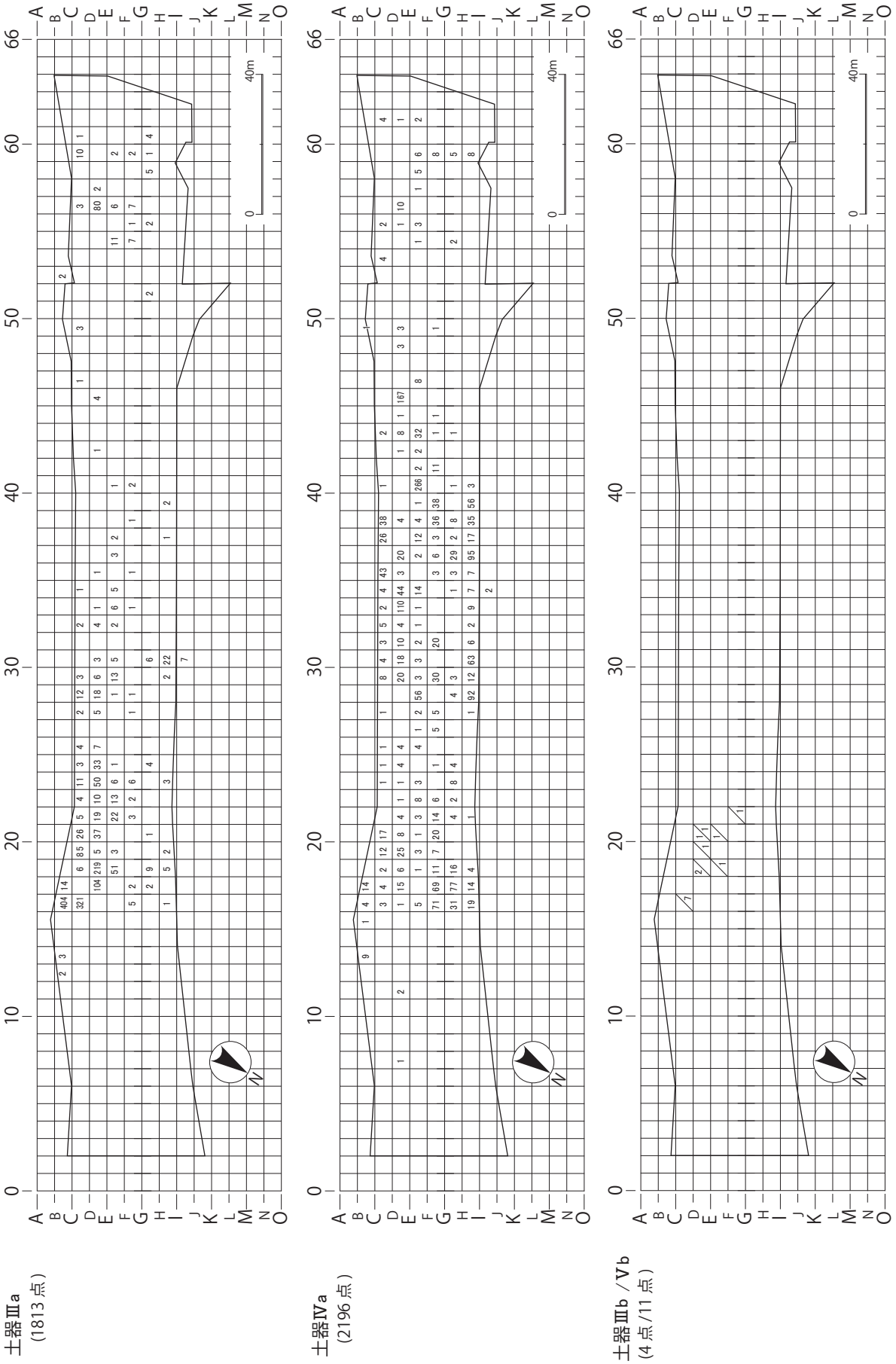


全遺物
(9803 点)

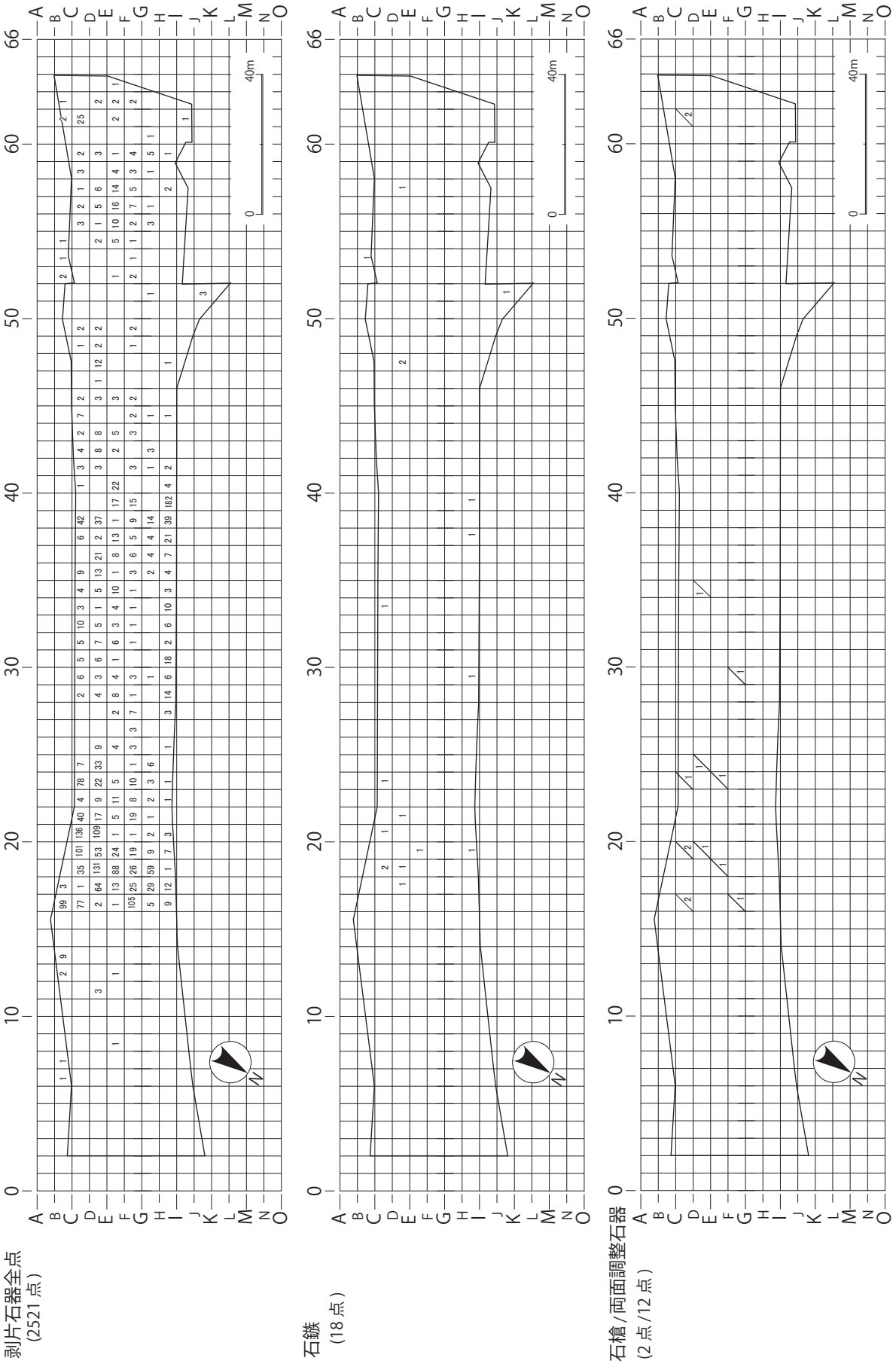
土器全点
(4034 点)

土器Ⅰb／Ⅱb
(7 点／3 点)

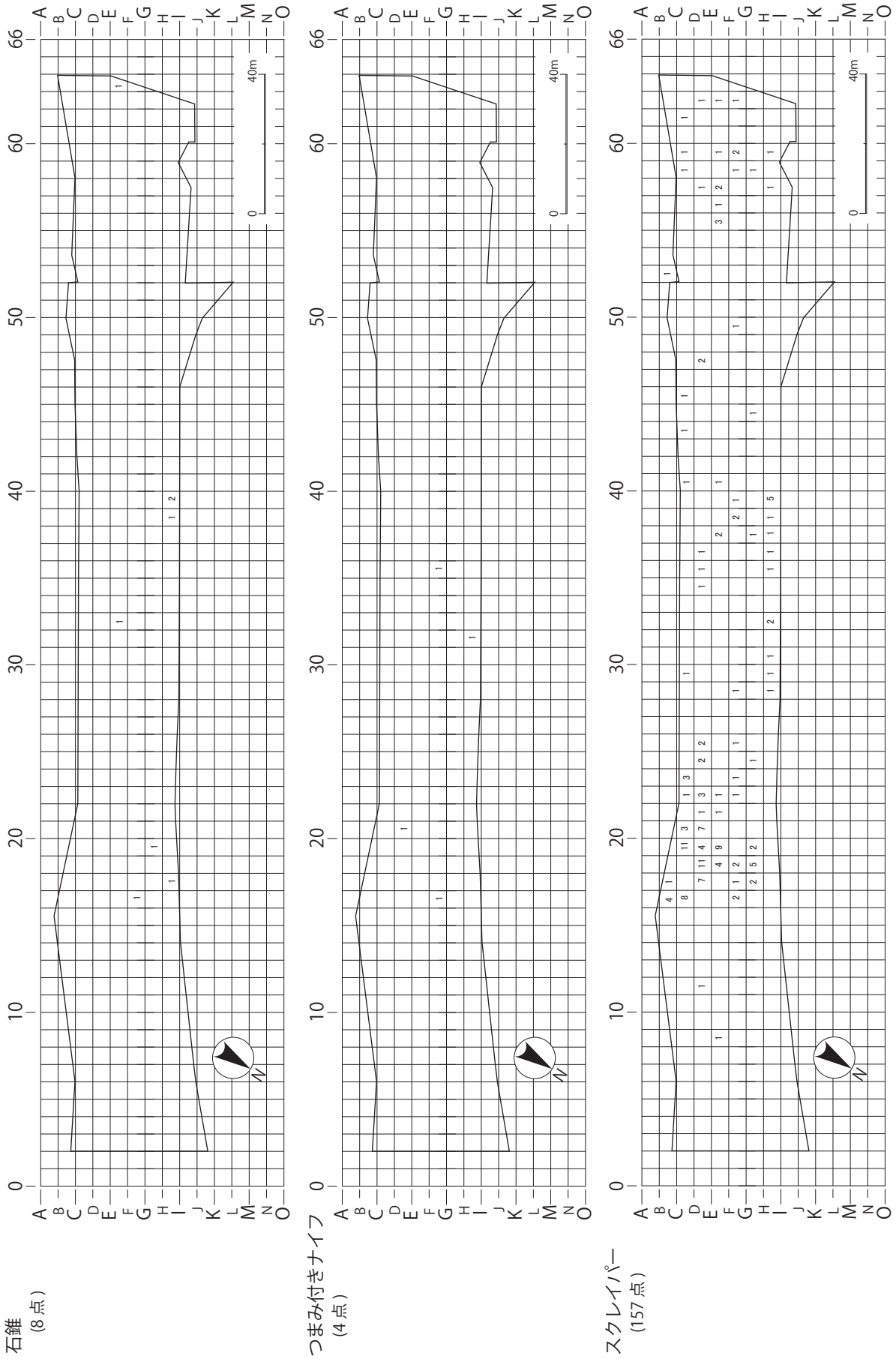
図Ⅴ－1　発掘区別遺物出土分布図（1）



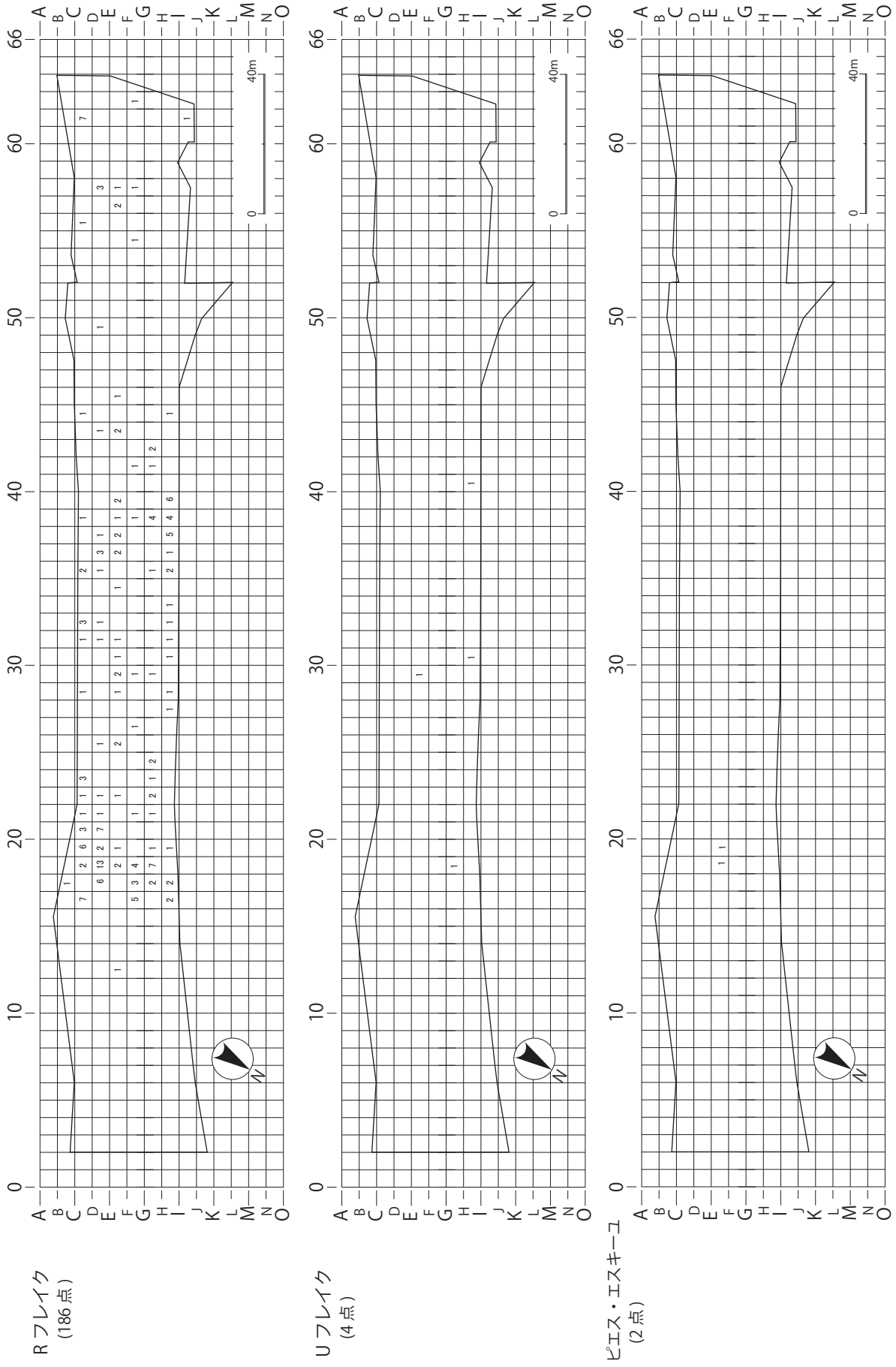
図Ⅴ－2　発掘区別遺物出土分布図（2）



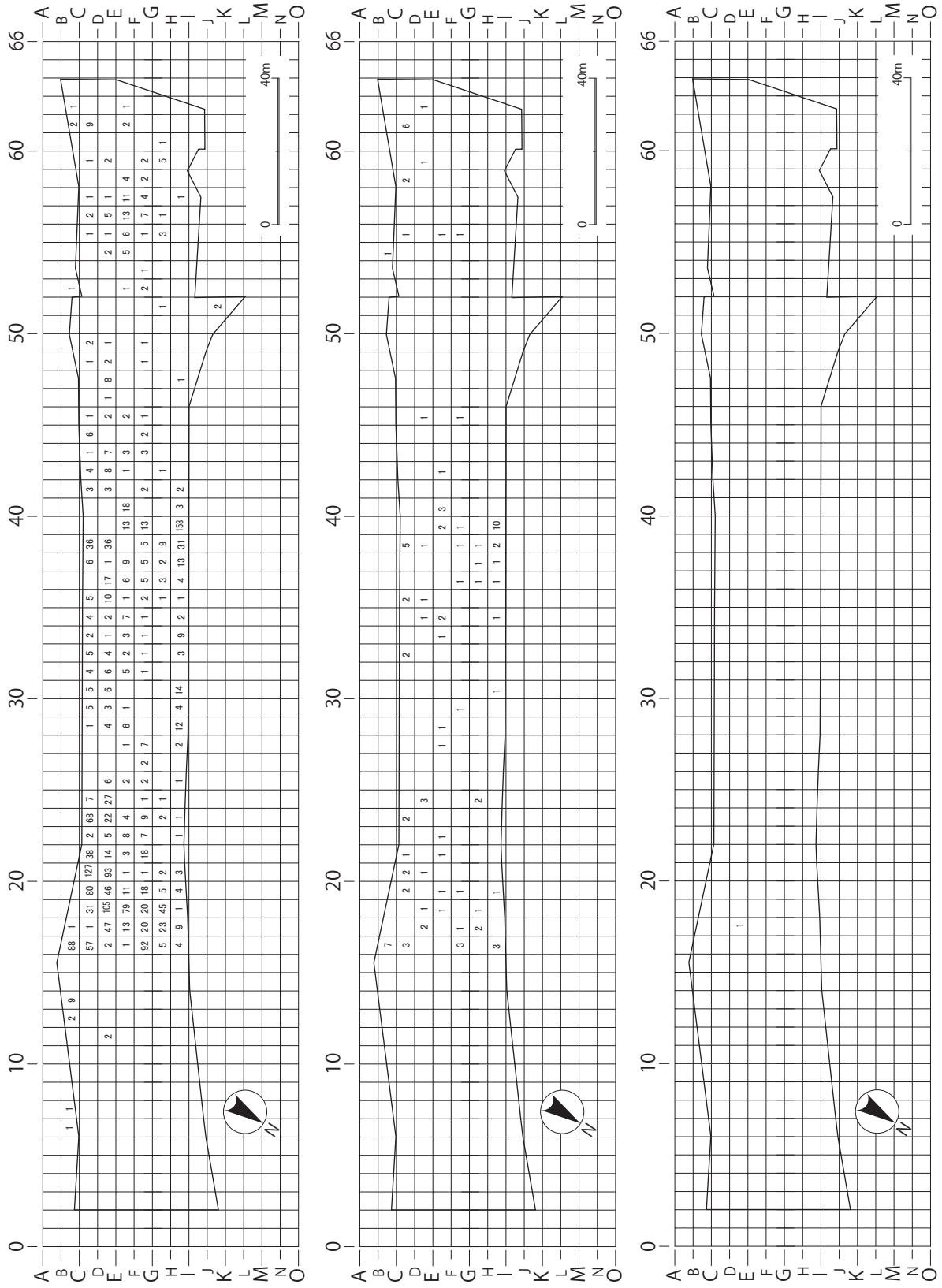
図Ⅴ－３　発掘区別遺物出土分布図（３）



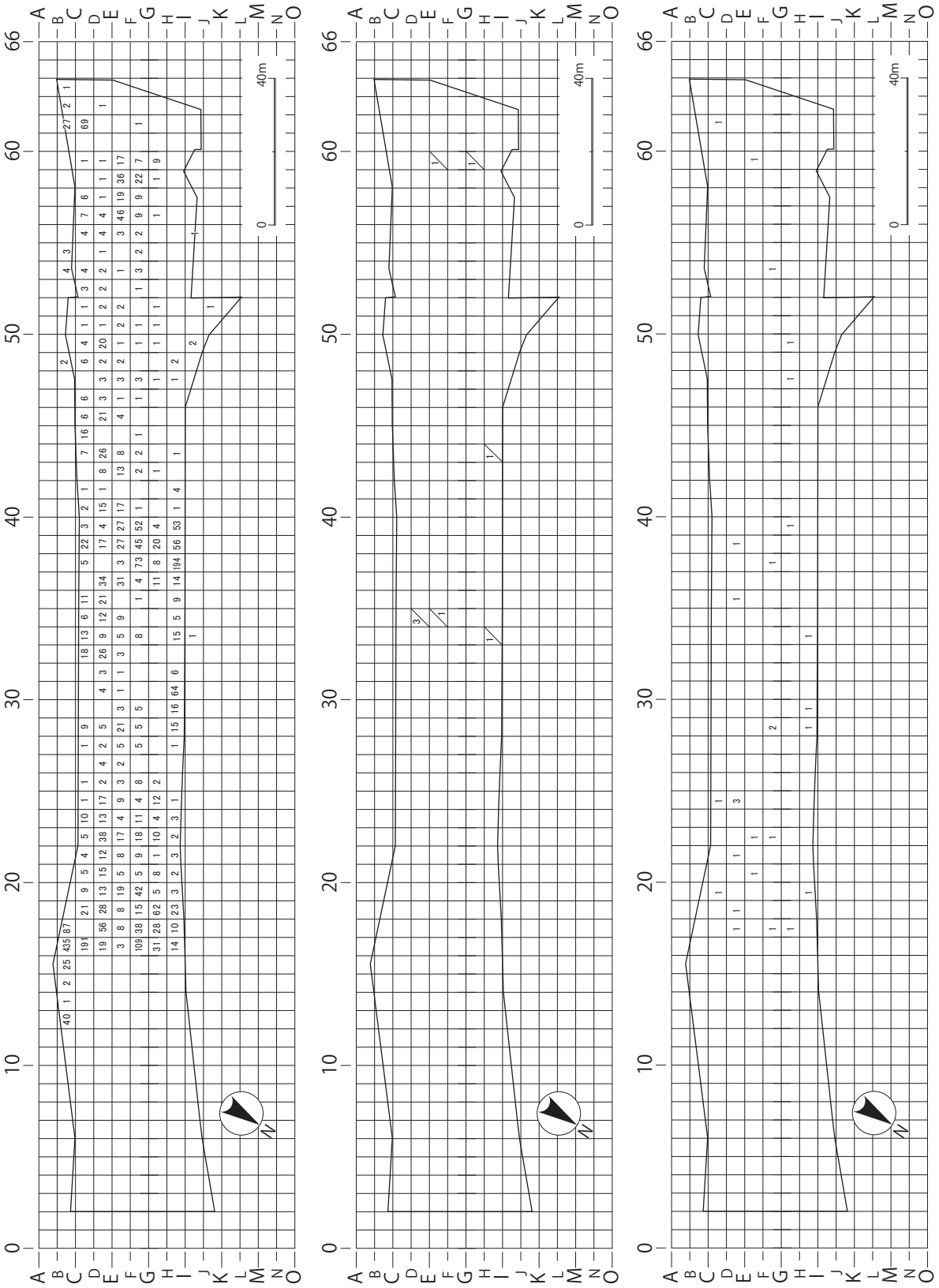
図Ⅴ－4　発掘区別遺物出土分布図（4）



図Ⅴ－5　発掘区別遺物出土分布図（5）



図Ⅴ－６　発掘区別遺物出土分布図（６）

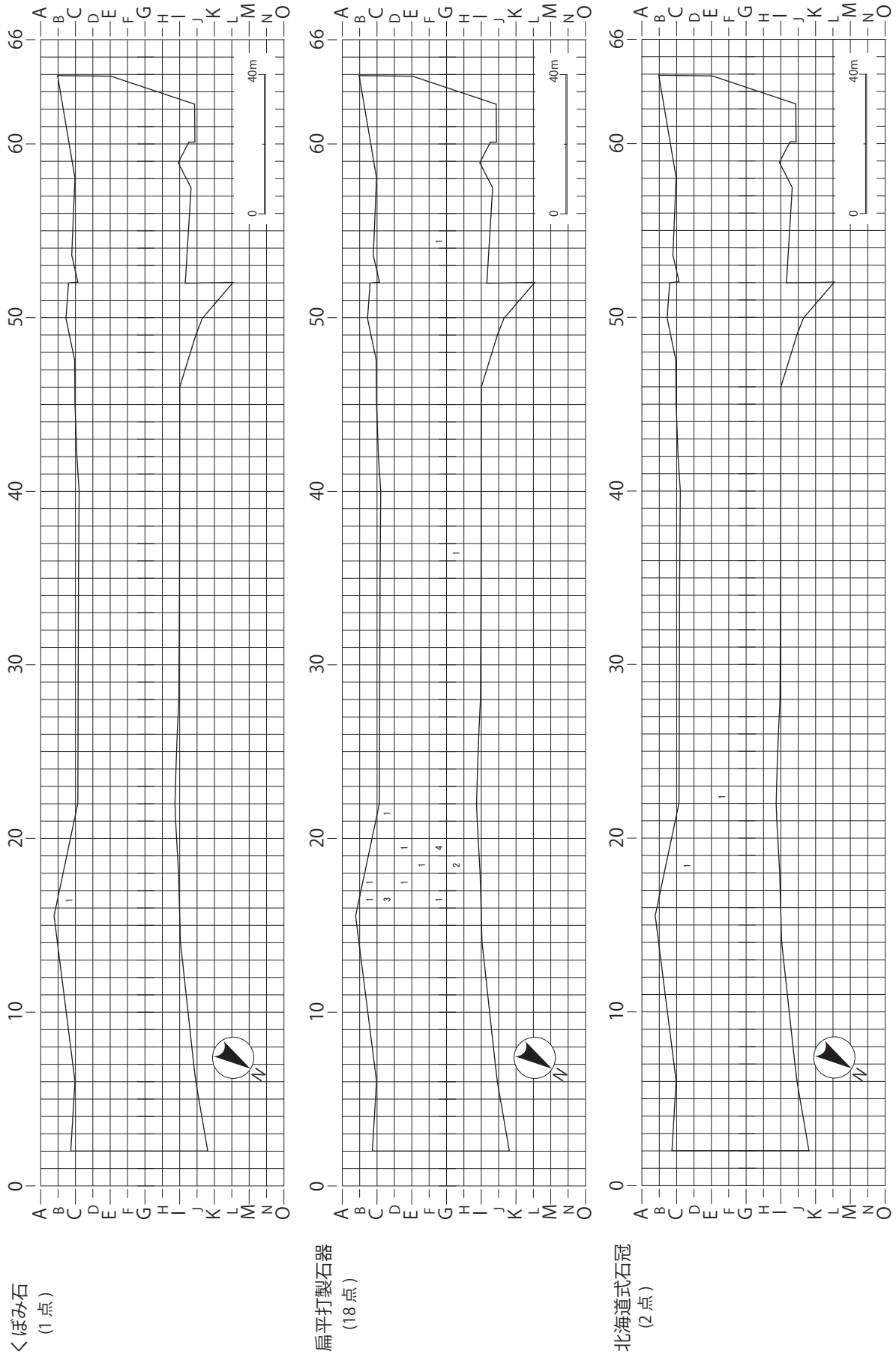


全礫石器
(3248点)

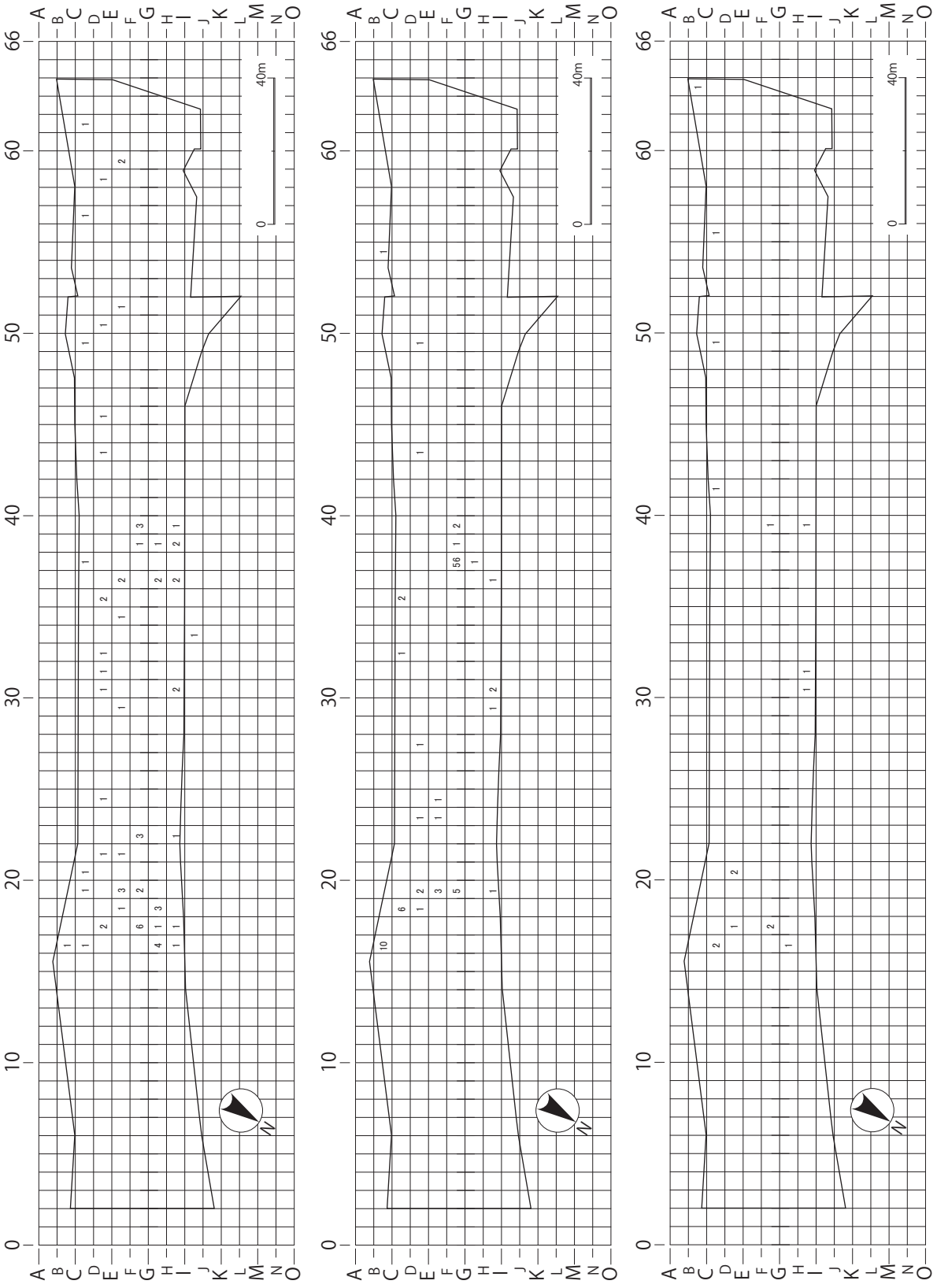
石斧 / 石のみ
(7点/1点)

たたき石
(28点)

図Ⅴ－7　発掘区別遺物出土分布図（7）



図Ⅴ－8　発掘区別遺物出土分布図（8）

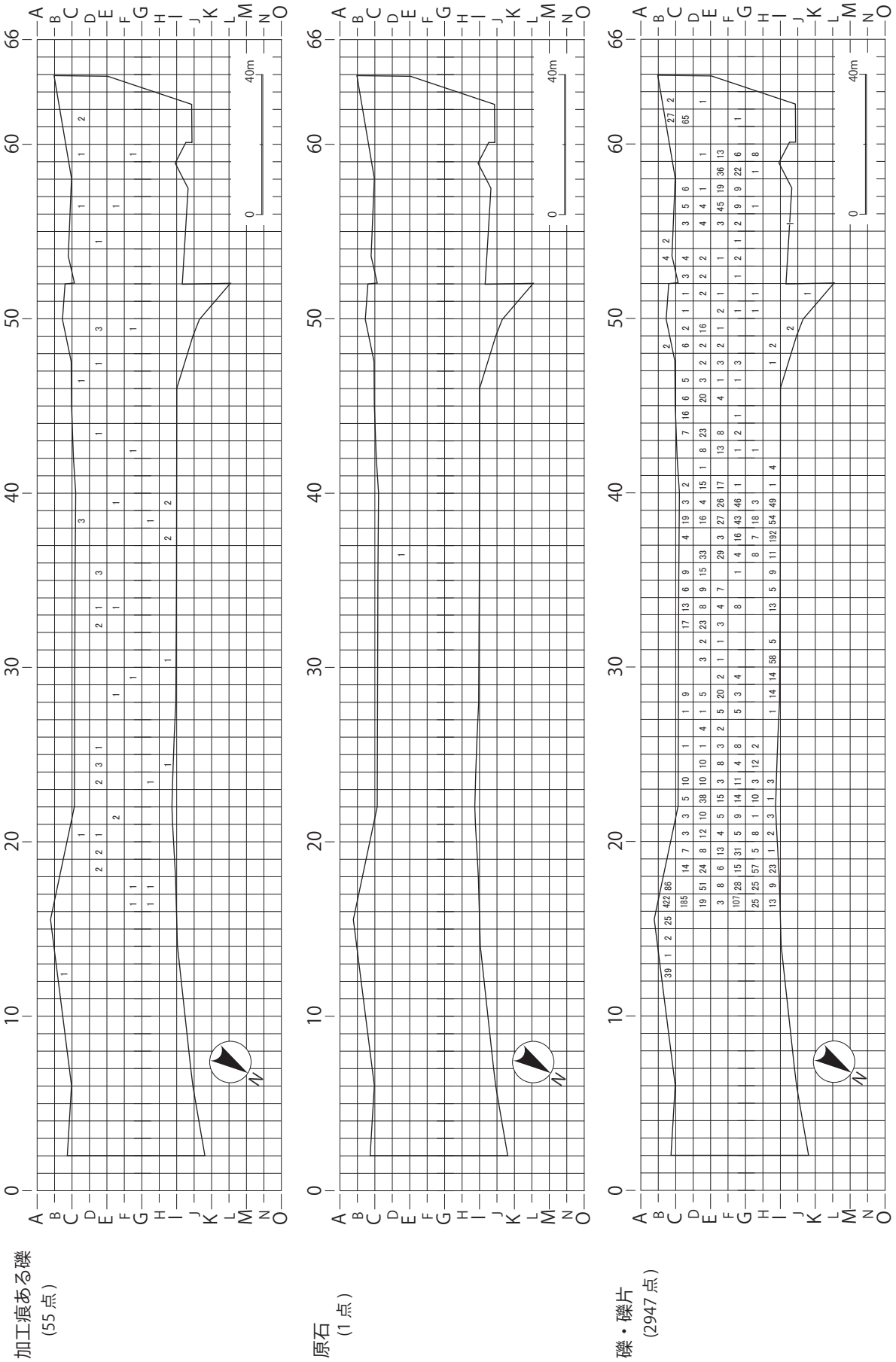


すり石 (70点)

台石 (102点)

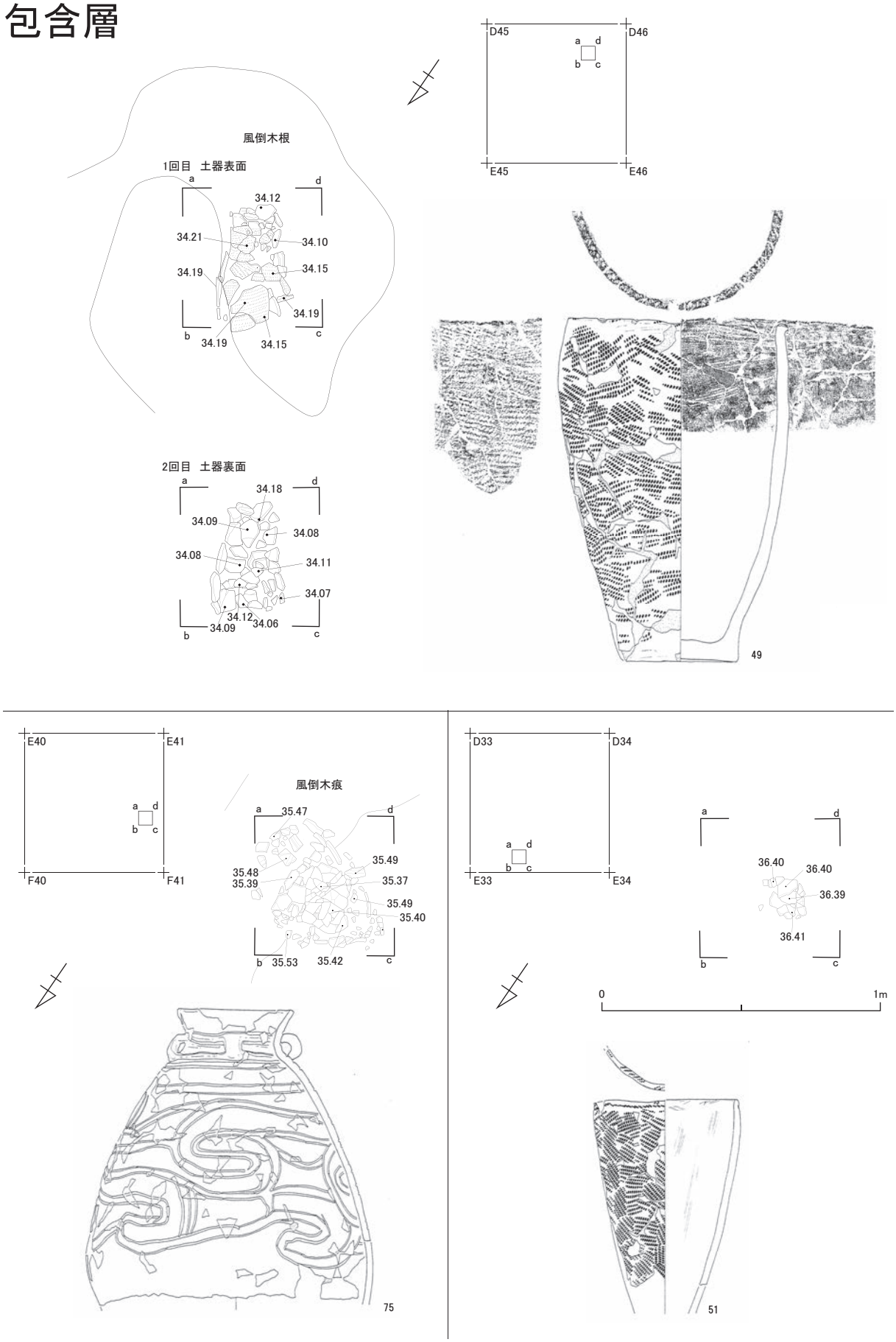
砥石 (16点)

図Ⅴ－９　発掘区別遺物出土分布図（９）



図Ⅴ－10　発掘区別遺物出土分布図（10）

包含層



図Ⅴ－11　包含層遺物出土状況

2　土器

縄文時代早期後半の土器（Ⅰ群b類、図Ⅴ－12－１、図版26、表Ⅴ－３）

１は東釧路Ⅲ式。胴部にLの縄による短い縄線文が５～10㎜程度の単位で「く」の字状に施されている。

縄文時代前期後半の土器（Ⅱ群b類、図Ⅴ－12－２、図版26、表Ⅴ－３）

２は円筒土器下層式。多軸絡条体による圧痕が縦方向に施文されている。胎土に繊維を多く含み表面がやや磨滅している。

縄文時代中期前半の土器（Ⅲ群a類、図Ⅴ－12－３～図Ⅴ－14－34、図版26～28、表Ⅴ－３）

３は円筒土器上層a式。幅10㎜・厚さ６㎜程度の厚手の粘土紐が胴部と口頸部文様帯を区画するように貼り付けられている。粘土紐上には撚糸による細い縦位の刻みが施されている。また粘土紐の直上の口頸部文様帯には粘土紐上と同様の３本組の撚糸による横位の圧痕と短い縦位の圧痕が施文されている。

４～13は円筒土器上層b式で、無文地の口頸部に粘土紐の貼付と馬蹄形圧痕文や半截竹管文などが施されている。基本的に粘土紐上には撚糸の圧痕がみられる。口縁部は山形の突起となっており、頂部の縁辺が内湾するもの（４・８・12・13）も一部に含まれる。４は粘土紐を貼り付け後、３本一組の撚糸の圧痕が施されている。５～９は馬蹄形圧痕が施されるものである。５は山形突起の下位に瘤状の貼付があり、３本一組の撚糸の圧痕も施されている。６は復元土器で、小型の深鉢形土器である。底部は張り出し、胴部中央が湾曲し、頸部が大きくくびれて口縁部が開く、４つの山形突起を持つ器形である。文様帯の構成は、山形突起から縦方向の２本の粘土紐が凹レンズ状に湾曲して貼り付けられ、それが胴部との区画として横環する粘土紐の上段部となっている。粘土紐上にはLとRの撚糸による「ハ」の字状の圧痕が紐に沿って施文されている。馬蹄形圧痕文は右側を開口部として口唇から３列施文され、それとは別に垂下する粘土紐内は下方向に開口する圧痕となっている。地文は結束羽状縄文である。７は山形突起の頂部に鋸歯状の粘土紐、それ以外は撚糸の圧痕が施文されている。８は山形突起の頂部に２列の鋸歯状の粘土紐によって斜格子文が組まれ、その下位には向きの異なる弧状の粘土紐が交互に付されている。９は口唇部に撚糸の圧痕が施されている。10～12は口頸部文様帯に半截竹管状工具端部による連続刺突文が施されるものである。10・11は山形突起の頂部に２列の鋸歯状の粘土紐によって斜格子文が組まれ、突起の袖部は短い粘土紐が貼り付けられている。口頸部文様帯は向きの異なる弧状の粘土紐が交互に付され上下で凸レンズ状を呈する。刺突文は５㎜前後で湾曲が大きい。12の刺突文は８㎜前後とやや大きく湾曲が小さい。13は山形突起が大型で、袖部分に鋸歯状の粘土紐が付されている。

14～22はサイベ沢Ⅶ式。粘土紐貼付の有無により14～19は古段階相当、20～22は新段階相当にあたると考えられる。

14～19は口頸部・胴部上半までの破片および復元個体。地文の結束羽状縄文は口頸部文様帯から胴部下半まで及び、文様帯には粘土紐の貼付がみられる。口縁部は山形突起の14・17、平縁の15・19、平縁に小さな突起のつく18の三者が認められる。14は山形突起の下位に楕円形の貫通孔がある。突起の袖部は鋸歯状の粘土紐が施されている。15は口唇部に２列の鋸歯状の粘土紐による斜格子文が組まれている。胴部の粘土紐上には撚糸文が施されている。16は胴部中央付近に横環する２列の粘土紐が

付されその後、貼付上も含め地文が施されている。17は復元土器で、深鉢形土器である。胴部中央が僅かに湾曲し、頸部がくびれて口縁部が開く、４つの山形突起を持つ器形である。胎土に小礫を多く含む。山形突起の下位に貫通孔があり、その下位には垂下する２本の粘土紐が付されている。口頸部文様帯は弧線を基本とし、上下で湾曲部が向かい合う凹レンズ状を呈する。18は口唇部に鋸歯状の貼付があり、口頸部文様帯は直線と２本一組の弧状の粘土紐によって装飾されている。19は口唇部の下位に粘土紐による隆帯があり、その間に上下からの鋸歯状の貼付がなされている。口頸部文様帯は３本一組の直線と弧状の粘土紐の貼付がみられる。

20～22は口縁部・胴部の破片。縄文地に沈線が施されている。口唇部には棒状工具による刻みが斜め方向に連続してみられる。20の口縁波頂部は尖り、縦方向の短い粘土紐が付されている。その下位には縦方向に細い沈線が施文されている。21の沈線は直線的である。22は凹レンズ状に向き合う弧状の沈線が施文されている。

23～26は回転魚骨文が施されているもの。すべてニシンタイプと思われる。23は口唇に斜め方向の棒状工具による刻みが連続して施されている。26は底径２㎝程の小型の深鉢形土器の張り出す底部である。

27～31はサイベ沢Ⅶ式新段階または見晴町式相当のもの。口唇上の連続する撚糸の圧痕または棒状工具による刻みを特徴とする。28は欠損する口縁波頂部の下位にも横方向の撚糸の圧痕が施文されている。29・30は口縁波頂部が尖り、30は突起先端に粘土紐が２条貼り付けられ、口縁部は肥厚する。31は２対の山形突起が並列してあり、貼付が施されている。突起の下位には撚糸圧痕のある粘土紐が横方向に付されている。

32～34は底部を含む資料。32・33は張り出す器形で、底面と胴部との境にナデ調整が施され無文となっている。32はRL単節の斜行縄文、33はLR単節の斜行縄文が施されている。34は胴部が細長い器形で、全面的にLR単節の縄文が横位気味に施されている。内面の上部には縦方向のヘラナデがみられる。底部の一部がやや張り出す。

縄文時代中期後半の土器（Ⅲ群ｂ類、図Ⅴ－14－35・36、図版28、表Ⅴ－３）

35・36は榎林式。波頂口縁の突起部分で、肥厚する口唇部に口縁に沿った凹線が施されているもの。いずれも波頂部の左右の凹線は繋がらず、左側の凹線がJ字状に湾曲して終息している。35は口唇部に棒状工具による短い刻みも施されている。36は斜行縄文地に細い沈線が不均一に平行して施されている。

縄文時代後期前葉の土器（Ⅳ群ａ類、図Ⅴ－14－37～図Ⅴ－17－76、図版28～30、表Ⅴ－３）

37は天祐寺式。小型の深鉢形土器で、折り返し口縁の上に２条の貼付をもち、その間に波状の粘土紐が貼り付けられている。地文と貼付帯には同一のLR単節縄文の施文方向を異にした羽状縄文が施されている。また、口唇部にはRL単節縄文が施文されている。

38～76は涌元式相当のもの。38～69が深鉢形土器ないし鉢形土器で、この内38～60は復元土器ないし口縁部片、61～64は胴部片、65～69が底部片にあたる。口縁部の様相から以下のように細分して説明する。

38～44は折り返し口縁のもので、38・39は口縁部に施文があり、40～43は口縁が無文で地文のみ施され、44が胴部上半まで無文となっている。38は口縁上端に縦方向の短い撚糸による圧痕が連続して付され、地文のRL単節縄文が折り返し部の一部にかかる。39は折り返し口縁が２段あり、上段部に

縄文、折り返しの下位に横方向の撚糸の圧痕が施文されている。41は口唇が平坦で断面が角形である。43はLR単節斜行縄文が施されている。44は口縁部内面に棒状工具による縦方向のナデ調整痕がみられる。

45～60は明瞭な折り返し口縁のないものである。

45～50は口唇部が平坦に成形されるもの。LR単節縄文による地文のみ施され、45・47は横走している。また、48・49は口唇部にもLR単節縄文が施され、一部に外側への粘土のはみ出しがみられる。49は復元土器で、胴部に最大径があり口縁部がややすぼまる深鉢形土器である。器壁は1.2cm前後と厚手で、全体的に不均一である。地文の他に不規則な縦方向の浅い沈線や波状の沈線がみられる（拓本部分に図示）。内面は胴部から底部にかけて光沢のある縦方向のヘラナデ調整がなされるが、口縁部付近は粗い横方向の調整となり、一部に輪積み痕が残存する。50は口縁部がくびれ、口唇部が薄く成形されている。

51～55は口縁部に撚糸の圧痕（52・53）ないし縄線（51・54・55）が横位に施文されるもので、51・55が１条、52・53が２条、54が３条施されている。地文は51・54・55がLR単節縄文、52がRL単節斜行縄文、53が不明瞭となっており、51・52には口唇部にも施文が及んでいる。51は復元土器で、胴部はやや湾曲し、底部に向かってすぼまる深鉢形土器である。52は地文が口縁部上端まで及んでいる。53は撚糸圧痕の下位で僅かに屈曲する器形である。55は口縁部に1.5cm程の粘土紐を廻らせ、その下位に竹管状の刺突を持つボタン状の貼付が縦位に二つなされている。地文、粘土紐、ボタン状貼付の順に施されている。口唇部の断面は角形である。

56～60は撚糸の圧痕・縄線文以外のもの。56は縦方向にRの撚糸文が広い間隔で施されている。口唇部は平坦に成形され、外側への粘土のはみ出しがみられる。57は口縁部に２条、58は３条の沈線文が施されている。59は無文で、器面にヘラナデ痕がみられる。60は無文で、口唇部に渦巻き状の厚い突起を持っている。

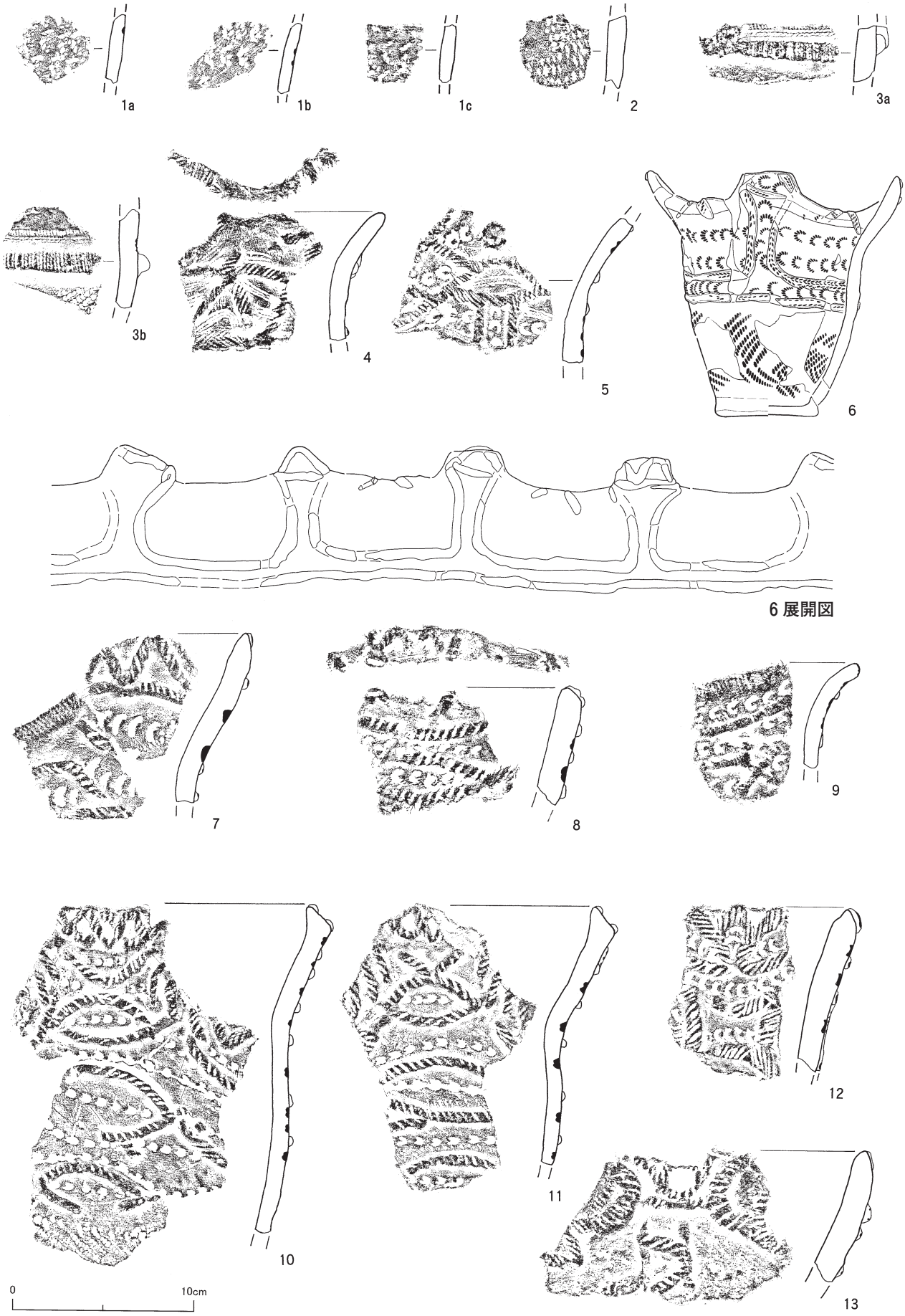
61～64は胴部片である。61は縦方向にRの撚糸文が狭い間隔で施されている。62は胴部にLR単節の縄線が横位に押捺されるもので、地文はLR単節斜行縄文である。63は２本の沈線で区画された中に刺突を持つボタン状貼付が施されている。64は横方向の浅い沈線が５本みられ、その上位に横方向のヘラ磨きの痕跡が不均一に施されている。

65～69は底部片である。地文はいずれもLR単節縄文で横位に施されている。65・68はやや上げ底となっている。

70～76は壺形土器である。いずれも無文地で、70～73は５㎜前後の太い沈線、74～76は２㎜程の２本組の沈線が施されている。青森県蛍沢Ⅰ式との関連が強いと考えられる。70は胴部の屈曲が明瞭である。内面は横方向のヘラナデ調整が丁寧になされている。74は胴部上半にあたる破片とみられ、直線的な沈線が施されている。75は頸部が大きくくびれ、胴部下半に最大径を持つ。底部側は直線的に欠落しており、意図的に切断された可能性がある。口唇部は平坦に成形され、断面角形をなしている。頸部の上下に沈線に挟まれた粘土紐による隆起帯を持ち、４つの橋状把手がそれを結んでいる。文様は把手下の横環する二組の沈線の下位にS字状ないし逆S字状に大きく湾曲する曲線が変則的に組み合わされて描かれている。また、それらをつなぐような縦位の線と横位の線が不規則にみられる。横位の線の中には３本一組で中央の線が下方に湾曲するものも含まれている。これらは沈線間の幅や文様の部分的な形や大きさに厳格な規格性がみられない。76は横方向の沈線の上部に、１㎜に満たない細い沈線で対向する弧線による凸レンズ状の文様が描かれている。

縄文時代晩期の土器（Ⅴ群b類、図Ⅴ－17－77・78、図版29、表Ⅴ－３）

77・78は大洞Ｃ２式相当の鉢形土器。77は口縁に２条の沈線を持ち、胴部にLR単節縄文が施文されている。78は頸部が発達し、口縁部が僅かに外反する形状である。口唇部には細かい刻みが連続し、口縁部に３条の沈線がみられる。胴部には非常に細かな撚りのLR単節縄文が縦方向に施文されている。（直江）

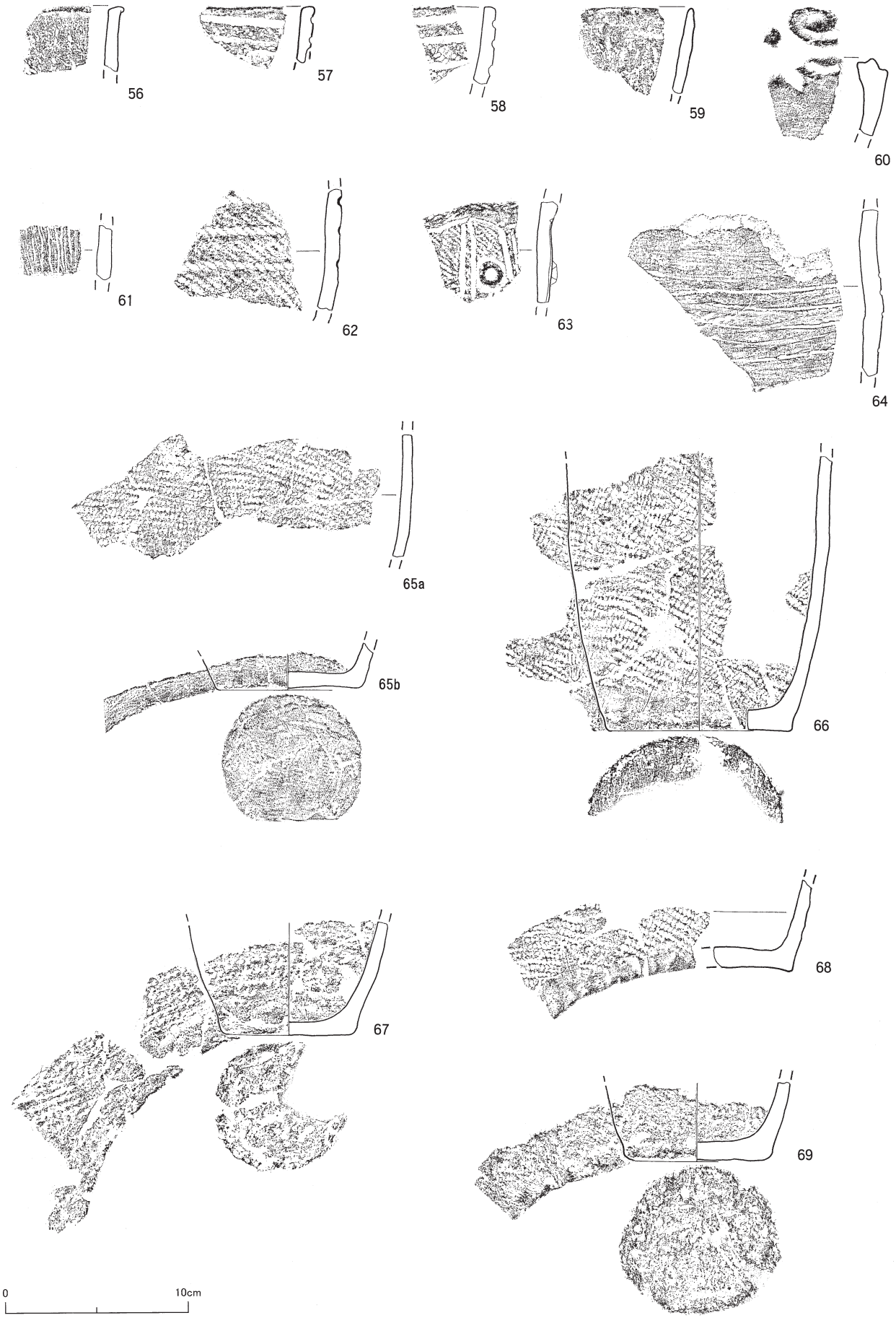


図Ⅴ－12　包含層出土の土器（1）

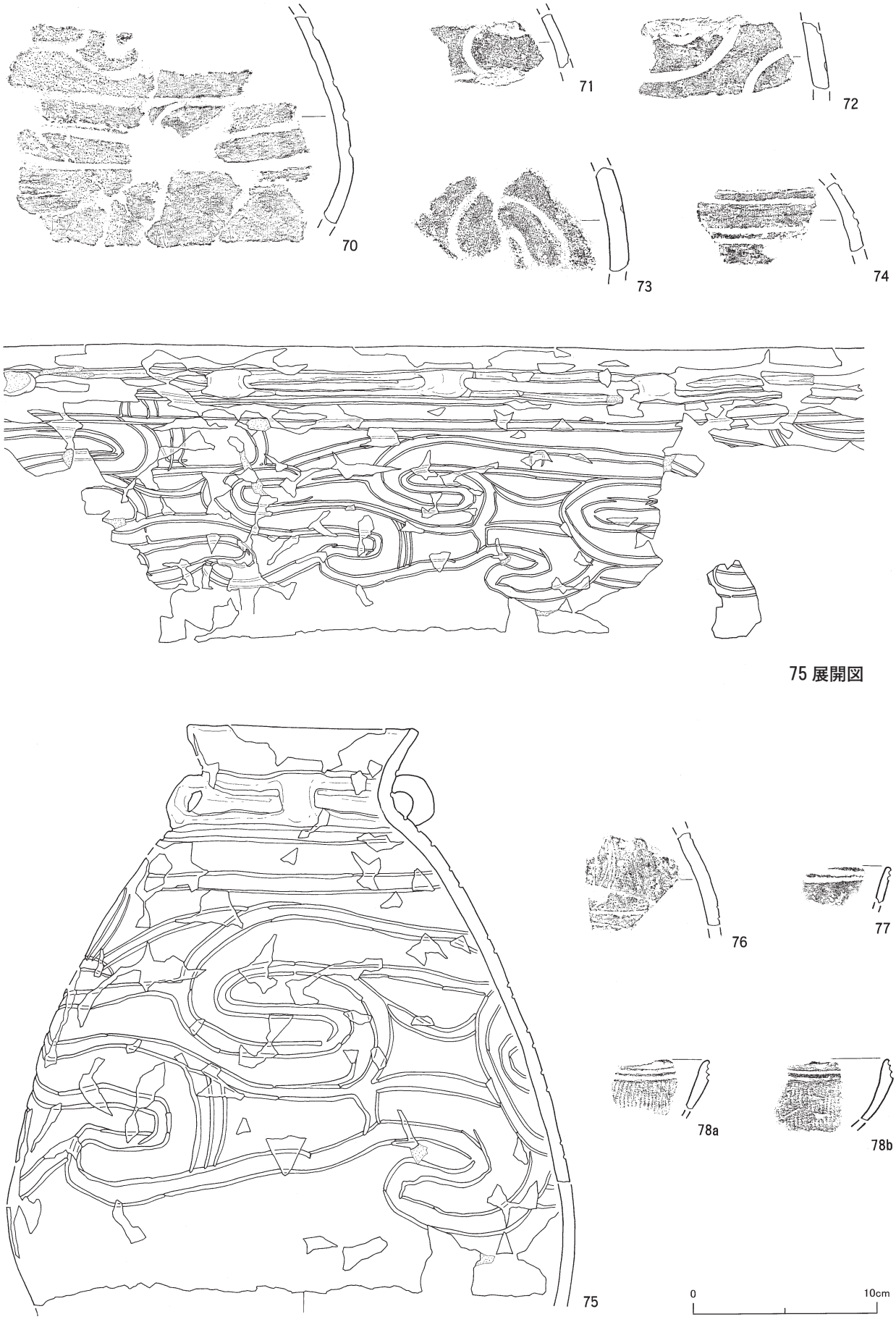
図Ⅴ－13　包含層出土の土器（2）

図Ⅴ－14　包含層出土の土器（3）

図Ⅴ－15　包含層出土の土器（4）



図Ⅴ－16　包含層出土の土器（5）



図Ⅴ－17　包含層出土の土器（6）

3　石器

石鏃（図Ⅴ－18－１～10、図版30、表Ⅴ－４）

１は柳葉形のもの。中央部下半に最大幅部を持つ。正裏面とも薄い右上がりの斜平行剥離が施されている。下端の左側縁がややノッチ状となっている。裏面に素材面が残存している。

２～９は有茎のもの。２～７は細長い形状である。２は茎部が長く、カエシが明瞭である。両側縁は直線的に成形されている。３はカエシ部分の加工がヒンジとなり、茎部付け根の厚みが除去しきれていない。４は右上がりの斜平行剥離が部分的にみられる。裏面に素材面が残存している。５は加工が短く、正裏面に素材面を大きく残す。６は左右不均一で、左側縁が僅かに湾曲する形状である。正裏面に素材面が残存する。７は凝灰岩製で、末端がヒンジとなる加工が多い。先端部の両側縁が摩耗しており、錐として機能転化された可能性がある。８・９は幅広の形状で、カエシの加工は８が明瞭、９が不明瞭で菱形を呈する。両者とも正裏面に素材面を大きく残す。

10は無茎のもの。薄手で下端がやや内湾する。加工は全面に及び一部右上がりの斜平行剥離がみられる。

３・４・５にアスファルトの付着が確認された。いずれも茎部の付け根付近の両面にみられる。

石槍・両面調整石器（図Ⅴ－18－11～14、図版30、表Ⅴ－４）

11・12は石槍。いずれもやや粗い両面加工により細長い形状となっている。11は下縁からの加工が集中的に行われ、下端が薄く整形されている。12は黒曜石製で、全体的に稜線が摩耗し、表面のガラス光沢が消失している。

13・14は両面調整石器。いずれも石槍の未成品の可能性がある。13は正面の加工が粗く、ヒンジによる凹凸が激しい。14は素材の打面と思われる下面が除去しきれずに残存している。

石錐（図Ⅴ－18－15・16、図版30、表Ⅴ－４）

いずれも剥片を素材として、錐部を中心とした部分的な錯向状の加工が施されている。15は折損した剥片の折れ面と縁辺を錐部としている。16は素材の打面側を錐部に設定している。

つまみ付ナイフ（図Ⅴ－18－17～19、図版30、表Ⅴ－４）

17・18は縦型のナイフである。17はつまみ部が両面加工で、上半部に錯向状の平坦剥離が施されている。18はつまみ部が両面加工で、正面に背面を覆う広い平坦加工が施されている。

19は幅広のナイフで、素材の末端側につまみ部が設定され、両面加工により緩やかな形状のつまみ部が作出されている。加工はつまみ部のみで、刃部側は素材の打面部も含めて残存している。

スクレイパー（図Ⅴ－19－20～図Ⅴ－21－41、図版31、表Ⅴ－４）

20～28は側縁の刃部形状が湾曲するもの。20は器体全体が円い形状を呈し、背面右側縁に集中的な加工と素材のバルブ部を除去するような平坦剥離が施されている。21は急角度な縁辺である左側縁の裏面に短い平坦加工が施されている。22は全面的に光沢のある石材で、両側縁全体への加工がみられる。23は幅広の原石面打面が残存しており、加工は左側縁の裏面に施されている。24は素材の形状を大きく変化させておらず、右側縁の背面に平坦剥離がみられる。25は両側縁の細かな加工の他に打面部除去する背面側への上からの剥離が施されている。26～28は類似する加工で、片側縁全体の背面側

への加工と下端腹面側への平坦剥離を特徴とする。

29～34は側縁の刃部形状が直線的ないし内湾するもの。29は全体的に光沢のある石材で、錯向状の剥離が施されている。30は右側縁裏面側への平坦加工がみられる。31は右側縁背面側への平坦加工により内湾する刃部形状となっている。32は素材の打面部を除去する粗い加工が右側縁上部に施され、左側縁は細かな連続する加工がみられる。33は原石面打面が残存しており、縁辺全体に腹面側への加工が施されている。34は末端まで厚みのある縦長剥片素材である。両側縁に背面側への加工が施され、末端部は粗い両面加工となっている。

35～37は下端に刃部をもつもの。35・36は両側縁が直線的で撥形の形状である。35は正面全体を覆う加工がみられる。右側縁の下部が僅かにノッチ状に加工されており、石錐として機能していた可能性もある。36は下縁の背面側に細かな加工が連続してみられる。37は素材の形状をほぼ保つもので、下端を円く成形している。

38～41は尖頭形の刃部を作出するもの。38の両側縁の加工は急角度である。39は中央部が非常に厚い素材で、右側縁背面側への平坦加工を中心に施されている。40は素材の末端と側縁の角部への細かな錯向状の加工によって刃部を作出している。また背面側の加工は打面部を含めて両側縁に連続している。41は加工が細かく、素材の形状を大きく変化させていない。

Rフレイク（図Ⅴ－21－42、図版31、表Ⅴ－４）

42は背面に原石面を大きく取り込む縦長剥片を素材としている。左側縁の中央部に鋸歯状の加工が施されている。

ピエス・エスキーユ（図Ⅴ－21－43、図版32、表Ⅴ－４）

43はうろこ状の剥片を素材としている。上下の縁辺に両面加工が施され、対向する一部の縁辺が潰れている。

石核（図Ⅴ－21－44～図Ⅴ－22－51、図版32、表Ⅴ－４）

44～46は扁平な石核で、主に石核の平坦な面で剥離を行うもの。44は薄手の石核で、主に正面上からの剥離により縦長剥片が剥離されている。また、正面の下部にはウートラパッセの痕跡がみられ、以前の石核の長さから大きく減少している可能性がある。45は正裏面への交互剥離が主体で、正面で平坦な横長剥片が剥離されている。46は主に正面で上からと横からの剥離により薄手の剥片が剥離されている。

47～51はサイコロ状・多面体の石核。47は風化の進んだ厚手の剥片を素材とし、素材腹面を作業面としている。48は上からの剥離が正・右側面で行われ、主に寸詰まりの剥片が剥離されている。49は正面と上面、左側面と裏面、下面と裏面でそれぞれ交互剥離が行われている。50は主に正・裏面で剥離が行なわれているが、大半が原石面打面となっている。正面と裏面でやや大型の剥片が剥離されている。51は正面～左側面と上面、下面と裏面で交互剥離が行われ、ヒンジとなる剥片が多く剥離されている。

箆状石器（図Ⅴ－23－52、図版32、表Ⅴ－４）

52は原石素材で、弧状の刃部である。破損しており、加工は刃部を中心にやや粗い両面加工が施されている。

石斧・石のみ（図Ⅴ－23－53～57、図版32、表Ⅴ－４）

53～56は石斧で、いずれも両刃で弧状の刃部となっている。53は側縁が湾曲する短冊形に近い形状である。54は撥形の形状で、裏面には下縁からの再加工が粗く施され、一部が階段状を呈している。55は左右の厚さが不均一で、厚みが左側面に偏っている。比較的厚手の刃部である。56は短冊形で、基部側にも刃部を持つ。

57は石のみ。細身で紡錘形に近い形状である。基部側にも刃部を持つ。

たたき石（図Ⅴ－23－58～63、図版33、表Ⅴ－４）

いずれも長軸上の端部を主体として敲打痕が認められる。58は小型のたたき石で、すぼまる下端側に敲打痕がある。59は下端の他に右側縁下部にも敲打痕がみられる。60は右側縁にも敲打痕が断続的にみられる。61の下端は敲打により破損している。62は縁辺全体に敲打痕がおよんでいる。63は両端に非常に激しい敲打痕が認められ、一部敲打により破損している。

くぼみ石（図Ⅴ－24－64、図版33、表Ⅴ－４）

正裏面とも最も厚い部位に敲打痕が確認できる。正面の敲打の範囲が広い。上端の正面側に剥離痕がみられる。

扁平打製石器（図Ⅴ－24－65～68、図版33、表Ⅴ－４）

65は中央部のみ擦り面が発達し、下面の両側は縁辺が残存している。66は上面も両面加工により縁辺化している。67は下面からの加工が僅かで、擦り面幅が2.5cm程度の厚みを持っている。68は下面からの加工が粗い。

北海道式石冠（図Ⅴ－24－69・70、図版33、表Ⅴ－４）

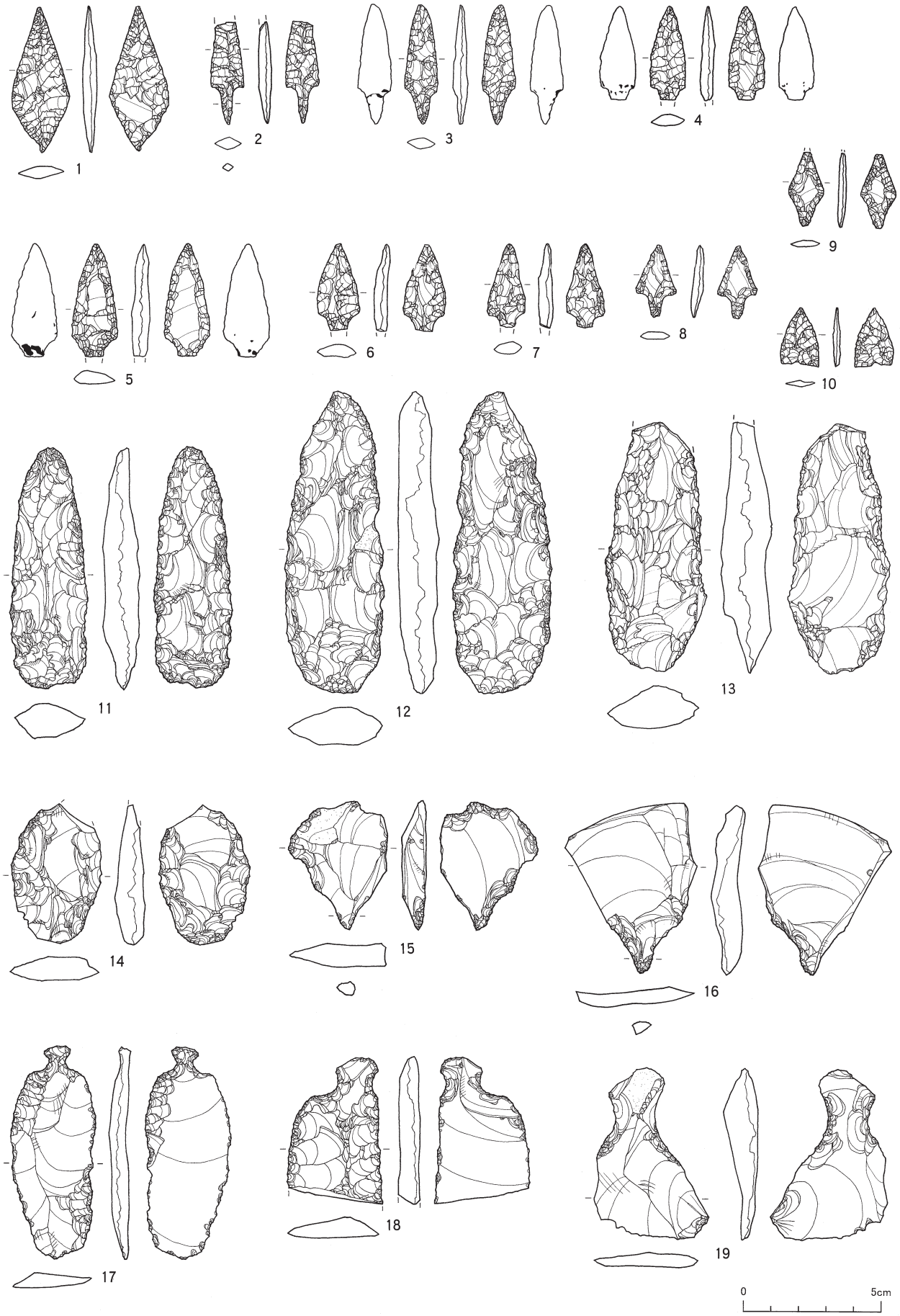
69は湾曲した底面で、下面からの加工が頻繁に行われいる。左側面の溝の敲打が弱い。70は多孔質の安山岩製で、下面は非常に平滑な擦り面である。ほぼ左右均等の溝が作り出されている。

すり石（図Ⅴ－24－71・72、図版33、表Ⅴ－４）

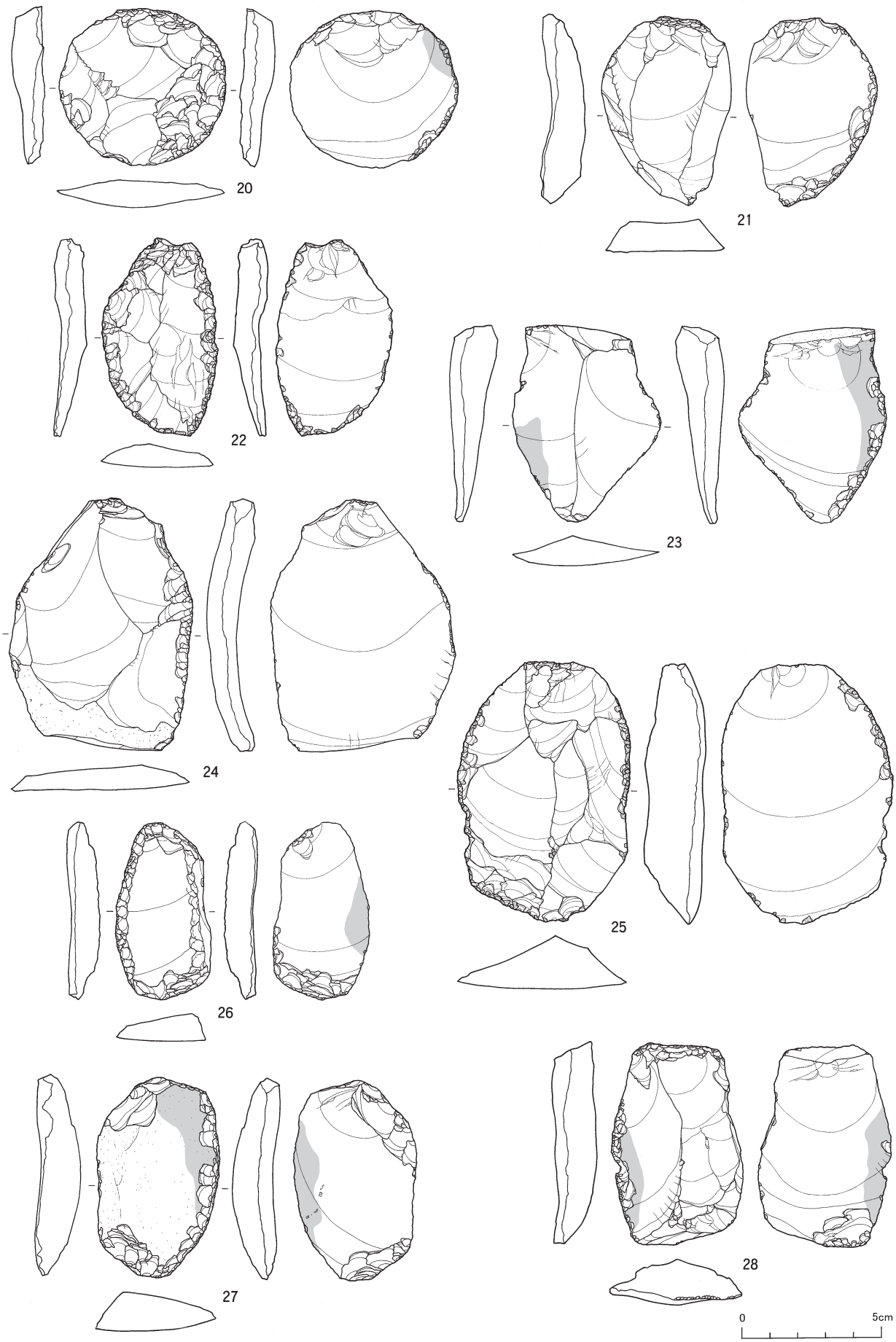
71は断面が楕円形の礫を素材とし、湾曲した面を擦り面に利用している。70は上下端部が摩耗し、滑らかとなっている。

砥石（図Ⅴ－24－73、図版33、表Ⅴ－４）

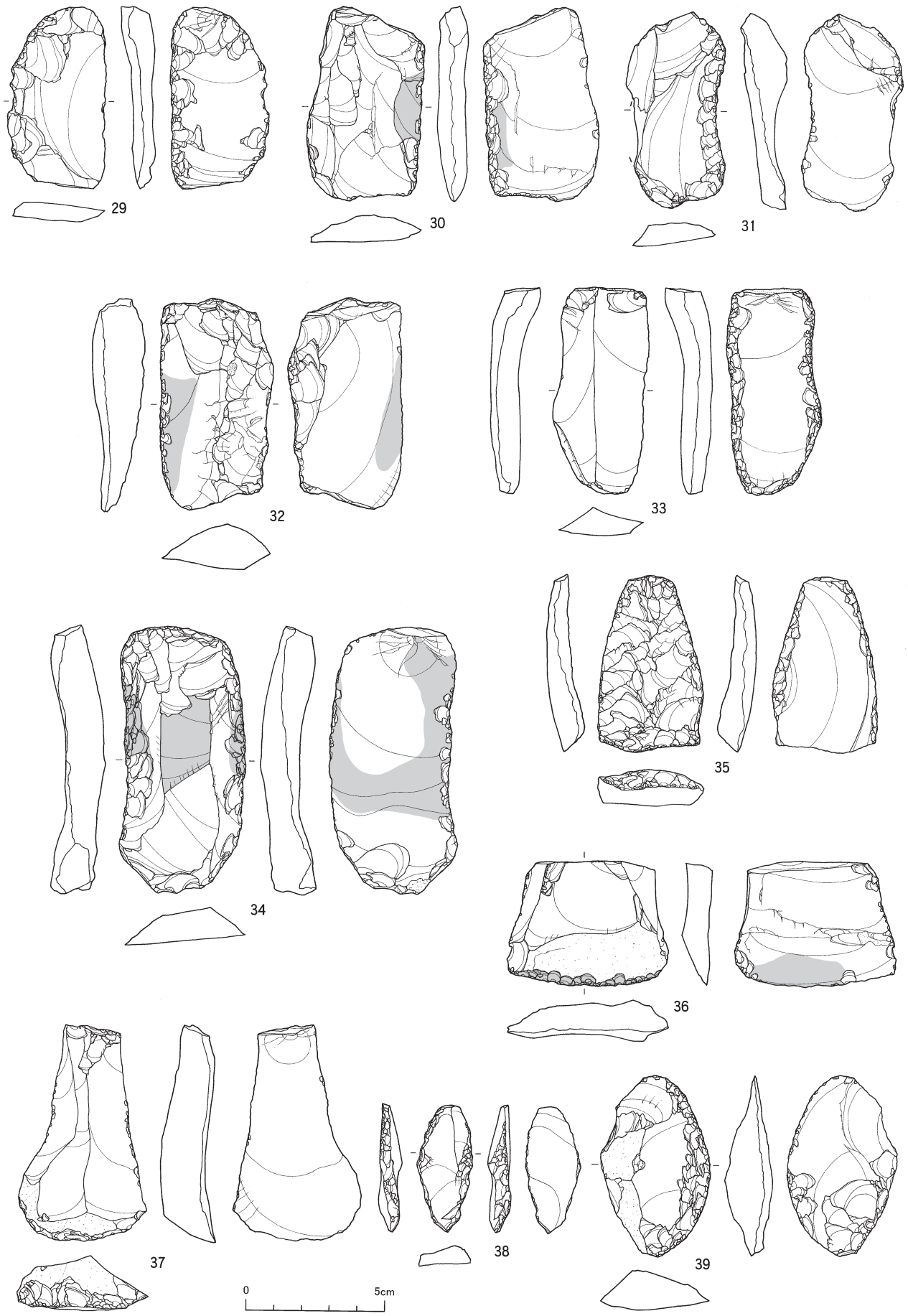
73は破損品で、部分的な残存状況であるが、両面ともに平滑な面となっている。　（直江）



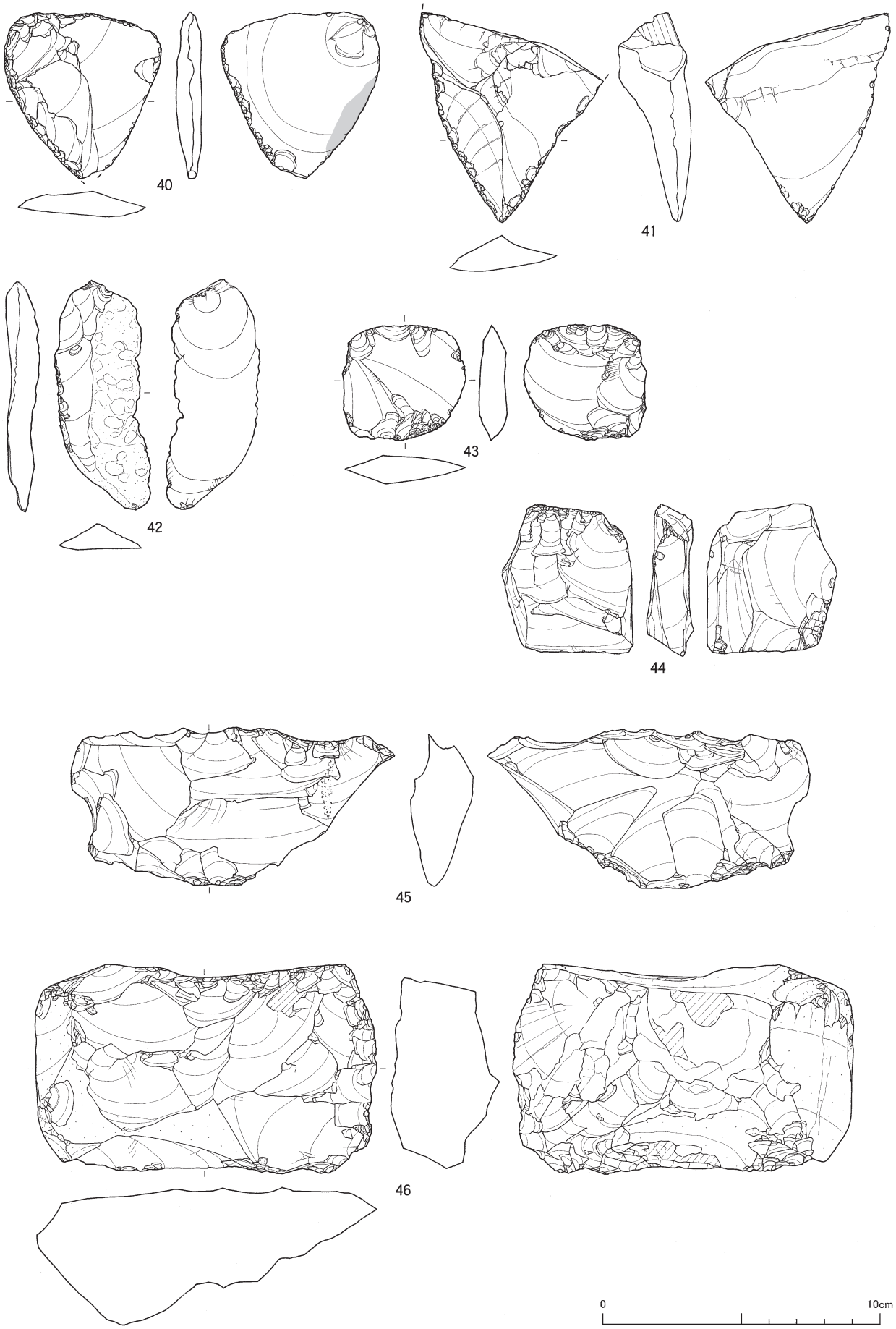
図Ⅴ－18　包含層出土の石器（1）



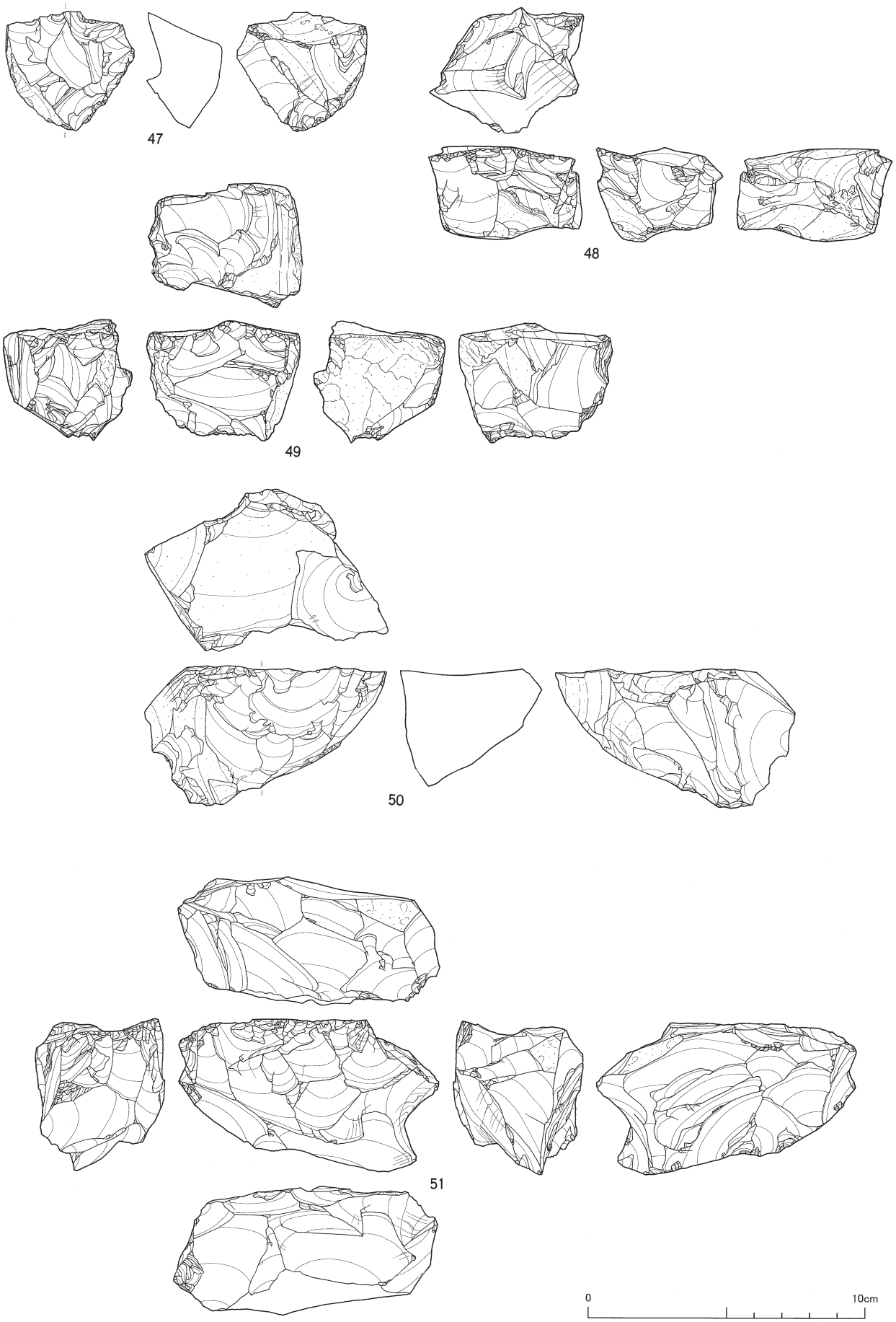
図Ⅴ－19　包含層出土の石器（2）



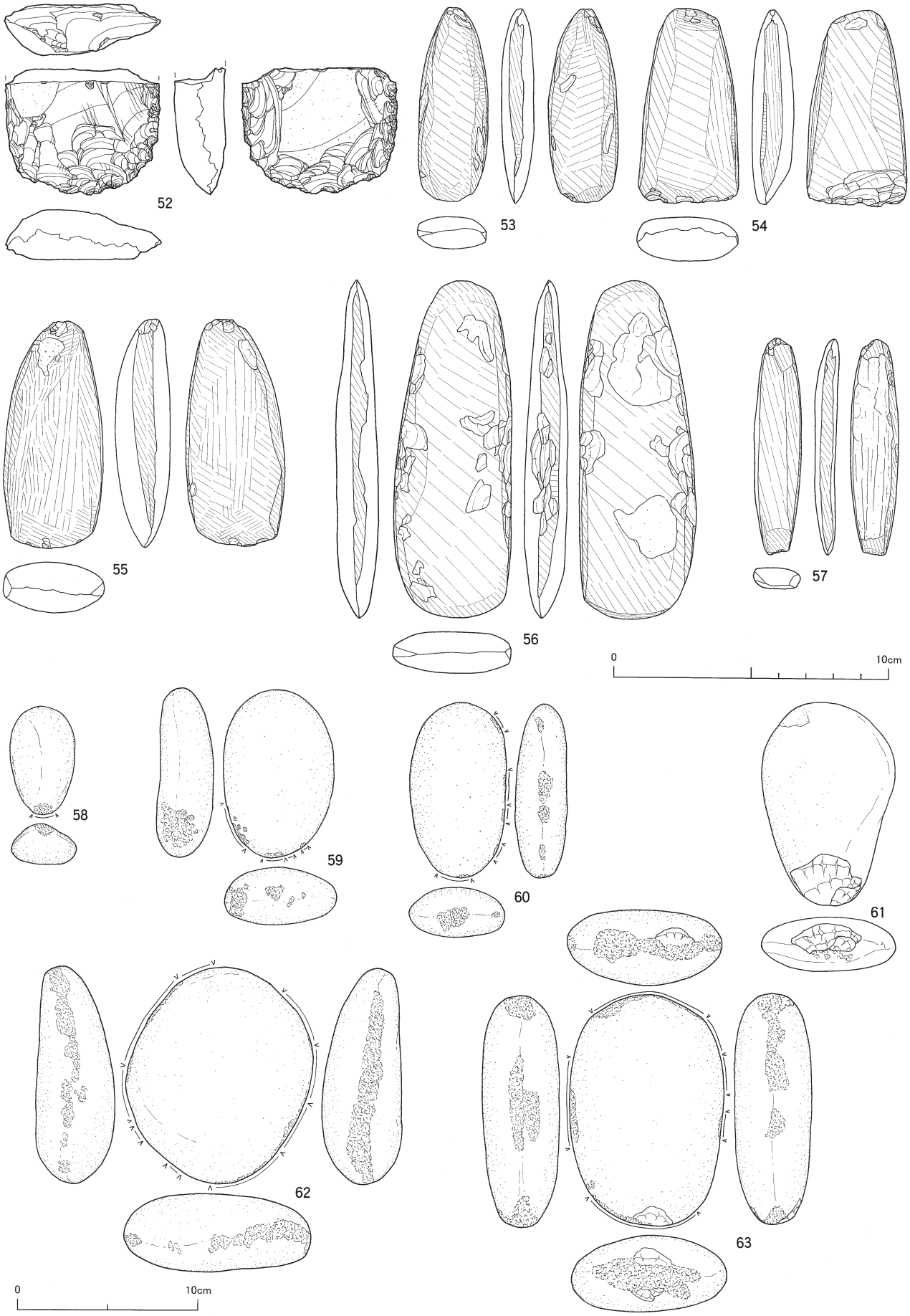
図Ⅴ－20　包含層出土の石器（3）



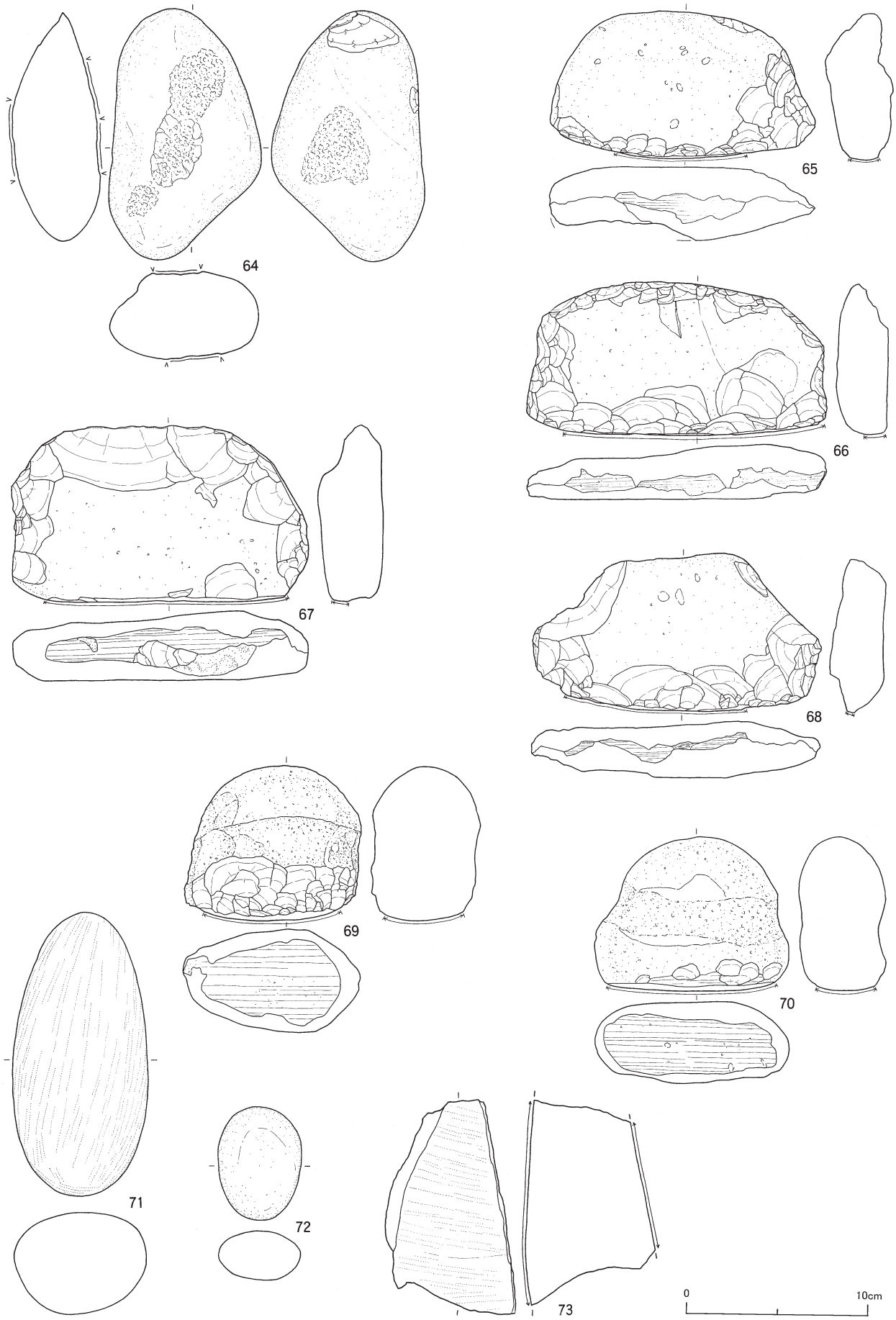
図Ⅴ－21　包含層出土の石器（4）



図Ⅴ－22　包含層出土の石器（5）



図Ⅴ－23　包含層出土の石器（6）



図Ⅴ－24　包含層出土の石器（7）

表Ⅴ－１　包含層出土遺物集計

器種／層位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	トレンチ	風倒木	木根	撹乱	総計
土器	199	17	884	2651	29		51	14	189	4034
Ⅰ群b類				7						7
Ⅱ群b類			3							3
Ⅲ群a類	48		198	1452	17		13		85	1813
Ⅲ群b類	1			3						4
Ⅳ群a類	149	17	682	1180	12		38	14	104	2196
Ⅴ群b類	1		1	9						11
剥片石器	154	2	713	1346	35		45	14	212	2521
石鏃	1		4	11					2	18
石槍			1	1						2
箆状石器				1						1
両面調整石器			3	5				1	3	12
石錐	3		3	2						8
つまみ付ナイフ	1		1	2						4
スクレイパー	14		31	94	5		3		10	157
Ｒフレイク	18		42	98	4		3		21	186
Ｕフレイク			1	3						4
ピエス・エスキーユ				1					1	2
フレイク	111	2	596	1078	24		37	12	163	2023
石核	6		31	50	2		2	1	12	104
礫石器・礫	124	1	1240	1362	87	26	43	13	352	3248
石斧			1	4	1			1		7
石のみ				1						1
たたき石	2		9	16					1	28
くぼみ石				1						1
扁平打製石器	2		4	11					1	18
北海道式石冠				1					1	2
すり石	1		28	34	1	2			4	70
台石	2		5	36					59	102
砥石	1		3	9			2		1	16
加工痕ある礫	2		15	26	1		2		9	55
原石			1							1
礫片			2	39						41
礫	114	1	1172	1184	84	24	39	12	276	2906
総計	477	20	2837	5359	151	26	139	41	753	9803

表Ⅴ－２　包含層出土石器の石材別集計

石材／器種	剥片石器													礫石器・礫														総計
	石鏃	石槍	箆状石器	両面調整石器	石錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	Ｒフレイク	Ｕフレイク	ピエス・エスキーユ	フレイク	石核	剥片石器集計	石斧	石のみ	たたき石	くぼみ石	扁平打製石器	北海道式石冠	すり石	台石	砥石	加工痕ある礫	原石	礫片	礫	礫石器・礫集計	
頁岩	17	1	1	11	8	4	157	179	4	2	1948	103	2435			5	1	1		3	2	2	37	1	34	1333	1419	3854
凝灰岩	1			1				5			30	1	38							2	62		5			467	536	574
砂岩											5		5			14				10	17	4	3			523	571	576
安山岩								1			4		5			6		17	2	53	21	10	7			293	409	414
チャート								1			18		19			2				1					7	260	270	289
片岩											13		13	2	1	1				1			3			18	26	39
礫岩																										6	6	6
緑色凝灰岩														4													4	4
珪化岩											3		3															3
ホルンフェルス																										3	3	3
泥岩											1		1													1	1	2
メノウ																										1	1	1
黒曜石		1											1															1
輝緑岩														1													1	1
片麻岩											1		1															1
その他・不明																										1	1	1
総計	18	2	1	12	8	4	157	186	4	2	2023	104	2521	7	1	28	1	18	2	70	102	16	55	1	41	2906	3248	5769

表Ⅴ－3　包含層出土掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	発掘区	層位	遺物№	点数 片	点数 計	分類	器種	部位	計測値・備考
図Ⅴ－12	1 a	26	F16	Ⅳ	5		1	Ⅰb	深鉢	胴	
図Ⅴ－12	1 b	26	F16	Ⅳ	5		1			胴	
図Ⅴ－12	1 c	26	G16	Ⅲ	1		1			胴	
図Ⅴ－12	2	26	H24	Ⅲ	1		1	Ⅱb	深鉢	胴	
図Ⅴ－12	3 a	26	D23	風倒木	4		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅴ－12	3 b	26	D23	Ⅳ	2		1			胴	
図Ⅴ－12	4	26	G18	Ⅳ	4		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－12	5	26	B16	Ⅳ	10		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅴ－12	6	26	B16	Ⅳ	10		26	Ⅲa	小型深鉢	口縁～底	口径13.2cm・底径5.3cm・器高14.0cm
図Ⅴ－12	7	26	B16	Ⅳ	8	1	2	Ⅲa	深鉢	口縁	
			B16	Ⅳ	10	1					
図Ⅴ－12	8	26	C16	Ⅳ	1		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－12	9	26	C16	Ⅳ	6		2	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－12	10	27	B16	Ⅳ	8	1	4	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
			B16	Ⅳ	10	3					
図Ⅴ－12	11	27	C16	Ⅳ	1		2	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅴ－12	12	27	D20	Ⅳ	4		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－12	13	27	B16	Ⅳ	4		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	14	27	B16	Ⅳ	4		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	15a	27	D56	Ⅳ	1		2	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	15b	27	D56	Ⅳ	1		4			口縁～胴	
図Ⅴ－13	16	27	D56	Ⅳ	1		8	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅴ－13	17	27	B16	Ⅳ	10		50	Ⅲa	深鉢	口縁～底	口径23.5cm・底径7.4cm・器高（14.5）cm
図Ⅴ－13	18a	27	B16	Ⅳ	10		5	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	18b	27	B16	Ⅳ	10		8			胴	
図Ⅴ－13	19	27	B16	Ⅳ	10		1	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅴ－13	20	27	D17	Ⅳ	3		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	21	27	D18	Ⅳ	7		3	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	22	27	D18	Ⅳ	7		1	Ⅲa	深鉢	胴	
図Ⅴ－13	23	27	C19	Ⅰ	1		1	Ⅲa	深鉢	口縁	魚骨文
図Ⅴ－13	24	27	H19	Ⅳ	2		1	Ⅲa	深鉢	胴	魚骨文
図Ⅴ－13	25	27	D18	Ⅳ	5		1	Ⅲa	深鉢	胴	魚骨文
図Ⅴ－13	26	27	B16	Ⅲ	3		1	Ⅲa	深鉢	底	魚骨文
図Ⅴ－13	27	27	D17	Ⅳ	3		2	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	28	28	B16	Ⅲ	3		1	Ⅲa	深鉢	口縁～胴	
図Ⅴ－13	29	28	D17	Ⅰ	1	2	3	Ⅲa	深鉢	口縁	
			D17	Ⅰ	2	1					
図Ⅴ－13	30	28	D17	Ⅳ	3		1	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－13	31	28	H23	Ⅲ	1		3	Ⅲa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	32	28	F56	Ⅴ	1		1	Ⅲa	深鉢	底	
図Ⅴ－14	33	28	D17	Ⅳ	7		2	Ⅲa	深鉢	胴～底	底径6.6cm・器高（6.7）cm
図Ⅴ－14	34	28	H30	Ⅲ	1	16	20	Ⅲa	深鉢	胴～底	底径（9.0）cm・器高（23.0）cm
			I30	Ⅲ	1	4					
図Ⅴ－14	35	28	D20	Ⅳ	5		1	Ⅲb	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	36a	28	D18	Ⅰ	4		1	Ⅲb	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	36b	28	D18	Ⅳ	6		1			口縁	
図Ⅴ－14	37	28	G17	Ⅲ	3		7	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	口径12.3cm・器高（9.6）cm
図Ⅴ－14	38	28	F18	Ⅲ	1		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	39	28	D36	Ⅳ	3		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	40	28	D35	Ⅳ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	41	28	H38	Ⅲ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	42	28	C37	Ⅳ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	43	28	G38	Ⅲ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	44	28	F38	Ⅲ	3		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	45	28	H29	Ⅳ	3		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	46	28	F16	Ⅲ	3		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	47	28	D29	Ⅳ	4		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－14	48	28	E28	Ⅳ	2		2	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－15	49	28	D45	Ⅳ	3	55	123	Ⅳa	深鉢	口縁～底	口径23.5cm・底径（12.5）cm・器高36.9cm
			D45	Ⅳ	4	68					
図Ⅴ－15	50	28	H33	Ⅰ	1		5	Ⅳa	鉢	口縁～胴	

表Ⅴ－3　包含層出土掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	発掘区	層位	遺物No.	点数 片	点数 計	分類	器種	部位	計測値・備考
図Ⅴ－15	51	29	D33	Ⅳ	3		72	Ⅳa	深鉢	口縁～胴	口径（15.3）cm・器高（23.0）cm
図Ⅴ－15	52	29	H36	Ⅳ	4		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－15	53	29	G36	Ⅲ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－15	54	29	H28	Ⅲ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－15	55	29	H29	Ⅲ	1	2	4	Ⅳa	深鉢	口縁	
			H30	Ⅲ	2	2					
図Ⅴ－16	56	29	F39	Ⅳ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－16	57	29	G21	Ⅲ	1		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－16	58	29	F17	風倒木	4		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－16	59	29	G18	Ⅳ	5		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－16	60	29	H16	Ⅲ	2		1	Ⅳa	深鉢	口縁	
図Ⅴ－16	61	29	F18	Ⅲ	1		1	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅴ－16	62	29	E61	Ⅳ	1		1	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅴ－16	63	29	D18	Ⅳ	7		1	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅴ－16	64	29	C53	Ⅳ	1		2	Ⅳa	深鉢	胴	
図Ⅴ－16	65a	29	H39	Ⅰ	1	5	6	Ⅳa	深鉢	胴	
			H39	Ⅰ	2	1					
図Ⅴ－16	65b	29	H39	Ⅰ	1	1	4	Ⅳa	深鉢	底	底径8.0cm・器高（1.5）cm
			H39	Ⅰ	2	1					
			H39	Ⅲ	4	2					
図Ⅴ－16	66	29	F16	Ⅲ	1	14	19	Ⅳa	深鉢	胴～底	底径（10.5）cm・器高（13.2）cm
			F16	Ⅲ	3	4					
			F16	Ⅳ	7	1					
図Ⅴ－16	67	29	C35	Ⅳ	1		14	Ⅳa	深鉢	胴～底	底径7.3cm・器高（5.8）cm
図Ⅴ－16	68	29	G17	Ⅲ	3		3	Ⅳa	深鉢	底	
図Ⅴ－16	69	29	E34	木根	5		1	Ⅳa	深鉢	底	底径8.4cm・器高（3.5）cm
図Ⅴ－17	70	29	H17	Ⅲ	1		11	Ⅳa	壺	胴	
図Ⅴ－17	71	29	D35	Ⅳ	4		1	Ⅳa	壺	胴	
図Ⅴ－17	72	29	C37	Ⅲ	3		1	Ⅳa	壺	胴	
図Ⅴ－17	73	29	E28	Ⅳ	2		2	Ⅳa	壺	胴	
図Ⅴ－17	74	29	G38	撹乱	3		1	Ⅳa	壺	胴	
図Ⅴ－17	75	30	E40	Ⅳ	1	2	222	Ⅳa	壺	口縁～胴	口径12.4cm・胴径29.0cm・器高（32.3）cm
			E40	Ⅳ	3	220					
図Ⅴ－17	76	29	G36	風倒木	3		2	Ⅳa	壺	胴	
図Ⅴ－17	77	29	F21	Ⅳ	5		1	Ⅴb	鉢	口縁	
図Ⅴ－17	78a	29	C16	Ⅳ	3		1	Ⅴb	鉢	口縁	
図Ⅴ－17	78b	29	C16	Ⅳ	8		1	Ⅴb	鉢	口縁	

表Ⅴ－4　包含層出土掲載石器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	発掘区	層位	遺物番号	遺物名	石材	大きさ（cm） 長さ	大きさ（cm） 幅	大きさ（cm） 厚さ	重量（g）	備考
図Ⅴ－18	1	30	H29	Ⅲ	3	石鏃	頁岩	5.3	2.1	0.5	3.9	
図Ⅴ－18	2	30	C33	Ⅳ	2	石鏃	頁岩	(3.1)	1.2	0.4	1.6	
図Ⅴ－18	3	30	B53	Ⅳ	1	石鏃	頁岩	4.4	1.2	0.5	2.0	アスファルト
図Ⅴ－18	4	30	D21	Ⅳ	2	石鏃	頁岩	(3.5)	1.3	0.4	1.9	アスファルト
図Ⅴ－18	5	30	H39	Ⅰ	6	石鏃	頁岩	(4.1)	1.7	0.6	4.3	アスファルト
図Ⅴ－18	6	30	D57	Ⅳ	1	石鏃	頁岩	(3.2)	1.5	0.5	2.4	
図Ⅴ－18	7	30	D18	Ⅳ	25	石鏃	凝灰岩	3.6	1.4	0.5	1.9	
図Ⅴ－18	8	30	H37	Ⅳ	1	石鏃	頁岩	2.7	1.5	0.3	1.0	
図Ⅴ－18	9	30	C23	Ⅳ	13	石鏃	頁岩	(2.7)	1.3	0.2	0.9	
図Ⅴ－18	10	30	D47	Ⅲ	1	石鏃	頁岩	2.2	1.4	0.2	0.7	
図Ⅴ－18	11	30	D24	Ⅳ	6	石槍	頁岩	8.9	2.9	1.4	32.8	
図Ⅴ－18	12	30	D34	Ⅲ	1	石槍	黒曜石	11.1	3.6	1.5	59.6	
図Ⅴ－18	13	30	C19	Ⅳ	3	両面調整石器	頁岩	(9.2)	3.7	1.9	57.9	
図Ⅴ－18	14	30	F16	Ⅲ	5	両面調整石器	頁岩	(5.2)	3.3	1.1	15.5	
図Ⅴ－18	15	30	F16	Ⅲ	12	石錐	頁岩	4.7	3.6	0.8	14.5	
図Ⅴ－18	16	30	G19	Ⅲ	1	石錐	頁岩	6.3	4.9	1.2	26.3	
図Ⅴ－18	17	30	H31	Ⅳ	1	つまみ付ナイフ	頁岩	7.8	3.1	0.8	16.3	
図Ⅴ－18	18	30	F16	Ⅲ	1	つまみ付ナイフ	頁岩	(5.4)	3.4	0.8	15.6	
図Ⅴ－18	19	30	D20	Ⅳ	4	つまみ付ナイフ	頁岩	6.3	4.2	1.3	16.3	
図Ⅴ－19	20	31	C16	Ⅳ	3	スクレイパー	頁岩	5.8	6.1	1.3	33.5	光沢

表Ⅴ－4　包含層出土掲載石器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	発掘区	層位	遺物番号	遺物名	石材	大きさ（cm）			重量（g）	備考
								長さ	幅	厚さ		
図Ⅴ－19	21	31	H59	Ⅳ	1	スクレイパー	頁岩	6.9	4.7	1.6	42.5	
図Ⅴ－19	22	31	F59	Ⅴ	3	スクレイパー	頁岩	7.2	4.1	1.2	28.0	
図Ⅴ－19	23	31	E19	Ⅳ	10	スクレイパー	頁岩	7.2	5.4	1.8	39.2	光沢
図Ⅴ－19	24	31	B52	Ⅳ	1	スクレイパー	頁岩	(9.2)	6.7	1.7	65.1	
図Ⅴ－19	25	31	D20	Ⅳ	17	スクレイパー	頁岩	9.5	6.1	2.2	118.0	
図Ⅴ－19	26	31	D19	Ⅰ	1	スクレイパー	頁岩	6.5	3.4	1.2	25.0	光沢
図Ⅴ－19	27	31	E55	Ⅳ	4	スクレイパー	頁岩	7.3	4.4	1.7	50.0	光沢
図Ⅴ－19	28	31	D20	Ⅳ	8	スクレイパー	頁岩	7.4	4.8	1.7	53.2	光沢
図Ⅴ－20	29	31	D35	Ⅳ	2	スクレイパー	頁岩	6.8	3.6	1.3	23.2	
図Ⅴ－20	30	31	D22	Ⅳ	4	スクレイパー	頁岩	7.2	4.3	1.1	36.3	光沢
図Ⅴ－20	31	31	G24	Ⅲ	1	スクレイパー	頁岩	7.3	3.6	1.7	24.1	
図Ⅴ－20	32	31	D20	Ⅳ	9	スクレイパー	頁岩	7.8	4.2	1.9	58.4	光沢
図Ⅴ－20	33	31	D18	Ⅳ	12	スクレイパー	頁岩	7.6	3.5	1.8	33.3	
図Ⅴ－20	34	31	E8	撹乱	1	スクレイパー	頁岩	9.9	4.7	2.0	88.3	光沢
図Ⅴ－20	35	31	E37	Ⅳ	6	スクレイパー	頁岩	6.5	3.9	1.4	28.6	
図Ⅴ－20	36	31	E59	Ⅴ	1	スクレイパー	頁岩	4.6	5.9	1.5	37.8	光沢
図Ⅴ－20	37	31	C40	Ⅳ	1	スクレイパー	頁岩	8.1	4.7	2.1	50.8	
図Ⅴ－20	38	31	H32	Ⅳ	4	スクレイパー	頁岩	4.7	2.1	0.9	6.4	
図Ⅴ－20	39	31	C19	Ⅳ	13	スクレイパー	頁岩	6.7	4.1	1.8	27.5	
図Ⅴ－21	40	31	H35	風倒木	2	スクレイパー	頁岩	6.2	5.8	1.0	28.4	光沢
図Ⅴ－21	41	31	D18	Ⅳ	32	スクレイパー	頁岩	(7.6)	6.7	2.7	59.0	
図Ⅴ－21	42	31	C16	Ⅳ	25	Rフレイク	頁岩	8.4	3.5	1.3	23.5	
図Ⅴ－21	43	32	E18	Ⅳ	7	ピエス・エスキーユ	頁岩	4.3	4.4	1.1	21.7	
図Ⅴ－21	44	32	D24	Ⅳ	8	石核	頁岩	5.5	4.6	1.4	48.5	
図Ⅴ－21	45	32	B54	Ⅳ	1	石核	頁岩	11.6	5.8	2.6	139.3	
図Ⅴ－21	46	32	B16	Ⅲ	5	石核	頁岩	7.8	12.3	4.9	520.0	
図Ⅴ－22	47	32	H39	Ⅲ	24	石核	頁岩	4.5	4.7	3.0	45.0	
図Ⅴ－22	48	32	C55	Ⅳ	2	石核	頁岩	3.4	5.6	4.6	80.5	
図Ⅴ－22	49	32	E39	Ⅲ	3	石核	頁岩	4.4	5.4	4.1	124.5	
図Ⅴ－22	50	32	H16	Ⅲ	4	石核	頁岩	5.0	8.9	5.2	187.4	
図Ⅴ－22	51	32	D17	Ⅳ	17	石核	頁岩	5.6	9.5	4.7	236.0	
図Ⅴ－23	52	32	D17	Ⅳ	19	箆状石器	頁岩	(4.7)	5.7	1.9	53.8	
図Ⅴ－23	53	32	D34	Ⅳ	10	石斧	緑色凝灰岩	7.1	2.5	1.2	36.2	
図Ⅴ－23	54	32	H33	Ⅲ	7	石斧	輝緑岩	7.2	3.5	1.5	65.2	
図Ⅴ－23	55	32	D34	Ⅳ	6	石斧	緑色凝灰岩	8.4	3.6	2.0	95.5	
図Ⅴ－23	56	32	G59	Ⅳ	1	石斧	片岩	12.5	4.2	1.5	130.2	
図Ⅴ－23	57	32	E34	Ⅳ	2	石のみ	片岩	8.0	1.7	0.7	17.6	
図Ⅴ－23	58	33	C61	撹乱	2	たたき石	砂岩	5.9	3.6	2.2	61.2	
図Ⅴ－23	59	33	C19	Ⅳ	1	たたき石	砂岩	9.3	6.0	3.2	253.0	
図Ⅴ－23	60	33	D17	Ⅳ	12	たたき石	砂岩	9.7	5.3	2.8	212.0	
図Ⅴ－23	61	33	D24	Ⅳ	13	たたき石	砂岩	11.2	7.3	3.0	332.0	
図Ⅴ－23	62	33	F53	Ⅳ	1	たたき石	砂岩	12.0	10.1	4.3	668.0	
図Ⅴ－23	63	33	E20	Ⅳ	2	たたき石	砂岩	12.7	8.4	4.2	706.0	
図Ⅴ－24	64	33	B16	Ⅳ	9	くぼみ石	頁岩	13.4	8.1	5.8	494.0	
図Ⅴ－24	65	33	E18	Ⅳ	3	扁平打製石器	安山岩	8.1	14.3	3.8	520.0	
図Ⅴ－24	66	33	C16	Ⅳ	21	扁平打製石器	安山岩	8.4	16.2	2.8	550.0	
図Ⅴ－24	67	33	F19	Ⅳ	15	扁平打製石器	安山岩	9.7	16.0	3.8	820.0	
図Ⅴ－24	68	33	D19	Ⅳ	2	扁平打製石器	安山岩	8.7	15.6	2.9	480.0	
図Ⅴ－24	69	33	E22	撹乱	4	北海道式石冠	安山岩	8.4	9.2	5.7	680.0	
図Ⅴ－24	70	33	C18	Ⅳ	1	北海道式石冠	安山岩	8.4	10.5	4.6	580.0	
図Ⅴ－24	71	33	E18	Ⅲ	1	すり石	安山岩	15.5	7.4	5.6	978.0	
図Ⅴ－24	72	33	C56	Ⅳ	1	すり石	砂岩	6.2	4.5	2.7	111.7	
図Ⅴ－24	73	33	C16	Ⅳ	3	砥石	砂岩	(7.2)	(11.7)	(7.1)	730.0	

Ⅵ　自然科学的分析

1　炭化樹種同定

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。炭化材も同様である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、木古内町泉沢５遺跡から出土した炭化材について、木材組織の特徴から樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定が行われている（第Ⅵ章第２節参照）。

（2）試料と方法

試料は、焼土跡のＨ－２・HF－１出土の炭化材（IZM５－１）、Ｆ－７出土の炭化材（IZM５－２）、Ｆ－13出土の炭化材（IZM５－３）の計３点である。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割折し断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製JSM－5900LV）にて検鏡および写真撮影を行った。同定は、木材構造および現生標本との対比によって行った。

（3）結果

同定の結果、Ｆ－７出土の炭化材（IZM５－２）およびＦ－13出土の炭化材（IZM５－３）は、いずれもクリ、Ｈ－２・HF－１出土の炭化材（IZM５－１）はクリ？であった。同定結果を表Ⅵ－１に示し、以下に、同定された材の特徴を記載する。図Ⅵ－１に走査型電子顕微鏡写真を示す。

１）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図Ⅵ－１　１a－１c（IZM５－２）、２a－２c（IZM５－３）

年輪のはじめに大型の道管が２～３列配列し、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

表Ⅵ－１　樹種同定結果

試料№	出土遺構	層位	結果（学名／和名）
IZM５－１	Ｈ－２・HF－１	焼土	*Castanea crenata Sieb.* et Zucc.?　　クリ？
IZM５－２	Ｆ－７	焼土	*Castanea crenata Sieb.* et Zucc.　　クリ
IZM５－３	Ｆ－13	焼土	*Castanea crenata Sieb.* et Zucc.　　クリ

2）クリ？　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.?　ブナ科　図Ⅵ－1　3a－3c（IZM5－1）
クリと同様の形質をもつが、横断面で年輪界が確認できなかったことからクリ？とした。

（4）所見

焼土跡F－7とF－13の炭化材は共にクリ、H－2・HF－1の炭化材はクリ？であった。いずれも焼土層から出土しており、燃料材として利用されていたと考えられる。燃料材としてのクリは、火力は高くないが長時間燃焼するため、燃料材には適した樹種である（伊東ほか，2011）。

青森平野周辺では、縄文時代前期から後期の遺跡出土木材の樹種組成の解析から、人間によるクリ林の管理が行なわれていたと考えられている（Noshiro and Suzuki，2006）。そしてクリは、果実は食用としての利用も可能であることから、泉沢5遺跡においてもクリが有用材として認識され、利用されていた可能性が考えられる。

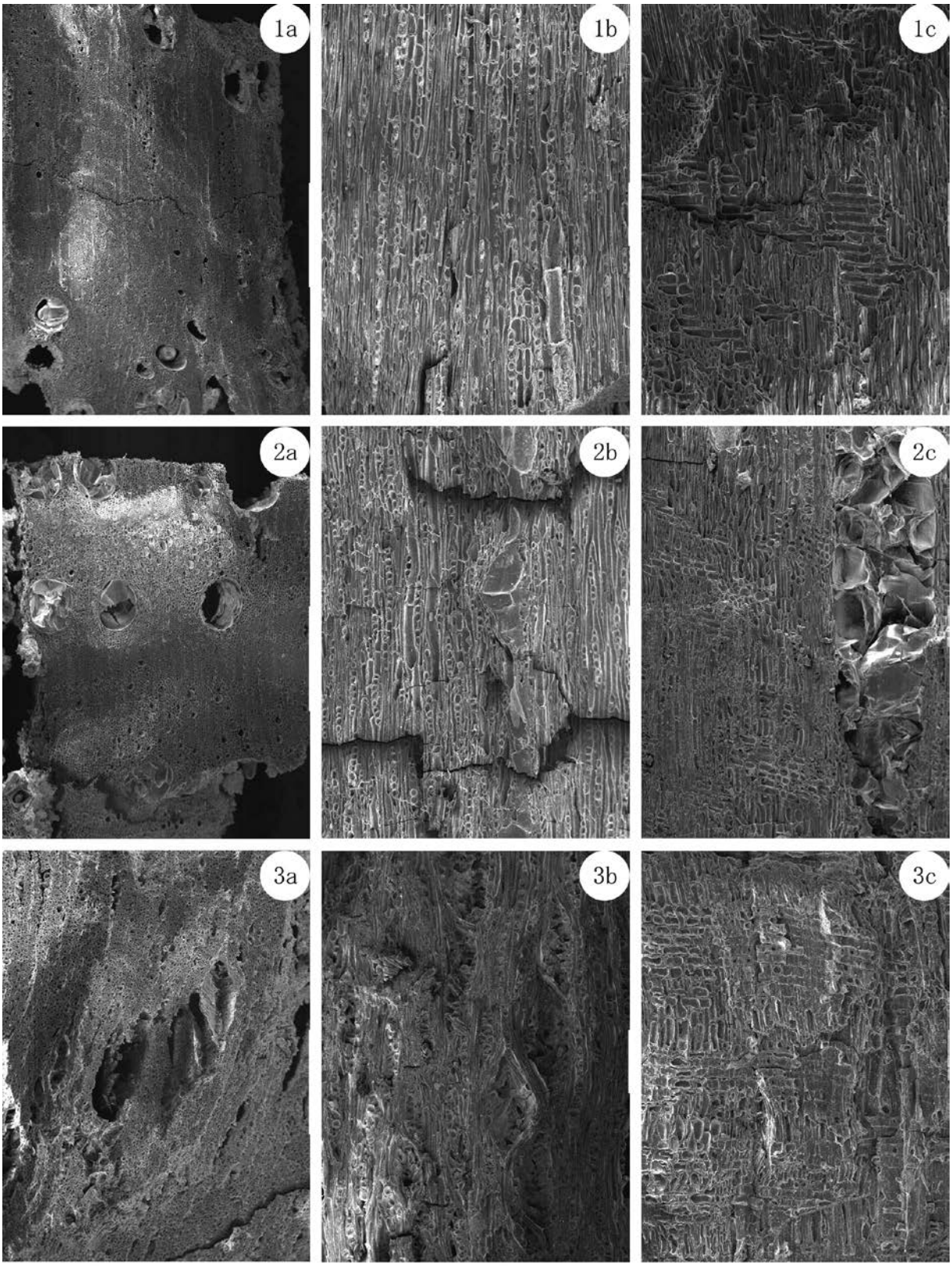
参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，海青社，238p.

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，449p.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49－100.

Noshiro, S., Suzuki, M. (2006) Utilization of forest resources in the early Jomon period at and around the Sannai-maruyama site in Aomori Prefecture, northern Japan.　辻　誠一郎・能城修一編「植生史研究　特別第2号」，日本植生史学会，p. 83－100.



1a-1c.クリ(IZU5-2)、2a-2c.クリ(IZU5-3)、3a-3c.クリ？(IZU5-1)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

図Ⅵ－１　泉沢５遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

2　放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約６万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、木古内町泉沢５遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

（2）試料と方法

測定試料は、泉沢５遺跡のＨ－２・HF－１の焼土より土した炭化材（クリ？）、Ｆ－７の焼土より出土した炭化材（クリ）およびＦ－13の焼土より出土した炭化材（クリ）の３点である。測定試料の情報、調製データは表Ⅵ－２のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）で測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

（3）測定結果

表Ⅵ－３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図Ⅵ－２には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（年BP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年

表Ⅵ－２　測定試料及び処理

試料名	遺構	層位	種類	前処理・調整	測定法
IZM５－１	Ｈ－２・HF－１	焼土	炭化材	超音波洗浄，酸ーアルカリー酸洗浄	AMS
IZM５－２	Ｆ－７	焼土	炭化材	超音波洗浄，酸ーアルカリー酸洗浄	AMS
IZM５－３	Ｆ－13	焼土	炭化材	超音波洗浄，酸ーアルカリー酸洗浄	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

表Ⅵ－３　年代測定結果

試料名	測定№（PLD－）	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（年BP）	^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）1σ（68.2%確率）	暦年代（西暦）2σ（95.4%確率）
IZM５－１	28576	－25.58±0.18	4360±22	4360±20	cal BC　3011－2978（31.0%） cal BC　2968－2950（14.1%） cal BC　2943－2918（23.1%）	cal BC　3024－2909（95.4%）
IZM５－２	28577	－24.68±0.21	3800±21	3800±20	cal BC　2285－2247（37.3%） cal BC　2235－2201（30.9%）	cal BC　2294－2195（84.6%） cal BC　2174－2145（10.8%）
IZM５－３	28578	－24.27±0.23	3315±20	3315±20	cal BC　1626－1603（25.3%） cal BC　1584－1544（40.2%） cal BC　1539－1535（ 2.8%）	cal BC　1644－1528（95.4%）

BP：Before Physics（Present），BC：紀元前

代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（４）所見

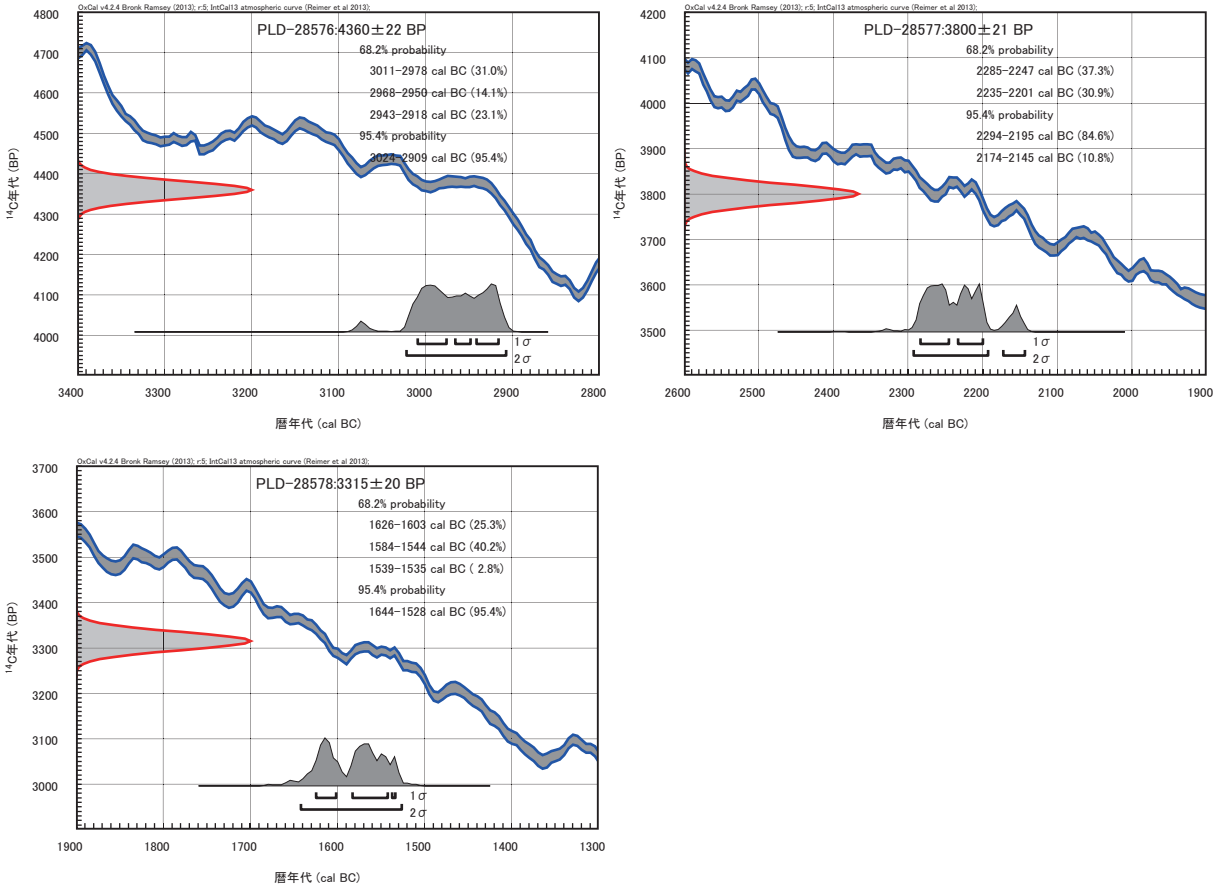
泉沢５遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、H－２・HF－１の焼土より出土した炭化材（クリ？）は、4,360±20年BP（２σの暦年代でBC　3,024～2,909年）、F－７の焼土より出土した炭化材（クリ）は、3,800±20年BP（２σの暦年代でBC　2,294～2,195年、BC　2,174～2,145年）、F－13の焼土より出土した炭化材（クリ）は、3,315±20年BP（２σの暦年代でBC　1,644～1,528年）の年代値であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355－363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」，p.３－20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0－50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869－1887.


OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-28576:4360±22 BP
68.2% probability
3011-2978 cal BC (31.0%)
2968-2950 cal BC (14.1%)
2943-2918 cal BC (23.1%)
95.4% probability
3023-2909 cal BC (95.4%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BC)
OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-28577:3800±21 BP
68.2% probability
2285-2247 cal BC (37.3%)
2235-2201 cal BC (30.9%)
95.4% probability
2294-2195 cal BC (84.6%)
2174-2145 cal BC (10.8%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BC)
OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-28578:3315±20 BP
68.2% probability
1626-1603 cal BC (25.3%)
1584-1544 cal BC (40.2%)
1539-1535 cal BC (2.8%)
95.4% probability
1644-1528 cal BC (95.4%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BC)

図Ⅵ－２　暦年較正結果

Ⅶ　まとめ

泉沢５遺跡は現海岸線から約600m内陸の海成段丘上にあり、遺跡のある段丘面は橋呉川およびその支流の開析を受け南西方向に張り出す台地状の地形となっている。調査面積は8,984㎡、調査区は長大で北東－南西方向に長さ約310mに及ぶため、場所により検出遺構や出土遺物の傾向が異なる。以下、出土した遺構・遺物をまとめるにあたり地形と関連づけて述べる。

調査区内の標高は26～39mで、調査区南西部が段丘の縁部分、北東部が段丘の奥部にあたる。調査区内の地形はほぼ平坦だが小規模な沢地形が２か所発達している。南西部に北西方向、北東部に南方向への沢地形がみられ、その周辺は緩斜面となっている。沢地形と平坦面を基準として以下の地点①～⑤に区分した。①南方向の沢に面した西向きの緩斜面（２～15ライン付近）②南方向の沢に面した東向きの緩斜面（15～20ライン付近）、③二つの沢に挟まれた中央の平坦面（20～43ライン付近）、④北西方向の沢に面した西向きの斜面（43～52ライン付近）、⑤北西方向の沢と調査区西端の橋呉川に面する急斜面に挟まれた舌状の台地（52～60ライン付近）（図Ⅱ－５）。

遺物は土器5,161点、石器・礫10,045点の計15,206点出土した。土器は縄文時代早期後半～晩期のものがあり、特に中期前半の円筒土器上層ｂ式、サイベ沢Ⅶ式が地点②・⑤、後期前葉の涌元式相当のものが地点③に多くみられた。なお、中期前半の土器にはニシンタイプの魚骨文土器も含まれている。石器は石鏃、石槍、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、たたき石、台石・石皿などがある。また、石槍の内１点は長さ10㎝程の黒曜石製であった。

遺構は竪穴住居跡（H）３軒、土坑（P）19基、Ｔピット（TP）10基、焼土（F）19か所、遺物集中８か所、フレイクチップ集中（FC）１か所、礫集中（S）１か所、土器埋設遺構１か所を検出した。出土遺物の傾向から中期前半と後期前葉の所産が大半と思われる。前述の地点①では遺構がなく、地点②には竪穴住居跡、土坑、焼土、遺物集中があり小規模ながら集落的な様相を示す。地点③には大半の遺物集中が散漫に存在し、土坑、Ｔピット、焼土、フレイク集中、土器埋設遺構もみられた。地点④からはＴピットのみが規則的な配列で検出されている。地点⑤には竪穴住居跡、土坑、焼土がみられた。

竪穴住居跡はいずれも長径が２ｍ程度の小規模なものであった。地点②で検出されたＨ－２・３は縄文時代中期前半とみられる。またＨ－２は床面の周囲に溝状の掘り込みがあり、ベンチ状の段、先端にピットを持つ。ベンチ状の段から検出した炭化材に4,360±20yrBP（２σで3,024～2,909 calBC）の年代値が得られた。床面の遺物と比べるとやや新しい値である。また、覆土上位に竪穴の窪みを利用した焼土（Ｆ－９）があり、縄文時代中期前半のサイベ沢Ⅶ式相当の土器片が多数出土していた。これらの住居跡から200m程離れた地点⑤のＨ－１は隅丸方形であった。床面出土土器や柱穴・炉跡等は確認されていないが、覆土中の縄文時代後期前葉の土器片を含む土坑（Ｐ－８）や周辺の包含層遺物から縄文時代中期前半の可能性がある。

土坑は19基の内、６基がフラスコ状を呈し（Ｐ－１・３・７・16・18・19）、深さ１ｍ前後が主体的である。地点②に２基、地点③に１基、地点④から３基検出されている。出土土器はいずれも覆土中で、Ⅲ群ａ類が含まれていた。また、Ｐ－16の坑底面からは扁平打製石器が出土している。これらのことからフラスコ状土坑に関しては縄文時代中期前半に属する可能性がある。

Ｔピットはいずれも溝状で、長軸が２ｍ前後、深さ１～1.5m程度であった。地点③では標高37m付近にTP－９・10が並列して検出された。地点④では二種の配列方向がみられた。標高32m付近に

長軸が等高線と直交する方向でTP－１・３・８・９があり、標高31～35mの斜面上に長軸が等高線と平行する方向でTP－２・４～６が検出された。細かな時期を判定できる要素はみられなかった。

焼土の内、地点③で確認されたＦ－７・13は周囲の半分に転礫を廻らせており、石組み炉であった可能性が高い。含まれる炭化物の樹種と年代を測定した結果、いずれもクリ材でＦ－７に3,800±20yrBP（２σで2,294～2,195calBC）、Ｆ－13に3,315±20yrBP（２σで1,644～1,528calBC）の年代値が得られた。遺構内や周辺の遺物はⅣ群a類の土器が主体的であることから、Ｆ－13の年代値はコンタミネーションがあったものと判断し、いずれも縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。

以上のことから、泉沢５遺跡における遺跡形成過程をまとめると、遺跡内は縄文時代早期後半から晩期中葉までの人為的な活動の痕跡が認められる。利用のあり方は断続的で、主に縄文時代中期前半の地点②・⑤における小規模な集落的な営みと、縄文時代後期前葉の地点③における土坑、焼土、遺物集中を中心とした活動の痕跡が挙げられる。後者の時期の住居跡には大きな掘り込みがなされないことが一般的であるため、この時期についても集落的な営みを想定できよう。また、詳細な時期は不明だが地点④の斜面地形において、規則的なＴピットの配置がみられることから狩猟場として用いられた期間も存在する。（直江）

引用・参考文献

大泰司　統　2003　「渡島半島の縄文時代後期前葉」『第１回東北・北海道の十腰内Ⅰ式再検討』海峡土器編年研究会

大沼忠春　2008　「特殊な施文具－魚骨文とオオバコ文－」『総覧縄文土器』アムプロモーション

小山正忠・竹原秀雄　1997　『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社

木古内町　1982　『木古内町史』

木古内町教育委員会　1998　『泉沢３遺跡』

木古内町教育委員会　2003　『泉沢２遺跡Ａ地点』

木古内町教育委員会　2003　『泉沢２遺跡Ｂ地点』

木古内町教育委員会　2004　『泉沢２遺跡Ｃ地点』

知内町教育委員会　1972　『涌元遺跡』

鈴木正語　2004　「木古内町における河川の川原礫について」『土・酒・海・山－故・石本省三氏追悼論集－』

立田　理　2006　「円筒土器上層ｂ式からサイベ沢Ⅶ式土器の編年方法について」『北海道考古学』第42輯

函館市教育員会　1979　『見晴町Ｂ遺跡発掘調査報告書』

北海道開拓記念館　1976　『札苅』

（財）北海道埋蔵文化財センター　2002　『八雲町山越３遺跡・山越４遺跡』北埋調報166

（財）北海道埋蔵文化財センター　2006　『森町三次郎川右岸遺跡』北埋調報233

（財）北海道埋蔵文化財センター　2011　『木古内町木古内２遺跡』北埋調報278

（財）北海道埋蔵文化財センター　2011　『木古内町大平遺跡・大平４遺跡』北埋調報280

（財）北海道埋蔵文化財センター　2011　『木古内町蛇内２遺跡』北埋調報281

（財）北海道埋蔵文化財センター　2012　『北斗市館野遺跡（２）』北埋調報282

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2012　『木古内町木古内２遺跡（２）』北埋調報293

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2012　『木古内町札苅５遺跡』北埋調報294

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2013　『北斗市館野６遺跡（１）』北埋調報295

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2014　『北斗市館野２遺跡Ｃ地区』北埋調報303

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2014　『木古内町木古内遺跡』北埋調報304

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2014　『木古内町釜谷８遺跡』北埋調報305

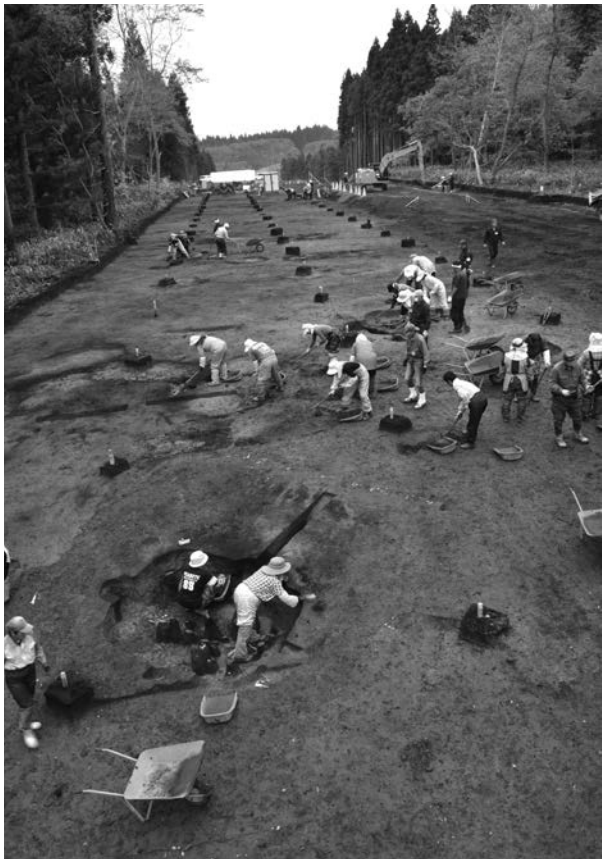
（公財）北海道埋蔵文化財センター　2014　『北斗市当別川左岸遺跡』北埋調報310

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2015　『北斗市押上１遺跡』北埋調報312

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2015　『木古内町新道４遺跡（４）』北埋調報320

南北海道考古学情報交換会　2002　「情報交換２　渡島半島における縄文時代中期末から後期初頭の土器様相」『第23回南北海道考古学情報交換会資料』

40ライン付近調査状況



20ライン付近 H－2 周辺調査状況

30ライン付近調査状況

50ライン付近調査状況

図版２　完掘状況（１）

２～15ライン完掘

15～33ラインセンター以北完掘

15～45ラインセンター以南完掘

34～52ラインセンター以北完掘

45～52ラインセンター以南完掘

52 ～ 58ライン完掘

基本土層

メインセクション①

メインセクション②

図版４　Ｈ－１

Ｈ－１ 南北断面

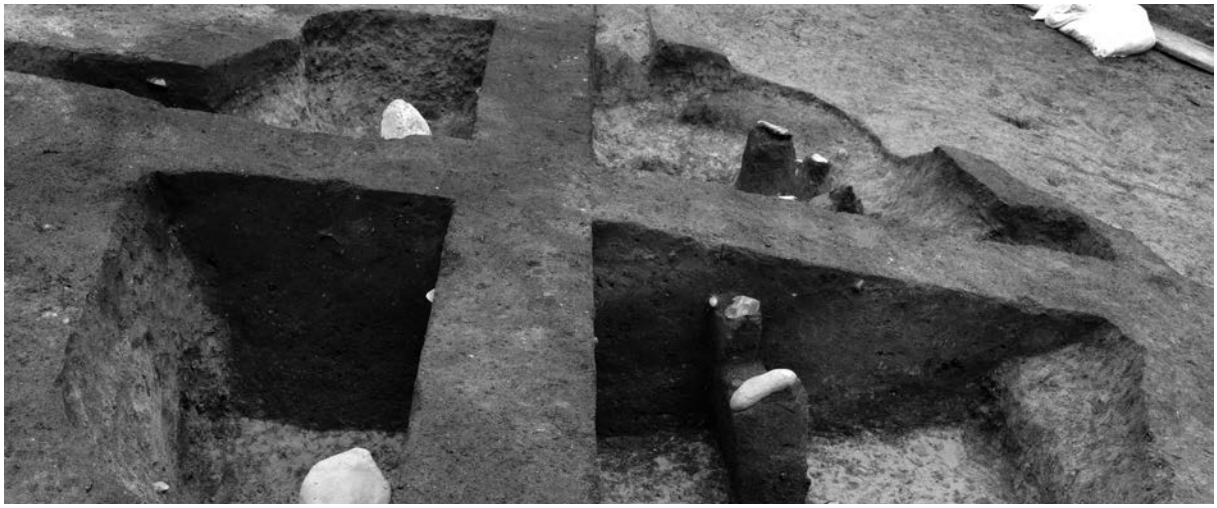
Ｈ－１ 東西断面

Ｈ－１ HP－１ 断面

Ｈ－１ HP－２ 断面

Ｈ－１ 遺物出土状況

Ｈ－２南北断面（上部にＦ－９含む）



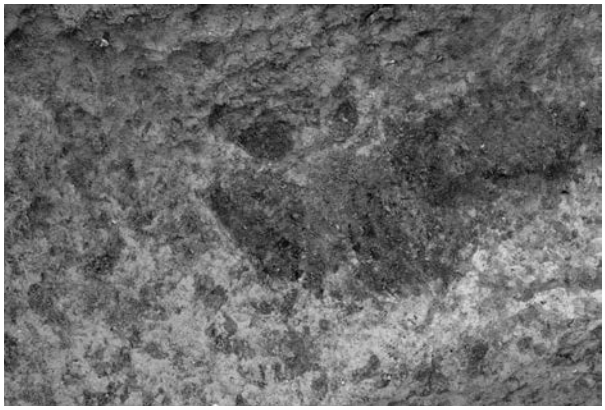
Ｈ－２東西断面（上部にＦ－９含む）

Ｈ－２遺物出土状況

図版６　Ｈ－２（２）

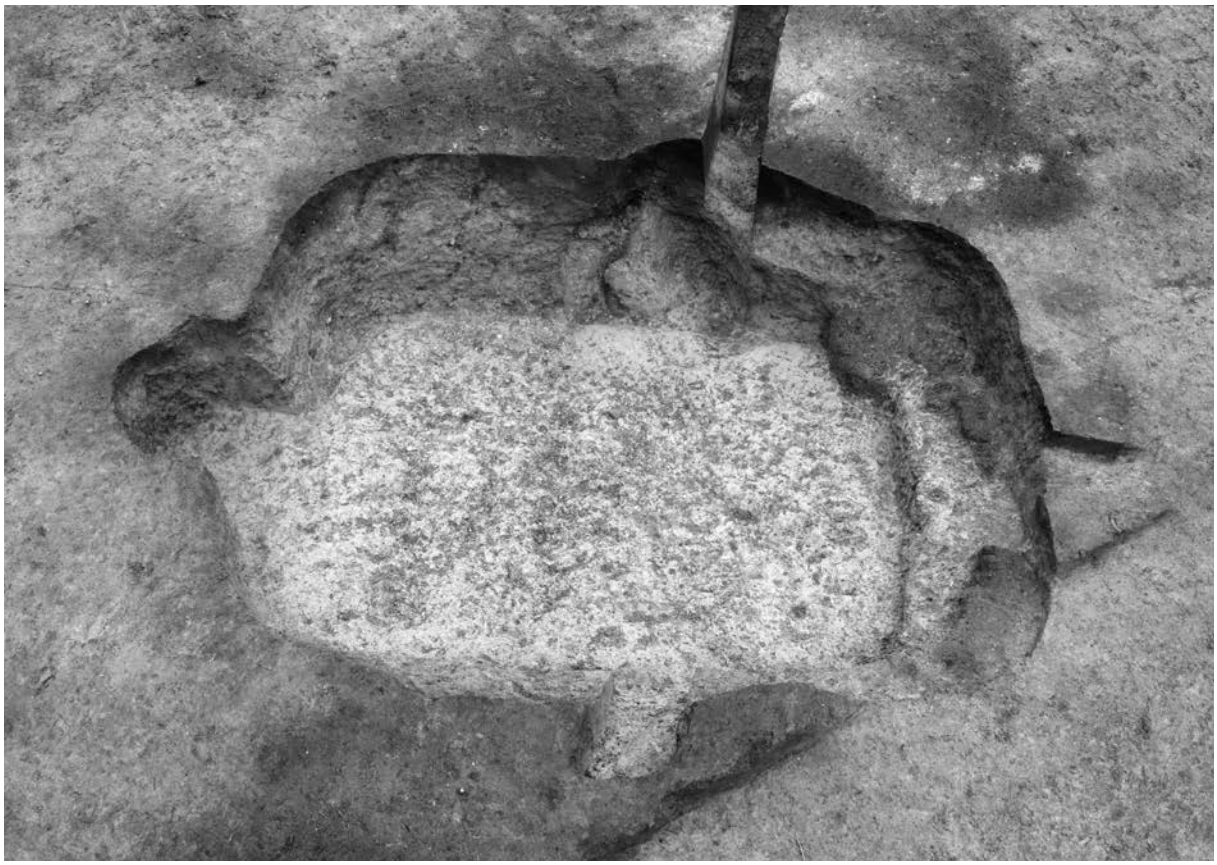
Ｈ－２ HP－１断面

Ｈ－２ HP－１完掘

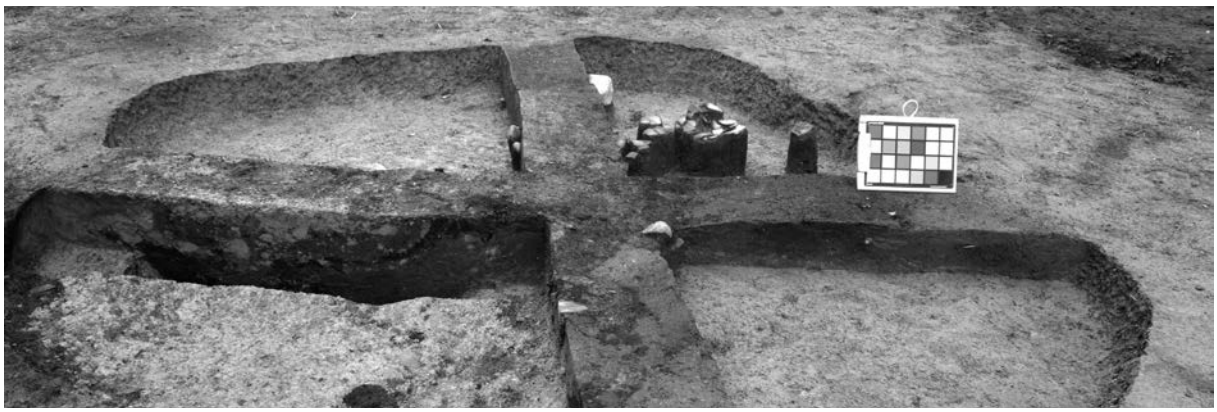


Ｈ－２ HF－１断面

Ｈ－２ HF－２断面



Ｈ－２完掘



Ｈ－３南北断面

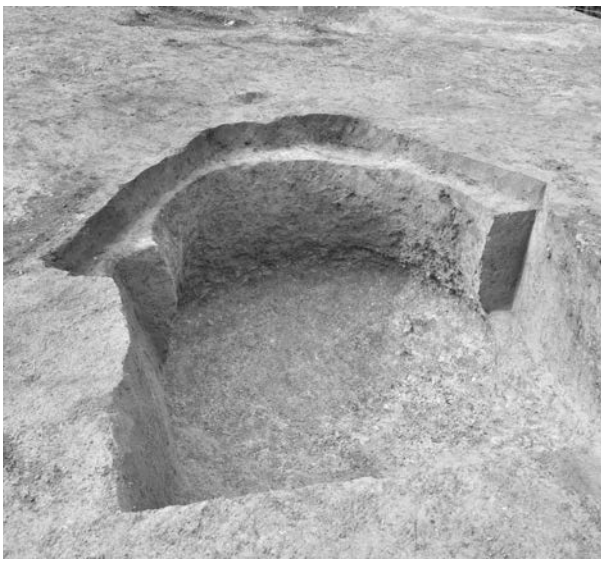
Ｈ－３遺物出土状況

Ｈ－３遺物出土状況

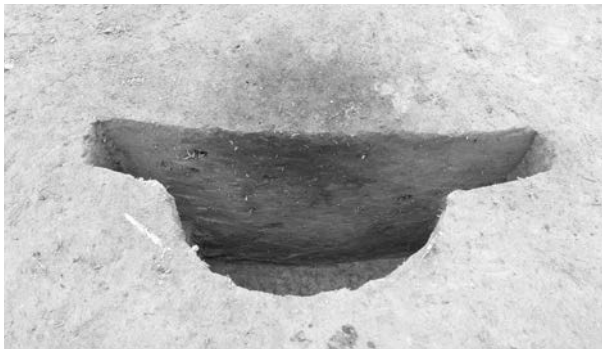
Ｈ－３遺物出土状況

図版８　Ｐ－１～Ｐ－４

Ｐ－１断面



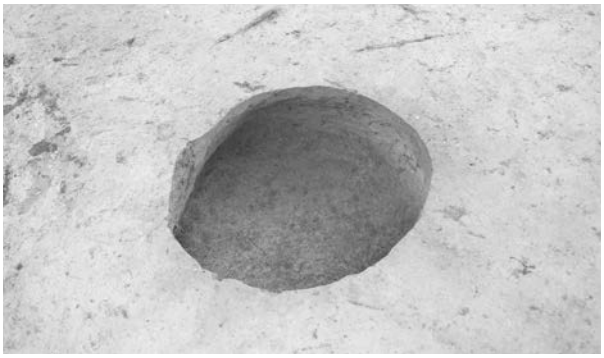
Ｐ－１完掘



Ｐ－２断面

Ｐ－２完掘

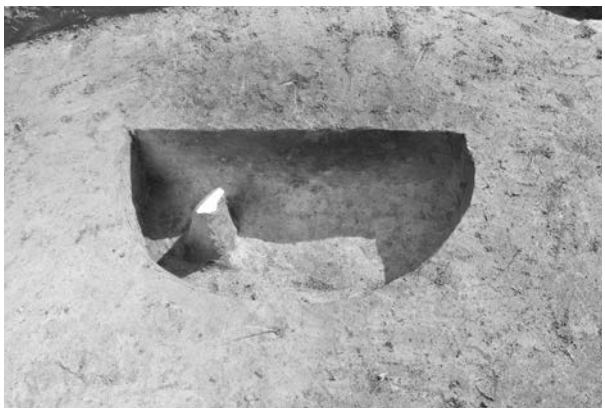
Ｐ－３断面



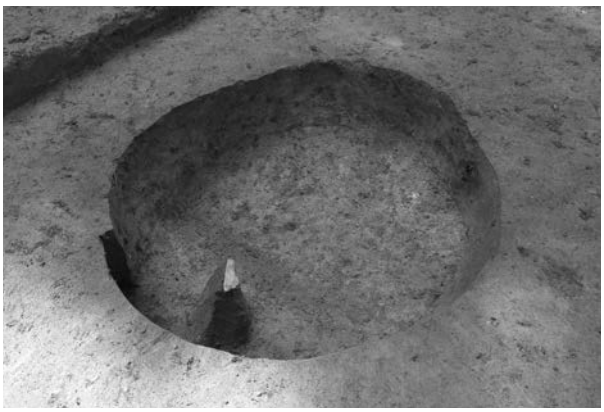
Ｐ－３完掘

Ｐ－４断面

Ｐ－４完掘



Ｐ－５断面



Ｐ－５完掘

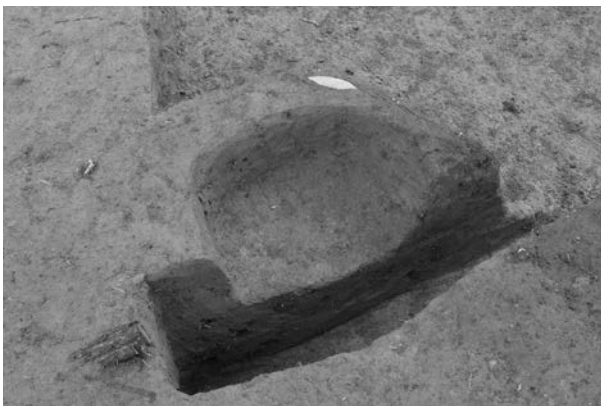
Ｐ－６断面

Ｐ－６完掘

Ｐ－７断面

Ｐ－７完掘

Ｐ－８遺物出土状況



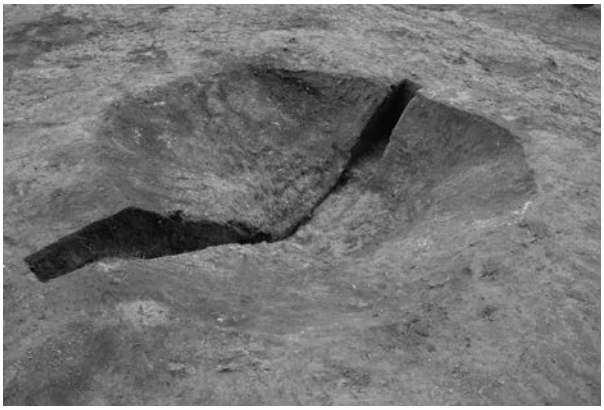
Ｐ－８完掘

図版 10　P－9 ～ P－12

P－9 断面

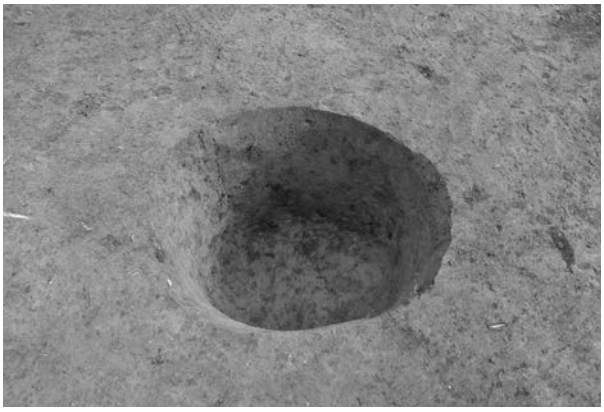
P－9 完掘

P－10断面

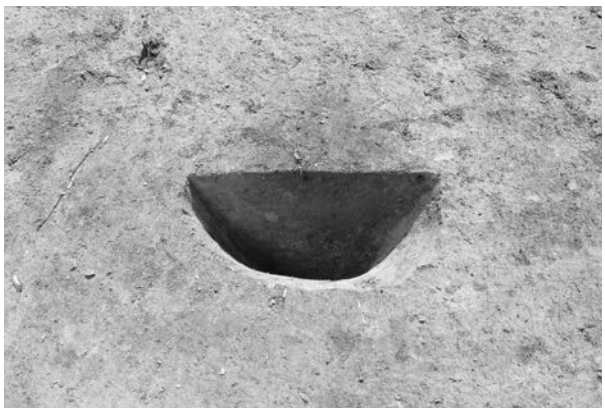


P－10完掘

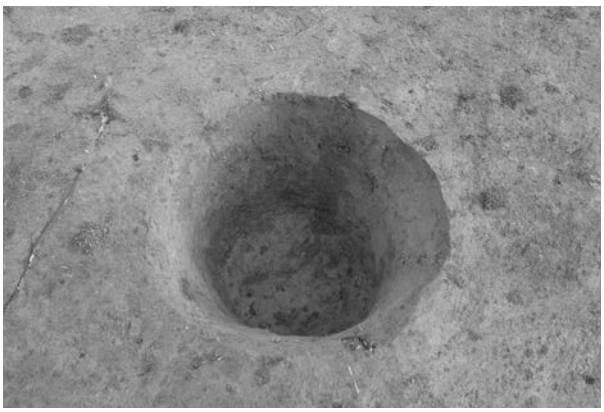
P－11断面



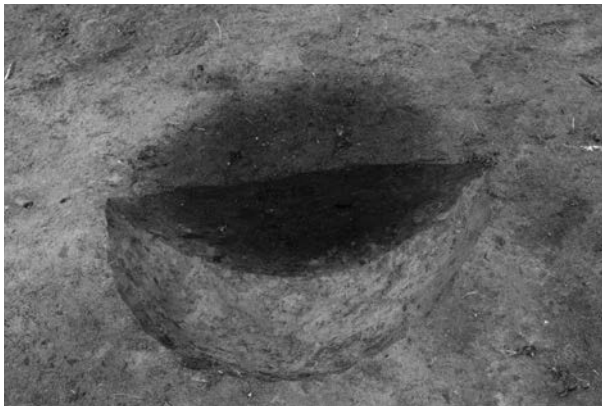
P－11完掘



P－12断面

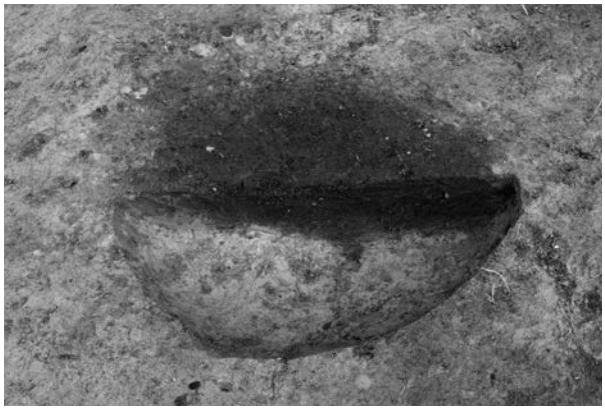


P－12完掘



P－13断面

P－13完掘



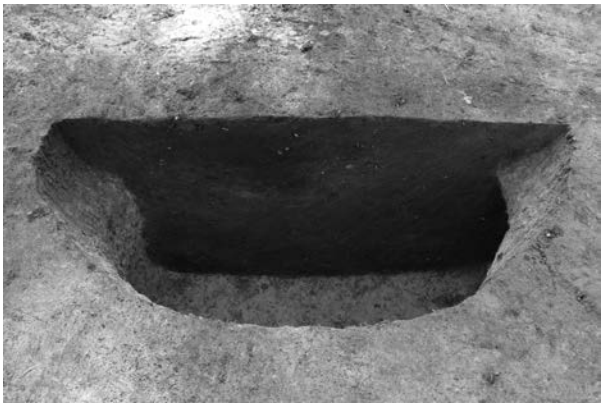
P－14断面

P－14完掘

P－13・14完掘

P－15断面

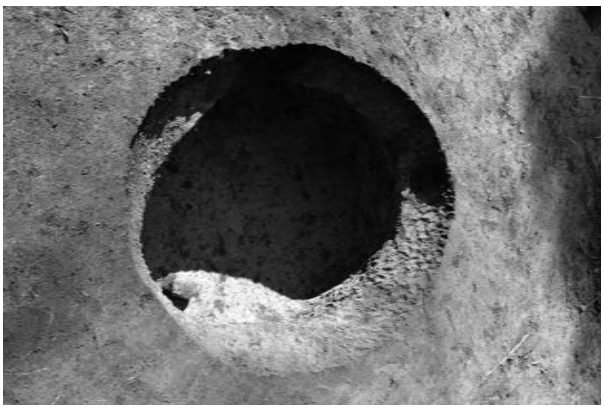
P－15完掘



P－16断面

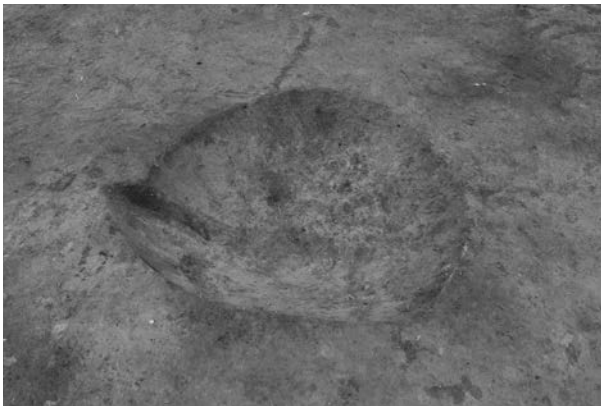
図版 12　P－16（2）～P－19

P－16調査状況



P－16完掘

P－17断面

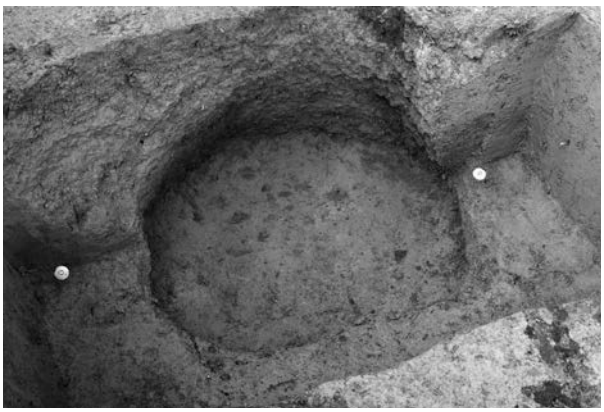


P－17完掘

P－18断面

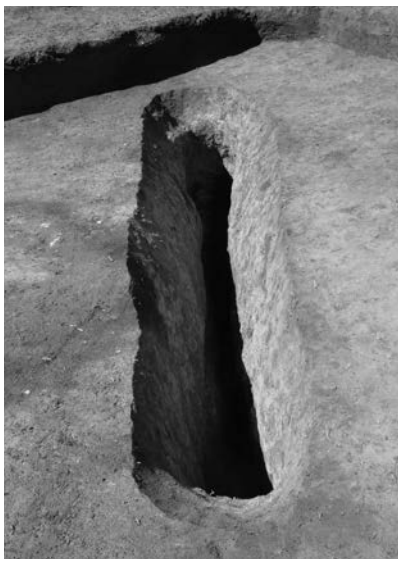
P－18完掘

P19断面



P－19完掘

TP－1 断面



TP－1 完掘

TP－2 断面

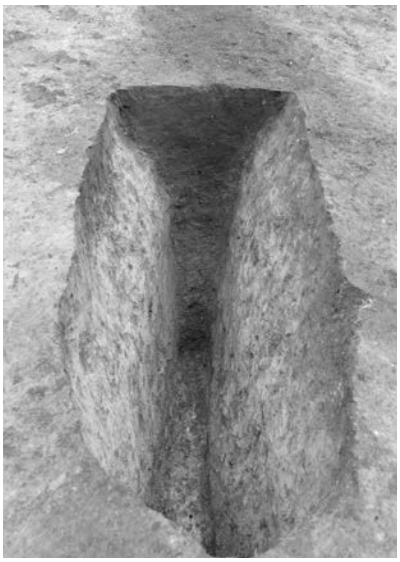
TP－2 完掘

TP－3 断面

TP－3 完掘

TP－4 断面

TP－4 完掘



TP－5 断面

図版 14　TP－5（2）～TP－9

TP－5 完掘

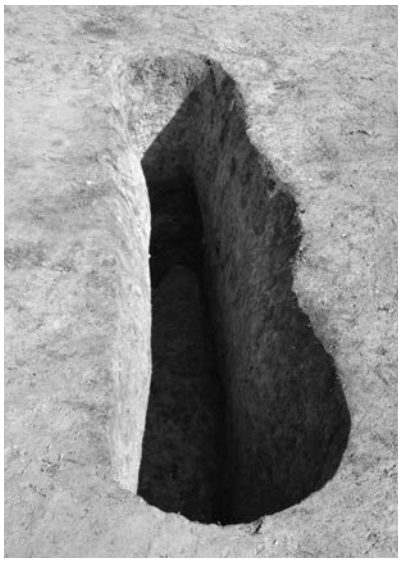
TP－6 断面

TP－6 完掘

TP－7 断面

TP－7 完掘

TP－8 断面

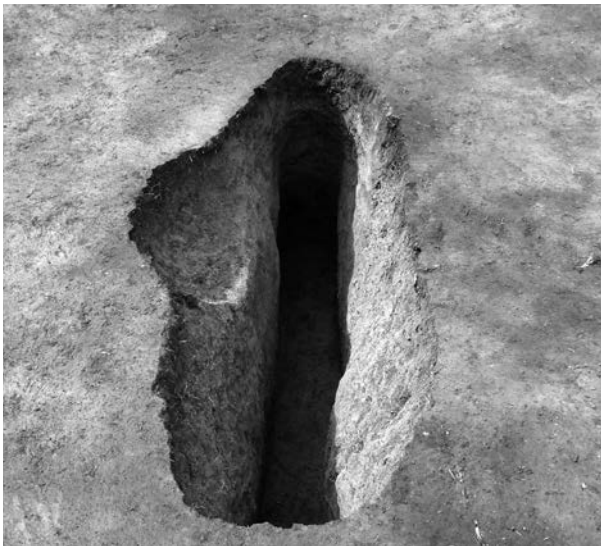


TP－8 完掘

TP－9（1001）断面

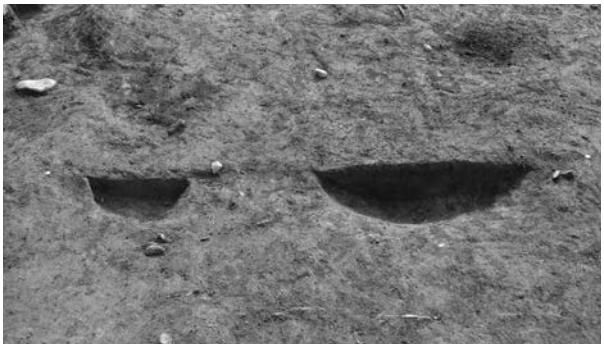
TP－9（1001）完掘

TP－10（1002）断面



TP－10（1002）完掘

F－1 断面



F－2 断面

F－3 断面

F－4 断面

F－5 断面

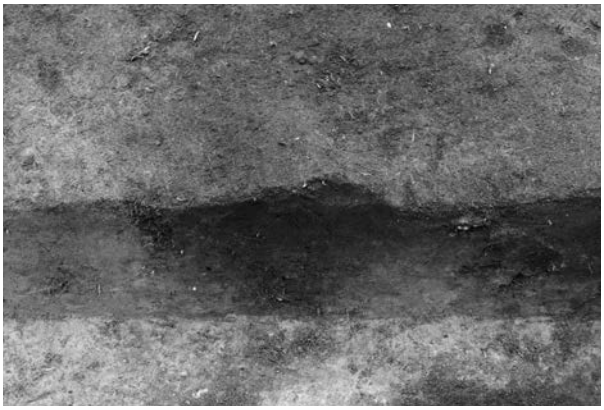
F－6 断面

図版 16　F－7 ～ F－13

F－7 検出

F－7 断面

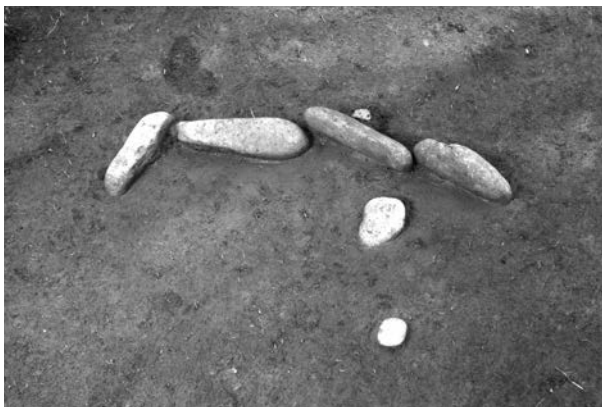
F－8 断面



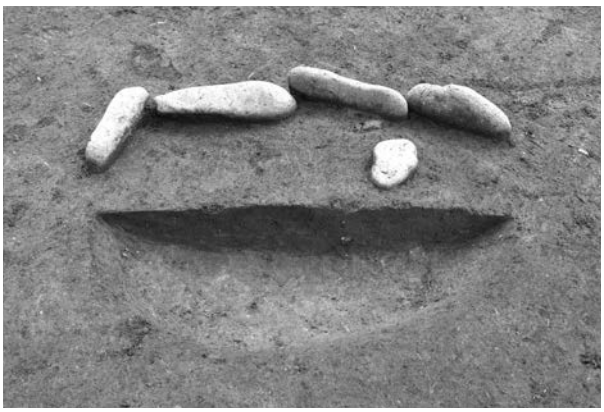
F－10断面

F－11断面

F－12断面



F－13検出

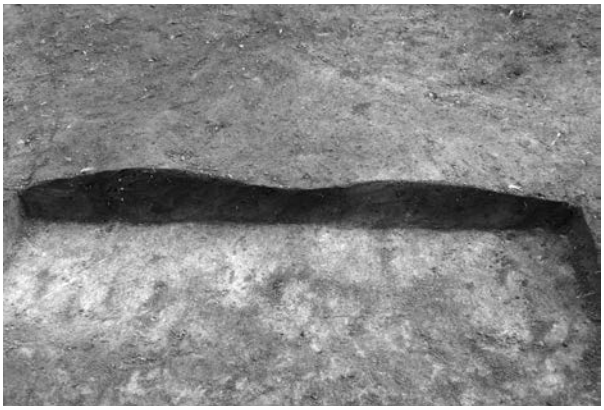


F－13断面

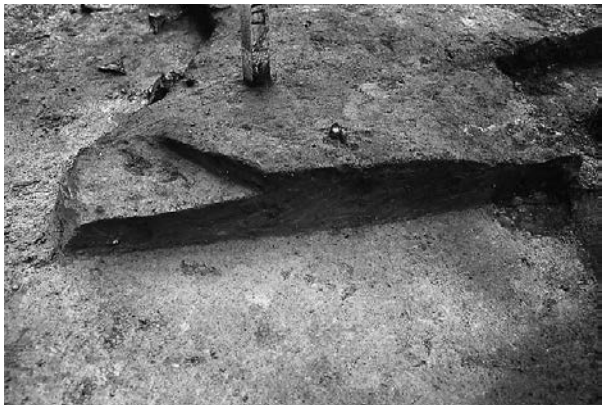
F－14断面

F－15断面

F－16断面

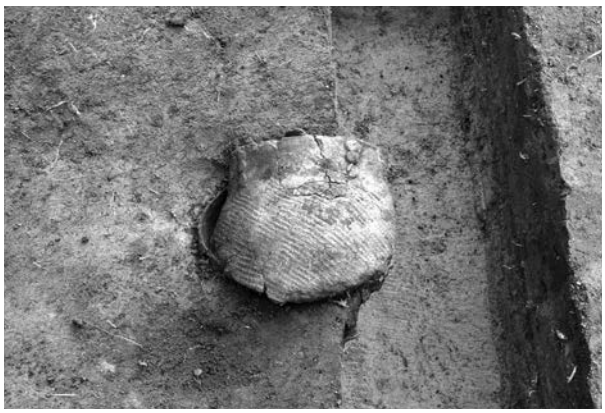


F－17（1001）断面



F－18（1002）断面

F－19（1003）断面



土器埋設遺構－1 検出

土器埋設遺構－1 断面

図版 18　遺物集中－1 ～ 5

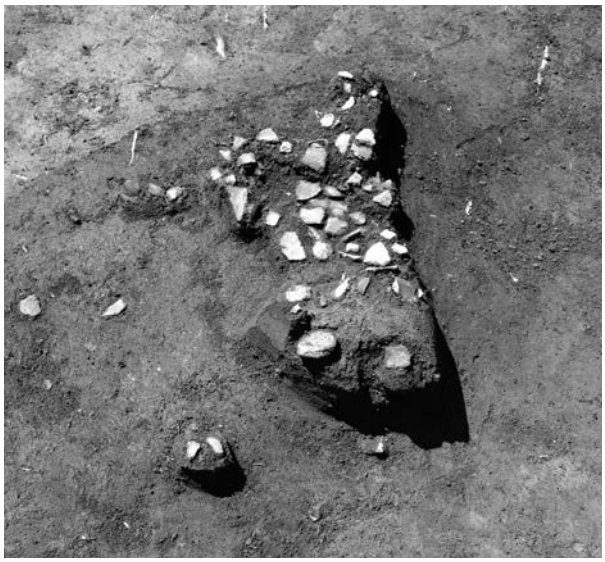
遺物集中－1 検出

遺物集中－1 出土土器

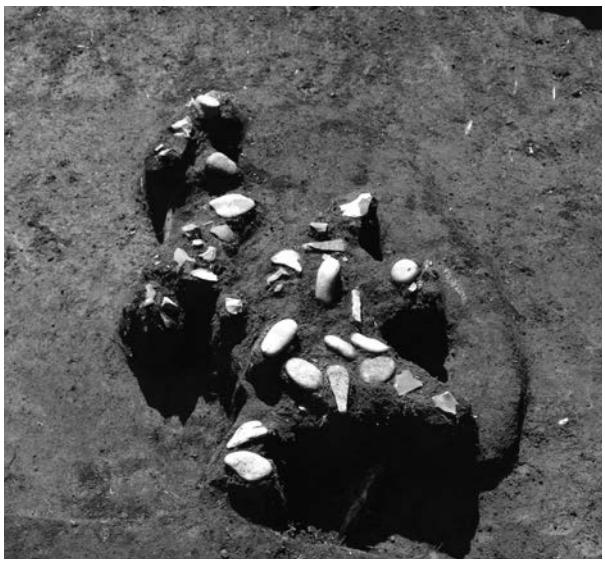
遺物集中－2 検出

遺物集中－3 検出

遺物集中－4 検出

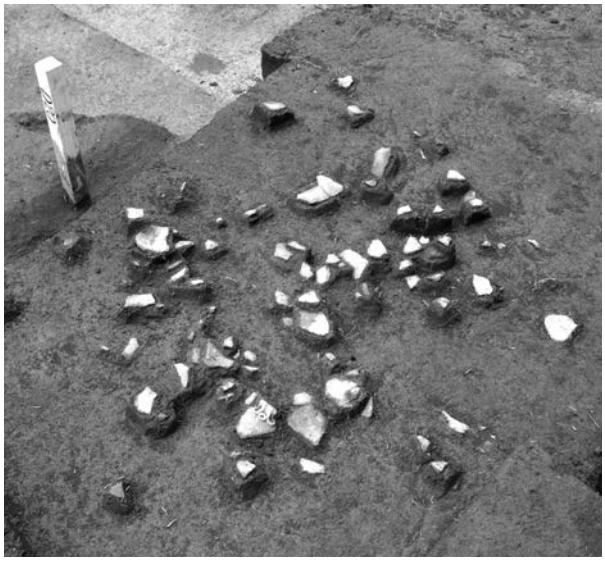


遺物集中－5 検出



遺物集中－6 検出

遺物集中－7 検出



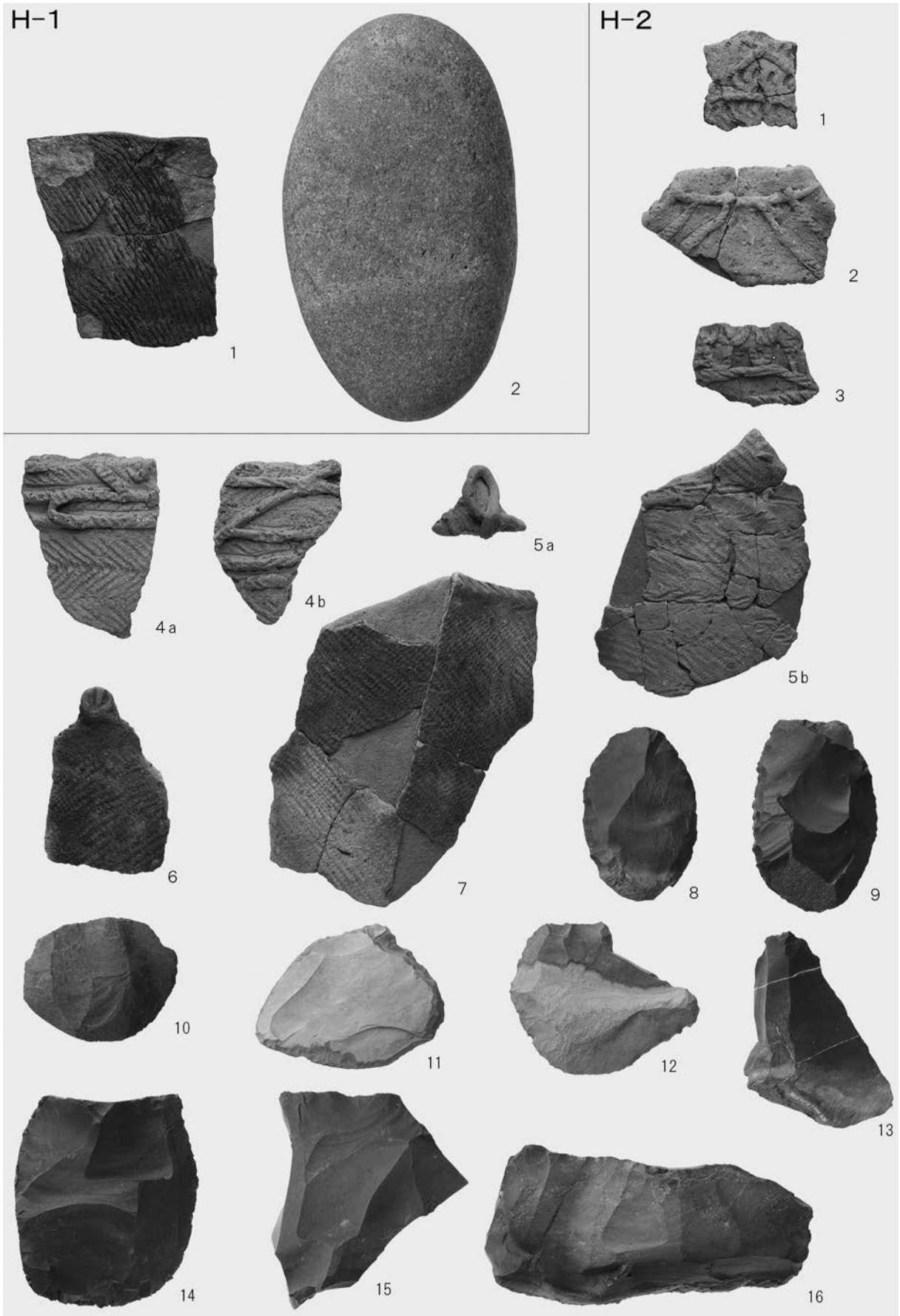
遺物集中－8 検出

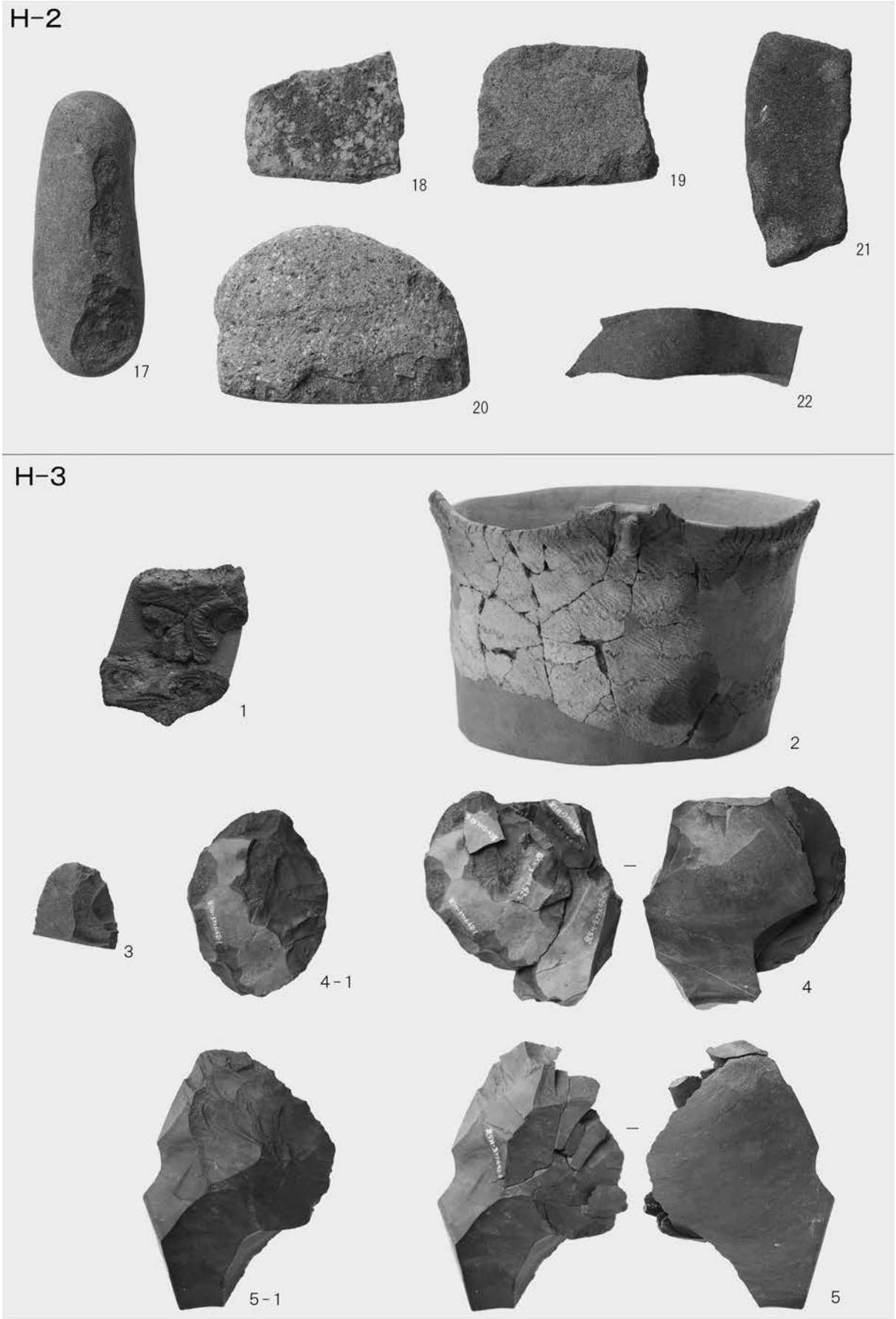
S－1 検出

D45区包含層出土個体土器

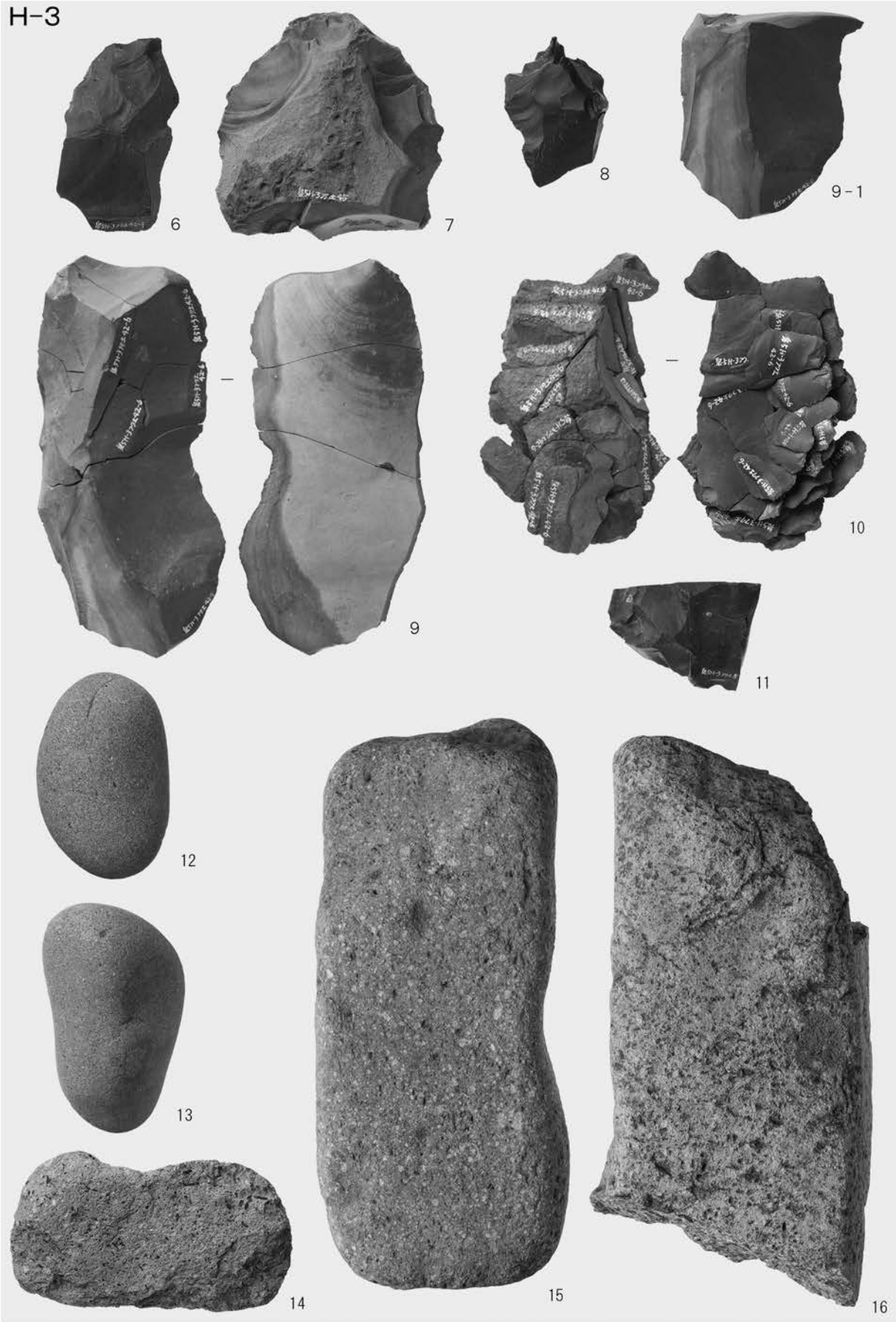
E40区包含層出土個体土器

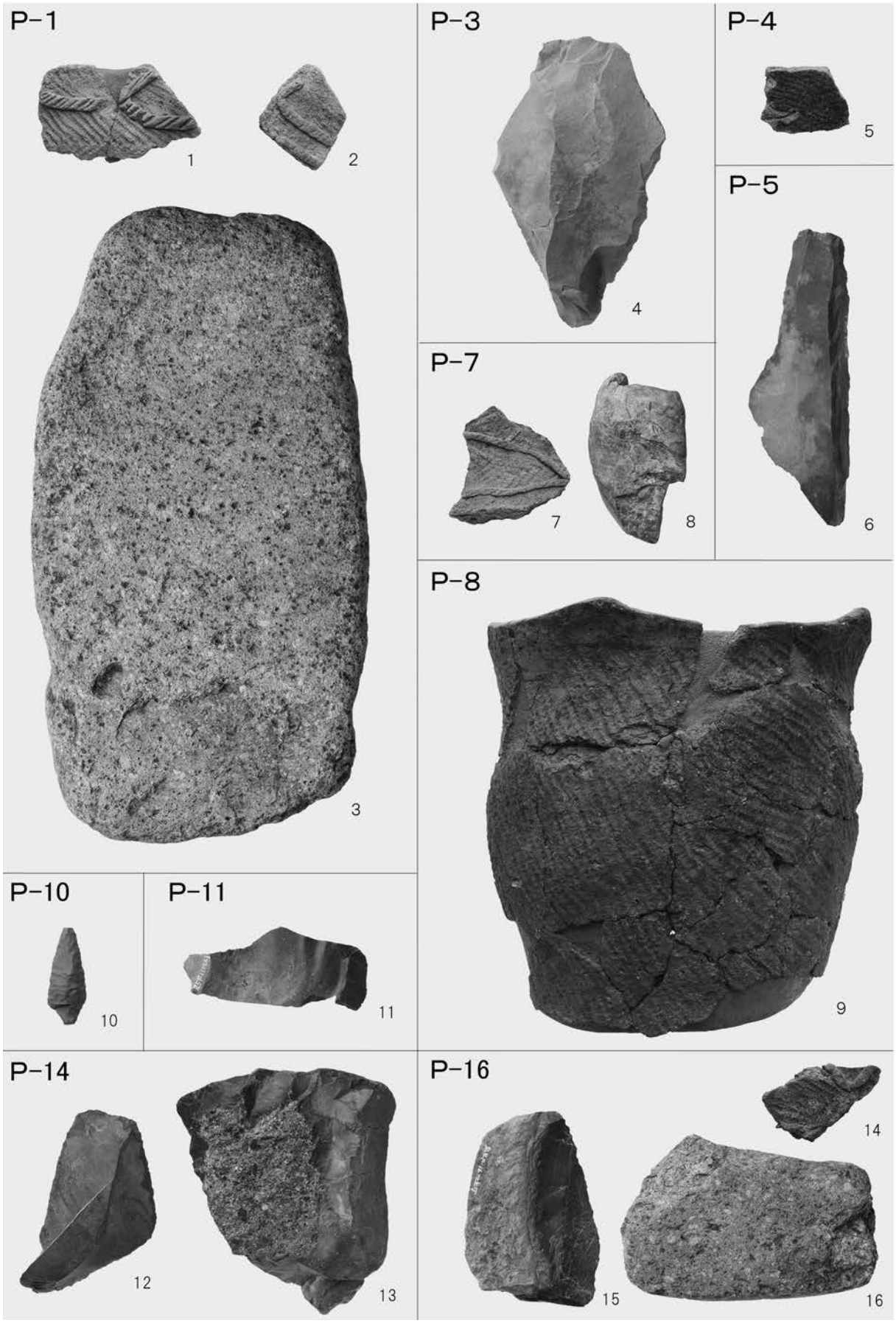
図版 20　遺構出土遺物（1）



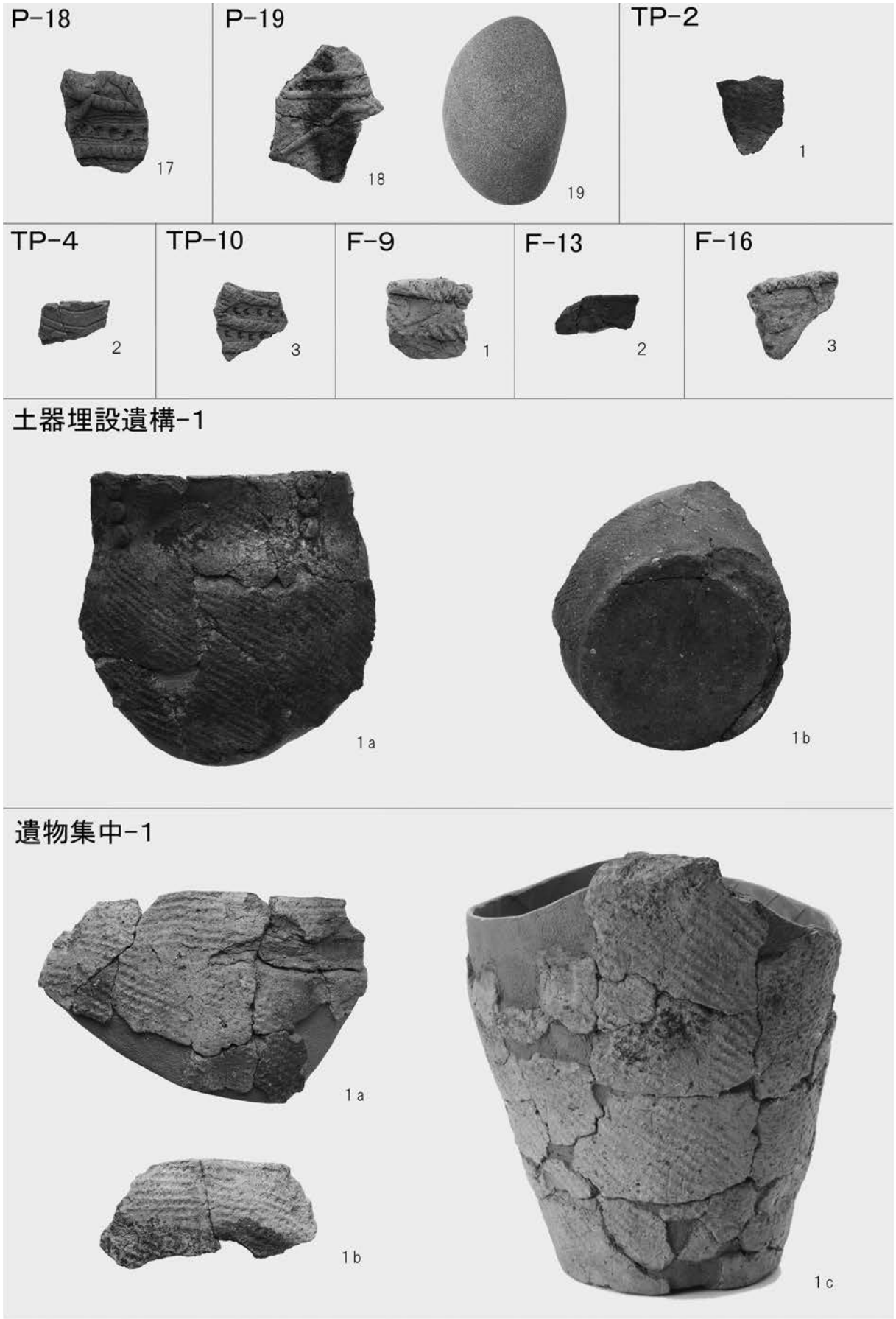

H-2
17
18
19
20
21
22
H-3
1
2
3
4-1
4
5-1
5

図版 22　遺構出土遺物（3）



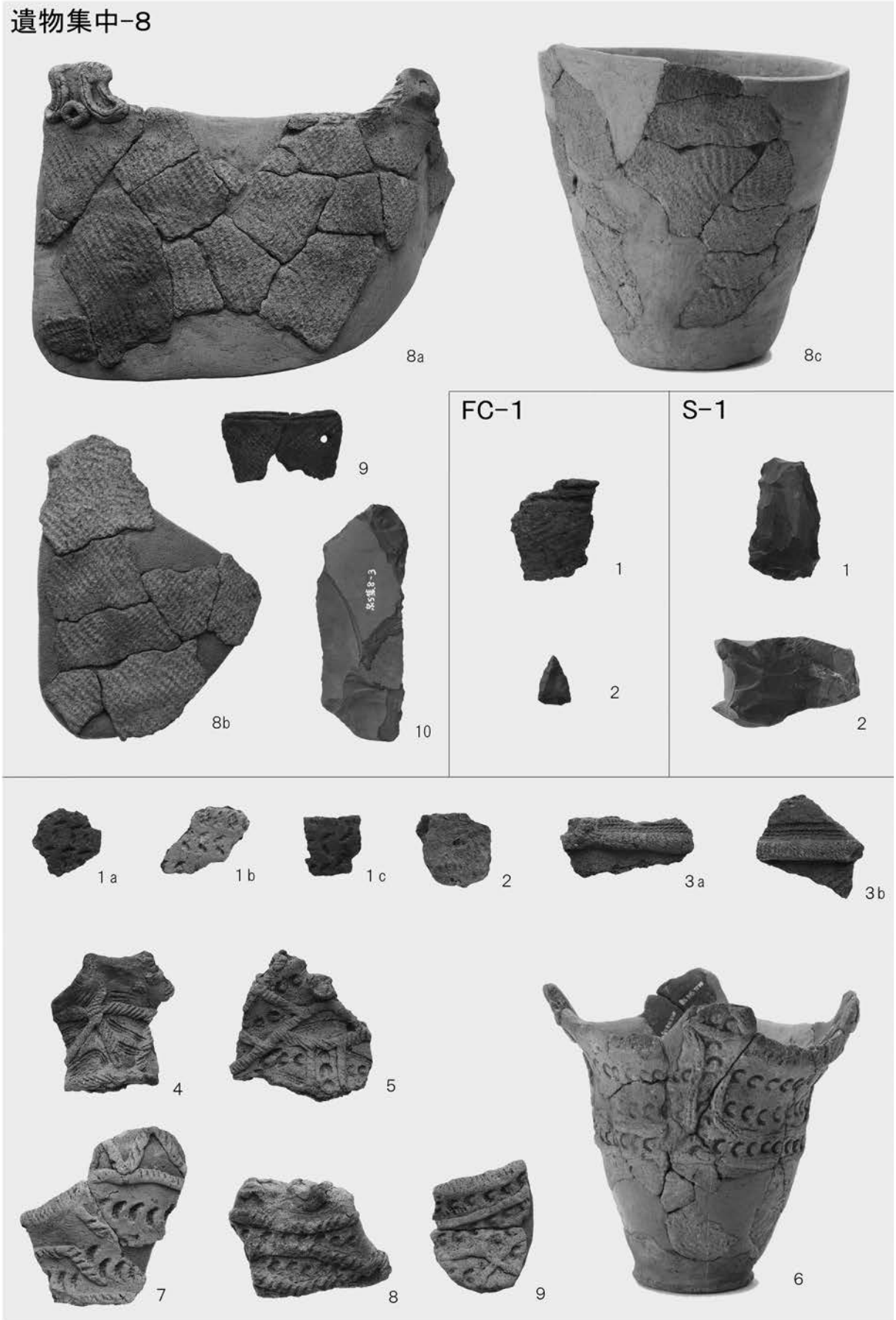

P-1
1
2
3
P-3
4
P-4
5
P-5
6
P-7
7
8
P-8
9
P-10
10
P-11
11
P-14
12
13
P-16
14
15
16

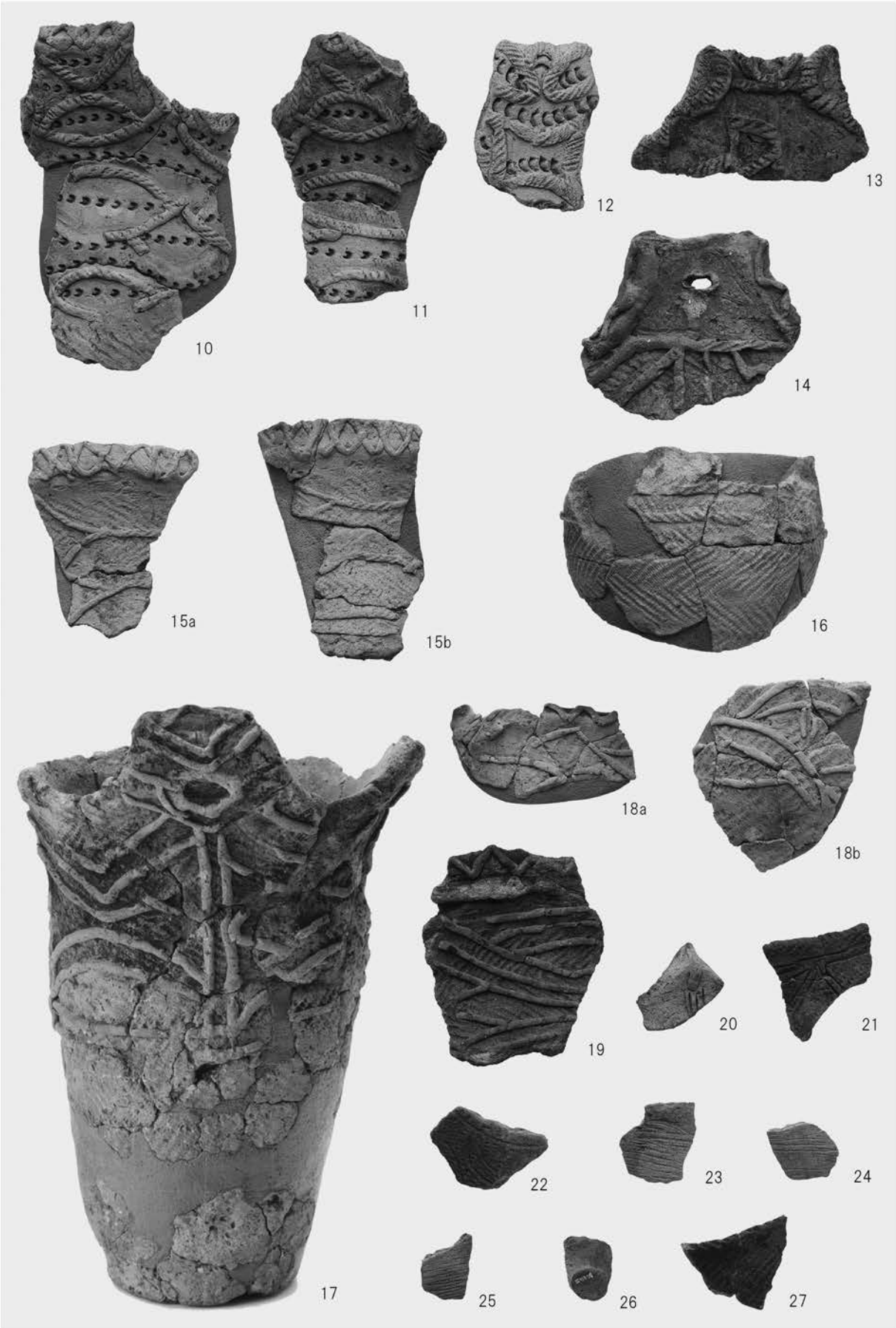
図版 24　遺構出土遺物（5）



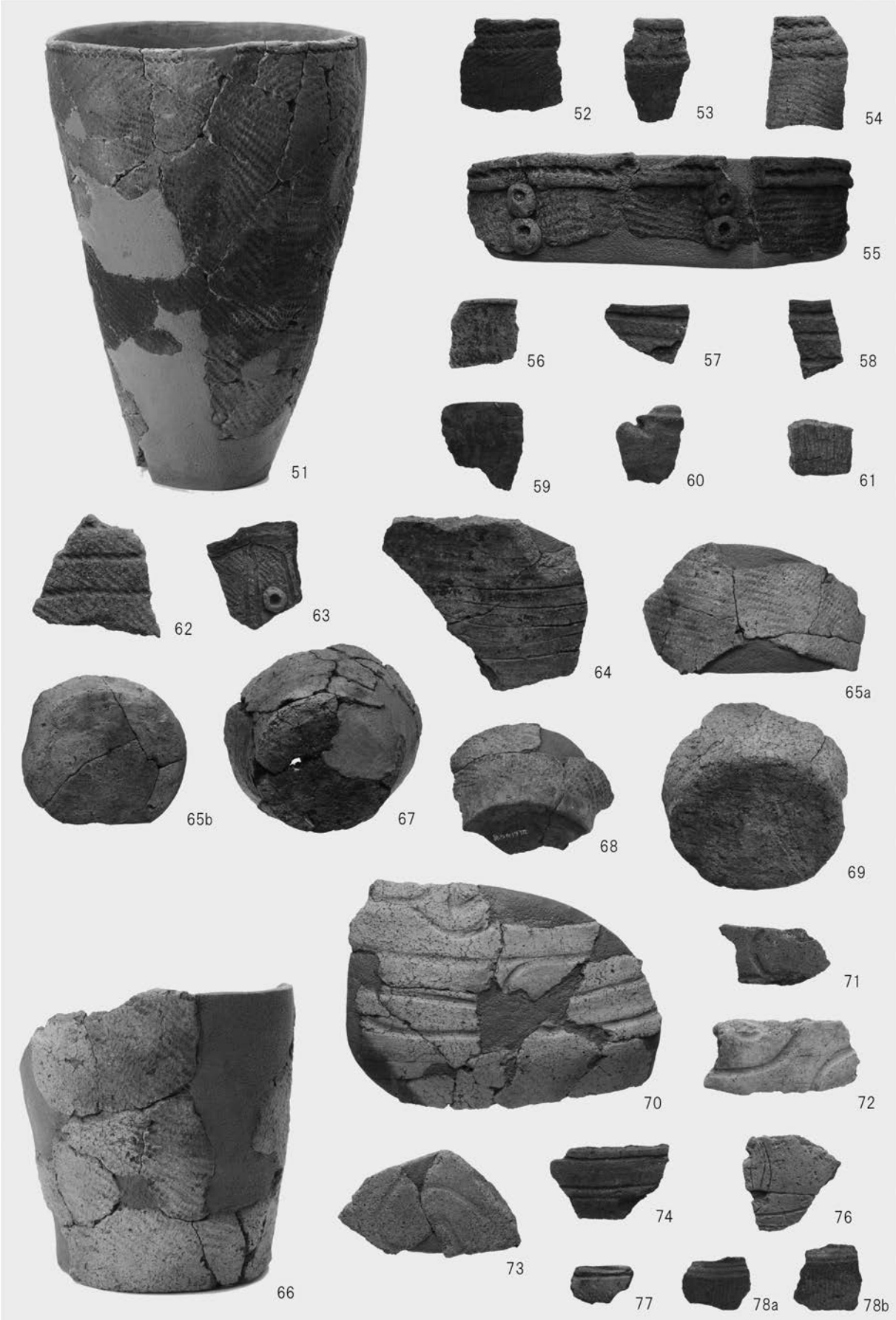
遺物集中-3
2a
2b
2c
2d
3
遺物集中-4
4a
4b
4c
遺物集中-5
5
遺物集中-6
6
遺物集中-7
7a
7b

図版 26　遺構出土遺物（7）、包含層出土遺物（1）

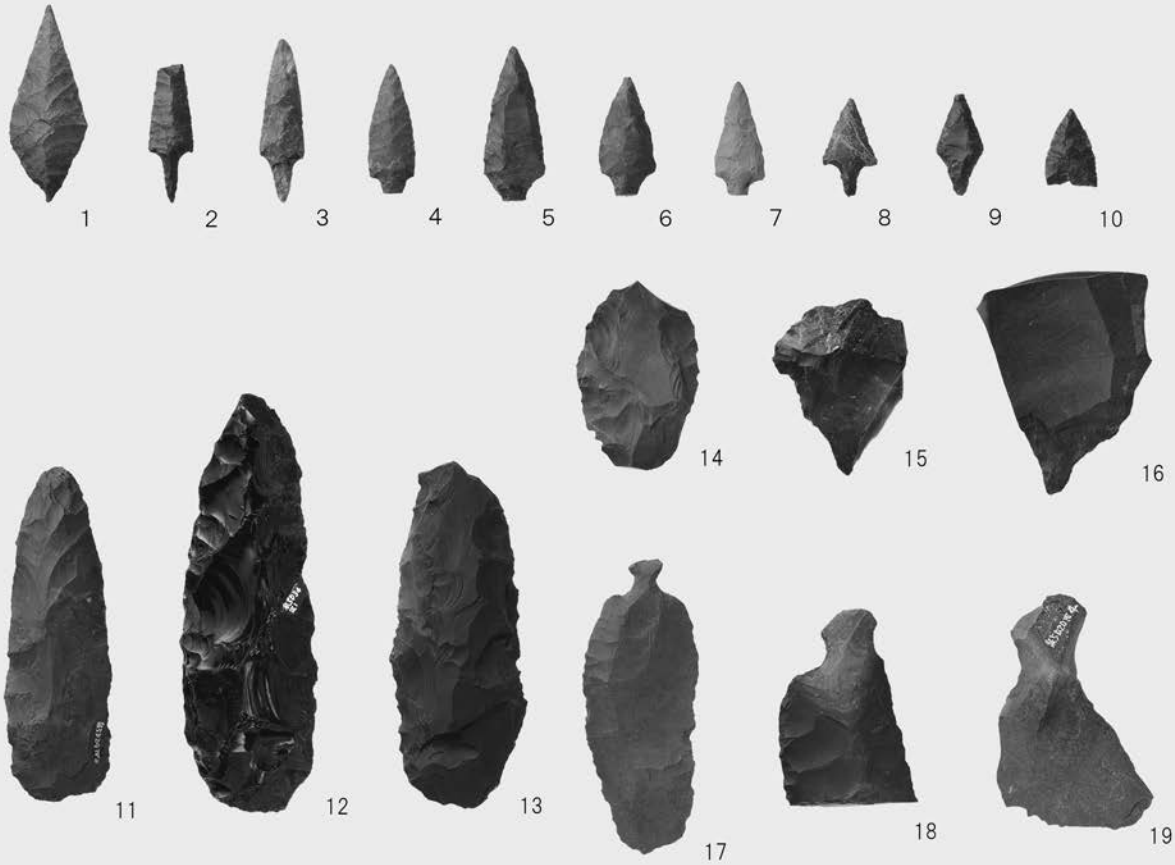


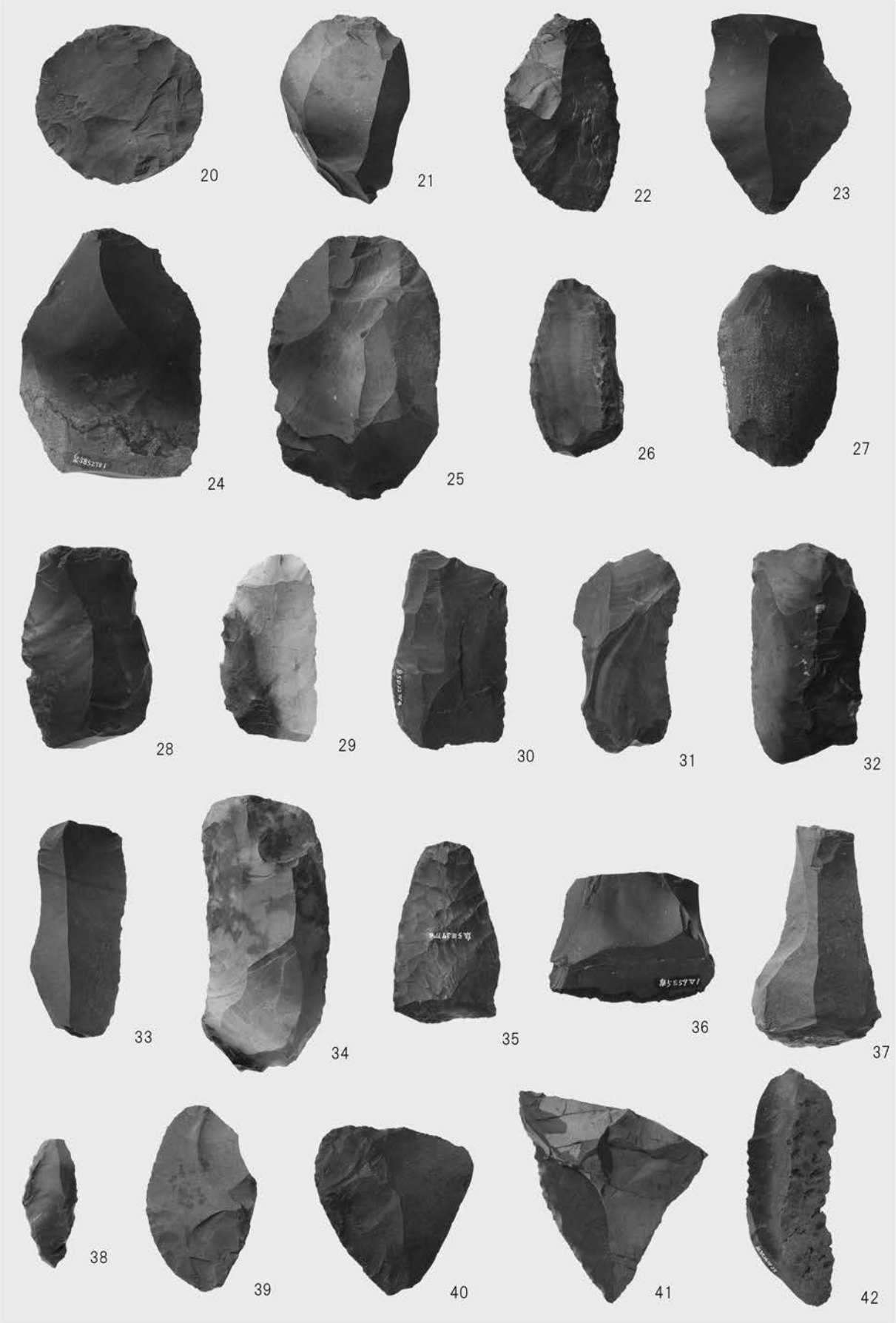

10
11
12
13
14
15a
15b
16
17
18a
18b
19
20
21
22
23
24
25
26
27

図版 28　包含層出土遺物（3）

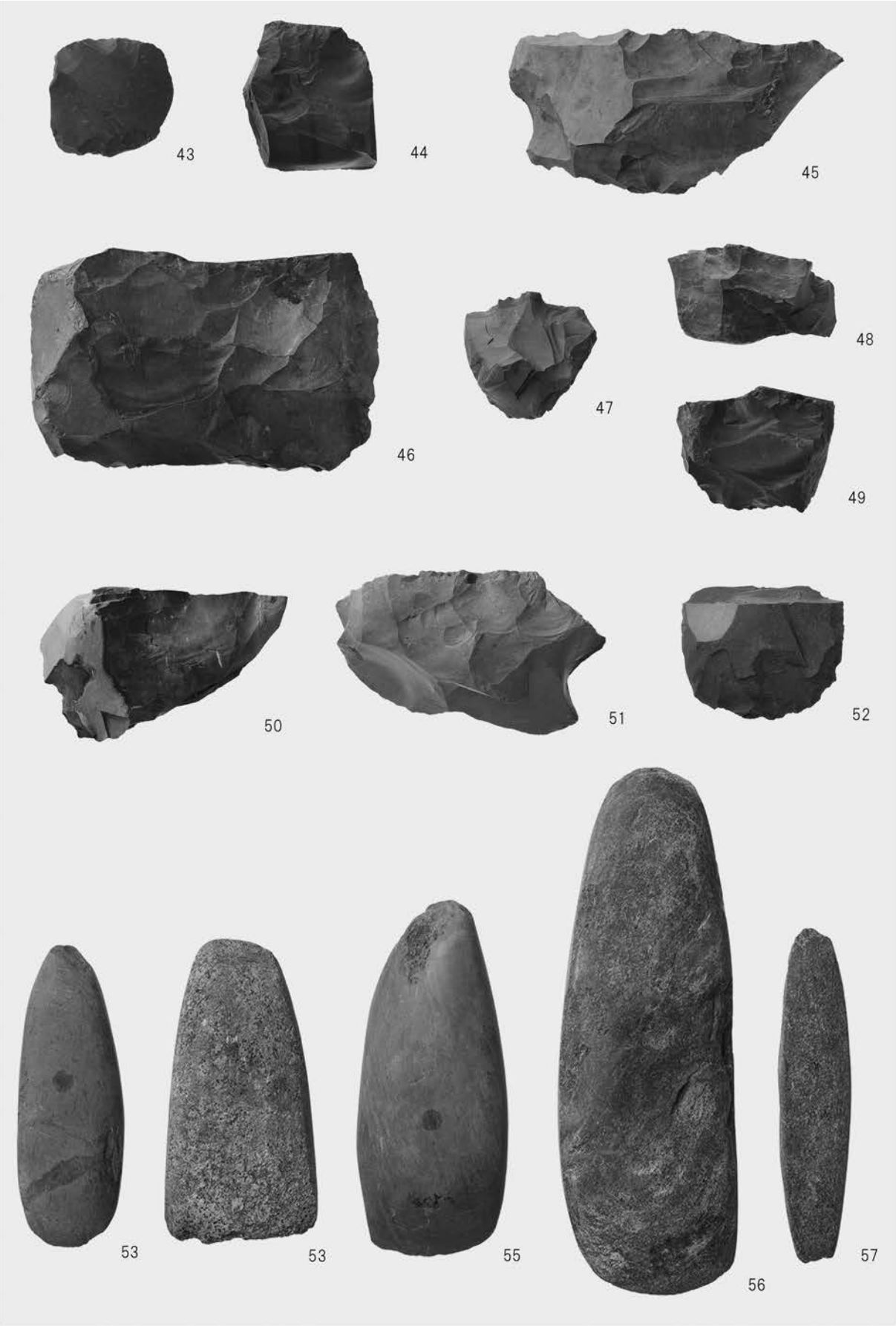

51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65a
65b
67
68
69
70
71
72
73
74
76
66
77
78a
78b

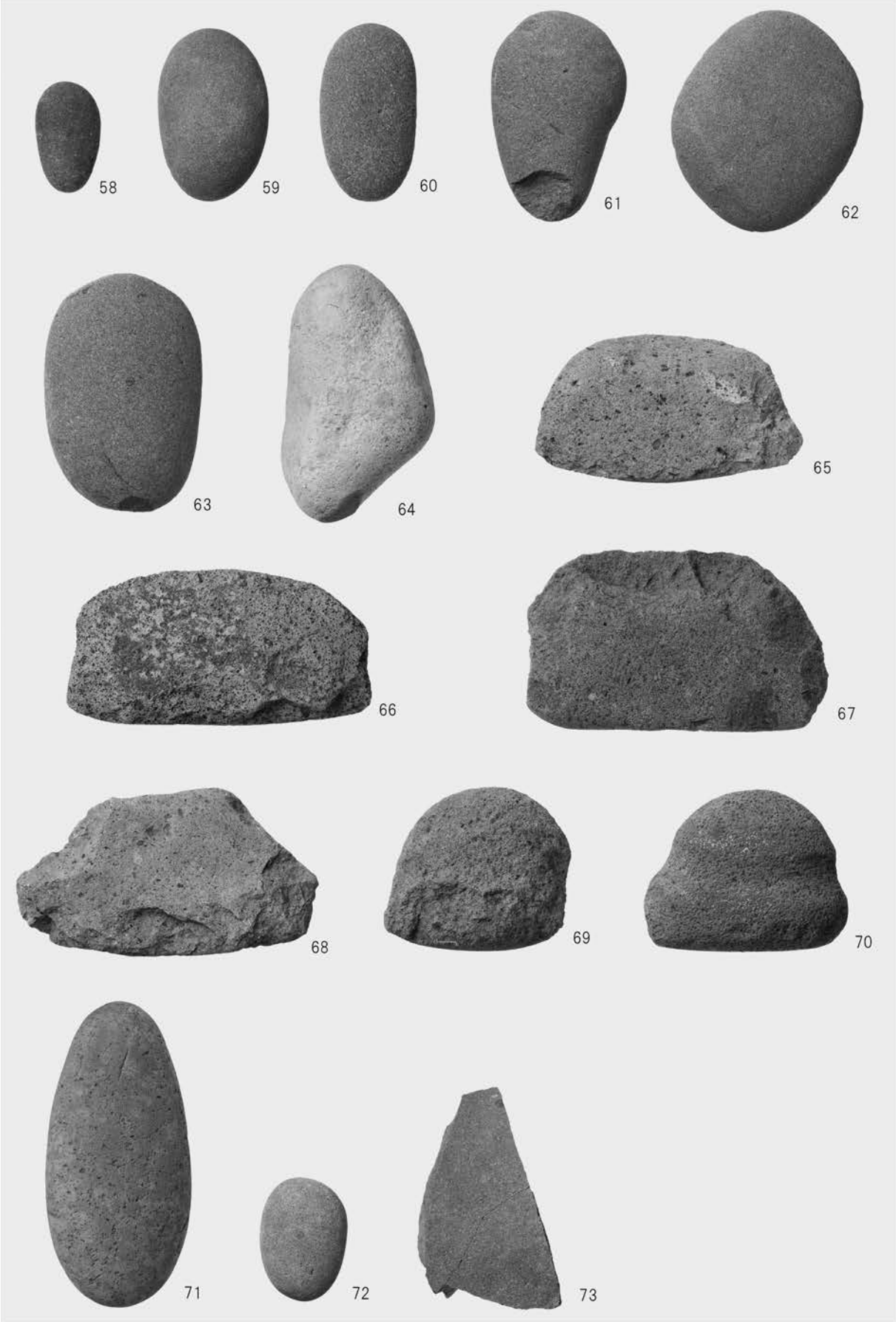
図版 30　包含層出土遺物（5）




20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

図版 32　包含層出土遺物（7）




58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

報告書抄録

ふ り が な	きこないちょう　いずみさわごいせき
書　　名	木古内町　泉沢５遺跡
副　書　名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第330集
編 著 者 名	直江康雄　袖岡淳子　渡井　瞳
編 集 機 関	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
所　在　地	〒069－0832　江別市西野幌685番地１
発行年月日	平成29（西暦2017）年３月10日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
泉沢５遺跡（いずみさわ いせき）	上磯郡木古内町字二乃岱（かみいそぐんきこないちょうあざにのたい）42－４・５、43－２、47－２、48－３・４、49－４、55－２、56－２・３、57－２、58－３	01334	B－05－55	41° 42′ 11″	140° 30′ 7″	20140901 ～ 20141030	8,984㎡	道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
泉沢５遺跡	遺物包含地	縄文時代中期前半、後期前葉	竪穴住居跡 土坑 Ｔピット 焼土 遺物集中 土器埋設遺構	土器（東釧路Ⅲ式・円筒下層式・円筒上層a式・円筒上層b式・サイベ沢Ⅶ式・魚骨文・榎林式・天祐寺式・涌元式相当・大洞Ｃ２式など）、石器（石鏃、石槍、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、たたき石、台石・石皿など）	

要　　約

泉沢５遺跡は木古内市街の北東約６㎞、現海岸線から約600m内陸の海成段丘上にある。遺跡のある段丘面は橋呉川およびその支流の開析を受け南西方向に張り出す台地状の地形となっている。調査面積は8,984㎡、調査区は長大で北東－南西方向に長さ約310mに及ぶ。調査区内は基本的に平坦面だが、北東部と南西部に２本の沢地形が発達し、その両側は緩斜面となっている。

竪穴住居跡（H）３軒、土坑（P）19基、Ｔピット（TP）10基、焼土（F）19か所、遺物集中８か所、フレイクチップ集中（FC）１か所、礫集中（S）１か所、土器埋設遺構１か所の遺構が検出された。竪穴住居跡はいずれも長径が２m程の小型のもので縄文時代中期前半に属すると考えられる。土坑の内６基がフラスコ状を呈し（P－１・３・７・16・18・19）、深さ１m前後のものが主体的である。Ｔピットはいずれも溝状で、長軸が２m前後、深さ１～1.5m程度であった。等高線に直交する長軸でTP－９・10（標高37m付近）、TP－１・３・８・９（標高32m付近）がそれぞれ並列してみられ、斜面の傾斜に沿って直交する長軸でTP－２・４～６がほぼ等間隔に配列されていた。

出土遺物の点数は土器5,161点、石器・礫10,045点、計15,206点である。土器は縄文時代早期後半～晩期のものがあり、特に中期前半の円筒上層b式、サイベ沢Ⅶ式や後期前葉の涌元式相当のものが多くみられた。なお、中期前半の土器にはニシンタイプの魚骨文土器も含まれている。

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第330集

木古内町　泉沢５遺跡

－高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成29（西暦2017）年３月10日　発行

編集・発行　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069－0832　江別市西野幌685番地１
TEL　(011)386－3231　　FAX　(011)386－3238
E-mail　mail@domaibun.or.jp
URL　http：//www.domaibun.or.jp/

印　　刷　富士プリント株式会社
〒064－0916　札幌市中央区南16条西９丁目２－10
TEL　(011)531－4711